

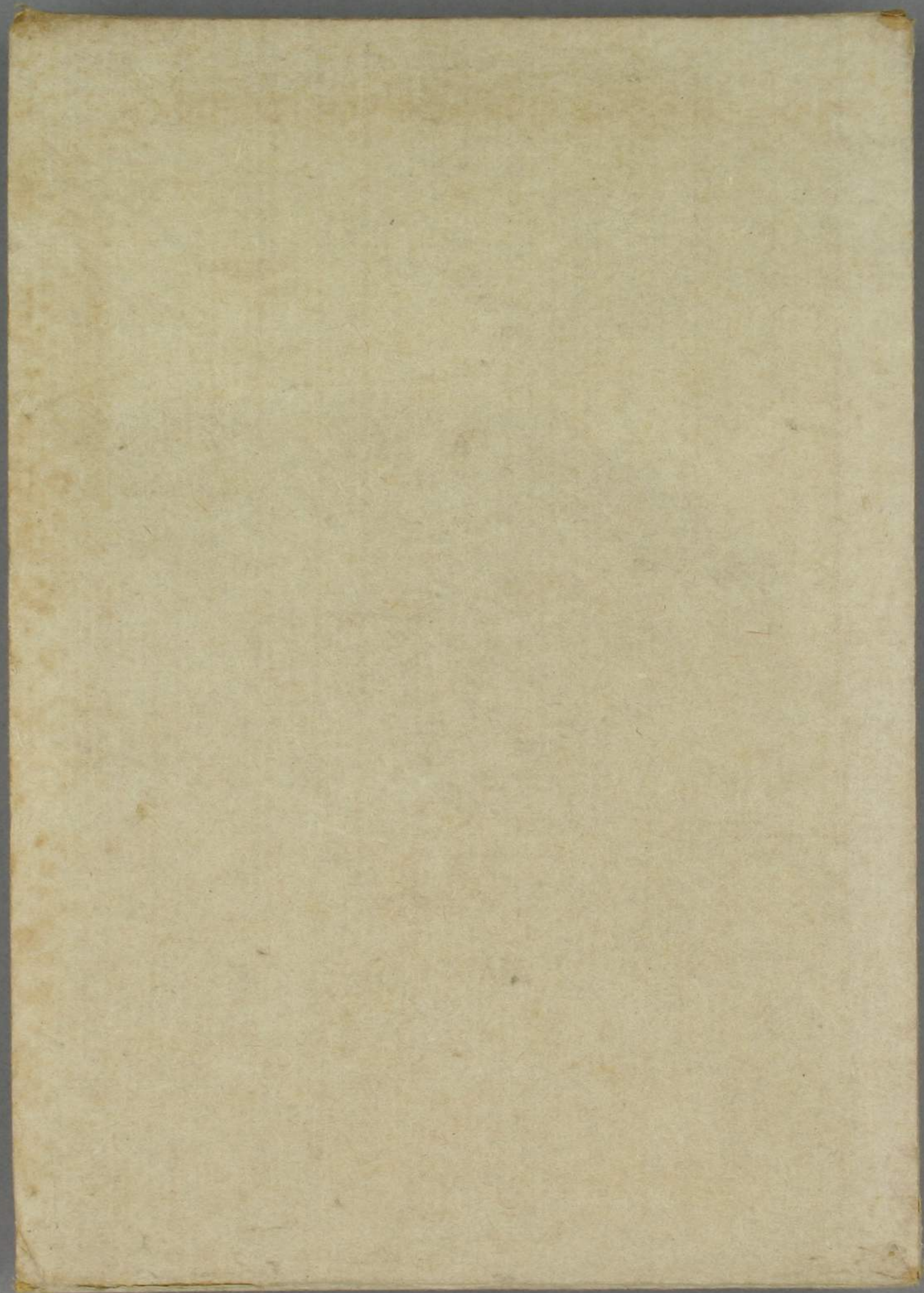
隨筆早稻田

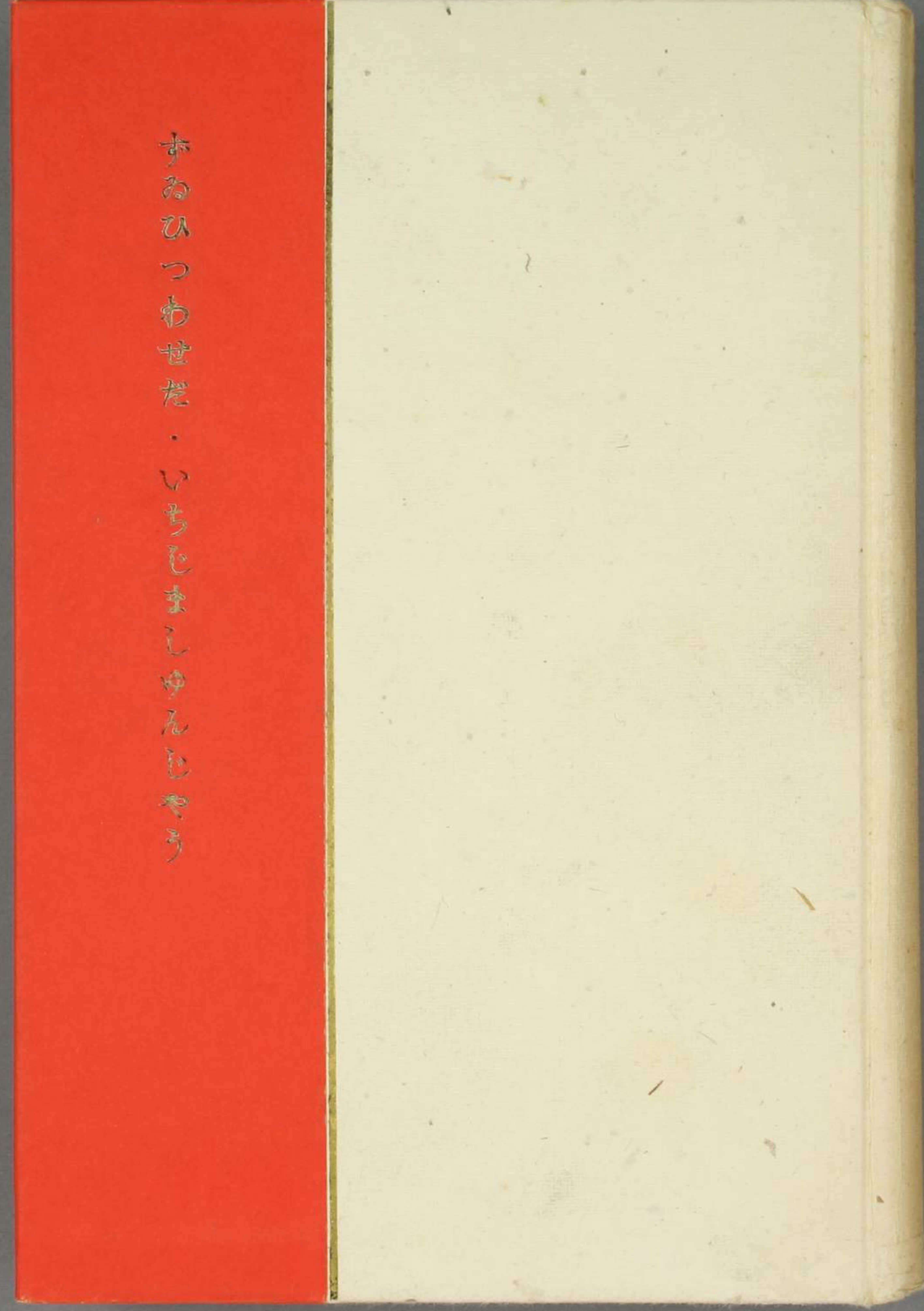
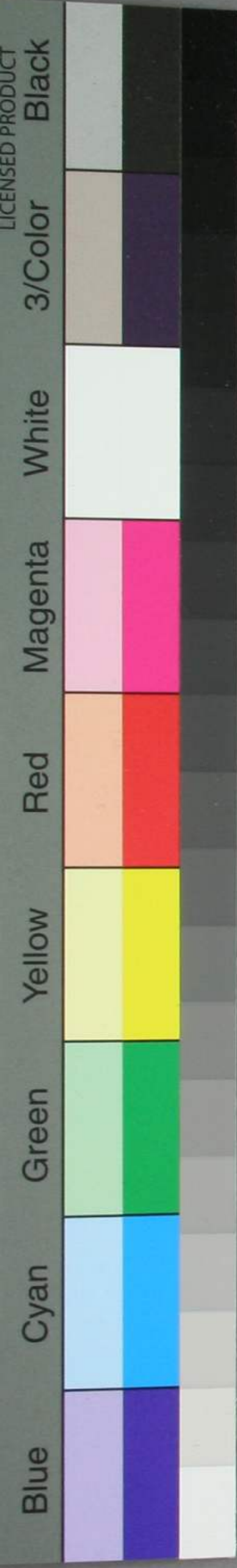
市島春城著



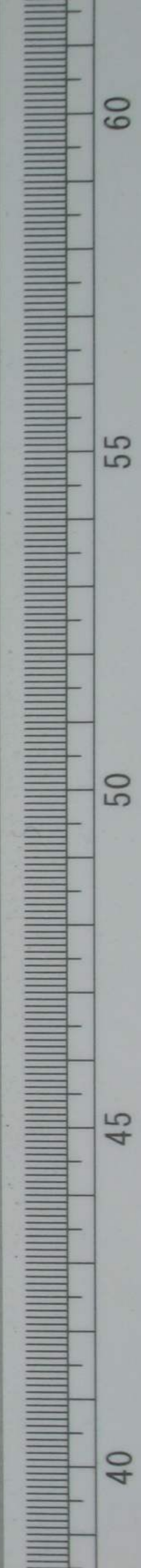
隨筆早稻田

市島春城著



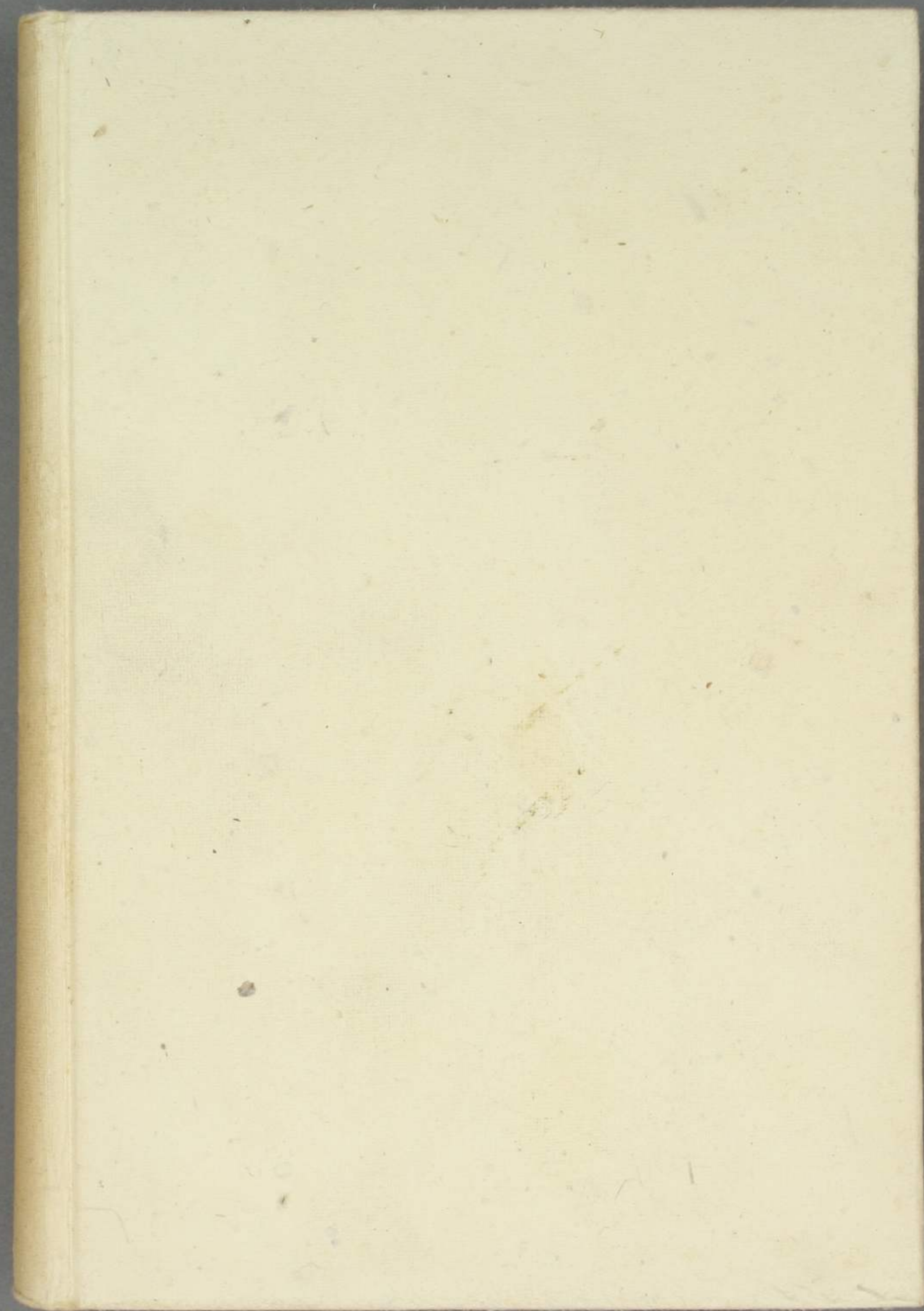


ずゐひつあせだ・いちごましゆんじやう



隨筆早稻田

市島春城著





張
氏
印

張
氏
印

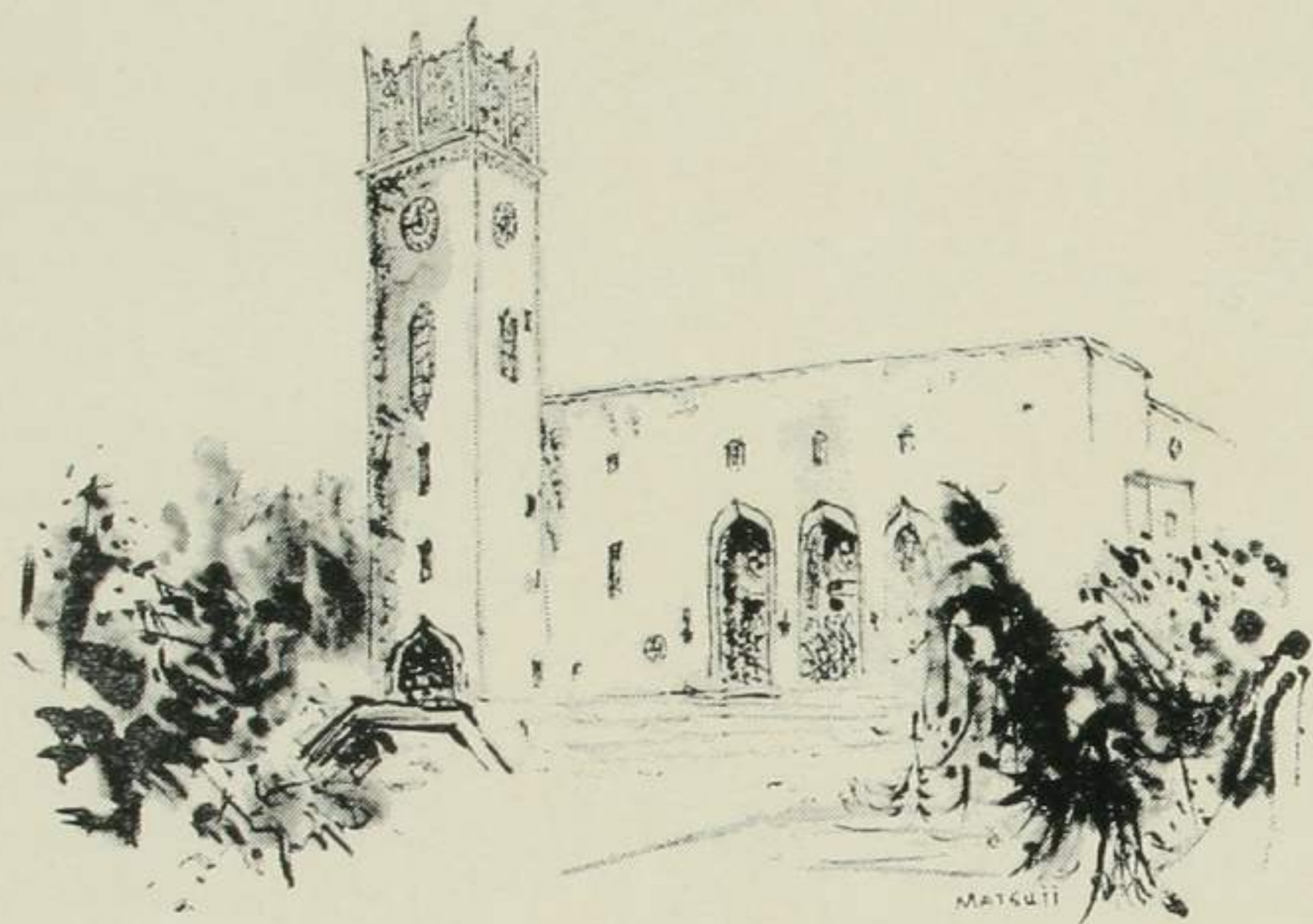
隨筆早稻田

市島春城著



隨筆早稻田

市島春城著



大講堂



館 書 圖



大隈侯銅像



近附科工理

隨筆早稻田

小 序

早稻田も私の第二の故郷である。私の半世紀以上の生活と経歴とが此地に絡んでゐるから、或は第一の故郷と云ふが妥當かも知れない。私は早稻田一帯が満目水田と若荷畑であり、白晝狐が横行する頃から此地の馴染である。

早稻田には半世紀間に驚くべき變遷があつた。明治十四年の政變が政治上に於て大なるエポックを劃したが、早稻田の運命を開拓したのも亦此の政變に因縁がある。大隈侯が冠を掛けて在野の人となり、早稻田に起臥されたことから端を發して、日本有数の學府が開かれ、忽ち車馬絡繹の處となり、田畑が埋められて新たに道路が開け、殷賑の市街が起り、學府の發展に伴うて附屬の學校が起り、木造建築が煉瓦建築と化し、遂に其の美觀は首都に雄視するに至つた。此の變遷を観じ來れば、眞に今昔の感に堪へないものがある。

早稲田繁昌記など云ふ書物はまだ世に出ないが、私は不束ながら、隗より始める趣向で、早稲田大學が五十周年を迎へた時、試みに大學の今昔に就て、亦大學に寄與した師友で、既に故人となつた百近くの人々に就て思ひ出を録し、當時の早稲田學報に連載したことがあるが、此等の記述では追憶が書き足りないので、其後も追々書き足して大隈侯其他の事にも迫んだが、まだ十分とは思つてゐない。

早稲田大學には既に半世紀の校史が出版されてゐる、それは縦に見たものとすれば自分の横に見たのである。前者は表から見たものとすれば、自分の裏から見たものと云へるであらう。私の回顧録は早稲田の蒙昧期から、三十數年間の事が専らであるが、此間の事でも記憶が確かでない爲め逸したことが少なくない、最近十年間の事どもは、自分が隱退後自然早稲田と疎遠となり、事情に暗いので多く語ることが出来ない。殊に理工科方面には語るべき重要な事があるにも拘らず、科學に門外漢である私は、遺憾ながら省略することを餘儀なくされた。

自分は老後の無聊を遣る爲め駄作の隨筆を折々出してゐるが、實は無意味な隨筆を書くよりも、私の記念としても「隨筆早稲田」にこそ筆を着くべきだと氣が付いたが、さて材料を得るには多少の活動を要するのに、老來人の訪問が懶いので、これまで書き溜めたものまでも抛擲

に附して居ると、此程是非に出版せよと勧める人があり、増補の遑もなく、匆卒其意に任したが、這般の隨筆でも、幾許早稲田を知る資料ともならば、誠に望外の幸である。

昭和十年七月上旬

春 城

目次

早稻田大學の今昔……………一

學園漫步……………八七

學園物故師友錄……………一一七

回顧餘談……………一三九

雙梯舍物語……………二六九

大隈侯旅行追隨記……………二九七

早稻田大學の今昔

早稻田大學の昔を語るに就て、先づ其地形から始めねばならぬ。大學の校歌に唄はれてある如く、早稻田大學の所在地は、都の西北に當つて居て、僅に一つの道を距つて近年まで郡部に連つて居た、此僻在した地が曾て大隈侯があられた爲に非常に名高い土地となつて、此處に世界の道が通じた。日本に來た世界の人は必ず早稻田へ馬車や自動車走らせた。それは主として大隈侯を訪問する爲であつた。政治家にしる、商人にしる、世界の著名な人々は、他の土地よりも早稻田の名を知り、此處にをられた偉人を訪問して、國への土産にしたのである。

槃 特 の 墓

斯様に世界の道を通じた早稻田は、吾大學の前身東京専門學校の起つた時分は、どんな所で

あつたかと言ふと、その頃は萬目若荷畑であつた。早稲田附近が若荷畑であつたのみでなく、小石川に若荷谷と言ふ地名があるが、あの邊から一面に若荷畑であつた。昔の川柳に早稲田邊りを讀込んだものが種々ある中に、一つ二つを挙げると

槃特の墓所目白の近所なり

早稲田の畠槃特の墓のやう

此二つの川柳は共に若荷のことを言うたもので、若荷と言ふものは、俗に食すると物忘れをし、馬鹿になると言はれてゐるが、此川柳も此意味を言つたものである。こゝに槃特と言つて引合に出てる者は、釋迦の弟子で、それが頗る遲鈍な愚物であつた。そこで目白、早稲田は若荷畑が多いから、槃特を引合に出して、此意味を寓したのである。俗説には、槃特を葬つた所が、そこから若荷が出たと言ふ、そんな所から引掛けて、若荷畑を槃特の墓場と言つたのであらう。斯様な譯で、早稲田と言ふ地名は、多くの人の知らなかつた所で、之を知つてゐるのは、須田町の青物市場位であつた。それは若荷の産地だから、青物市場では知つて居つたのである。そんな所が、後に最高の教育を行ふ場所になつたのは、槃特に對して皮肉である。馬鹿者の墓場と迄言はれた所に、人を賢明にする學府が設けられたのである。此地には、世界の偉

人と言はれた大隈侯が居られた許りでなく、日本に於ける有数の大學が設立せられ、曾て二十五年の祝典の折には、世界の各大學から祝辭がこゝに集つた。矢張世界の道は早稲田に通じたのである。

學校に因縁のある早稲田

學校を創立した時、何故此處に地を選んだかと言ふと、第一は清閑な地で、教育に適してゐる事と、もう一つは大隈侯所有の地が此處にあつたからであつた。此早稲田大學の敷地は、昔井伊侯の所有地であつたと聞いてゐるが、後で考へると、早稲田と言ふ所は學校に因縁のないわけではないのである。大隈侯の邸宅は、讃岐の高松の松平家の下屋敷であつたが、維新の始め此處に山東直砥が學校を開いて教へた事がある。又其後に關新八が英學を教へた事もある。それは皆大隈侯の屋敷であつた事を考へると、早稲田は早くから學校に因縁がある。此頃大隈侯の記念大講堂を建築する爲に、大隈侯庭の一部分に基礎工事を起すに當り、下を掘つて見ると、澤山の埋めた杭が出て來た。技師の語るのに、慥かにこゝには相當の建物があつたに違ひないと言つてゐる。或は山東が此處に校舎を建てた跡かも知れぬ。

二時間の授業に往復三時間

最初學校創立の際學生を募集するに當つて、學校は早稻田にあると廣告しても、誰も解らなかつた。多分今慶應義塾のある三田などでも、開校の時分は三田と言つても、多くの人々には知れなかつたであらう。ともかく人の知らない處へ、入學者に入學手續を出せと廣告をしても、人が來さうがないので、當時雉子橋に居られた大隈侯の屋敷の、執事の室を假事務所として募集事務を取扱ひ、入學願書はそこで受付けた位であつた。今から思ふと其頃は不便此上なしで、今の鶴巻町あたりから概ね畑や田であつた。學校に往復するには畑中を行かねばならなかつた。日本橋邊から來ると人力車で來ても一時間半もかゝつた。教師達は多く牛込、小石川に住んで居つたので餘り遠くもなかつたが、日本橋筋から來た教師も少なくなかつた。山田一郎、岡山兼吉等の人は、學校創立當時大いに力を入れ、且つ教授を勤めた人々であるが、此人々は日本橋の西河岸から通つて來た。何時も合乗の俵でやつて來て、僅か二時間教へるのに、ともすると往復三時間も俵に乗らなければならなかつた程、不便なものであつた。

杜鵑を聞く名所

今の鶴巻町の道路が大隈侯の舊邸即今の大隈會館に沿うて出來たのは、餘程後の事である。學校の最初の建物は皆門の際にあつて、奥の方は小高い山であつた。元の事務所を知つてゐる人は、其實際に斷崖のあるのを見たであらうが、それが即ち元の山の名残である。後にそれが平げられて今の校庭となつてゐる。そのうしろの方は今でも高く斷崖を現してゐる所がある。又隣地に今でも高い山があつて、それは石黒子爵の別荘となつてゐるが、その地形を見ても此邊が山地であつた事が解る。昔は閑雅な地で、石黒子の所は杜鵑を聞く名所として多くの人に知られた所である。此學校の後方の小高い所が大隈侯によつて切開かれ、其土で學校の前面の田畝が埋められ、そして追々道が出來たのである。即學校の後の山が埋立の材料となつて一舉兩得の利を得たのだ。

古い蕎麥屋がたつた一軒

當時の早稻田は満目者荷島で、人を愚にする材料が豊富で、何れを見ても野趣が漲り、寂寞

を極めた。狸や狐が白晝人を恐れず徘徊した事は事實であつて、決して空談ではなかつた。飲食店と言つては、今の中學の角に古い蕎麥屋があつた許りで、之は赤穂の義士堀部が立寄つて酒を飲んだと言はれてゐるから、元祿の頃より續いてあつたものであらう。此蕎麥屋の外は此近邊に飲食店は一軒もなかつた。斯様な所に學校が建築された、勿論學校の規模も極めて狭小なものであつた。其教室全部と事務所迄も合せて、後には文科の教室に當てたが、今は取拂はれて位置を替へてゐる。斯様に土地が不便であつたから、寄宿舎の必要が感ぜられてそれも設けられ、後には大講堂も出來上つた。此大講堂は大震災に破壊して名残を止めないが、惜しい大切な記念物であつた。之は仲々念入の建築物で、當時近邊の偉觀と稱せられ、爰に多くの人材の卒業式が擧げられたのである。

學問の獨立

此學校を東京專門學校と言つたのは、多分專門學校の名を付けた始めであらう。各高等の專門學科を極めて短時間に學ばしむると言ふのが本旨で、小むづかしい外國語で教へるより、日本語で教へるといふ一生面を開いたものである。そこで政治の學科は勿論、理科も開いた。後

に文科が起り、理科は廢するの已むを得ない事になつたが、後年理工科が興つたのは當初の素志を貫いたものである。其頃學問がやゝともすると、政府の道具に使はれたり、官僚の機械となつたりする弊があつたので、當初から學問の獨立を唱道した。之は大隈侯の高い見識から發したもので、學問の獨立を圖るには、言語も獨立を要すると言ふ所から、邦語を主とした。此學問の獨立の主張は今日でも、又今後も變化なく貫いて行かねばならぬ。

教師より學生の方が年上

開校の當時は大隈侯の養子英麿氏が校長であつたが、大隈侯の高等祕書とも言ふ可き小野梓氏が、最も創立に参畫して學校の大切な地位にあつた。開校の時學問の獨立を高唱したのも此人で、言ふ迄もなく大隈侯の意を承けたのである。此小野氏は、當時教授の任に當つた前の高田總長其他吾々の兄事した人で、高田氏を始め吾々帝大の學生を、卒業前に大隈参議に紹介したのも此小野氏であつた。其大隈侯に對する紹介が因縁となつて、開校と共に其連中が教鞭を取る事になつた。教授連は大學を出た許りの、何れも二十二三歳の血氣盛んな者で、學生のある者より教師の方が、遙かに若かつた。當時は晩學の人が多く來り學んで、中には縣會議長を

つとめてゐるものもあつた。然るに教師は多く無妻であつた。

最初の入學者が四十名

東京専門學校を愈々開校した時幾人入學があつたかといふと、極めて少なかつた。タシカ四十名位と記憶してゐるが、それも開校してからポツ／＼入學した者まで合はせての數である。今の校友名簿の首頭に載つてゐる初期の卒業生が即ち此時這入つて來た學生だが、此等の面々は今七十近い連中である。無論追々歿したものも可なりある。最初は年輩の稍々進んだ人達が入學した、その割合に教授連は若かつた。學生も教授も餘り年齢に懸隔が無つた、却つて學生の方が年長であつたものも見えた。入學生は四十名許りであるが、各科にそれ／＼受持教師があり、校長幹事事務員も備つてゐた。いくら安い給料でも、コンナ事で收支が償ふ筈はない。此時分の月謝が一圓であるから、四十人の學生からの収入は四十圓しか無い、學生は其後段々増したと云うても、二百三百四百といふ位で五百人の學生があつたとしても五百圓の収入しか無い譯で、收支は學校創立後數年を経ても償ふことが出来なかつた。

車代にも足りない教師の給料

當時の教師の給料はどんなものであつたかと云ふに、いつぞや學校創立當時の會計簿を捜し出して見たのを覚えてゐるが、給料は最多額者が高田氏でそれが三十圓であつた。二十五圓二十圓十五圓といふやうに色々等差があつたが、受持つ時間が標準となつてゐたやうである。高田氏の受持つ時間が最も多かつた爲めに其の給料も最多額であつたのだ。中橋徳五郎氏は法律の教師であつたが、其給料は五圓とある、當時専任教師とも云ふべき者が四五人あつて、それが何れも多くの時間を受持つたもので其他は補助格の教師であつた。中橋氏などは補助格であつたらう、いくら金の價が今と違ふと云うても五圓と云ふ金は車代にも足りない程の者である。言ふまでもないが、之れは給料としてではなく、車代として出したのである。補助的の教師は大抵厚意的に無給で、あの不便の地へ一週一二時間來て教へてくれたのである。

苦しかつた學校の月計

當時學校の月計はどんなものであつたか、正確には分らないが、三百圓かそこらのものであ

つたらう。校長などは勿論無給であつたにしても、教師幹事事務員にはいくらか給料を拂つた譯だから、何としても三百圓位は要つたであらう、月々大隈家から補助があつた。それで給料を拂つたのであるが、それが毎月滞りなく貰はれなかつたこともある。さうすると給料が支拂はれないので、今月の給料を翌月になつて拂つたことも屢々あつた。此の大隈家の補助は學校の創立後何年か續いた。今日から考へると毎月二百五十圓乃至三百圓位の補助は何んでもないやうに考へらるゝが、政府を引退された大隈侯の懷ろを考へると、決して輕微のものでは無つた。と云ふのは大隈侯の十四年の挂冠は侯一代の大事件で、藩閥から侯が嫉視を受けたことは非常のものであつた。薩閥は大隈侯が吾等を出しぬいて國會開設を策したというて極度に怒り、侯を亂臣賊子と呼ばはり、例の陰險手段で、退官後の侯をどこまでも苦めようと策し、侯の糧道を絶つにあらゆる手段を取つた。銀行などへも手を回して、大隈に金を貸してならんと威嚇した爲めに、侯も非常に窮迫されたことは事實である。此の魔の手が頻りに延びる時分恰かも此學校が生れたのである。それが侯の補助に依らねば立ゆかぬ譯だから、月額の補助もスラースラと請取り得なかつたのも無理はない。

學校が借金

學校が長らく横濱の平沼専藏から二千圓ばかり金を借りたのも、大隈侯の口添であつた。此の平沼は高利貸として評判がわるかつたが、學校の借つた金の利子は高利でも無かつた。その利子を毎年二季横濱へ持參するのが幹事の役目の一つで、自分も幹事時代に數度平沼を訪うたものだ。平沼はいつも座敷へ引いて相當の馳走をして自家起身の自慢話をした。此金の内壹千圓は後年學校へ寄附することになつたが、多分これが第一號の寄附であらう。世間で蛇蝎のやうに惡んだ平沼が學校の第一寄附者であるなどは珍な話である。大隈侯はある時語られた。世の中では無やみ矢鱈に平沼を憎むが、俺には恩人である。あの兵糧責にあつた時、無擔保で金を貸してくれたのは彼一人であると云はれたことがある。侯が斯く語らるゝほどに一時は困られたのである。平沼に一千圓の寄附をさせた経緯は後で語ることにして茲には學校が平沼に助けられた窮迫の時代があることを言ふに止めておく。

藩閥の壓迫

當時藩閥者流の壓迫は侯に對し單に兵糧責のみで無つた。彼等は出來得べくんば學校を潰さんとたくらんだ。多分彼等の眼には學校は謀叛人を養成する所と映じたのであらう。不平滿々の大隈侯が野に下つて政治學校を建てたのだから、薩州の私學校が西郷に於けるとく考へたのも無理は無い。學校の授業に携はつた面々は、小野梓君を兄分として内實改進黨樹立の際に参加してもゐるし、學校の評議員（當初は議員というた）に小野梓、矢野文雄、前島密、島田三郎、沼間守一、尾崎行雄、犬養毅、成島柳北といふやうな顔觸れで、多くは大隈侯の挂冠に進退を與にした面々で、それがゾロリ名を列してゐる。これなども餘程藩閥者流の神經を刺戟したに相違ない。時の政府は學校を苦しめる一策として、帝國大學の教授に對し、私立學校に臨んで教鞭を執つてはならぬと嚴達した。學校は經濟不如意で、帝大の教授を友人關係で依頼してゐたのであつたが、此一令でそれが出來ないことになり、これにも困らせられた。已むなく、帝大の教務に關係のない友人に教鞭を執つてもらつて漸やく間に合はせた。關直彦氏が厚意的に來てくれたなども其一例である。

煙草の演説で烟に捲く

藩閥者流の手段は如何にも陰險で、始終學生らしく粧はしめた一二のスパイを入れて置いたことも事實である。又此頃學生のため教師が大講堂で演説をやり、政治學の應用や法律の是非などもおのづから論題として現はれたが、警察官は多くの場合此の演説會に臨監した。自分もある時何か政治に涉つたことを言はんとして會場に入つて見ると、高い處に警部が劍を按じて臨監してゐるので、急に演説を變じ、世界の烟草に就て聊か取調べた者があつたから、それを演じて警官を烟に捲いたことがあつた。政治學校に政治の理論を演説して咎めらるゝ道理はない筈だが、當時は政治の二字を云へば忽ち政談と認められるやうな危険な時で自分の早替りも已むを得なかつたのである。

學園興亡に關する重大事

學校がいろ／＼困難を感じてゐる際に一事件が起つた。それにも魔の手が潛んでゐたと解されたが、その事件といふは學校の存立に關するほどの重大事件であつた。乃ち神田に法學院の前身である私立の英吉利法律學校が帝大法科の出身者によつて創立されたが、その機會に早稻田の法科をそこへ移してはどうかといふ交渉があつた。全體法科の教師は其頃多く辯護士で其

の業務の傍ら教鞭を執つたものであるから、早稲田に於ても忙はしい此等の人々に遠方まで來て教へてもらふことは困難で、爲めに法科の維持には餘程頭を痛めたもので餘り繁昌もしなかつた。然るに神田の如き四通八達の地で同じ英法の學校が出来るのだから第一有力な競争者である。これが充分成立したら早稲田の法科は競争負けをすることは想像に難くなかつた。そこへ誘惑が來た。岡山兼吉といふ人は創立から早稲田の學校に與つた法科の大切の人であるのだが、その人も英吉利法律學校の發起者であつて、切に早稲田の同人に向つて法科の移轉を主張した。他人から誘導を受けたのなら、一も二もなく拒絶も出来るのだが、創立者の一人である此人が熱心に利害を説くのだから困つた。退いて早稲田の法律を見ると甚だ不振で、前途が危ぶまれた程であるから、此誘導に困つたのは無理もなかつた。併し流石に此誘導を可とするものは無かつた。實は折角設けた法科を英吉利法律學校に併はせると、専門學校の一角が崩れることにもなる。且つ移轉とは云へ實は新設の學校に併合さるゝ譯であるから利害よりも感情がよく無かつた。當時岡山と同居してゐた山田一郎氏すら、友誼を離れて切に其の不可を鳴した。この移轉論には數月に亙り悶着を生じたが、結局早稲田の法科は死守することになつて、爲めに今日も立派に存續してゐるのである。

背後の魔の手

目前の利害から云へば岡山の言ふごとく併せた方がよかつたかも知れんが、實は恐ろしい陰謀であつた。岡山氏は知つてか知らなかつたか背後に魔の手があつて、早稲田の一角を崩し、終には全部を崩す陰謀があり、岡山氏は其手先に使はれたのだと後年大隈侯は語られた。其の魔の手といふのは司法大臣たりし長派の山田顯義といふが、背後に絲を引いてゐると當時専ら取沙汰があつた。岡山氏もなか／＼略のあつた人で、或は此の陰謀を知りつゝ先づ投じて其の實權を早稲田で占める積りであつたかも知れんが、それは危ない綱渡りであつたと思ふ。

色眼鏡

學校は光風霽月で裏も表もなく、學問は獨立で無ければならぬと開校の時小野梓君が大隈侯の意を承けて天下に發表したのである。學校は政權に左右されてはならぬと唱道する位だから大隈侯の野心の具でないことは此の唱道でも分るべきであるのに、藩閥者流は色眼鏡をかけて見るから、小野君の演説に對してすら妙な誤解を抱いたかも知れぬ。高田君始め吾々は改進黨

の樹立に内實與つたのであるけれども、これとても公明正大なもので政府から彼是云はれる筋は毛頭なかつた。ナゼなれば政府の設けた帝大で教はつた政治學の講義を其儘改進黨の趣意書の骨子とし、小野君が書いたに過ぎないのである。どう洗つて見ても申分がないのに、政府の色眼鏡では餘ほど危険に見えたらしい。大隈侯の後半生の言行でもわかる様に、侯は公明正大の人で學校を政黨の機關とする様なケチな人ではなかつた。侯は誤解の或は學校を害せんことを顧念されて、最初創立の頃數年に互つて學校へ足を入れられたことも無つたのである。兎に角學校創立の當時が恰かも校主大隈侯の包圍攻撃を受けられた時であるから、學校は襁褓の間に非常の難儀をした。どこの學校も創立當時には困難のあるものであるけれども、此學校位生れると共に困められたものは他にあるまい。

大隈家の移轉

大隈侯自身も兵糧賣にあつて、終には家計を支へかねてあの強情な人が、明治廿一年であつたか、雉子橋の邸宅を賣却された。大隈家の文書の内に此の賣買契約の原書が残つてゐるが、それを見ると、買人が澁澤榮一とあつて、價が五萬五千圓となつてゐる。當時は外國人が買人

となることが出来なかつたので、澁澤子が名義人となり内實は佛蘭西公使が買入れたのであつた。但し大隈侯は此邸宅の賣却前十七年頃であつたか早稻田の別邸に引移られた。早稻田の別邸はそれ迄は始終留守居がゐて、侯夫妻は幾んど見舞はらるゝことも無かつたが、こゝに移轉された爲めに仕合を得たのはひとり學校であつた。恩人を學校の門前に引寄せたのは何かにつけて便利であつたが、大隈侯は人の接見に不便を感じられ、京橋の弓町に出張所を設け毎週日を定めてそこで訪客を引見された。當時の早稻田はそれほど不便の地であつた。高田氏や田原氏は一時此の別邸の二階に起臥したこともあつたが、それは大隈侯の引移られない前である。

室咲でない吾學園

東京専門學校は右いふ如く不如意の間に育つたのだから決して室咲ではない。梅は寒苦を経て清香を發すとやら、此學校が後年偉大な學府となつたのは偶然でない。先哲も言つた如く、天の重任を下さんとするや、先づ窮苦に置いて試練するとある通り、此學校は呱呱の聲を揚ぐると共に非常な困難に遭遇し、それと闘ひつゝ屈せず撓まず追々進展したのである。大隈侯に依つて建られた大講堂の建設の年月日も覚えてゐないが、決して大隈侯の財政の豊かな時では無

つたのである。此時分はまだ寄附金の募集などは夢にも考へられず、縦令考へたとて行はるべき時で無かつた。大隈侯が獨力であれ丈のものをあの當時建てられたことを今から考へると侯の偉大さを感じざるを得ない。此の講堂の結構、後年技師が見て大いに賞讃した程の立派なもので、階上の大講堂には幾十回の卒業式が擧げられ、内外の名士が爰で幾百回の講演をなし、擬國會其他諸般の會合がこゝに催され、階下には貴賓室があり、他の二三の室は或は圖書室閱覽室となり教員室となり又學長理事の室となり、學校の歴史を語る大切の記念建築であつて、長らく本校に美觀を添へたものであつたが、大震災の爲めに倒壊したのは返すくも惜しいことであつた。

理工科の設置は初志の貫徹

學校創立頃の學科や其受持教師の事を追懐して見るに、校名を専門學校とした譯だから、ゆくゆくはあらゆる専門の諸科を設ける抱負であつて、最初から理科を置いた。校長たりし大隈英麿氏が理科出身であつたから此科は校長が擔任したのだが、これは間もなく廢科となつた。其の廢科となつた譯は、失敗したからではなく、實は斯様な科を置いたのは無謀であつたのだ。

理科と云へば扇一本机一脚で教授が出来る譯のものでなく、特殊の器械特殊の教室實驗室を要して、其設備に少なからぬ費用を要する。大隈老侯は理科に興味を有つて居られたから、侯が順境にあられたならば、或る程度の設備も出来たであらうが、前にも云うた通り、侯が兵糧責に遭はれてゐる難儀の時代に、コンナ學科が成立する筈はない。されば最初開いた理科と云うても格別費用を要さない土木の測量位を教へたに過なかつた。それが廢科となつたけれども初志はどこまでも遂行せねばならぬと飽まで執着して、時は大分後れたが遂に理工大學の設立を見た時は、吾々は今昔の感に打れて、歡天喜地の情に堪へなかつた。

教師の受持が専門外

當時理科の教授をして來た人は吉田彦六郎氏であつた。田原榮氏も始めは理科の爲めに這入つて來たのだが、理科が廢されても田原氏は止まつて須要の局に當つた。坪内雄藏氏も其頃這入つて來た。それは文科を教へる爲めではなかつた。文科は坪内氏によつて創立されたのだけれども、それは後の事で、始めは政治科の課目を教授した。此頃は教師の数が少なかつたので、教師の専門を本位として講座を定むることが出來ず、何んでもカンでも受持つて間に合はせた

が、政治科に於て最も此の觀があつた。坪内氏がセークスピヤを講じて教場を賑はしたなどは、文科が置かれてからの事で、最初は西洋史を受持立憲政治に關する原書の講義も受持つたのである。高田氏は主として英國憲法を受持つたが、それは氏の専門に屬するけれども、傍らゼボンの貨幣論などを教へた。氏の貨幣論は、小野梓氏の經營してゐた、今の富山房書店の前身東洋館書店で出版された。其書は即ち高田氏の講義を集成したものである。又天野爲之氏は其専門である經濟學を教へたが外に政治學をも教へたといふ様に、受持が専門外にわたつたことを想ひ起す。

初代校長大隈氏の後任

初代校長大隈英麿氏が仙臺の高等學校長として赴任さるることとなつて本校の校長を辭された。それは創立後幾年もたぬ時であつた。次の校長として誰れを戴くべきや、それが當時の一問題であつた。評議員中には知名の人が多かつたことは前にも云つた通りであるが、其中で學校の中樞となつてゐる高田氏を始め、四五の面々に最も理解があり、創業時代の學校を深く念とした人は前島密氏であつた。そこで後任校長としては誰れも彼れも氏を推すに異存が無か

つた。氏自身も若い連中が努力してゐるのに同感があつて、何事も謙讓であつた。此人に似ず校長となることを否まれなかつたのは、此教育事業を餘程大切に考へられたからのごとである。當時大隈侯は母堂を奉じて伊香保の温泉に居られたので、前島氏は高田氏と共に侯を伊香保の旅館に訪うて打合の末、前島氏が校長となることに決した。こゝに一言を要するのは、高田氏は後年前島氏の長女を娶り、親族關係が生じたが、當時はまだそんな關係が無つたのである。

校史に記銘さるべき建議

前島氏が校長となられてからと思ふが、校史に長く記銘さるべき建議が大隈侯の採納する所となつた。此の建議は學校の基礎にも發展にも重大な關係がある。畢竟學校の今日の盛を致したのも此の建議に由來するといつてもよいのである。其の建議は十數個條に互つて、教務の事にも及んだが、最も大切な個條は月謝の増額であつた。當時の月謝は一圓であつた、大ていどこの私立學校でも月謝は一圓が通例であつた。それを八十錢増額して一圓八十錢とすることが建議の主眼であつた。僅かに八十錢の増額は何んでもないやうであるが、月謝と云へば一圓と

相場が極まつてゐるやうに思つてゐる學生に、幾んど二倍の月謝を課するのであるから、當時に於てたやすいことで無かつた。當時の學生は今の學生とは違つて理窟屋が多かつた。それに増額を納得させることも、なか／＼面倒であつた。随つて此案を遂行するには大なる決心を要した。實は學校の内情からすると非常な決心をしても、是非増額を斷行せなければならなかつたといふのは、前にも云うた通り學校は毎月大隈侯の補給を仰がなければ立ゆかないのであるが、侯は政治關係から藩閥者流より陰險な意地のわるい兵糧攻に遇はれたので月々の補給がハカ／＼しく届き兼ねた。當時は今頃のやうに學校の經濟の不足を寄附金で補ふやうなことは絶對に出来なかつた。借金をしようとしても學校に金を貸すやうな篤志家も無つた。毎月の不足を補ふ道は唯だ單に月謝を増額するの外に無つたのである。儘かに八十錢の増額と云へ、學生には可なりの苦痛であつたに相違ないが、學校ではこれが爲めどれだけ増収があつたかといふと當時の學生の數はよくも記憶しないが多分三百人位しか無かつたであらう。假りに三百人とすると増収が二百四十圓に過ぎぬ、二百四十圓は些々たるものであるが、此の僅かばかりの増収が大切であつた程、學校の經濟の規模が小さかつたのである。今日コンな昔し語りをすると人は多く不審を抱き、ナゼ一圓増額しなかつたのか、八十錢と一圓は五十歩百歩でないか、と

いふものもあらうが、刻んで八十錢としたのは學生に對して二十錢だけ遠慮したのである。當時の金は今よりも遙かに貴かつた。二十錢だけでも遠慮の趣意が立つた譯である。學校では二十錢遠慮したのみでなく、教科用の原書は従前學生に買はせたのであつたが、月謝を増額する代りに、教科書は學校より貸附することにした。此の教科用書貸附の件も建議案中の一要項で之れを購入する費用は大隈家より仰ぐといふ案であつた。實に斯くまでせなければ八十錢の増額は行はれ難い事情であつたのだ。

大 會 議

扱て此建議案は大隈侯の採納を得た。その際の事を今想起すが、前島校長を前頭に立て、高田氏始め吾々十名計りのものが、大隈侯の坐してゐらるゝ座敷の次きの間に居並び、高田氏より改革の已む可らざる趣意を陳し、建議の各項を仔細に説明した。説明が終ると前島校長が侯に對して口を開き、學校の前途は茲に列する若い人々の責任に屬します、此人々の可とする所は閣下に於ても諒とされたいと言はれたので、侯は「宜しい」と一言答へられ、そこで案は可決したが、實行は豫期した通りなか／＼面倒であつた。今時のやうに月謝の増額を一片の掲

示で實行するやうな事は、到底出來ず、高田氏が全校の學生を集めて増額の已むを得ざること
を訴へたり、時の幹事たりし田原榮氏が、手硬い學生を相手に百方説得するに徹夜をしたりし
て、ヤツトの事に増額を斷行することが出來たが、田原氏は此の事に努力して三日も家に歸へ
らなかつた位、何人も氏の勞の容易ならざることを認めた。

八十錢の増額は學校の獨立問題

些々たる八十錢の問題であるけれども、學校創立以來の法科移轉問題にましてこれが重大で
あつた譯は、八十錢の増額は學校の自立問題である。言ひ換へれば大隈家から補給を辭するの
問題でもあるのだ。學校の建學の趣旨は「學問の獨立」にあるけれども、人より補給を受けて
成り立つのでは學校は獨立してゐるとは言へぬ、學問の獨立を期するには先づ學校それ自身が
自立せねばならぬ、大隈侯は學校の創立者であらるゝ關係から、學校に補給せらるゝも自然の
因縁で、學校がその補給を受けたからというて、其の體面を傷けるとも云へないが、創立の際
ならば兎も角も、いつまでも人に頼つて立つといふことは意氣地のない譯である。且つ當時大
隈侯の不如意を思ひ遣り其の補給を辭することが恩人に對するの道でもあつた。大隈侯の襟度

は勿論光風霽月のごとく、微塵も學校を私有する念などはあらなかつたのだが、補給を受け
てゐると何となく、大隈侯のものゝやうに世人からも見られて、吾々若いものどもは厭でたま
らなかつた。萬難を冒しても侯の補給を辭したいと熱中したのは實に學校の獨立が繋がつてゐ
たからである。此の改革案を作つた當時の事を追懷するのに、高田氏が主として案を立て、私
が文案を草し理由書を綴つたのであるが、確か高田氏の家で夜を徹して十枚計りの案が出來た。
此時位吾々が精根を凝らしたことは無かつた。記念のため此案の草稿だけは私の手に保存して
ある筈だが、震災の後紛亂して今はチョット尋ね出すことが困難で、其の全文を此場合こゝに
掲げかねるを遺憾とする。兎に角此の改革は學校の創業史に特筆すべきことで、問題は八十錢
であるけれども實は八十錢で學校の獨立を買つたやうなものである、やかましい學生連が結局
増額に服した譯も學校の獨立を重しとしたからであつて、彼等が苦痛を忍んだればこそ學校の
收支が漸やく償ふに至つたのであるから、學生が拂つた犠牲を多とせざるを得ぬ。

過ちの功名

學校は後年衆多の人が寄せた基金で追々擴大し、社團法人となりて、踵で財團法人組織とな

り、學校の敷地は久しく大隈家の所有であつたが、それも寄附されて、天下晴れての獨立の體面を完うしたが、創立の當時いくら大隈侯の襟度が天空海濶でも、事に當つた面々が一步を誤つたらどんなへマを起したかも知れぬ、と云ふのは當時學校の幹事に備はつた秀島家良といふ人は、佐賀人で毎日大隈家の奥に出入した。此人は官僚肌と佐賀氣質とを兼ね具して吾々とは餘り折合はなかつた。此人達は自分極めに大隈家が資を投じて作られた學校だから、大隈家の學校であるかの様に考へ、大隈家の奥へ通つても自然此考をほのめかした。當時吾々が後年のやうに奥へ頻繁に出入したとすれば、秀島が何んといふともあの聰明な大隈夫人は吾々の思惑を可とされたに違ひないが、當時年壯氣鋭の吾々は依頼心を何よりも陋として、大隈侯には折々面會しても奥へ行く事を欲しなかつた。呼ばれても事に託して行かなかつたことすらあつた。大隈侯夫婦の吾々に對する慈愛は晩年と異なる所なく、高田氏始め吾々がまだ妻帯もしない書生揚句であることを念とせられ、曾ては雉子橋の邸に明いてゐる長屋があるからそれに住めとの厚志もあつたが、吾々は己れの不如意を棚にあげて、それにも應じなかつた。高田、田原の二氏は暫時早稻田の侯の邸の二階に起臥したことはあるが、これとても學校に近いので、便利であるのと、其頃早稻田の邸は明き屋となつてゐて、氣が置けなかつたからである。兎角吾々

は我儘で公然の必要がなければ大隈家へ其頃出入しなかつたから吾々の意思が奥に充分通ぜず俗物が夫人に御爲ごかしを云つたなどで多少誤解もあつたかも知れんが、實に偶然ながら公私の混淆は吾々の無骨のために避けることが出来たのだ。若し私的情誼が濃厚にからんだとしたらそれが學校の獨立にもおのづから支障を生じたかも知れん、云はゞ過ちの功名とも云ふべきであらう。

我儘無骨であつた吾々

コンなデリケートの事は學校の獨立に關係があるから已むなくいふのであるが、そればかりではない、これを語らなければ事情のわかり兼ねることもあるからだ。前島校長が辭されて後鳩山氏が校長となつて長く在任であつたが、この校長は實に天降りであつた。鳩山氏は帝大出身の秀才で、吾々一同の先輩でもあり學校の校長と仰ぐに決して不足は無つた。併し天降りであるといふに就ては、其間多少の事情があつた。大隈家では若い連中丈で學校を管理するのは心許ない、鳩山は先輩であるから、押しが利くといふので監督のために天降つたのだと取沙汰をした、私は其頃學校を離れて、地方に居つたが、あとから聞けば、高田氏等は鳩山氏を迎へる

ことに異存は無いにしても、學校には既に定まつた方針もある、鳩山氏はそれを承認して校長となつて貰はねばならぬ。亦校長に戴くには校規に定めた手續もあるから、形式丈は踏まねばならぬとあつて、それ／＼その道を盡して、校長に戴くことになつたのだと聞いた。年壯氣鋭で我儘無骨であつた吾々が、當時信を大隈家に博してゐなかつたことが、これで知れるであらう、それと共に謂はれなく、天降り校長を迎へることを、不可とした意氣も亦蔽ふ可らざることである。

窮境時代の仕合

前に陳べたごとく學校は八十錢の月謝増額で獨立して、それから大隈侯の補給も受けず、毎月の仕拂はどうにか出來たけれども、矢張困難であつた。教師の月給のごときは切りつめるだけ切りつめて、何れも薄給で、とても生活の安定を得ることは思ひも寄らなかつた。専任の教師がこんなことであつたから、厚意を以つて遠方から教へにきてくれた人々に對しては到底報酬が拂へず、僅かに車代を出したに過ぎなかつたが、それも甚だ不充分のものであつた。言ふまでもなく、車代の名義で報酬を拂つたのではなく、事實車代に過ぎなかつた。それをも厭は

すよくも忙がしい學者達が來て呉れたものと、今考へても感心する外は無い。

同じ教師の内でも、法科の出身は辯護士を營んでゐたから、其の收入で生活が出來たから學校へ教へにきてても全く義務的であつた。岡山兼吉、砂川雄峻、山田喜之助諸氏の如きは皆創立からの人々だが、何れも辯護士であつた。他から厚意を有つて來てくれた人々の内には、吾々の大學時代の同窓もあつた、關直彦氏の如きはそれである。併し吾々と別に交りのない人々が追々來てくれた、其の多くは立派な學者であつた。當時政府に志を得なかつた有爲の人や、官學をおもしろく感じない學者などは早稻田へ來るのを喜んだ。敢て報酬を得んためでなく、早稻田の學校を助成する義侠から來たのである。言ふまでもなく早稻田には大隈侯といふ一明星があつたので、それが引きつけたのであるが、捨てる神があれば助ける神もある古諺の如く、此學校の窮苦時代の仕合は實に此應援であつた。

執筆中の著述を擔保に前借

右のごとく學校の經濟は、到底内外の教師に相當の報酬を拂ふことが出來なかつた爲めに、何等他に收入の道が無つた學校專屬の教師は、生活費の幾分を補足するに、内職働きをするこ

とが已むを得なんだ、そこで時間の許す限り、方々の學校へ教へに出掛けて、聊かばかりの報酬を得たものもあつた。坪内氏などはその頃から勉強家で、二三の學校をも教へたのみならず、夜分は著述に筆を走せて生活の料を得た。坪内君が舊惡全書だと云はれる、小説神髓、書生氣質、内地雜居、未來の夢などといふ作は、皆此頃に出たものである。或は新聞へ書いたり、雜誌を書いたりするものもあつたが、そんなことでは生活のたそくにはならなかつた。小野梓君が東洋館といふ書店を開かれたのは何年であつたか、確なる記憶がないが、これは今の富山房の前身で、主として洋書を販賣した。傍ら、學校の連中の著述をこゝから出版するの計畫を立てられ、これが爲めに法律、經濟、社會學、政治書が世に出たけれども、これが同人の糊口を凌がしむる程度のもものでは無つた。皆々執筆中の著述を擔保にして前借をしたので、小野君が歿した後、誰れも彼れも借財があつて、小野君の遺稿の編纂を企てられた梓君の義兄義真君は、前島男爵に書狀を寄せ、學校の教授の内に編纂を託したいけれども、皆々書店に負債があつて困る。ひとり市島君だけが、貸借の關係がないから此人に頼みたいと云うて來たことがある。前島男爵から私へ轉致された義真翁の手紙は今も手許に保存してある。餘談はさて置き此書店は到頭收支償はず、小野君在世中店を閉づるの已むを得ざるに至つたが、その原因は小野君の理想が餘

りに高かつた爲めであつて、君自身が敬服を拂ふ程度の書物をのみ仕入れたなどは學者の商賣として有勝ではあるけれども、所謂陽春白雪和するものが無つたのである。人或は早稻田の同人の前借が累をなして閉店を促したのではないかと邪推をするものもあるかも知れんが、實は此書店に累を及ぼす程の金の融通を請ひ得なかつたのである。此店の後身なる今の富山房程に繁昌したら同人の窮を救ふ銀行でもあつたらうが、如何せん蓄の内に枯れて充分花を發するに至らなかつたのである。

學校が講義録發行の發端

扱又此書店の開店の頃かと思ふが、學校の同人に内職を與へる一事業が起つた。當時埼玉縣から横田敬太といふ人が若干の資本を齎らして出京し、高田君と會してあなたがたが學校で講義をされる其筆記を刊行して世に出したら必ず多く行はれるであらう。不肖ながら刊行費は私が辨するから共同されないかといふやうな交渉があつた。高田君は諾して案を立て、幾種かの講義録を發行せしめた。その講義録は割合に立派なもので、一人づゝの講義を一冊にして月刊にした。此講義は政治、經濟、法律であつて幾號まで繼續したか今記憶にないが、經營が、

宜しく無かつた爲め、横田は結局破産して、學校はその事業を繼續したが、これが我校から講義録を發刊するの發端で、その元は横田氏にあるのだ。横田氏が此の講義の發刊中著者に幾許かの原稿料を拂つたやうであつたが、それも生活費を補ふに足るなどではなかつたと思ふ。しかしハッキリ記憶に無い。兎に角學校の講義録の端はこれから發したとすれば、横田氏の功績を没してはならぬ。横田氏が東京へ現はれてきた頃は學校の經濟が頗る悲境であつたので、到底講義録を發行するの力は無つた。之れを鑛山などに譬へると横田氏は最初の採掘者であつた。多くの場合最初の採掘者が失敗するやうに、此人も失敗したが、それを繼承した學校がその功を收めたのである。講義録や出版部に就ては尙ほ別に陳べることもあらうが、爰には吾々同人が自から支へる爲めにいろ／＼のことをやり、それが生活の安定を得るまでに至らなかつた一斑を言ふに過ぎぬ。

今日に傳はる義俠的精神

此頃學校の専任教授は皆な貧乏であつたけれども、多くは無妻であつた。これが何よりの強味で、武士は喰はねど高楊枝の意氣で、實は餘り貧乏を氣にかけなかつた。畢竟他日に望を繫

けてゐたからでもあらう。追々學校が盛大になつて來て、今は百幾十萬の經濟になつてゐる職員俸給は勿論舊時の比ではないが、それにしてもまだ充分でないのは、私立學校の一特徴である。どうせ公税を取つて支給する官立學校のごとく豊かな俸給を拂ひ得るものでない、私立學校は教師の義俠で、半ば成り立つてゐるもので、本大學はもと教師の義俠で築き上げたのであるから、その精神が今日でも傳統的に傳はつてゐる。この美しい精神が私學の誇りであり、又早稻田の誇りである。

特典獲得の苦闘

私學といふものはひとり早稻田ばかりでなく府下には他に四大法律學校があり、國學院もあつた。然し其何れに對しても政府から何等の特典も無かつた。徴兵猶豫も無ければ判檢事辯護士となるにも少しも便利を與へられなかつた。それ所か最初は政府は一概に私學を壓迫して有害無益のものであるかの如く取扱つた。茲に於て五大法律學校の聯合會（國學院も徴兵問題には同盟に加つた）といふが出来て、各學校の幹部が時々會合して對策を講じた。其の重なるものは、官立學校に與へてある特典を私學にも與へられたいといふことであつた。私學の在學生

に徴兵猶豫が無いことや判検事辯護士試験に資格のないことが、私學全體の致命傷であつたのである。五大法律學校の聯盟は百難を冒して後には追々此等の特典を得るに至つたけれども、隨分骨が折れた。政府者は初め私學を一概に輕侮してなつてをらぬと云つた。忙しい法曹界の人々が片手間に幾んど義務的に教へたのであるから、官學のごとく井然たる教授の出來なかつたことは申すまでもないが、それを改善するには相當の特典を與へて入學生を多くし經濟を豊かにすることが最も必要であるのに、政府は私立學校を藩閥の基礎を危ふするものとして嫉視したから、私學を助けるなどの念は毛ほども無かつた。それが追々ほどけたのは、政府が覺醒したのではなく、止むを得ざる勢に制せられたのである。

五大法律學校の功績

全體明治政府の大事業とも云ふべきは法典の編纂であつた。具體的に西洋諸國に譲らない法典を編纂することは容易の業でなかつた。尙ほ法典をすらくと行ふことは別して容易で無かつた。法典はいくら立派に出來ても、國民が之を理解せざれば行はるゝものでない。扱てそれを理解せしむるに何人が働いたかと云ふと、五大法律學校が則ちそれである。此等の學校は

新法典を何から何まで解釋し、其の原理と共に實際の法を執行する道を教へた。多分五大法律學校に入れ替はり立かはり入學したものは幾萬を數へるであらう。各學校は教場に之れを教へたのみならず、各々講義録をも發刊したから、それに就て學んだものも亦幾萬を數へるゝあらう。如斯く新法典を諒解するものが追々全國到る處に散布したから、彼れが如き複雑で浩瀚な法典が發布と共に案外面倒なく困難なく行はれたのである。若し此法典を少しも準備なくパツト發布したならばどんなにまごついたであらう。法典の解釋と宣布の機關は正しく五大法律學校であつた、即ち法典實施の功は何んというても五大法律學校にあるのだ。而かも五大法律學校が政府の虐待を受けながら、此の大切な任務を盡したことを考へると、吾等は私學の堅忍不拔を稱揚せざるを得ないのである。

本大學文科の創設

明治廿三年は帝國議會が始めて開けて、我國史に一の光輝を添へ長く記念さるべき歳だが、同じ歳に吾校に文科を開始し、爰に早稻田を飾る名花が發した、學校の創立から屈指すれば八年目であつた。我國に於ける純粹の文科はこれが嚆矢である。東京大學の其頃の文學科は政治、

經濟、史學、哲學を主としたのであつたからである。全體一學科を開くことは決して容易の業で無い。經費其他の上から見て當時まだ、我校に餘裕などの無つた頃に此一科を開き得たのは意外の大發展と云はねばならぬ。此學科の創唱者は言ふまでもなく坪内博士である。君は早稻田に此學科をひらく使命を帯びて來り投じたとも言ふべき人ではあるが、此科を開くまでは普通の講師であつた。當時政治科にも法律科にもいくらか文學趣味の教課書を採用してをり、坪内君も英文譯讀の師として其幾分を受持つてゐたが、其中の最高尙な教課書であつた「マクベス」を擔當してゐたのは高田博士であつた。乃ち早稻田の教場で最も早くセークスピアを教へた人は高田君であつた。坪内君は學校の創立の翌年に來り投ぜられた人で、譯讀以外の受持は西洋史、英國憲法史、社會進化論等で、就中西洋史には尤も念が入つた。西洋の歴史は何人が講じても學生の倦怠を生ずるのが常であるのに、坪内君獨得の講義振は宛がら講談を聞くやうに興味があつたので、學生は皆喜んで之れを聴いた。或學期間はスキントンやフィツシャの西洋史をテキストにして英文譯讀兼帶に講授したこともあつたらしい、それが最も君の長所を發揮したものであつたといふ。バヂオツトの英國憲法論の譯講は取りわけ得意らしかつた。

三文學の調和を標榜して

文科を起した趣意は首唱者自身が學んだ本地帝國大學の文科に倣つたものと何人も考へるであらうが、實はそんな單純の模倣ではなく、深く時事に感ずる所があつて起したのであつた。所謂の時事は當時わが國文學は最初の大過渡期に屬し、種々の思想と雑多の文體とが紛糾してゐた。甚しい歐化熱と其反動の國粹論とが最初の大衝突を経験した時であるのに其の *Conspicuous* とを言ひ現す所の文體が大混亂を極めてゐたので、敵も味方も其是非を辨別しかねて、例へば漢文崩しもあれば翻譯體もあり、言文一致體もあり、從來の文法を全く度外に置き、語格などには頓着せず銘々思ひ／＼に文體を創造することを競ふといふ風で、思想の混亂は彌々甚しからんとする虞れあるに氣づき、君は先づ文體を統一し之によつて思想の健全を得んことを庶幾し、和漢洋三文學の調和といふことを標榜して、さてこそ文科を開くに到つた。これが抑々文科を早稻田に起すに至つた眞の動機であつたよしを此頃君に就て親しく聞いた、委しいことは文科開始の翌年君自から創め又自から經營した「早稻田文學」の初號に陳べてある。もつとも文科の創設に當つて經營に組織に大なる助言及び助力を與へた人は例に依つて高田博士であつたこ

とは言ふまでもない。

立派な顔振

断つて置くが「早稲田文學」は今の同雑誌の前身であるけれども、創刊頃は全く文科の講義録であつた。文科創設の動機は右に云ふごとく根本は國民思想の調和を招來せん爲めのものであつたので、およそ其爲に必要な諸科、例へば哲學、美學、倫理學、内外のクラシック等を置いたことは勿論である。哲學の講師として迎へられたのは大西祝氏で、英語の教師として迎へられたのは増田藤之助氏などで、坪内博士は勿論セークスピア其他重要な講座を受持、國文には落合直文、關根正直、畠山健の諸家が迎へられ、漢文には森槐南其他二三の大家が來た。此等諸家を迎へるに坪内君みづから足を勞するまで努力したものであるが、其盡力甲斐あつて初めより立派な學者をズラリ揃へ得た。大西祝氏は長く哲學、倫理の諸科を受持ち其薰陶により多く秀才を出したが、身體が羸弱で早く歿したから今の若い人達は其名すら知らぬ人もあらうが、文科には長く忘る可からざる名教授であつたことを爰に特記する。

數年にして文界の一名物

さて此の學科を開いた結果來學者は二十七人であつた。金子(馬治)、水谷(弓彦)、村山(駒之助)、紀(淑雄)、中桐(確太郎)、永井(一孝)、土肥(庸元)などいふ面々は皆第一期生で、島村(瀧太郎)、後藤(寅之助)、中島(半次郎)が第二期、五十嵐(力)、綱島(榮一郎)、朝河(貫一)三氏などが第三期生である。

此等の面々が追々卒業して文科の講座を擔任することになり、文科は益々繁昌し、坪内博士は終始主宰して早稲田の文科は文界の一名物と稱せらるゝに至つたのは、此科の開始後數年の後で、眞に成功であつた。追々年を累ぬるに隨ひ學生卒業後の生活問題が起り、教師たるに必要の學科を設けたりしたが、創設の頃の來學者は衣食問題には淡泊のもので、一意文藝家たらんことを欲する外餘念が無かつた。それが爲めに多くの秀才が輩出した。當時卒業の場合には卒業論文を課したが、流石に其の頃の論文は立派なもので、金子、朝河、島村の卒業論文の如きはいづれも堂々たるものであつたと坪内君は語られた。

時代に一步を先んじた吾文科

文科には追々變遷もあるがそれは今陳べる場合でない。自然主義的の近代文學を主として教授して、それが早稲田文科の一特徴と見らるゝ事になつたのも一變遷であるが、それは島村が文科主任となつてからの事であつた。坪内博士が文科を主宰されたのは長い事であるが博士の沙翁講座は早稲田の誇りとするもので、博士の講義の妙は世自ら定評があるから彼はいふを要せぬ。しかし博士が朗讀法を自得したり、或は演劇術を研究したりした事は随分早い頃からで、今日では博士の先覺を稱してはゐるが、當時は人が驚異の目を以て見た。吾々ですら墨堤に運動會を行つた折、文科の催しで、ある所に小屋掛をして文科の學生達が演劇をやつたのを見てよい事と思はなかつた位である。博士の朗讀法が決して役者の假聲を遣ふ譯でないのを、男女の言語を遣ひわけするのを、直ちに役者の假聲に模するものと速断し、讀賣新聞の中井錦城の如き、文學趣味のある者すら其紙上に早稲田の學校はけしからん、河原物の眞似を教場でやつて得意であると書いたのを、當時の文科生が見て憤懣し村山(駒之助)氏などが、中井を訪うて嚴談したなどの事もあるが、當時は文科に理解が乏しかつた。それだけ文科は進んでゐたのである。

吾學園發展の第一期

早稲田大學の歴史に顯著な事蹟は、高田博士が學監となられてから、六七七間に、大なる發展を見たことで、確かに大なるエポックである。高田博士が學監の職に就かれたのは、明治三十三年の二月で、自分は其時會計監督となつた。それから所謂第一期の基金募集が始まり、東京専門學校を大學組織に改めて早稲田大學と改稱することになり、開校二十年記念を兼ねて早稲田大學の開校の式を挙げ、圖書館が起り、高等豫科が起り、商科大學が起つた。これが高田博士學監就任後五年間の事業で、早稲田大學の大きくなつたのは實に此間にあるのだ。

以上の發展を細かく陳べる前に、學校創業以來の行政の大略を陳べる必要がある。校長は大隈英麿、前島密、鳩山和夫三君を舉げて三代を経たが、當時の校長は今の總長や學長と違つてアクテージュのものでは無つた。幹事は創立の時からあつたが、それは餘りに事務的のもので、権力も無つた。そこで創業頃には監督といふ後日の學監に似たものを置き、幹事と校長の間に介立して樞要の校務を擔任したことがある。此の監督は確か規則で定まつたものでなかつたと思ふが、便宜上有力な教授が輪番にこれを務め、代るゝ責任を負うて重要な衝に當つた。此

監督となつた人は高田、山田（一郎）、天野の三氏であつたと思ふ。山田氏が漢文に録した監督日誌があつた筈だが今は所在が知れない。此の行政を當時監督政治というた。併し此の制度は餘り長く續かず、田原榮氏が幹事となつてから其の職權も稍々擴がつた爲め監督政治も自然やみ、小川爲次郎氏が田原氏に代はり、私が小川氏に代つた。斯様に多少の沿革はあるが、最初から職名の有無に拘らず高田博士は學校經營の中樞として重きをなし、終始幹事を指導し重要な發案は皆博士から起つたのである。

全身を學校に投じたる高田博士

學校も創立後十數年を経て漸やく盛んになつたとは云へ、經濟は不相變困難で、幹事が一番大切な役目は不足の金を工夫するにあつた。當時の事務は今日から見ると簡單であつたけれども事務に幹たる私の如きは一方政界に乗り出して、議員であつたりしたので、自然事務に阻滯を來すやうのこともあつた。高田博士も大隈内閣の時には一時外務省に入つて通商局長となられたこともあり、校務を毎日見ることは勿論出來ず、旁々學校の形勢は行詰りの觀なきにしもあらずで、若し其儘に推移したら或は學校を衰運に導いたかも知れなかつた。

此行づまりを展開したのは高田博士である。博士は通商局長を辭して後、慨然として一意學校の衝に當らんと意を決し、茲に全身を投ずるに至つた。是が學校に取つては救ひの神であつた。博士は先づ紛亂せる事務を鋭意釐革すると共に、積極方針を立て、邁進した。職名は學監で地位は校長の下にあつたが、校長に齊しい權力を振ひ縦横に切り回した。此學監の名は前に言ふ監督に近い名であるが、それから淵源したのではなく、私の郷里の新潟學校に學長の次に校監といふがあつた所から思ひつきそれに倣つたものである。後に諸學校が争うて學監を置くに至つたのは言ふまでもなく早大に倣つたのである。

學校當局の苦闘

高田博士は學監となつて間もなく東京専門學校を改めて早稻田大學となすの大望を抱き、それが大隈侯や學校幹部の賛成する所となつたが、さて大學組織となすに就ては豫科を設けねばならず、圖書館が備はらねばならず、先だつものは資金であつた。そこで基金募集を執行するに極まつたのが三十三年の末頃であつた。これが第一期の募集である。これより前にしばしば基金募集の議が起つたが、案が出來ても實行が容易でなく、主たる責任者が無い爲めにいつも

有耶無耶に終るのが、今度こそ敢然實行することになり、前島前校長を委員長に擧げ、高田學監や私などが専務委員となつて、三十四年一月から、運動を開始し、私は委員長と共に郷里新潟縣に出張し、高田學監は九州に出張し、爰に募集の端を發した。慣れぬ事であるから最初は頗る困難を感じた。此一期募集は三十萬圓を得んとするに在つた。大隈老侯のやうな有力者を背後に持つてゐるのであるから募集は容易でありさうで其實非常に骨が折れた。私が高田學監と共に私の郷里へ再度出かけたのは三伏炎暑の際で、三十日間に涉り越後の六分通りも遊説を試み、非常につとめたが案外成績が擧らなかつたことを今思ひ起すのである。それにしても一年有半の努力が二十八萬圓を募り得たことを考へると、手初めの募集としては決して不成績では無つたのである。翌年の三十五年九月が學校の創立後二十周年に當り、それを記念すると共に早稻田大學と改稱して開校式を擧げた時の募集額が即ち廿八萬圓餘となつてゐる。その後も募集を續けたから結局豫定額を超えたと記憶する。

専門學校を大學に改めた理由

何故に専門學校を大學に改めたかに就ては、開校式場に高田學監が其理由を尤も鮮明に説か

れてゐるから爰に其の概要を抄録する。

諸何が故に、此東京専門學校を此度大學組織に改めたかと云ふ事、之れは一言諸君に向つてお話を致して置く必要があらうと思ふ。此事に就ては二つの理由があります。一は學校内部の事情とは如何なる事かと申しますれば、邦語のみを以て専門學を修めることにしますると、中學卒業生を其儘收容して之を教授しても敢て不都合を感じない譯ではありませんが、學の蘊奥を究めんと欲するものは只其國の國語のみを以つて學問をなして、足れりと云ふわけのものではない、少なくとも一國若くは二三ヶ國の外國語を修め、外國の書物を涉獵するといふ必要がある。此事をさせますには、是非共中學を卒業した者に向つて、多少の準備をさせなければならぬ。専門學を修めるに至るまでに、多少の階梯を踏ませなければならぬ。尤も從來と雖も英語政治科の方は全く階梯を履ませない譯ではありませんが、半年若くは今少しの時間を與へまして準備をさせたのでありまして、どうもそれでは十分の結果を得られない、少くとも一年半の準備をなさしめる事を要する、依て高等豫科と名付けて大學に入るの準備をさせる仕組を立てる事に致しました。即ち言葉を換へて言へば、今まで順序の急激であつたものを、多少勾配を緩くして登り易からしめると云ふ、此教育の必要上、是非共大學組

織の止むを得ぬと云ふ事を感じた譯である。之は内部の理由、此外に外部の事情に刺戟されました理由が一つあります。夫は如何なる事であるかと申ますと、今日中學の数は年々歳増加して、従つて其卒業生も殖えて参つたが、此卒業生が往つて學ぶに所が尠ないと云ふのが、諸君の多數が御承知である通り今日の状態である。國家の高等教育に關する設備は種の事情よりして今日はまだ不完全であると云ふ實況、此高等教育を修めんと欲する中學卒業生の數は年々増加して、而して是等は年々歳々高等學校の門を窺つて入る事を得ず、遂に方向に迷ふと云ふ姿で、此有様は到底見過す事の出来ない實況でありますから、私立學校ではありまするが、聊か力を爰に致して國家教育の御手傳をしたいと云ふのが、即ち此大學組織の止むを得ない外部の事情であります。

新大學の特色

専門學校を改めて大學組織とした理由は右の如くで、時勢の必要に鑑み教育の程度を高めたのである。但し官設の大學に倣つたのでは無かつた。今日の早稻田大學は帝國大學と些しも違ひがないのであるが、此の三十五年に企てた大學の組織は、折衷したものであつた。そして其

の折衷を以つて寧ろ特色としたのである。それは科目を選択して、最も必要のものを選び虚を避け實を取り、多くを食らぬ代りに學問を充分咀嚼せしむる事、帝大の高等學校の修學年限の長きに顧みて、高等豫科を一年半に短縮した事が重なる相違であり、又特色であつた。そして教育の方針は理論と實際との併行を努め、可成實生活に適合する人物を造就せんとするにあつた。此の階梯があつたので、後年大學令に據り、國立大學と同一地歩に立つ綜合大學を起すことは案外容易であつたのである。私學で大學と稱したのは早稻田が最初で、他の私學も追々倣つて大學と改稱することになつた。

感激に充ちた大學の開校式

此の大學の開校式には大隈侯が主人側で演説されたことは言ふまでもない。文部大臣として菊池大麓氏、日本銀行總裁として山本達雄氏、官學を代表して帝國大學の舊總理加藤弘之氏、政界の大立物として伊藤博文氏が何れも演説を試みられた。式場でこれほど人物の揃つたことは無い、そして私をして最も感激せしめたのは伊藤加藤の兩氏が、式壇に立たれたことであつた。此兩氏は實に珍客であつた。本校は創立後長い間、政府の誤解を受け其の嫉視の的となつ

てゐたもので、動もすると叛逆人の製造所の如く宣傳せられ、大隈侯の政治上の敵手たる伊藤公、官學の代表たる加藤男の如き、割合に事に理解のある人達も、自然一種の色眼鏡を以つて本校を見てゐたのである。勿論二十年の久しき一たびも本校へ足を入れたことのない兩氏が、交々式壇に立つて祝辭を陳べるに吝かでなかつた。その演説を聽いて十數年間の事を思ひ較べると吾等は眞に今昔の感に堪へなかつた。時勢の推移は實に驚ろくべきである。尙ほ私の今尙ほ忘れない一事は、伊藤公がその演説中これ迄外賓が會つて氣附かないことに言及されたことである。公は本校を評して私學は多く營業的であるが此學校はそれとは選を異にしてゐると頌し、私學の尤も困難とするは經濟の料理である、よくも百難を凌いでこゝに至つた、畢竟經濟の料理宜しきを得たからで、これは官學の及びもつかぬ事で、よろしく學ぶべき事だと喝破された。流石に伊藤公は慧眼で、學校の經營家が最も困しみ、言つて貰ひたいと思ふ所へ言ひ及んだ、私などは此演説を聽いて欣喜の情を禁じ得無つた。

尙ほ加藤男の演説を聞いても、多少の感なきを得なかつた。男は東京専門學校創立の時大隈侯の麾下に趨りその創業に與つた高田氏始め吾等十名計りのものを産んだ帝大の總理であつたのである。吾等は此總理の薰陶を受け、帝大に得た教育を此學校に移したのである、それが漸

く年所を積んで、大學を組織するまでに進んだことを、舊總理は何んと感じてゐるかなどと、加藤男の演説の趣旨をソツチのけにして、私は考に耽つた。學者肌の男は不相變感情を現はさないけれども、内心は必ず喜んでゐるであらう、否な喜ばざるを得ないと勝手な感慨を馳せたことを今想ひ起すのである。

此開校式の當夜盛んなる提灯行列が行はれ、早稻田學園の學徒は早稻田から發して神田、日本橋、銀座邊を練り歩るき、宮城前に集中して兩陛下の萬歳を唱へた。これも空前の事で、日本橋銀座筋の大商店は特に店を開き、通過の行列に對し歡呼して祝意を表した。私は其頃病後で活力が無く、行列に加はることが出来なかつたが、空しく家に立籠つてゐるに忍びず、九段下に佇立して行列の九段坂を下るのを見てゐたが、坂一杯に横溢する提灯の火光は宛がら火の海の動くかと思はるゝ壯觀で、行列の先頭が坂を下る時後列はまだ校門を出ないと注進せられた。二十年前には僅かに百にも足らぬ學徒が斯くまで繁殖したかと想ふと、歡喜の感に打れて涙ぐましくなり、一時は茫然自失した位であつた。此頃の早大の學徒は三千幾百、早稻田中學の生徒が千、一年前に出來た早稻田實業學校の生徒が五六百、其に教職員を加へると五千の數は確かにあつたと思はれる。

圖書館の建設

前項に東京専門學校を改めて大學組織とし早稻田大學の成つたことを述べたが、次に陳ぶべきは圖書館を起したることである。大學を組織するに就ては、勿論科程の編制、教授の選任を始めとして諸般の設備を要したが、就中大切な設備は圖書館の建設であつた。流石に高田當局は先づ手を之れに下し、大學組織を發表する前に、既に圖書館は閱覽室書庫と共に工を竣へてゐた。高田學監が大學組織披露の演說中にも此の竣工の事に言及してゐる。實は東京専門學校創立の頃から、不完全ながら圖書館らしいものがあつた。今は震災で崩れて其影をも留めないが所謂大講堂の階下で、迎賓室に隣る一室を書庫とし（此室は後に理事室と云つた）後に教員室に充てた書庫に接続する一室を閱覽室としたことがあつた。勿論書冊の數も少なく閱覽者も極めて寥々たるもので圖書館の體をなしてはゐなかつた。併し早稻田の圖書館の歴史には逸すべからざる事實であるが、吾大學に名實共に備はる圖書館の起つたのは大學組織の首頭に設けたのが初めである。其の館に館長を置いたのも亦此時が始めで、私は館長に擧げられたのである。私の館長を勤めたのは十數年の長きに亙つた。當初圖書館の建築に着手した頃は、私は重

患の揚句で、都外に靜養してゐたので、設計には與らなかつた。書庫は三層の煉瓦作りで近頃迄存してゐた。閱覽室は今無いが木造であつた。私は此館の漸やく出來上つた頃、健康も略々回復したが、活動するには餘りに疲れてゐたので、高田學監の私に言はるゝには「君は圖書館の經營に當るがよからう、靜かにやれる仕事だから病後の君には適する、ヤツテ見給へ、圖書館は案外趣味のあるものだ」と勧められた。高田君の勧めは私に深き感激を興へた。私は元來年少から書物趣味があつたので、此の衝に當ることを喜んで直ちに諾したが、實は其頃まだ圖書館の管理法や西洋流の目錄の編成法などを心得てゐなかつた。しかし初めから興味を以つて事に當つた。

圖書の蒐集

何は差措き先だつものは圖書の蒐集であつたので、一面大學諸科に要する洋書を蒐めると共に、しきりに和漢書を漁つた。學校の創立以來追々購うた圖書は可なり在つたとは言へ、圖書館建設前には圖書購入の定額があつたでもなく、和漢洋書共頗る不備であつたから、館が設けられた後數年は購書に忙がしかつた。當時はまだ和漢の書籍が澤山に坊間にあつて、其價も甚

だ安かつた。私が何れかと云ふと和漢書の蒐集に偏したかの如き態度であつたのは、洋籍は私が館長を罷めても末長く集め得るが、追々亡びゆく和漢書を集めて置かないと、他日必らず臍を嚙むの悔があらうと思つて、銳意此方面に力を注いだ。私は下谷池の端の書肆琳琅閣へ日参して或は半日或は終日其の店の奥座敷に陣取つたのは此頃であつて、各所から此店に集まる多くの圖書を他人に占めらるゝを厭うて、必要のものは一書を逃すまいと、毎日出張したのである。斯くして三四年の間に數萬冊を購うたが、今考へると此頃集めたものに稀觀のものが少なくない。後に追々書價が昂り、震災後は別して書物が拂底で、少し稀の本となると馬鹿に高價となつた。當初集めた幾萬の書籍を今頃集めたら莫大の金を要するであらうが、當時は實に二束三文の價であつたのだ。それを思ふと早く、和漢書の蒐集を力めたのは、決して誤つた遣り方で無かつたと信ずる。斯く一方に多くの圖書を購ふと共に、一方には寄贈を諸方に促したり寄託を勧誘して集まつたものも少なくなかつた。二十萬冊を納め得べき書庫が明治の末頃全く充實して狭隘を告げた。それが爲め今上御即位記念にと圖書館の改造を圖ることになつた。これが爲め私が衝に當つて五十萬圓の資金を募つたが、種々の事情で工事に着手することが後れた。其の重なる原因は大學に急施を要する高等學院の増設其他の事があつた爲め、已むを得ず

手控へたが、震災後に至つて漸やく建設された。それが今の圖書館である。

思起す館長時代

扱又私が館長時代に戻り、當時幾何の閲覽者があつたかといふと、一日四五百から六七百人位を數へた。校外の人にも閲覽を許す規則を設けたが、外來は極めて少なく、校友と在學者が多數を占め、夜間も開館した。教授には館外に持去ることを許したが、其の貸出し書冊の數も甚だ多かつた、追々館務も整頓を告げ、都下有數の圖書館となつたのは開館後三四年を経てからである。私が圖書の購入に熱中した結果、毎年豫算を超過した。そして其の超過が時に巨額に上つたこともあつたが、之れを學校に求める譯にゆかぬ所から、高田學監の諒解を得て、其都度私が資金を募つて收支の計算を合はしたことを思ひ起す。或る時は募金が出来ず私が經營してゐた國書刊行會から金を立替たこともある。饗庭篁村氏から曲亭馬琴の稿本其他手澤本を五百圓で買入れた時などは、資金が無いからというて之れを逸することが如何にも残念であつたので、機宜の取計らひをすることが止むを得なかつた。刊行會で立替たのは此時であつた。其の馬琴の舊藏本は今吾が圖書館の誇りとする一つとなつてゐる。又他から寄贈を受け

た圖書も少からずあるが、田中光顯伯から、前後二回に寄贈された、六朝寫本皇侃の禮記の義疏と同じく六朝寫本の玉篇及日本の古文書二十通は皆國寶たる權威のあるもので（義疏と玉篇は後に國寶に指定された）何れも早稲田の誇りとする所である。此等の事を書き立てると、際限もなくあるが、今は委しく語る場合でない。私の館長であつた十數年は私に取つて最も愉快を覺えた時で、私の趣味を培養向上せしむるに大なる助けをなした。私の經歷中忘れ難いのは實に館長在勤中である。後に校務の都合から理事一人を置くことになり、私に其の職が擬された。高田學監は其の際私に言はるゝには、圖書館は既に整頓したから、最早君を煩すまでもない。館長は他人に譲つて、君は經營の方に回はり自分を輔けて欲しいと云はれた。其時私は理事で館長を兼ねてよいことならお受をするが、兼ねることが出来ない譯ならば寧ろ理事を辭退したいと斷つた位、私は圖書館長に執着があつた。眞實私は圖書館に此の上なき趣味を感じたからである。實は館長の地位は其頃幹事以下に置かれ、圖書館其物に未だ理解がなく、隨つて館長の地位も重く無つたのであるけれども、私は地位の如何に拘らず飽まで之れに執着したのである。

商科大學起る

早稲田大學と改稱された翌年、大學程度の商科を起すこととなり、先づ一年半の豫科を設けることとなつた。此の施設の動機は校友中實業界に在るものが、切々當局に勧めたからであるが、實は時勢の必要に鑑みての英斷であつた。是れより先き一年ばかり前に高田學監や私が發起して大隈侯に請うて早稲田實業學校を創立し、實業教育に多少の經驗もあつたのである。學理と實地を抱合し實務に當る人材を造就せんとする吾が建學の本旨からしても、大學に商科を置くを最も大切に感じたのは頗る道理あることであつた。斯くして天下に率先して商科大學を開くことになつた。高等商業學校が商科大學となつたのも帝國大學で商科を設けたのも皆な其後の事である。此の施設は早稲田大學の爲めに一生面を開いた。之れが爲めに一大原野を開拓し、早稲田の領域を甚しく擴めた。従前は政治、經濟、法律、文學の諸科が置かれてあつて經濟を修めて卒業するものゝ内には實業界に身を投ずるものもあつたけれども、大體學校の創立の時から世間から政治學校と目され、事實も政治趣味が濃厚であつたので、出身者は多く政治の舞臺に立ち、新聞界には特に出身者を歓迎したが、實業畑には未だ卒業生が充分に認めら

れず、相當の人材でも充分活躍が出来なかつた。然るに商科大學の開設は、早稲田に新しい且つ大なる實業趣味を加へた、それが恰かも時勢に投じたから、追々非常の發展をなし、又學科中最も多數の學徒を收容し、隨つて尤も多數の卒業生を出して爰に實業界に活躍する端を發したのである。早稲田が實業界に接觸したのは實に此時からである。

實業家に負ふ所多き吾商科

早大が實業界に接觸したことにつき、一事の漏す可らざることがある。それは幾回かの基金募集に、多くの實業家が其の募りに應ぜられたことである。これがやがて學校と實業家の提携である。そして商科大學が起つてからは一層實業家の同情が濃やかになり、一たび寄附金を寄せられた因縁から、二たびも三たびも繰返へさるゝことゝもなつた。尙ほ其上に得業生は概ね寄附者たる實業家の厚意に因り就職の道を得ることもなり、茲に早稲田は實業界に一天地を開くに至つたが、右の次第だから商科の發展は實業家に負ふ所が少なくないことを忘れてならぬ。

慶應義塾は實業畑に早くから接觸したのに反して早稲田は久しく實業には縁が遠かつた。い

つぞや慶應義塾の五十年の祝典のあつた折、早大は創立二十五周年に當つたが、招かれて慶應に往つて羨ましく感じたのは、十人ばかりの慶應出身者で實業界に知名の人達がぞろり揃つて來賓を迎へてゐた。其頃早稲田には十人は愚か一人と雖もそれに並ぶほどの人が無つた。勿論學校の創立が二十五年も後れてゐるから、斯る懸隔は怪しむに足らないが、實は當時さむしく情けなく感じたのに、今は漸やく吾意を強うするものあるに至つたことを學校の爲めに祝さざるを得ない。

本大學と支那との教育關係

次に思ひ出すのは、早稲田大學に清國留學生部を設けたことで、校史に特筆すべき重要事件である。此の留學生部を開くに就ては、高田學監は親しく支那の事情を取調べるため、同國の視察に赴かれた。それは明治三十八年の春で、歸朝後間もなく此部が特設されたのである、今それを委しく陳べるに先だち、少しく支那の事情を語る必要がある。又早稲田大學と支那との教育關係は此の留學生部の開ける前に既に成り立つてゐたことも語るの必要がある。

明治廿七八年の日清戰役に、支那が脆くも敗れたので、支那の覺醒はこれから始まつたので

あるが、更らに支那の覺醒を大いに促したのは、それから十年の後、明治三十七八年日露の戦役に於て、強露の敗れた事が自國の敗れたことよりも、更らに一段深刻なる刺戟を支那に與へずにはおかなかつた。強露に對する日本の奇勝は、どうしても君主獨裁の專制政治に對する、立憲政治の勝利であらねばならぬと支那人は考へた。そして其の考は當を得たのである。そこで支那の國民は立憲熱に燃え出したが、就中有識階級は早く覺る所があつて、日本の立憲治下の制度を研究したり或は日本の官私の學校に入つたものも少からずあつた。往年康有爲が早稻田大學で一場の講演をやつた後、吾等は此人を紅葉館に迎へたことがある。其折に、康有爲は吾等に告ぐるに、日本に來た第一番の留學生は自分であると云うた、それは戯れて云うたのだが事實日本研究を一番早くやつたのは此人であるから、第一番の留學生と云ひ得るのである。又湖廣總督張之洞が勅命を奉じて「奏定學堂章程」てふ日本の教育制度に模倣しての新教育制度を制定したのも日露戦役前であり、南洋大臣陳寶琛が西太后の忌諱に觸れて野に下り、その故山福州に全閩師範學堂を創設したのも亦同じ頃である。此の學堂の總教習として迎へられた桑田豐藏氏は早稻田の校友で、桑田氏が聘された關係から矢澤千太郎、向後順一郎、薄井福治などの校友も追々迎へられて支那に赴き桑田氏の下に働くやうになつた。

明治三十年早くも支那から遊學

ひとり前掲の人達ばかりでなく、早稻田から支那に赴むいて、早稻田と支那とを結びつけた校友は少なく無かつた。柏原文太郎、井上雅二、青柳篤恒、小山田劍南、神田正雄、大内暢三の諸氏などもそれであつて早稻田に支那通の多くあるのは此故である。勿論背後には大隈侯があつて、常に支那の維新に後援を與へられた。侯が「東亞の平和を論ず」と云へる獅子吼を梁啓超が漢譯して普く四百餘州に宣布したことは著名の事實である。支那の朝野の有力者が絶えず侯を訪うて指導を受けたことも知れ渡つてゐる事實である。又前に述べた張之洞が勅旨を奉じて教育制度を定むるに當つても、侯の意見を叩き一再ならず書信の往復があつたことは言ふまでもない。

右のごとき因縁もあるから、支那の學生が吾早稻田に來り學んだのも、明治三十年頃から始まつて居る。乃ち東京専門學校時代に心ある支那學生は早く來つて、英語政治科や邦語政治科或は法律科に入り日本の學生と伍をなして専門の學科を修めた。此の卒業生の内には後に支那の要路に立つた秀才が少からずある。乃ち左の諸氏のごときは皆清國留學生部を設くる前、既

に早稻田を出た人々である。

前日駐公使陸宗輿、前駐日公使汪榮寶、金邦平、唐寶鏐、劉崇傑(前西班牙駐劄公使)、江庸(前司法總長)、林長民(前司法總長)、稽鏡(外交部參事)、陸夢熊(交通部參事)、張繼、前參議院議長)、楊度(袁世凱秘書)、李士偉(前中日實業公司總裁)、董鴻禕(前教育總長)等。

高田學監の支那訪問

支那には千有餘年科擧の制度があつて、それが唯一の登龍門であつた。然るに清廷は新教育制度實施の前提として、此の舊制度を全廢した。科擧は廢されたが、新制度に據る學堂の普及は、一朝一夕に出來上るものでない。そこで苟くも青雲の志を懷くものは勢ひ遠く笈を負うて同文の邦なる日本に來り學ばざるを得なかつた。前掲の諸氏が早く志を立て、來たのは逸早く此の潮流に駕したのであつた。

前掲諸先輩の後を追うて清國留學生が潮の如く日本へ寄せ來る形勢となつたに就ては、支那學生に普通學を教ふる一種の設備を必要とした。高田學監が青柳篤恒を伴うて、親しく清國を訪うて實地の視察を遂げたのは此故であつた。

今青柳氏に就て旅程の大略を聞くに、先づ上海からはじめて南の方福建へ渡り、再び長江の流域を蘇州、杭州、南京、漢口、武昌、漢陽と巡遊し、洞庭湖を南に湖南長沙へ下り、更に漢口から河南の大平原を跋涉して國都北京へ入り、天津から滿洲へ廻つて歸朝したのである。

學監の教育上の意見を聞はした名士の重なるものは上海では盛宣懷(後の郵傳部尙書)張謇(支那の澁澤さんと呼ぶる人)張元濟など、福建では後の宣統帝師傅陳寶琛、林文忠公(則徐)の孫林炳章、南京では俞明震、武昌では湖廣總督張之洞、北京では度支部尙書趙爾巽、學部尙書張百熙、そして天津では直隸總督北洋大臣袁世凱あたりであつた。中にも早稻田と鄰邦大陸との教育上の聯鎖となつたのは、當時新文物輸入の急先鋒たりし、北に於ては袁世凱、南に於て張之洞の二氏であつた。殊に湖廣總督張南皮官保は學監に請うて教育上の意見を徴した。その意見書は一大雄篇であつた。加之早稻田から支那語で直接講義の出來る十數名の日本教師を一齊に武昌に招聘した。勿論高田學監訪問の結果である。

清國留學生部の創設

早稻田大學教授松平康國氏が張之洞の顧問として迎へられたのは、恰かも高田學監支那訪問

の時で松平氏は同船で日本を發したのである。偕て高田學監歸朝間もなく、爰に清國男學生部が特設された。此部を開くに就ては青柳氏は大隈侯及學監の命を受けて當時早稻田の留學生にして後の中日實業公司總裁（明治天皇より勳一等を授けられたる人）李士偉氏を相手に牛込原町の葦館なる下宿の一室に會して、幾度となく清國留學生部の組織編制に就て擬議を重ねて成案を得たのである。即ち豫科一年、本科二年、補習科一年とし、師範科（物理化學科、博物學科、歴史地理科の三）政法理財科及び商科を置いた。その趣旨書の冒頭に

學問天下公器。非一國一人可私。況清國。疆域相隣。人種相同。其學術我嘗受之矣。其文字我仍用之矣。固宜以我有餘補其不足。是所以報舊德而贊文化也。

と標榜したのが、その生命である。

青柳氏此部の長に擧げられ講師には法學博士浮田和民、理學博士坪井正五郎、法學博士中村進午、理學博士横山又次郎、農學博士外山龜太郎、理學博士草野俊助（當時理學士）、理學博士石原純（當時理學士）、山上萬次郎、中島半次郎、宮田修、煙山專太郎の諸氏其他數十名があつた。

當時清國全權公使楊樞氏は留學生總監督を、一等參贊官王克敏氏は同副總監督を兼ね、公使

館内に留學生監督處を特設し、學生の入學修業等に就き學校當局と協議の任に當つた。

此の留學生部を開いた結果として支那の學生が入學した數は不斷に一千名乃至一千五百名に及んだ。これが爲めに早稻田に於ても新たに諸般の設備を整へた。乃ち理化に關する講座を設けたのも之れが嚆矢で元の正門内左側に階段教室を建築し實驗室をも併せ設けた。

尋いで中島半次郎氏が天津の直隸師範學堂に中桐確太郎氏が杭州の浙江師範學堂に聘されたのも皆之れが因縁であつた。

使命を果した留學生部と其影響

其後支那本國の教育機關が漸く備り、普通教育は本國に於て授くる事となつたので、明治四十四年清國留學生部は完全圓滿にその使命を終つて之を閉し、再び舊態に復して、日本學生と同學し得る支那學生のみ、後に残つて高等教育を受くる事となり、以て今日に至つた。

此留學生部より輩出した名流は少なくない。大學堂教授あり國會議員あり、谷鐘秀、李肇甫などは最も著はれてゐる。

此等多數の留學生の卒業の毎に記念のため詩畫集を揮毫せしめたものが數百紙ある。それは

鴻爪帖と名づけて早稻田の圖書館に藏してある。又明治四十年十月頃早稻田大學のアルバムを作るに當り自分の思ひつきで、早稻田八景を懸賞で學生全般に募集したことがある。其の選に入つたのは甲乙丙共に清國の學生で劉文嘉が甲賞、高中和が乙賞、劉南谿が丙賞を得た。個様なことにかけては支那人には特別の才があつて、到底日本青年の及ぶ所でない。此の入選の八景を取捨して定めたのが、當時製したアルバムに收めてある。以上三清人の八景案并に附帶の記文は當時の早稻田學報に收めてあることを附記しておく。以上は清國留學生部特設の始末の大要であるが、これが機縁となつて、後年理工學科を新設するに方り、老侯及高田學長の命令で青柳篤恒氏が渡支した折にも支那の皇族大官より少からず寄附金を得た。乃ち北京中央に在りては監國攝政王を始め肅親王、慶親王、大振貝子、載濤貝勒、載洵貝勒、溥倫貝子、載澤公の各宮家、大官としては軍機大臣張之洞、同袁世凱、同那桐、同瞿鴻禨、以下の諸氏、地方各省に在りては直隸總督楊士驤、東三省總督徐世昌、以下の諸氏で、此時は恰かも慈禧皇太后及び光緒皇帝兩宮相嗣いで崩御の國家大故の危機であつたに拘はらず、皆相競うて各々數千元宛の寄附を申込まれた。此等の人々は皆吾大學より推して校賓と仰いでゐる。

私學の經營難

創業の經營難は何事でも同じであるが、學校殊に私學の經營ほど困難のものは無い。營利會社などは利益のあるやうに力めれば、それで經營は成るが、學校は營利事業でない。官公立學校は資金があるから格別の困難はないけれども、私學は資金がないから此點に於て先づ困難を感じる。吾が早大の前身東京專門學校創立當初、大隈侯のごとき大立物を背後に有しながら、如何に困難を感じたかは此の編の初め頃に敘した拙話によりても思半ばに過ぐるものがあるであらう。學校が漸やく發展した頃、伊藤公が來校されての演説中「學校は營利事業でない、私學の經營は特に困難である、其困難に打勝つてよくも斯くまで進めた、公私の學校は宜しく、此學校の經營に學ぶべきだ」と、賞讃されたが、流石に伊藤公は急所を云はれた。自から經營の難衝に當つた人でなければ、斯る同情は起り得ないのである。

學校は營利事業でないから、教化の爲め看す／＼不利の事もせねばならぬ。例へば或る學科は初めから收支の償はないことが知れ切つてゐるものもある、しかしそれを設けねば學校の體をなさぬ、學校經營家のツラサはそこにある、別して收支の不足を公費に仰ぐことの出来ない私

學に於ては、非常のツラミがある。官公立學校の經營家が全く知らないツラサはこゝに在る。

世間には經營に特能のある人がいくらかもある、その人が學校を經營したら成功するだらうと思ふ人もあらうが、さう簡單にはゆかぬ、學校の經營家は學著を駕御し得る人でなければならぬ。教授と學生に信望のある人であらねばならぬ。經營家其人に學藝の備はるを要する。然るに學藝と經營能力が兩立しないことが寧ろ通例である。學者の中には多く事務に迂で世故に疎な人が少なくない、が學者は世故に疎な方が却つて尊いのである、双方を兼ね備へてゐるものは世間廣しと雖も稀である。或は兼備の人があつても人格に不備があつたりする。俗才と人格の兩立することは、學藝と事務才と兩立するよりも一層稀れである。

學校の事業は會社や其他の事業と異つて、いくら經營功を奏したからというて、充分の酬いのある所でない。一身を教育に捧げて犠牲となる積りでなければ學校經營の衝に當られぬ。私が人格を云々するのは此故である。教育の衝に當るものは、全體損な役回はりであるが、就中經營の衝に當るものは損役だ。と云ふのは教授達が經營の味を知らないから、それに對して理解がなく、成功したればとて褒めるでもなく、やり損なへば攻撃がくる。經營に理解がない爲めに往々誤解が起つて、經營家は痛くもない腹を探られ、時には謂はれのない言ひ掛けを受く

ることも敢て珍らしくない。總じて經營の衝に當るものは、幫間流に御無理御尤と事莫れ主義ではやつてゆけぬ所から、動もすれば多少の衝突も起る、随つて敵が生じ易い。經營家其人が切れ、ば切れるほど此の難がある。學校經營は學校存立の上に最も大切なことであるが、其衝に當る人ほど眞價を認められず、割のわるい役回りは無いのである。

帝都復興番付の上段を

占むべき吾早稻田

私は現在の學校當事者が大震災以後矢繼ばやに諸般の經營をされたことを多とするものであるが、經營の難さを解しない者から見たら災後當然の事だと輕々に思うてゐるかも知れん、併しそれは餘りに冷淡に失しはしまいか。それに就て思ひ出すのは、曾て大阪に盛んな校友會があつた時、高田總長に隨つて私も臨席したが、席上總長より震災後の經營に就て輕くサラ／＼と大要を報告され、少しも其の經營の勞苦を云はれなかつた。そこで物足りない感があつたので私が起つて多少の敷衍をしたことがある。その大要は左の如くであつた。

總長は自家の經營を如何にも輕く苦もなく出來たかのやうに云はれた。自畫自讚の嫌ひを避

けるには、さうあらねばならぬが、自分から見ると、決して軽く考へる譯にゆかぬ。震災後僅々三ヶ年、帝都の復興は幾んど緒に就かない時に方り、學校は火災に焼失した理科の研究所を建て、潰れた大講堂の代りに大なる圖書館を造り、夜學の爲めに製圖室を作り、學生俱樂部を建て、運動場にスタンドを造り、壊れた牆壁を改築し、校内の講堂の位置を變じて區劃整理をした。そして大隈侯の記念講堂を建てつゝある。これが資力に乏しい一私學の經營で、皆な震災後の事である。帝都の復興番付でも作るとあれば正しく早稻田の諸設備は上段の好位置を占むるに相違ない。私は非役で學校の當事者でないから、八百長でなく公平に見て、よくもこれ丈の事が僅かの間に出來たと、内々其經營手腕に感服してゐる。諸君は經營に鋭敏の理解のあるべき大阪に居らるゝからには、斯く言ふ私に同感であらねばならぬ。と云うた。私の此の注脚演説で漸やく學校當事者が如何ばかり三年間勞したかと分つたらしかつたが、實は目前の大經營も幾何かの贅辯を費さねば、校友にすら理解を博し得ないと思ふと、情けない感じがする。

私學經營の要訣

早稻田の如き複雑で大規模の學校の經營は多岐多端で、簡単に言ふことは出來ないが、要訣はある方面の不足を或る方面の餘を以つて補ふといふに在る。随つて經費の流用は已むを得ない。否な寧ろ大切である。官設學校の當事者が、動もすれば早稻田の如き私學の經濟の取り方を理解せず、或は餘り擴張に過ぎると難じ、どうして收支が償ふかと不審がるものもあるが、會計法に縛られてゐる官立學校經營家に、分らないのも實は無理ならぬことである。早稻田が手を擴げ過ぎるといふのは畢竟抱負が狭いからいふのもあるが、實は私學の存立に多般の設備を要する實情があるのだ。乃ち多般の學科設備が無ければ、互ひに相扶けて經濟の料理が出來兼ねる經營上の必要があるからである。

募金と大隈老侯・澁澤子

學校は終始積極主義で進んで來た、一たびも消極主義を取つたことがない。積極主義は私學の經營に尤も大切であることは、老練の經營家は首肯するであらう、但し積極方針に伴うて資金を要するは言ふまでもない。茲に於て早稻田の經營家が前後幾十年最も勞したのは資金募集にあつた。學校が發展毎に幾回となく募つた金は幾百萬の多きに上りなかく、其都度一ト通り

ならず骨も折れたが、嘗て失敗に終つたことの無いのは、大隈侯のごとき大立物を總長に戴いてゐる外に、財界に勢力のある澁澤子の助けを受けたからである。私は専ら募集の衝に當つた關係上特に思ひ出が多いが、大隈侯も晩年こそ自から足を擧げて募集のため地方に出張さるゝ迄になり、露骨に勧誘もされたけれども、當初は侯を煩はすことが餘りたやすく無つた。勿論侯はどの場合でも勞を取ることを一たびも辭されたことは無つたが、いつも有力者を自邸に招かれ、いざ勧誘となると、世界の大勢などを幅廣ろく説かれて勧誘を言外に寓するに止められた。吾等事の衝に當るものは何故に簡單にもつと涙ぼく言はれないのだらうかと思つたこともあつた。あれだけの人になるとどうも人に依頼することが厭だに見える。ある時慶應の鎌田君を訪うたとき、募金の談に移り、おらが大将には困るというたら、鎌田君の云ふには、おらが大将も人に頼むことが大嫌ひで困つたと同感を表せられた。福澤先生も矢張り、大隈侯と同様であつたと見える。大隈侯に就て今云つたのは初めの頃の事で後には頗る如才なくなつたのである。

澁澤子爵に至つては大隈侯の態度と全く異つて、すべて事務的で、先づ自からの出金額をサツサと定めて、人に肉薄して勧誘さるゝが例であつた、ある時大隈邸に多くの實業家を會した

時などは、自から通路に筆硯を載せた卓子を置き、來客の歸路を扼してみづから申込額を書かされたこともあつた。吾大學が發展上子爵に負ふ所の少なくないことは申す迄もない。

吾大學の募金に對する特徴ともいふべきは、募集費を經常費より支出し寄附金には毫厘も手をつけぬ主義を守つたことである。餘裕のない學校の經濟から募集費を辨することは樂なことではないが、それが出來たのは、多く募集費を要しなかつたからである。最後の募金の場合は別として、既往幾回かの募集の費用は寄附金額の二分乃至三分にしか當らなかつたやうに記憶する。勿論多くの人手をかけず、高田氏の外に私と田中唯一郎氏の二人が専ら其衝に當つたに過ぎなかつた。

募金運動のツラサ

今になつて思ひ起すのは募金運動のツラサである。私は幾回か此衝に當り主に關西方面を擔任し、數ヶ月に亙つたこともある。局外から見ると遊んでゐるかの如く見え、理解のない人から羨まれたこともあつたが、實は此位氣骨の折れることは無かつた。自分の爲めではないとは言へ、人に頭を下げて、誰れも喜ばないことを説くのである。成績の擧つた日は其晩眠れもし

たが數日要領を得ないと煩悶して寢食を安んぜず、時々神經衰弱にかゝつたこともあつた。あ
る時僅少の額を多數の人より得ることを煩しく思ひ、一舉巨額の寄附を得んと策し、種々思を
凝らし大隈侯まで煩はして、漸やく成功したが、さて測り難いのは世の常で、快諾を與へた其
人は忽ち破産して無一文となつたので、折角の苦辛は全く水泡に歸した失望談もある。又いつ
ぞや大阪で三四萬圓の金を募り、久方振り東京へ歸つてくると、坪内博士が私の宅へ訪れた。
君は私に對し長々御苦勞と云はれたので、私が云ふには、可なり長い間旅にゐたが、僅かに長
篇一詩を得たに過ぎぬ。但し非常の苦心で、一日一句を得ることが出來ず、苦吟數日に互つて
僅かに一句を拈出したこともある。詩は拙だが苦心の作だといふと、坪内君は是非見たいと云
はるゝで、傍らに在つた寄附帳を出して見せると、君は始めてかつがれたことに氣がつき、成
るほどこれこそ一字千金だと一笑された滑稽談もある。

吾學園の宿望

理工科を設けることは本校宿昔の素願であつた。東京専門學校が創設された當時早く理工科
を設くるの端を發したが是は眞に形ばかりのもので、それも久しからず廢んだ。清國留學生部

を開いた時理科を設けたがそれは創立の際のよりも一步を進めたもので、特に實驗の爲め階段
教室まで造つたが、これも特に清國學生の爲めにしたもので矢張り一時のもので今の理工學部
の開始されたのは、實に明治四十一年の二月に屬する。

本校が創立の初めから希望を抱きながら、二十五年を経て漸やく宿志を滿したのは實は偶
然でない。理工の學科は建設にも維持にも頗る多費を要するもので、到底月謝の收入などで償
ひ得るものでない。本校に設けられた他の諸學科は皆な机と黑板だけで教授の出来る簡單のも
のであるが、理工科になると多般の機械を要し藥品を要する。建物も講堂のみでなくラボラト
リーや製圖室やいろ／＼特殊のものが要る。それを設けるには少からず費用を要し、それを維
持するにもなか／＼骨が折れるので、收入を月謝のみに得る私學の經營としては非常に困難で、
私學に於て理工科の經營は到底不可能とされた位なものだ。私學の經營として理工科の建設が
如何に困難であつても、既に本校を大學と稱するからには、見識上理工科を闕くことは出來な
いのである。綜合大學としては、理工科のみならず醫科も備はらねばならぬが、この建設も私
學に於ては同じく困難である。本校が當初理工科を目標た時、醫學と孰れを先にすべきやが問
題であつた。醫科の建設には多費を要するけれども、病院を附屬すれば經營は却つて理工科よ

りも樂であると知れたが、それを他日の計畫に譲つて、寧ろ經營困難の理工科を先づ開くことになつた。これは校史に特筆すべき重大事件であつて、此の科の開始は一生涯を開いたのである。

理工科開始の踏出し

今想ひ起すのは、明治四十年の秋の頃此科の開始準備のために高田田原兩氏と私が、箱根の塔の澤の旅館に數日立籠つて、三人手別をして設計書を作つた。私は確か基金募集の趣意書や募集方法を立案し、田原氏は課程表を稿したと記憶する、これが此科開始の踏み出しである。斯くして理工科の設置を發表したのは、明治四十一年の二月で、機械、採鑛、電氣、土木、建築應用化學の諸科を漸次に開くことを公表し、同年四月先づ、機械、電氣二科の豫科を開始した。本校の此計畫が天聽に達し、吾大學の既往の功績を嘉賞あらせられ、新學科設置の資金として參萬圓の下賜に浴したのは同年の五月で、これが基金募集の爲めに大なる先例をなしたので、大隈侯を始め吾々當事者も洪恩に深く感激した。

此の恩賜金を如何にすべきやの問題が起つて、恩賜記念館を建つることになつたが、折角の

鴻恩を一般に及ぼすには、諸學科に均霑せしめねばならぬといふ議が起つて、館内には各科の研究室を置くことになり、貴賓室會議室等も出來たが此の煉瓦の新館は學校に美觀を添へた。勿論恩賜金だけでは工費を償ふことが出來ず、可なり工費の補足を要した。館の左端の一翼の如きは、數年の後に増築したのである。

意外なる仕合せ

此學科を新設するに方り頗る思慮を要したことは、學科の程度と方針であつた。まだ此頃は私設大學を大學令で律することは無つたので、可成必要の學科を選び、且つ實地を旨とし、理論に馳せないことを方針とし、斯道に經驗の深い手島精一氏より種々の指導を受け、氏の推薦で阪田貞一氏を科長に擧げた。

既に或る科の豫科を開き、一方には資金の募集を開始したが、さて困難を感じたことは、適當の教授を得ることであつた。理工の學には早大は久しく縁遠であつたので、此方面の學者に關係が薄かつた。それやこれやで他の學科の教授を得るよりも困難を感じたが、爰に意外な仕合せを得たのは一學數多の教授の寄附を得たことである。これより先き現に本校の校賓である竹

内明太郎氏は獨力理工の學校を起さんとする企があつて、それに要する教授を簡拔し諸外國に遊學せしめつゝあつた。竹内氏は早稻田に此學のあることを聞き、既に基礎ある早稻田に斯る企があるからには自分の企は全然見合せて折角養成しつゝある諸學者を早稻田へ譲ることにすると申出られ、且つ留學の期の満ざる人々に對して氏は留學費の支給をつゞけられた。これが理工科創業の場合に於て、金錢に換へられない仕合であつた。竹内氏が海外へ留學せしめた各科の教授は都合五名で、電氣工學では牧野賢吾氏、機械工學では遠藤政直氏、採鑛學では小池佐太郎氏、建築工學では佐藤功一氏、冶金學では岩井與助氏であつた。此の數氏の内牧野賢吾氏は創立當時の教務主任であつたが、不幸にして病歿された。

基金の募集は明治四十一年十月から開始し、百萬圓を募つたが、申込額は九十三萬四千圓に達し、七十四萬圓を實收し得た。此資金で諸般の設備を悉く成し得た譯ではなく、追々と新設増設の爲めに少からぬ費用を要したが、茲に特記を要するは、故森村市左衛門氏が、化學の實驗室を建設して寄附されたことである。經費の多端であつた創業期には如何にも仕合の事であつた。此の實驗室は大震災の際に、實驗用の藥劑から火を發して焼失したが、森村家では復興の資を再び寄附されて今は出來上つてゐる。

感慨無量の今日

理工科に屬する建物の總坪數は三千七百坪を數へ、それが多く煉瓦作りで、すべてに器械が充實してゐるから、それに要した經費は固より巨大のものである。元より理工科の完成までに五六年を要し、四十二年の二月に採鑛學科と建築學科の豫科が置かれ、追々に本科も開始されて、凡そ完成したのは大正二年の秋であつた。了度本校創立後三十年に當る所から、記念の式典を擧げ、六日間に互り理工諸科の設備を開放して一般の觀覽に供したが、それまでの經營の苦心は容易なもので無つた。顧みれば創立の際に力を致された人で故人となつたのが少なくない。手島精一氏も阪田貞一氏も前後に歿し、田原榮氏牧野賢吾氏も相踵で逝き、廣部徳三郎教授と建築學科の顧問に迎へた辰野金吾氏も亦共に遠逝された。理工科の今日隆盛あるは全く諸氏の努力によるのであるのに、中には隆盛を見るに至らず逝かれた人もあることを思ふと、吾等は限りない感慨に驅られる。

大學令と工手學校

私の随録は沿革を叙するが目的でないから、多く變遷に關する事實を略したが、爰に漏らす可らざる重要な事が二つある。それは大學令の發布と工手學校の起つた事とである。大學令の發布は大正九年の四月で、吾が理工科もこれに據ることに成り、學科に改正する所もあつて、理工科を理工學部と改稱することになつた。若し大學令に應ずる爲め理工大學の建設に従事したならば今頃も尙完成に至らなかつたであらうが、既に完成してゐた理工科を大學令に準據するやう手を加へる位は容易の事で、苦もなく理工大學の出來たのは眞に幸とせざるを得ぬ。尙ほ又簡易な工手學校を創設して、夜學を開いたのは理工科を設けてから一二年の後であつた。これも大學の整うてゐる設備を夜間本科の無い時利用するのであるから、工手學校は容易に起り得るのである。教場や機械の流用がつくのみでなく、教授も亦流用し得て、萬端の物が工手學校には稍々過ぎたものである。これが夜學生には非常の仕合と認められて、四千の學徒が來り學ぶの盛況を呈してゐるのは偶然でない。多費を要する本科の經營も、此の副事業のため幾何の活路を得てゐるから本科の爲めにも工手學校の隆盛を幸とせざるを得ない。

學園が釣上げた附近の地價

早稻田大學は今こそ大なる土地の所有者であるが、久しい間尺寸の土地も有たなかつたのである。大學の建つてゐる所も大隈家の所有であつて、それが大學へ寄附されたのは學校創立から廿六年後の明治四十一年である。これより先多少の土地を買入れたことはあるが、それにしても創立後二十數年は全く尺寸の土地を有なかつたのである。今から既往を追懐すると、随分忌々しいこともあつた。東京専門學校の貧乏時代を経過して、早稻田大學と改稱すると俄かに景氣がついて、附近の土地の價が大いに昂つたので、吾々は驚いた。コンナ事なら必要の處を買つてから改稱するのであつたと悔いたが、事前に氣もつかず、設令氣がついても買ふだけの資力が實は無かつた。その後は益々地價が昂つて來た。終には學校が地價を昂げておいて、それを高い値に買はねばならないやうになつたので、馬鹿々々しい感に堪へなかつた。

吾大學の土地の持ち始めは、現存のものに就ていふと第一高等學院の敷地四千九十六坪餘を東海銀行より譲り受けたのが明治四十一年一月で、その五月に大隈家から大學の敷地七千餘坪の寄附を受けたのである。即ち明治四十一年は土地所有に就て記念すべき年と云へる。今は確かに記憶しないが、此年の前に郊外に一二ヶ所土地を買つたことがあつたやうにも覺える。それは皆な價を待つて賣る爲めであつて經營上度々地を郊外に相し、寄附金の剩餘で買收したこ

とがある。三五年持ち續けてゐる内には三倍四倍價が昂るので、折々それを賣却して學校の經濟を助けたものである。學者の商法はいつも失敗に歸するが例であるけれども、嘗つて一たびも遣り損ひが無かつた。此類の土地で今尙ほ大學が所有してゐるものが一二ヶ所ある。それは後段に陳べる。

十ヶ年賦で買つた運動場

大學の運動場は都下幾萬の人を吞吐する有名な場所だが、其坪數は四千三百八十五坪餘で其内の大部分は明治四十四年十一月に買入たのである。これは最初附近農家の所有に係る畑地であつた。之れを購入した時の事が忘れられぬ。大學では是非運動場として此の土地を欲しがつた。併し當時はなか／＼十萬圓に近い代價を一時に拂ふことは思ひも寄らなかつた。しかるに所有者は如何にも奇特のものであつた。所有者の云ふには學校で御所望とあればお譲りしてもよいが、これまでの經驗に據ると農家が大金を手に入れると、それが爲めに自滅するものが多い。此土地をお譲りするに就て自分の恐るゝのはそれである。どうかお譲りする條件として一時に金を渡して貰ひたくない。年賦として初年は少なく追々多く渡すやうにしてほしいといふ

ことであつた。當時の大學の經濟事情として其申出は眞に願つたり叶つたりであつたので、確か十ヶ年賦であつたかと思ふが、極めて樂な條件で手に入つたのである。付け加へておくが、此運動場用地の内、相馬家と土地を交換して運動場に添へたものが六百三坪あり、戸塚町より拂下を受けたものが少しばかりある。

大正年間のすばらしい發展

明治年間に於ける土地の沿革は、大略右の如くで、餘は皆な大正になつてからの事である。大正五年には大阪の鴻池善右衛門氏から、信州輕井澤の高原に二萬坪の寄附があつた。これは現下其まゝになつてゐるが、頗る將來望みある土地である。それから大隈總長薨去の後、侯の遺旨により舊邸宅の建築ぐるみ全部の宅地が大學へ寄附された。それは一萬七千餘坪の大きいもので、有名な庭園が其敷地の半ばを占めてゐる。侯を長く記念するために、此上もない尊いものである。實は此處が學校の有にならない前は、賓客を待つ所もなく、教員の俱樂部に充つる所もなく、目を怡ばしむる庭園の設備などは勿論無かつたのであるのに、侯に因縁ある第宅庭園をそのまゝに學苑に寄附されたことは幾んど望外とも云ふべき幸で、これにより學校は始

めて賓客を延く所も、教職員の俱樂部も備つたのである。大學は飽まで邸宅庭園を保護して舊觀を維持せねばならぬ、亦故侯を永く記念せん爲めには記念講堂を此の邸内に建つるを可としそれも既に出來てゐる。大隈會館が即ちそれである。學生俱樂部も亦邸内に建られたが、皆故侯を偲ばんとするの舉に外ならぬ。

學園の發展と運動場の移轉

大正十四年に東京稅務監督局から四千五百八十四坪の土地の拂下を受けた。これは第一高等學院所有地と隣接の地で、學院の用地として大なる必要があつて、現にトラックとなつてゐる。尙又最近西武鐵道の寄附行爲で、大なる土地が我學苑の有に歸した。それは鐵道の沿道保谷村にある二萬七千坪の土地を運動場用に寄附されたのである。大學は此の鐵道の開通を待つて今の運動場を移轉する筈であるが、學校から此新運動場までは鐵道に據ると三十分で達すると云ふから、決して不便は無い。且つ現在の運動場が移轉することゝなれば今後學校が擴がり行く所も出來るから、學校も仕合である。實は學校の將來は今の運動場の處へ擴がるの外に餘地が無いのである。亦あれ程の處を運動場として使ひ潰すのも不經濟と云はねばならぬ。以上

は學校の方面に就て云うたのだが、更らに西武鐵道側から見ると、早稻田の運動場が其沿線に移るとなれば運動遊戯の觀客は年々幾百萬を數ふるに至るであらうから、鐵道の繁榮は期して待つべく、其の經營も成る譯である。去れば此の大なる土地の寄附は洵に道理あることと會得さるゝのである。併し此土地を立派な運動場に仕上げるには、向後少からぬ費用を要するは言ふまでもない。序に云うておくが、此の鐵道の一端は早稻田の電車の車庫前、即ち大隈邸の一角に達する筈で、若干の土地は大學から鐵道會社に割與して、そこに停車場が出來る設計となつてゐる。尙ほ前に書き漏らした一事を補うておくが、大隈邸の後ろ即ち電車線に面する所に帯のごとき細長い土地がある。それは大隈老侯在世の時不用とあつて所持されなかつたが、早稻田大學では今後土地の經營上必要を感じたので、大正十五年それを買入るゝことになつた。其坪數は四百四十五坪で此買入のため大隈舊邸の背面は藪地となることを免かれたのだ。

尙ほ以上の外大學が郊外荒井山に所有してゐる土地が千二百八十七坪、武藏野村境に所有してゐるのが一千六百九十坪、皆大正九年に買入れたものである。此等は學校に直接必要のある土地ではないが、學校の經濟策から所有してゐるのである。

寸土を有なかつた早稲田も今では

以上幾口かの土地の坪数を總計すると、八萬八千九百九十四坪となる。これが學校の現在所有する所であつて、其の價格は今精確に計算する譯にゆかぬが、追々輕井澤並に西武沿道の地價が昂つて來れば、餘り遠からぬ未來に、全部の地價平均百圓位に算し得る時の來るは決して空想ではない、假りに百圓と積れば八百八十萬圓といふ巨額になる。曾つては二十數年間尺寸の地も所有しなかつた大學が、今此大なる資産を有してゐることを思ふと、大學の進化も大なりと云はねばならぬ。左に大略の表を擧げて参照に供する。

種類	坪數	年月
大隈家寄附大學敷地	七、〇〇二 ^坪 、五五	明治四一、五、二一
運動場	四、三八五、八九	同四四、一一、二〇
第一學院敷地	四、〇九六、五〇	同四一、二、二四
同トラツク	四、五八四、一〇	大正一四、九、一〇
大隈家舊邸	一七、七〇〇、〇〇	同 一〇、一、二一

買添へたる土地	四四五、〇〇	同 一五、一、二九
輕井澤土地	二〇、〇〇〇、〇〇	同 五、二二、一〇
西部鐵道沿線 保谷村運動場用地	二七、〇〇〇、〇〇	同 一五、九
他の郊外所有地		
荒井山	一、二八七、三〇	同 九、一〇、一一
武藏野村境	一、六九三、〇〇	同 九、一、二八

學園漫歩

はしがき

都の西北早稻田の森に人物陶冶の學府が教育界の權威として仰がれてゐるのは久しいことだが、今日建築美を以つても誇り得る盛域に達した。不如意時代には隨時必要に應じアツト、ランドムに木造の建物が出來て、統制は全然無つたのであるが、それが整理されて新舊諸建築が井然となつたのは既に十數年の既往に屬する。爾來舊建築の漸やく朽廢に屬するものは、追々堅牢の新築と取換へられ、大震災以後建築又建築で代謝は實に目まぐるしい程頻繁で、一昨年から昨年にかけて、事務所の新築が成り、文科の講堂が改築され、又政法講堂が新築され、圖書館の増築が成り、武道館が起り、今は舊建物は一掃され、學苑の面目は全く一新して、久方振學校に訪ひ來る校友連は餘りの變化に驚駭し、茫然自失するやうな始末である。右様な次第

で早稲田大學は創立僅かに五十數年を経たに過ぎないけれども、建築物中には既に歴史中のものとなつて、其の創設當時を追懐すると、今の學生達に耳新らしく感ずるやうな事も少なくないから、聊か爰に追懐談を試みんとする。

大隈會館

學苑名區の内第一に指を屈すべきは大隈會館であらう。大隈老侯が最後まで住はれた邸宅は此處で、立派な史蹟である。世界の道が早稲田に通じたのも此の邸宅があつたからである。ここに維新の元勳大隈侯が、八十數年の長い歲月談論風發、一世を警醒したのも、曾ては先帝の東宮に在らせられた時台臨を賜つたのも、對獨宣戰の内閣會議が開かれたのも皆此邸宅である。侯の居常坐臥の室も侯の訪客を延見された書齋も、皆儼然在ませる時の如く其儘に存して居り侯の居室の隣室には遭難負傷の際の慘憺たる記念物が置かれてある。各室の調度、庭園の、樹一石に至るまで、故侯を偲ぶものならざるはなく、吾等日々此邸に伺候した者は、何物を見ても深い感慨に打れて堪へ難い心地がする。これは國家の一史蹟であるが、侯の遺旨により最も緣故の深い早稲田大學に寄附せられ、永久に守護し保存することとなつたのは、無上の仕合と

云ふべきで、此の史蹟を永久に保護するは早稲田大學が最適者であることは言ふまでもない。併し大學では自ら之れを私せず、開放して内には教職員の俱樂部に宛て、公衆に對しては何人にも縦覽を許してゐる。

私は大隈會館の内部に就て細かに検討するに先ち、大隈記念大講堂に就て先づ語りたい。此の講堂は侯の薨後、侯を永久に記念する爲めに建設したものである。侯の舊宅は大切な記念物ではあるが大衆を容れ得る所でない。この附帯して建設された大講堂こそ、都下に二つとない大會堂で、三千乃至五千名を容るゝ容積があり、一千名を納るゝ地下の會堂がある。此堂の建築された場所は大隈侯邸宅の一隅にもと家職の居つた處で、此の高大の建築は鶴巻町の街道に沿うて其の一面の雄姿を現はし、大隈會館の庭園に亦其の半面を現はして美觀を添へてゐる。堂の正面右側に聳立してゐる自鳴鐘臺は威容堂々として、其の晝夜打驚す鐘は四隣に震つて混濁の人心を淨化してゐる。此會堂は内外の文藝に關する會合に利用され、嘗ては 今上の御代理として秩父宮殿下を奉迎した事もある。老侯在世の時は卒業式其他記念會等で大衆を會する時は、いつも大テントを張り、そこに會するのが例で、老侯もしばしばテント内に演説されたが、侯は其都度是非闔校の學徒を會する大會場が欲しいと云はれた。然るに侯の生前此會堂の

設立を見なかつたのは如何にも遺憾な事で、切めて一回でも侯を此の堂の講壇に立せて、其の獅子吼を聴きたかつたと毎々感ずることだ。併し此會堂を建るに就ては校友の殆んど全部が熱心に賛助したのみならず、全國における同志の苟くも敬慕を侯に捧ぐるものは競うて賛助し、寄附金額は大は五萬圓より小は十錢にまで及び、國民的助力が此大殿堂を結成したことを考へると、侯は恐らく地下に微笑を洩らして居らるゝであらうと思ふ。

私は逆轉して大隈會館の内部を検討せんとするに當り、先づ會館の門を通りかゝつて思ひ出すのは、此門が會堂の出來た爲め元の位置を變じ、今はハスカヒになつてゐることである。扨て玄關に入つて何人も見のがし得ないのは大なる二王尊像が左右に立つてゐることである。これはもと岡山縣の某寺にあつたもので、作者は不明だが文餘の楠の一本彫りで、靈妙な鑿の牙えは決して凡作でない。其の逞しい左右の腕をひろげ巨眼を輝かしてゐる雄姿は如何にも侯にふさはしい玄關番で、往年大隈邸が火災に罹つた時少しの破損もなく此の巨像が救はれたのは早稻田中學の若い學徒が、其の軟かい手でいたはりながら搬出したからであつた。火後侯は涙ながらに學生達の働きを喜ばれた。

老侯は骨董などを玩ぶ人でなかつたが圖ぬけて大なるものを喜ばれた。二王もそれだが、同

じ玄關に青銅の毘沙門天が手に正義の劍を掲げ、威容を示してゐる。これも文餘の大像で某商工會社が米國の博覽會に出品したものだ。これも侯の趣味に適つてゐると思ふのは、其偉大さと、正義の爲めには萬難を辭せざる所に、侯と一脈相通する所があるからである。尙ほ玄關に入ると右手の壁に長さ六尺許の大杓子が掲げてある。これは侯が安藝の宮島へ赴かれた折、同處の校友が侯に獻じたもので侯は之れを受けて莞爾として語られた「杓子は飯を掬ふものだが、斯の如く大なるものは天下を濟ふことが出来る」と、自分などは此杓子を見る毎に侯一流の諧謔を追憶せずには居られない。尙玄關入口の左方に高く掲げてある額面は渺茫たる大氷洋の寫眞であるが、これは侯が南極探検の壯舉を助けて苦心された記念品でこれも大を語るの骨董たるを失はぬ。玄關に斯るものが集まつてゐるのは、侯の趣味を現はす爲め、態と後日工夫したのでなく、侯在世の時のそのまゝであつて、偶然にも、此入口は侯の人格を語るものが幾多あるから、匆卒に過ぐ可らざる所である。

私は會館中のどの室にも多少の思ひ出があるが、最も思ひ出の多い處は書齋である。侯は朝客が來ると書齋に出で應接せられ、追々來る幾人の客を此室に引き入れて、談笑半日を費するが常であり、多くの場合侯自身談ぜらるることが多かつたので、自分など多少の用があつて

伺つても、いつも來客が室に充てゐて、なか／＼用が辨じないので、ツイ侯の談論を半日も傍聴することがあり、その談論に陶醉して時刻の移るを覺えなかつたこともあつた。侯に依つて吾等が啓發を受けたことが今考へると實に少なくない。自分は侯の旅行の都度随伴したから、別して談話を聴く機會が多く、爲めに最も大切な教場であつた。今坐るに想ひ出すのは、侯が總理大臣として議會を解散され總選舉を行ふに當り、自分は自ら揃らず大隈侯後援會の會長となつて、逐鹿戦に馳驅したが、味方に榮冠を與へる手段として最も大切であつたのは、侯が出陣されて候補者の爲め演説さるゝことであつたが、なか／＼全國に涉つて侯が出馬さるゝ譯に行かず、そこで案じたのは、侯の演説を蓄音機のレコードに納め、それを各地に回すことであつた。侯は最初此案を聞き入れられなかつたが、夫人の後援を得てやつと承諾され、高輪の某蓄音機會社が頗る重量ある大機械を早稲田まで運び、それを取りつけたのは、書齋に隣る應接室の中間に戸のある所で、ラツパをこゝに取りつけ、侯はそれに吹きこまれたのが、輿論の勢力と云ふ演説で、それは確か四枚ほどのレコードで完結したと思ふが、侯は例のごとく原稿なくして淀みなく堂々と陳べられた。此の吹込の場合にも、侯は初めての事であるので躊躇され、私に向つて君先づ前座をやれと云はるゝので、老侯を紹介する簡単な言葉を陳べた。實は政治

家が蓄音機で自家の演説を吹込んだのは日本ではこれが初めてであるのだ。

も一ツ自分一身に關して此書齋の思ひ出は、大震災の時に自分の家は幸に焼失を免かれたが書籍を置いた所が傾いたので已むなく書籍全部をトラックに満載して大隈會館に預けた。二三日経て行つて見ると二百計りの箱が書齋にぎしり積んであるので、自分は頗る恐縮したが、その時起した感想はと云ふと、これだけの書物の内一冊でも老侯の覽に供したことがなかつたのに、一擧故侯の坐邊近く積み重ねたのは如何にも奇縁であると感じ、亦苟かに苦辛十幾年漸やく得たものを設令一日でも侯の坐邊に置かれたことを本意とした。

大書院と老侯居室

書齋を出て廊下傳ひに行くと大書院に入る、こゝが會館の中樞で、二間續きの尤も大きな座敷である。此の建築が侯自身の意匠に成つたもので、寺の大書院とも見らるべきものだが、寺の書院は多く日光が遮られて、内部が暗く陰氣であるが、これは多くの高窓のある爲極めて陽氣に出來てゐる。そこに侯の工夫があつて、庭園の全貌は居ながら見ることが出来る。

此の廣間は極めて歴史に富んでゐる。大正天皇が東宮にあらせられた時台臨の御座所もこゝ

であつたし、大正三年大隈侯首相時代、對獨逸戰の閣議を半夜開いたのも此處であるし、侯が天盃を賜はり、其の祝宴を催して舊君鍋島侯御一家を招待になり、吾等迄席末を汚して御流れを頂戴したのも此席であり、侯が多數の人を招いて各種の會を催された處も亦此席である。今は早稻田の宴席場に充てられてゐるが、自分の忘れ難いことは大震災の時早大の重要な相談があつて此會館に會し、正午近く會食せんと高田坪内兩君と自分が食卓を共にしてフォルクを把らんとすると、あの驚天動地の地震が起つた。吾等は驚ろいてフォルクを投げ、兎皇縁下の芝生に走り出たが、立つても坐つても居ることが出来ず、芝生に臥して戦慄しやゝ震動が緩んだから、或は反動の地震で、平地の裂けることを慮り、庭内の丘陵今大隈老侯夫人の銅像のある所へ駆け登つて、大樹に抱き付いたが、樹もしきりに動くので幾んど生氣が無つた。此時大隈侯の別邸を覗くと、其の倉庫の化粧煉瓦が悉く落ちて、地上に委してあるのを見た。間もなく理工科のラボラトリーから發火して炎々と火の手が上がり、益々容易ならぬ大地震であることを感じた。さて丘陵を下つて大書院の屋上を眺めると、瓦一枚落ちて居らず書院に隣なる侯夫婦の居室の屋根も同様で、何の異状もないのを見て、今更ながら建築の堅固なるに驚いた。平生餘りに氣にも止めなかつたが、地盤を検すると宛がら奈良の法隆寺のそれの如く、コンクリ

ート製の高さ尺許の非凡の地盤の上に立つてゐることが判り、あれほどの大震に遇つてもびくともしなかつたことが偶然でないと感じた。實は斯くと知らば庭などに飛び出すでなかつたと、高田坪内兩君と語り合つたことである。

此大書院の一隅から疊廊下傳ひに侯の居室に通ずる。此所は十五疊敷南北の二室で、南側の室に侯は夫人と席を並べ、床を背にし庭に面して居られたのだ。こゝは侯を偲ぶ最も大切な部屋で、生前用ひられた蒲團も煙草盆も脇側も書籍も、在せる時の如くそつくり其儘になつてゐる。夫人の坐邊も調度も亦同様である。侯夫婦の寢室は別に、洋館で疊を敷こんだ處があるが大正十年九月侯が病に罹られてから、居室が病室となり、自分なども御臨終少し前、お招きにより拜顔を得たのも此室であつたが、終に此室で薨去になつた。

斯る來歴があるから此室は末長く保護を要する。隣室には侯の早大總長の赤色の式服と遭難當時の衣服其他が陳列してゐるのは、來觀者に老侯を偲ばせる用意に出たもので、いつも此室に入る毎に、吾等は萬感交々到つて胸の塞がるを覺える。

東都の名園

歩を庭園に移して逍遙すると、一木一石侯を偲ぶの記念でないものはない。侯は毎朝例として庭内を散策せられ樹石に親しまれたが、實は樹石や佛像や燈籠など、或は自から購ひ或は他より寄せられたものが多く、皆それらの歴史がある。のみならず庭園全部が侯の趣味で作られたものであるから、侯の趣味の現はれとも云ふべきものである。此庭園はもと松平頼壽伯前代の下屋敷であつたので、多少其頃の趣も存してゐるかも知れんが、侯の趣味で大いに改造されたことは事實である。明治以前には諸侯の舊庭園は皆和様四條家風の作庭であつたのが、東京に始めて文人風の作庭を試みたのは實に侯から始まるのである。明治の初年に大阪に鈴木柯村と云ふ文人風の作庭に長じた人がゐた。侯は舊式の作庭を厭ひ此人に囑して庭を改造せしめられた。それを助けたものには、圖案を作るに華山の門人である渡邊翠石が参加し、園藝家の香樹園主人も亦與つた。香樹園主人は柯村に學ぶ爲め浪花へ特に赴いたこともあつた。斯くして出來た庭園は東京に於ける文人風の作庭の初めで、爾來これに倣ふものが出來た。澁澤子と飛鳥山邸の庭園や、九段招魂社内の庭園の如き皆柯村の意匠で出來たものである。文人風の作庭術は自然の趣を本意とするもので、舊式の作庭術が陰陽説に拘泥して萬篇一律の形式に泥むものとは甚しく異なるものである。侯の庭園が自然に適ひ一樹一石安排宜しきを得て居るのは

此故であつて、東都の名園と稱せらるゝのは決して偶然でない。

此園は老侯の遺作とも云ふべきものであるから、飽までも原狀の儘保護せねばならぬ。幸に庭は些しも舊觀を改めてゐない。唯だ多少變じた所を擧げて云へば大温室が取拂はれ、大隈講堂が庭園に其の一面を現はし、山上には老侯夫人の銅像が立ち、紅葉山には招魂殿が設けられたが、此等は決して庭の風趣を害することなく却つて風趣を添へたと云ひ得る。多角堂の温室は庭の芝生の要部に建つてゐたので、元は無かつたものだ。庭園の風致から論ずれば寧ろ無方がよいので、その取拂は即ち庭の還元である。庭の一面に西洋建築の側面を見ることは日本式庭園と調和し得るか否や、これに就ては建築家も苦心したのだが、あの男性的雄姿が何の遮断するものもなく立つたのを見ると、如何にも堂々たるもので、爲めに庭園に大なる光彩を添へるに至つた。此講堂は故侯の宿望を實にしたものであるから、其位地、庭園に副はるべきである。故侯の靈若し舊邸に存するとせば、必らず吾意を得たと云はるゝであらう。老侯夫人の銅像は老侯のが早稻田大學の校庭にあらねばならぬと同様に、長く住はれた舊宅の庭に建てらるべきが亦當然であつて、幾多内外の參觀者が仰で舊を偲ぶのは此庭園に精神づけるものと云うてよい。招魂殿はもと庭内の天神山の菅公と老侯の北堂の崇信された肥前鹿島の裕徳稻荷を

合祀した其の祀堂が不用となり、天神山の地形も變ぜんとするので、同じ地形である紅葉山に移したもので、故侯夫婦を始め開校以來學校に功勞ある物故者の靈を祀ることになつたので、紅葉山はこれが爲めに神聖の處となり、風致も一段加はり夫人の銅像と云ひ招魂殿と云ひ共に庭内の名所が出来たのであるから、吾等は甚だ慶びに堪へない。俗惡のものを置き清地を汚すのとは同日に語るべきでない。

大隈侯は曾て毎朝の散策に語られたことがある「誰れの庭も隅の方の土手際などは、芥溜の如きものや、木葉の溜りのやうなものばかりにして置くのが多いが、此庭の特色とも云ふべきは、全體に注意して庭に表裏がないことだ」と云はれた。如何さま成金連の庭園は其の要部こそ立派にされてゐるが、隠れた所となると、手が省かれてサン／＼になつてゐる。老侯の作庭は流石に表裏がなく、徹底的に調うてゐる。大概の人が餘り注意しない所だが、自分などがいつも好んで徜徉する所は、庭園の片隅に一貫の細徑があつて、それが幾んど庭を半周する長い長い歩道で、それには一點の塵もなく、左右には霧島、つゝじ、どうだん、其他四季さまざまの花木があつて風致に富むてゐるが、此一區は大樹が天を翳してゐるから、如何にも幽邃で、庭園中最も詩趣の漲つてゐる所だ。全體侯の庭は侯其人の如く明るい庭であるが、どこかに幽

邃の處が無くんば、十全の庭とは云へない。そこで侯が庭の片隅を相して幽邃の歩道を作られそこに瀟洒な亭榭まで營まれたのは茶人躰足の傑作と云うてよい。此の一區は侯の所謂隅が注意してあると云はれる其一である。自分はこれに就て思ふのに、大隈講堂の建つた所は、もと家職の住宅のあつた所で水溜などがあつた。何れかと云ふと美でなかつた一隅に、あの殿堂が建てられて美化し、其殿堂の一面の雄姿が庭園に光彩を添へたから、侯の隅を閑却しない意匠にも適つた譯だ。尙ほ早大の校庭にあつた侯の舊像は今移されて此の講堂の庭園に面した回廊に置かれてあるが、其位地は庭園の幾んど全部を眺め得る所であるから、侯は遺愛の庭に始終目を注がれてゐるであらうなど、思ひやると、偶然かも知れないが、舊像保護の場所も誠に處を得たと思ふ。

校 庭

大隈會館を出て、校門に歩を運んだ、此校門も元とは位置が變つてゐる。元は今は無くなつた大講堂の前面にあつた。即ち今の校門の左の方にある南門が正門であつたのを、改めて鶴巻町の突き當りに設けたのが今の正門である。門に入つて少しく歩むと、多少の勾配があつて聊

か高くなつてゐる。これが昔し丘陵であつた地形の名残りで、今の校庭のあるあたりは、もとは高い丘陵であつた。東京専門學校の起つた頃は此の丘陵を後ろにして僅か計りの平地に講舎を設けたのであつた。自分の記憶に依れば、早大の今の所有地はもと井伊家の所有で、後に大隈家の有となつたのだ。曾つて此處に山東直砥が學校を建てたことがあると云ふが、それほどんなものであつたか不分明であるが、大隈侯の舊邸と共に學校に因縁のある地であつたことに吾等の注意を惹く。どうしてあれほどの丘陵を平らげたかと云ふと、その土を運んで校前にあつた満目の水田を埋めたのである。今の鶴巻町の新市街の容易に起つたのは、間近に山なす土があつたからのことで、學校もこれに因つて現在の如き廣ろい敷地を有するに至つた。今でも學校の敷地の周圍に小高い處があつて斷層を現はしてゐるが、あれが丘陵の續きである。昔し此丘陵に里道があつたとかで、戸塚の町會が古圖を案じ、里道を收めて學校の敷地となすからには、相當の地代を申受けたいなど言ひ出して、往年學校は其請求に應じたことがある。學校の敷地は大隈侯の寄附に係るものであるが、現在のごとく立派な敷地となるには相當歴史があり、又少からぬ資金を要したものである。

漸やく歩を移して校庭に入ると、爰にはガウン姿の老侯の銅像と、それに對して高田前總長

の坐像が校庭を飾つてゐる。四邊には多くの針葉樹が植ゑられ、高雅の風致を添へてゐる中に先帝の東宮に在らせられた時、學校へ台臨の御記念に、お手づから裁ゑさせられた月桂樹は、今は大木となつて、繁茂の枝葉は石柵を壓し、姿勢堂々あたりを拂つてゐる。自分はこれに就て追憶を禁じ得ないものがある。この中庭に自分が主任となつて作庭したのは丁度東宮殿下台臨の時、庭が略々成らんとする時に台臨の御沙汰があつた。それが爲め園丁を督勵して晝夜兼行で漸やく成つたのである。其頃の大隈侯の銅像は大禮服姿で、高く石壇に立ち其下には石造の演壇があつた、それは今取り拂はれ、其石材は種々の工事の材料に使用されたが、其の演壇は今の大隈侯の銅像の立つてゐる所より數歩奥にあつたのだ。庭は則ち此の演壇の前面に作つたのだが、最初どんな趣向にすべきやと大隈老侯にも圖つた、侯は圓形を畫きそれに芝生を栽ゑよと云はれたので、其の案に基いたのが可なり長い間の校庭であつた。當時は全校の教職員學生を會する所がなく、大會を催すときにはテントを張つて、此の庭が會場となつた、老侯の圓形案も斯る工夫から生じたものである。當時自分は風致ある樹木を取入れて四邊に植ゑたが、其樹木は今も尙ほ存在してゐる。併し今考へると、崇高の趣は寧ろ現在の針葉樹にあると思ふ。それは兎に角、此圓形の庭は出来る匂々、東宮奉迎に役立つた。乃ち老侯が殿下を御先

導申上げて演壇に立たると、全校の教職員學徒は、芝生に蟠集して最敬禮の上、校歌を奏したのである。月桂樹は乃ち其際の御手裁で、餘りに繁茂したので、前年一旦石柵を擴張したことがあつたが、又再び擴張を要するやうになつた。

殿下台臨の時には各講堂を台覽に供することゝなつたので、これにも容易ならぬ苦心をした。何にしる其頃は木造の貧弱の教室のみで、何れも學生が踏み荒して居るから、それを洗ひ清めることが二三晝夜の仕事として容易な事ではなかつたが、精根を盡して大掃除をやつた揚句、各教室に香水までまいた。大隈老夫人が潔癖家であらるゝだけに、講堂の掃除如何と氣遣はれ平生減多に足を擧げぬあの方が、わざ／＼檢分に來られたが、どの教室も清められて香水の香りが鼻をつくので大満足を表して歸へられたことを思ひ出す、今のやうな洋風の講堂一つもない時だから、台覽に入れるには恐懼に堪へず、三四日當局の吾等は寢食を忘れて没頭した。幸に滞りなく事が終つたので、其夜大隈侯の宴に招かれた時、高田學長は歡喜の餘り、私を擁して泣き出された位であつた。

恩賜記念館

此の建物は學校の一大史蹟で長く保存を要するものである。大震災に遇うても破損を免がれたのは此上もない仕合である。此室の設けられたのは室の入口の壁に坪内博士の文章が刻されてゐる通り、明治大帝が本大學の發展を嘉賞あらせられ、三萬圓御下賜の皇恩を永久に記念する爲め出來たものである。恩賜を不公平無くあらゆる學校の方面に均霑させるために意を用ひて、各室の研究室と教室を作り、貴賓室、會議室等も備へた。學校で研究室を作つたのはこれが初めてである。貴賓室は東宮殿下台臨の節御座所となり、いつも内外の貴賓來校の場合は皆こゝに迎へてゐる。尙ほ維持員會は每會こゝに開くことが例となつて居り、三階にある會議室は教授會其他重要な會議場に充てられて居り、一時本部の事務所が腐朽したので茲に移したこともあつて、總長學長の室に充てた所もある。今は圖書館に研究室も備つたので館内のそれは較々狹隘であるので、不用の姿となり、事務所も新築されたのでそれに引移り、爰に漸やく餘地が生じ、近く學術研究の貴重資料を陳列することになつてゐるから、益々大切味を此館に加へるであらう。これ迄學校には陳列所が一切無つた爲め、幾百のスポーツの賞杯や、大切な記念品は皆貴賓室に納めてあるけれども、それ等も迫々置き所を得るであらう。

室内で最も思ひ出の多い室は貴賓室と會議室である。貴賓室は前にも述べたごとく、維持員

會員の會場であるから、學校の歴史の材料は皆こゝから生れてゐる。よいことも、わるいことも、喜ぶべきことも、悲しむべきことも、經濟も法律も人事も皆此室で定るので。平穩の時は議事はすら／＼進むが、波立つ時は動もすれば暗礁に觸れんとして殺氣の漲ることもあつた。私などは可なり長く維持員として此室に出入したものだ。振り返つて見ると、喜憂交々たる感なきを得ない。併し學校には幸にして不祥事は少なく、常に駸々たる進歩の途上にあつて、堂大學府たる貫祿を保持し得たことは常に要路其人を得、闔校協力の然らしむる所と云はざるを得ない。

會議室に就て思ひ出の深いのは、往年學校騒動のあつた時連日の會議はこゝに開かれ、こゝに喫飯もし、深夜二時に及んでも會議の畢らなかつた事もあつた。斯く言ふ自分は被告の位地に在りながら、事の拾収に當らねばならなかつたから、實に必死であつた。恩人大隈侯が瀕死の病に罹つて居らるゝのに、前門に鬪争を續けるなどは此上ない失態で、何んとしても收めなければ恩人に對して相濟すと、其時監査役であつた大隈侯の親戚三枝守富氏を特に臨席せしめて吾等の苦衷を目前に示し、松平、牧野兩教授は義に依つて半夜しきりに奔走され、其の結果を齎らして幾回か報告されたのも此會議室で、眞に慘憺たる光景を演じたが、私はいつも此室

に入る毎に當時を憶うて感慨に堪へない。

摺筆に臨んで瑣事ながら言ひたいことが一つある。それは貴賓室に掲げてある額面の事で、大隈侯御夫婦と澁澤子爵の肖像の外に、怒濤が岩石に觸れ遙かに日光の映してゐる巨大の額が掲げてある。これは此頃長逝した洋畫家河村清雄の大作で、恐らくあの人の畫中の傑作であらう。此の畫を河村が書く時自分が關係したから、聊か其際の事を語つて見よう。校友で河村に懇意な人があり、ある時私を訪ねて來て、河村に畫を書かせて恩賜館に掲げてはどうかと云ふから、自分は笑つて、それは駄目だ、自分は間接にあの人を知つて居るが、畫はうまいが、あの人は天才肌の持前で、責任が無いから頼んでも恐らく出來ないであらうと云うた。校友は尙ほ再三私に勤めるので、自分は捨鉢になつて、唯だて書いてくれるなら頼まうと云ふと、校友は其儘河村に報告した所、河村は「唯だて書けと云ふのが氣に入つた、自分は必らず書く」と云うて、其後河村自身私を訪ねて來たこともある。さて果して出來るかどうか自分は半信半疑であつたが、到頭立派に出來上つたのがあの額で、畫の意匠は河村に一任したので「君が代は千代に八千代にさゞれ石」の古歌に據つたので、恩賜館の額には尤もふさはしいものであるが、約束通り僅かばかりキャンバス代と繪の具代を遣つたのみで事實唯だ書いて呉れたのである。その額

の金縁に就ても序ながら云ふが、往年校用で大阪へ出張した時、岩下清周氏を北濱銀行に訪ふたら、樓上に三大政治家の肖像が置かれてあつた。即ち大隈、井上、松方三君の肖像で大隈侯の肖像は五姓田芳柳の筆であつた。岩下氏は自分より敢て需めもしないのに大隈侯の肖像を學校へ獻じたいとは云るゝので、自分はそれを貰ひ受けたが五姓田の畫は出來がよくないのでそれを取り去り、縁だけを助けて其寸法で河村が書いたのである。此洋畫は圖書館の明暗の圖と共に學校の名物として珍重さるべきものである。

舊大講堂と舊圖書館

恩賜記念館から出て歩を演劇博物館の方面に移さんとするに當り、館前に佇立して前面を臨むと立派な建物があり、左邊を見ると此頃出來た大きな事務所がある。これ等の建築物は誰れも目睹のもので、まだ歴史もないが、自分は寧ろ今跡かたもない大講堂と舊圖書館の書庫に思を馳せねばならぬ。大講堂は今の南門を入ると數十歩の處にあつた煉瓦造二階建の建築で、入口には廣い三四段の石階があつて、舊時の大學に頗る美觀を添へたものである。これは東京專門學校が創立されて幾年かの後に大隈老侯單獨の力で建築されたものである。煉瓦の建築物と

云へば、これがそも／＼始めて出來たもので、學校の誇りとしたものである。樓上には約五百人を容るゝ席があり、毎年の卒業式を始め大講演會は多くこゝに開かれ、大隈侯夫婦が卒業式に臨まれ、内外朝野の名家が會したのは、皆な此の樓上であつた。階下には大なる賓客室があり、それに隣つて二三の室のあつたのは沿革もあるが、最初は一室を書庫に充てた。それが後に學長理事の室となり、閱覽室に充てた室が後に教員の控室となつた。棟は異つてゐたが此の教員室から僅かの廊下傳ひに木造の事務所があつた。事務所は如何にも狹隘のものであつたが、幹事局もこゝに在つて、長い間こゝに事務を執つたが、段々學校が擴張されて事務が繁雜となるにつれては各部に事務室を分置した。兎に角大講堂と共に此事務所は學校の歴史に大切な關係があり、吾等の思ひ出の多い所である。事務所は早晚改築擴張を要するものであつたが、大講堂は永く保護したいものだと思つてゐた、大震災の時に惜しや四壁が壞れて終に救ひ難いものとなつた。自分は最後に此大講堂に登つたのは、大隈侯の葬儀を営む時多衆の委員を會して其の順序等を相談したのが名残りであつた。此の大講堂の建築は大隈侯が設計を指圖され、爾後技師達もよく出來てゐると稱讚したものであるのに、震禍で亡びたものゝ内、最も惜むべきは此の建物であつた。

恩賜記念館に隣つて最初の図書館があつた。閲覧室は木造二階建であつたが、四五百の閲覧者を入れ得た。そして事務室も目録室も備はり、廊下傳ひに煉瓦造りの書庫に通じ、書庫の入口に館長室があり向ひ合せにも一室があつて、圖書整理の事務員を置いた。書庫は三階建で、約二十萬の圖書を蔵することを得た。後に興つた現在の図書館に較べると頗る見劣りはするが、當時私立の大學でこれほどの図書館を有するものは無つた。新館が出来て閲覧室は早く取り去られたが、書庫丈は長く物置となつて保存してゐたが、新事務所が建築さるゝに及んでその姿を隠した。此の舊館が建築されんとした頃自分は大患の揚句で、劇務に當り兼ねたので、高田學長の慫慂で館長となり、館務に従ふこと十數年間の長きに涉り、館の創業史と自分の經歷が絡んで、切り離すことが出来ない程關係が深く、自分に幾何か圖書館の知識や圖書趣味を教へた道場は、此館であることを思ふと、いろ／＼の思ひ出が湧く。併し舊館の代りに更らに整備した立派な館が出来、第二次の増築まで竣り、附帶の研究室が全備し、書庫も擴張された今日、舊館は惜しむに足らないけれども、吾等には尙ほ亡兒を思慕するやうな切々の情なきを得ない。

演劇博物館

私は左顧右眄今は無くなつた舊時の建物を追憶しつゝ、遂に演劇博物館に入つた。これは今年故人となられた坪内逍遙博士が古稀の齡に達せられた今より七年前、其の記念のために建築されたもので、まだ歴史を有つほど古くはない。併し幾何か語るべきものゝあるのは、此の館は建築も其の内容も學苑に於ける一異彩であるからだ。尙ほ此の建築に就ても特異の事がある。凡そ人の功績を表彰したり記念したりする事業はさまざまあるが、表彰され記念さるべき人は通例客位にあつて、假令ひ其人の意に適ふやう經營するにしても其人は遠慮や斟酌で自かから與らないのが通例であるのに、これは全く其趣を異にし、何から何まで逍遙博士其人の指圖に依つて出来たことが稀有の例である。博士は當初から云はれた。自分の齡を祝するとき記念物は絶対に要らぬ。唯だ劇を研究する爲めに道場を作ることには自分は賛成だが、それは自分の爲めに賛成するのではなく、文科のため斯道の研究が必要であるからの事だ。決して逍遙の記念呼ばはりをして貰つてはならぬ。幸ひに劇の研究に資する館が出来れば、自分としても喜ばしいから、自分も力相當の事をするよと云はれたので、博士の眞意は初めから分つてゐた、博士

は自己の記念などいふやうな事を一切眼中に置かれないから、自ら進んで先づ自から設計された。即ち沙翁の運命座に形どり、入口を舞臺にし、高く檜を築いたなどは、博士ならではの思ひつかない案である。誰れが考ても劇の博物館にはふさはしい設計と云はねばならぬ。博士は建築費の内へ巨萬の金を投ぜられたのみならず。本宅別荘に至るまで死後の寄附をも約され劇に關する圖書標本等それは莫大なものであるが其の全部を館有に移された。

最初此館を作る際には自分も與つたので、高田總長と談合したのは、越後新發田の旅館であつた。設計豫算は約十五六萬圓であつたが、この資金を募集することの難易に就て、いろいろ研究もやつたが、自分には最初から自信があつた。と云ふのはこれ迄早稲田に數次の募金で人を煩はしてゐるが、此の計畫の資金は別天地から得らるゝから心配に及ばぬと、そこで總長も同意されたが、實は案外募金は容易に運んだ。これは勿論博士の高潔の志が人を動かしたからである。名優や劇の座主や文科の校友などが續々募金に應じたので、募集締切前に早くも工事に取掛つたなどは例の無いことであつた。劇方面關係者が喜んだのも道理、斯る研究機關は日本のどこにもないからである。此等の人々も追々博士に倣つて劇の標本や貴重品の参考品を寄せ來り、遂には宮内省より能裝束の貴重品を拜領するの光榮に浴した。未だ館の備品は充實

したとは云へぬが、書庫は早大の圖書館から劇の圖書を全部移管したから既に充てゐる。但し圖書も續々新加を要し、他の研究資料を蒐集するには相當の資金を要する。經常費は早大で辨じて居るけれども、館の充實を圖るには、別途の財源がなければならぬので、國劇向上會なる後援團が起り、資金の獲得に努力してゐる。恐らく他日は大擴張を見るであらう。

早大には功勞者の爲めに記念銅像は幾つも樹つてゐる。この館も逍遙博士の功勞を表彰する銅像似寄りのものであるが、異なるのは之れが維持の爲め將た發達の爲め間斷なく資金を要する事である。云はゞ飯を喰ふ記念物だが代りに活ける働きをなし、劇の研究に資し劇の向上を促し、文化を扶掖する。此點に於て館は逍遙博士の化身とも云ひ得るものだ。博士が簀を易へても、館は博士の精神をいつまでも發揮するであらう。館の外面を見るものは博士を知ると知らざるとに拘らず直ちに博士を聯想する。館に入つて見ると滿架のものは皆博士の愛玩品であつて、時々陳列に現はれるものも多くは博士の丹精の結果に成つた劇の資料である。凡そ藝術趣味の寶庫とも云ふべきは此館で、學校が藝術方面の人々を惹き付けるのは偏へに此あるが故である。自分は今學校の職務を辭し登校することが少ないが、登校の時は乃ち此館に何か陳列や講演のある時である。此の學苑漫步の時にも、館には立派な趣味的陳列があつて、頗る

吾等の目を悦ばした。

新 圖 書 館

私の漫歩は終に新圖書館に向つた。舊圖書館に代はる新館は既に出来て壯觀を呈してゐるが今は恰かも第二次工事が竣つた時であつた。此館は 先帝の御即位大典を記念するため廣く資を募つて建設したが抑々始めて、設計は早大理工専門家の衆智を聚めて成つたもので、大體洋式に東洋趣味を混和し、内外の裝飾も多くブロンズを用ひてゐるので雅趣がある。追々歳を経て鏘が生ずれば蒼古の趣が添はるであらう。此館の特色は大學の附屬であるだけに、研究室が備つてある。第一次工事にも若干の研究室が既に備はつたが、更らに其數を加へんとするのが第二工事である。館の中樞は勿論閱覽室であるが、これが特色とすべきは天井が殿堂的に高いことで、帝國大學に於ける圖書館の閱覽室は此點に於て早稻田に一步譲る所がある。天井の高い結果窓も高かく隨つて光線がよく通り、如何にも居心地がよい。玄關は館の全體を代表するものであるだけに堂々としてゐる。玄關を入つて突き當る正面に大なる壁畫がある。これは現代畫苑の大家下村觀山、横山大觀二氏が合作で圓窓の中に濛々たる黒雲の中から太陽が昇る圖

で、これを明暗の圖と云うてゐるが、文野を象徴したものである。勿論兩畫家空前の大作で、二間半の畫を一枚の紙に収めたのは紙に於ても畫に於ても、既往のレコードに全然類例の無いことである。此東洋趣味の大畫が洋式の構造とよく調和を保ち、其の燦爛たる金銀の彩色は滋味のある圓境の幽寐を破つて、館に權威と光彩を添へてゐる。此大畫は二畫伯の厚意的寄附に成つたものであるが、従前のレコードに全く例のない徑二間半の紙を漉くには實費五千圓を要した。それも其管業者は斯かる大きな紙を製したことがなく、製紙用の船から鐵網のミザラを紙の大きさに應じて新調せねばならなかつたので、コンクリートで作つた船は宛がらプールの如きものであつた。紙の材料としては麻や雁皮などの優良のものを用ひたから天下無雙の堅牢で且つ光澤のある白紙を得たが、實は十枚の紙を造るに、工費五千圓の實費を要したのである。黒雲を描くに用ひた墨は乾隆の御墨で極めて高貴のものであり、太陽に用ひた金粉のみで千五百圓を費してゐる。此畫を作る時に二畫伯が大學に來られ、どんな畫を作るべきかに就て種々相談のあつた時、自分も參加したが、一應古賢哲の像を畫すべきかの案も出たが、自分はそれを非とし、フト浮んだのは一面は暗く一面は光明で、文野を表象する畫はどうかと云ひ出したのを二畫伯もそれが面白いと云うて、爰に明暗の圖が出来たので、恩賜館に掲げてある川

村清雄の畫と共に早大の誇りとすべきものである。

館の書庫は第二次工事の擴張に依り約六十萬冊を納め得る容積があり、書庫内に隨意讀書し得る机案も備はつてゐる。藏書に就ては、其の委曲を語る機會を別に求めねばならんが、今は僅かに館の誇りとする一二の書籍を擧げて止まんとする。館藏に稀覯の典籍は少なくないが、取り別け貴重の圖書は近年國寶に指定された二書である。一は六朝寫本皇侃の禮記義疏一卷と舊鈔本顧野王玉篇一卷とである。官私の圖書館に珍籍は少からずあるとは云へ、これほどのものを藏してゐる所は早稲田の館の外には無い。此二卷は私が館長時代に田中光顯伯より寄附されたもので、皇侃義疏は法隆寺の舊藏にかゝり、卷尾に光明皇后の御印と傳へてある「内家私印」の印記があるから、恐らく同皇后が寺へ納められたものであらう。此書は本國支那に早く佚して、僅かに隋書に其目を存するに過ぎぬ。此寫本は光明皇后の御手澤と云ふだけで既に此上のない貴重のものであるのに、書寫は六朝時代の著者皇侃の高足鄭灼に依つて手寫せられ、且つ鄭灼の増註があるから、珍奇此上のないもので勿論國寶たるべき權威がある。顧野王の玉篇も六朝寫本でこれ亦支那に佚してゐる。我國に於ては幸に高山寺や伊勢の神宮其他に殘闕が備はつてゐて、四五種の零本が諸家に珍藏されてゐるが、館藏のは高山寺の舊藏で紙數が最も

豊富で殘闕本の冠冕と云はれてゐるものだ。

此外田中伯の寄贈に係る天平より大同に至る各年代の古文書二十通も他日國寶に指定さるべきものと信じてゐるが、他の二書と共に早稲田圖書館の誇りとするもので、何れの圖書館も羨望する所である。

學園物故師友錄

はしがき

早稲田大學は創立後既に半世紀を経て五十年の式典を擧るに至つた。此時に方り學園の誰れしもの心頭に往來するものは、吾大學を築くに多大の力を致し、今日を見るに至らず、既に白玉樓中の人となつた面々である。大學では「半世紀の早稲田」と題する校史を發行されたが、自分は不束ながら半世紀の物故者に就て聊か思ひ出を語つて見ようと思ふ。實は昭和五年の夏偶々閑を得て、銷夏の一助として、學園の故人を思ひ出るまゝ漫筆的に日々書いたことがある。その草稿を今取り出して見ると、かなりの枚數があつて、収録した人の數は七八十人に達してゐる。勿論半世紀間の物故者は二百名近くあるが、自分の多少交つた人と云ふと百名位に過ぎぬ。交りの深い友人でも學園に職を奉じない人は除外するのだから、此點でも制限されるの

だ。斷つて置くが、自分の思出は唯だ臆ろげな記憶を辿つたのみで、一切参考書などに據つたのでない。亦もとく其人々の傳記を書く趣向でないのだから、記述は頗る放漫で、或人に就ては委しく、或人に就ては簡疎で、交りの深淺に依り長短精粗のあるを免かれない。尙ほその日／＼の思ひ出だから、年次の順序も錯綜不同であるが、今それを故らに改むることをしない。又自分の交つた人々は學校創立當初から二三十年後に互る處に多いので、自然或る時代に偏するの嫌を免かれぬ。

一、創立者大隈侯

早稻田大學が諸大學の群を抜いて仕合であることは、創立者として大隈侯を有したことである。官私さまざまの大學はあるが、維新元勳中尤も雄偉の人を其創立者としてゐる大學は早稻田の外には無い。侯は全然自費を投じて學校を建設されたのである。設立當時の規模は小であつても、絶対に人の力を藉らず、單獨に建てられたもので、侯は眞實大學の産みの親である。後に追々擴張され、遂に今日の大を爲すに至つたのは、衆多の助力に依つたに相違ないが、侯が獨力其の基礎を築かれなかつたら、恐らく世の歸依や義捐を博し得なかつたであらう。侯は

創立者として此大學に幸したのみでなく、後には名譽總長として陣頭に立たれた。侯の如き大人物を名譽總長に戴いたことも亦早大の誇りである。侯は出で、は内閣の首班に列し、入つては早大の總長であつたこともある。早大總長たる大隈首相が、大正天皇の即位に奉仕された一事は、國史に長く傳はるべきことで、古來布衣で即位の大典を擧げたものは大隈侯を始めとすることを忘れてはならぬ。侯が早大の總長として當時捧呈された賀表は（其副本は今早大に存してゐるが）他の如何なる大學總長と雖も、言ひ得ないことを言うてゐる譯も、一身首相と總長とを兼ねてゐたからであつた。

早稻田大學が天下第一人者を其創立者として又總長として仰ぎ、これを光榮としたのは決して佐命の元勳をウラルシツプするなどの謂ではない。侯は大學の總長として最も適任として許さるゝ人であつた。侯の薰陶力は多くの學者を綜合したよりも遙かに偉大であつた。侯はしばしば校庭其他で闔校の教職員學徒校友を會して熱誠の訓諭を垂れられた。それが皆偉大なる感化を與へた。尙ほ侯は日夕群がる内外の訪客に接して外交、經濟、社會、教育各般の事に涉つて、その蘊蓄を發表された。それが都鄙の新聞紙に掲載されて大衆を指導する大なる力があつた。一日侯の説話を閱いても新聞紙は寂寥を感じる概があつた。侯は國民全體を學徒として黨

陶されたと云ふも誣言でない。侯は實に大なる教育家であつた。侯の講説は抵ね體驗した實際に出で、多くは國家の休戚に關してゐた。侯の言説には權威があつた。大學の總長としてどこに之れと比肩すべき人があらうか。

侯は帝國議會開設に就て最も有力な奏請者であつた。侯は最も早く英國流の政黨政治を主張した人である。憲政の神は何れに在りと云はゞ早稻田に在りと云ふべきだ。侯は憲政の爲めに長く藩閥と戦つて嘗つて屈することが無つた。憲政教育の本場は早稻田であることは吾等の私言でない。侯の憲政教育が、早稻田大學に及ぼした薰陶は甚だ大なるものがある、藩閥者流は一時學校を目して謀叛人の製造所として之れを忌んだ、立憲思想と兩立し難い藩閥政治家からは斯く見えたのは不思議はないが、侯は常に公明の道を踏んで、堂々其所信を行つて毫も憚る所が無つた。侯の薰陶に浴して自然憲政に興味を感じ、議員となり新聞記者となりたるもの、學園に多きは争はれない事實で、此點は他のあらゆる大學を壓してゐる。藩閥者流の恐れたのも道理であるが、これは偶々侯の薰陶力の偉大なることを語るものである。

早稻田大學が半世紀で非常の發展をなしたのは、大方の賛同に負ふことが少なくない。擴張毎に大方より資金を募り數百萬圓に達してゐる。私學の經濟は國稅に頼ることが出来ないから

大方の寄附に仰ぐことは已むを得ないのであるが、これにはなか／＼困難を感じた。併し幾回かの募金も結局豫定額に達したのは、畢竟侯の勢望に依ると云はねばならぬ。實を云ふと寄附者は教育の爲めにすると云ふよりも、寧ろ大隈侯に献じたいと云ふやうな幼稚な考から、義捐をしたものが少なくなかつたのである。それほど侯は一般から仰がれたのである。勿論侯自身も募金に努力され、しば／＼足を擧げて各地を巡遊し、九州のハテ迄も遊説されたが、いつも募金の事が付き纏うた。侯の旅行は誰れも知ることく派出なものであつたが、費用は勿論いつも自辨で、一たびも校費に依られたことが無かつた。天下豈斯の如き重寶な總長あらんや。早稻田大學の今日の大をなしたのは、諸般經營の力にも頼るが、侯の聲望が無つたら斯くまでに進まなかつたであらう。大隈侯薨去後既に十年餘を経れども、侯の薰育に係る校風は嚴然として存し、毫もかはることがない。恐らく此の校風は永久に存するであらう。そも／＼學校に於て重しとするものは、何よりも美なる校風である。侯の不羈獨立の精神、侯の高崇雄偉の風格、侯の堅剛不拔の偉力は、早稻田の校風を育成したもので、早稻田大學が他の大學と異なる所もこゝに在り、早稻田大學の誇りとする所も亦たこれに在る。侯は有形的の學校の創立者であるのみでなく、實に精神的校風の創立者であることを忘れてはならぬ。有形的に學校を造ること

は必らずしも侯を待たぬが、唯だ精神的の校風を造ることが侯に依つて初めて成るものであることを思ふと、吾等は今更ら感激を新たにせざるを得ない。

二、小野梓氏

小野梓氏は學校の創立に大切な關係を有した人である。氏は大隈侯を助けて早大の前身東京専門學校を創立するに與つた中心人物であつた。開校の際の小野氏の演説こそ長く記憶すべきもので、學校の精神のある所を道破した。乃ち早大の教旨となつてゐる最も大切な一條項、學問の獨立を最初に宣言した人は氏である。無論氏一個の私見でなく、侯の旨を受け創立に與つた同人にも協議して之れを宣したのである。

小野君が學校に偉勳ある所以は、創立の際大隈侯の帷幕に在つて事に參畫したのに在るは勿論だが、それよりも寧ろ新進の學者を侯に紹介したのにあらう。小野氏は昌平費に學んで早く海外に留學し、法學を修める傍ら政治學を學び好學の人であつた。當時まだ卒業前であつた高田氏や吾々に交はることを深く喜び、既に刎頸管ならざる誼があつた。學校創立前參議たりし大隈侯へ我等を率ゐて紹介したのも、其交りから生じたもので、開校の計畫にも與かり、教

授となつて各科を受持つに至つたのも、皆、氏が侯と吾等の間に立つて斡旋した結果に外ならぬ。如何に有力者が學校の創立を計畫しても先立つものは教授である。教授なくして奈何んぞ學校の建設あらん。此學校が創立と共に各科擔任の新進の學者が備つたことは稀有の例で、學校建設が急速に進んだのは偏へに教授の供給があつたからの事だ。氏は實に教師の供給者であつた。これは幾萬圓の資金にも優るの供給であつた。別して當時藩閥政治が陰險の妨害を逞し、學者の早稲田に投ずることを阻止した事態に顧みると、此供給は氏の偉勳と云はざるを得ない。此等學者の中には一生を學校に寄せてその柱石となつた人もある。高田氏の如きは正しく其一人である。

小野氏は崇高の人格を有し、闘士の面目を具する人であつた。外國に學んで而も年若かく、二十臺の吾等より僅かに數歳の長に過ぎなかつたが、決して外國に心酔することなく、思想は飽まで獨立であらねばならぬとし、民法も其骨を日本の習慣に取るべしと主張し、國憲も日本の國體習俗を本位として世界の長を取るべしとして國憲汎論の著があり、洋行者の滔々として陥る反譯者流とは全く其の選を異にした。斯人にして學問の獨立を高唱したのは、全く其精神に一致する所があつたのだ。氏は洋行歸朝後官仕したが、毫も官臭なく、大節に臨んでは侃諤

毫も屈する所が無かつた。常に慷慨國を憂へて能く責守を重んじ、藩閥者流の心膽を寒からしめた。そして十四年の政變には大隈侯に殉じて官を罷めた。

氏は開校後時に講堂に臨み「日本財政論」、「國憲論綱」、「民法之骨」等を講じたが、皆な氏の新著であつたので頗る學徒の傾聴を博した。併し氏は政黨や著述に忙がはしく登校することは稀れであつた。吾等は頻々氏の橋場の寓所を訪うて、氏の政論を聴き、亦政談演説の試演をやり、改進黨の内議にも參した。吾等が實際の政機に觸れたのは、此時であつて、氏の宅に會することを此上もない愉快とした。此の同人の會は、鷗渡會と云うたが、政府の探偵がつけねらふので、わざと風流じみた會名を附し、一同揃うて行くことをすら憚つた。その同人は高田、山田(二郎)、岡山、天野、砂川、小川(爲次郎)并に自分などであつた。

氏が終始憤慨したのは、我國際條約が對等でなく、片務的屈辱的のものであることで、之れが改正を圖るために氏は、當時識者の團體であつた「共存同衆」と携へて種々の對策を講じたが、時尙早く何事も成らなかつた。其後大隈侯が條約改正の衝に當り、爆彈の難に罹つたことをも知るに至らず、早く氏は世を去つた。氏は亦廿三年の國會開設を春の來るのを待つごとく、一日も忘るゝことなく、憲法制定に資せん爲め國憲汎論の大著を力作したが、その春にも遇は

で世を去つた。早大の今日の隆盛を見せたいと云うても、それは餘りに隔たりがあるが、切め條約改正を見せたかつた。切めて一たび衆議院の演壇に立せて其の熱烈の雄辯を揮はせたかつた。惜むべし、氏は氣魄を惠まれたが、健康がそれに副はなかつた。

氏は土佐の宿毛の人で、先輩には板垣伯があつた、氏は伯の黨派が動もすれば、理想に趨るのを非難した。氏は氣鋭の年輩であつたが、思想は老成であつた。若し氏にして今日の所謂危険思想が大學に巢喰ふ實狀を見たら、何んと云ふであらうか、特殊の外國に行はるゝ純理を鵜呑にして之れを我邦に擬し、吾國體を左右せんとする者を見たら、如何に驚ろくことであらう。必らずや云はん、五體は日本に存在しながら精神は既に外國の奴隸になつてゐると、例の悲憤の氣を吐き怒髮天を衝くものがあつたらう。氏の早世は惜むべきであるが、此の混濁の思想界を見るに及ばなかつたのは、或は氏の仕合せであつたかも知れぬ。

三、南部英磨氏

開校第一世の校長は大隈英磨氏であつた。氏は華族南部家から大隈家へ養子として迎へられた人である。氏は眉目秀麗、温厚優雅、頗る品位の高い人であつた。米國に遊學して理科を修

め、天文学が其の専攻であつた。大隈父子の志は、開校匆々理科を開かんとするに在つて、開校の時、理科は置かれたが、それは型ばかりのもので、諸般の設備を爲すには時機が早すぎで、當時に於て不可能であつた。吉田彦六郎氏や田原榮氏など迎へたのは理科の講座を受持の爲めであつた。田中館愛橋、石川千代松の兩氏も一二の課目を受け持たれた。併し幾ばくもなく理科は廢されたが、其の志を抛つたのでなく、後年の經畫を期してのことであつた。英磨氏は初期の學生に英語や書取などを親しく教へられた。氏は溫藉の人に似ず、教場では常に嚴格で、發音やアクセントを正すことに假藉がなく採點も峻嚴であつたと、教を受けた校友は語つてゐる。早稻田中學が創立さると、氏は轉じて其校長となられ、教員も兼ねられた。氏の爲めに寧ろ其處を得たので、中學は創立後間もなく好評を博し、中學界に雄視して模範中學と認められたのは氏の信望に因るのである。幾年かの後、氏は仙臺の高等學校に迎へられて赴任された。が、早稻田を去られたことを吾等は遺憾とした。吾等の更らに遺憾とするのは、其後永久早稻田を去らるゝ不幸な事が起り、大隈家と絶縁された。其間の消息は爰に語る必要もなく亦語るを欲しないが、あの溫藉の人が此の不幸に遭遇されたことを思ふ毎に、吾等は斷腸の思ひがある。氏は晩年舊封地盛岡に退いて閑居されたが、早大に理工科の開かるゝに先だち實を

易へられた。氏の宿志は漸やく達したのであるのに、それを見るに至らなかつたことは、返す返すも遺憾である。自分は嘗て校用で盛岡に出張した折、何事も差措き、旅館に行李を卸すと直ちに氏の僑居を訪うたことを憶ひ起す。氏の居は町を外れた閑靜の處に在つた。邸宅も相當に廣く立派なものであつたが、家には僅か婢僕があるのみで寂寞を極めてゐた。やがて一室に迎へられ、氏は莞爾として寒暄を叙されたが、自分は幽雅の地に御閑居で結構だと云ふと、氏は此處は盛岡の早稻田だと云うて一笑された。如何にも早稻田と地形がよく似てゐたが、氏の孤筑蕭然なる姿を見ては胸が塞がった。種々舊を話して旅館へ戻ると、間もなく答禮の爲め來訪されたが、これが最後の面會であつた。

四、男爵 前島密氏

南部英磨氏の後を承けた校長は、後に男爵となつた前島密氏であつた。氏は日本の郵便を開始した元祖で、電信、電話、郵船等、遞信事業に大なる功績があり、能吏の令聞のあつた人だ。大隈參議が十四年の政變に冠を挂られた時、候に縁故ある在官者は相携へて、野に下つたが、氏も其一人であつた。當時學校に議員と云ふがあつたが、それは今の評議員の事で、大隈參議

に殉じた名流は或る二三を除けば、皆議員に名を列した。前島氏も其の一人で、唯れが考へても、校長にふさはしい人は氏であつた。此頃は學校の困難時代で、氏の如き老練周到の人を校長に迎へる必要があつた。氏は維新早々あらゆる困難を排して郵便制度を確立した苦勞人だから、困難である學校事業を左まで困難とは思はなかつたであらう。氏は何事も自から行ふ勤勉家で、決して放任主義の人では無かつたが、學校だけには始めから放任主義を採られた。それは主として學校の創立に與つた若い教授連に充分の理解があつたから、飽まで之れに信賴し、なまじひ干涉するよりも、彼等をして任意にやらせる方が、却つて事が舉ると考へられたからであらう。前島校長はいつも大隈侯と若い連中の間に立つて、情意の疏通を圖り、之れを以つて校長の務とされたやうに思ふ。

前島校長の在任中最も重大事件は、一圓の月謝を一圓八十錢に増額したことである。月謝の増額と云へば瑣事のやうだが、これが當時吾等若い面々が心血を絞つて學校の自立を策した大問題であつた。當時一圓の月謝を収入するだけでは學校の經濟は毎月二三百圓の不足を告げた。其不足は大隈家の補給を仰いで僅かに凌いでゐたのだが、大隈侯も十四年の政變後幾年か藩閥の嫉視を受け、經濟上頗る苦境に立れ、侯の爲め金融を便を圖る銀行があれば、政府の機嫌を

損ひ不利を生ずることが必然であるので、何れも金融を手控へた。これが爲め大隈侯は自家の内政にすら窮迫を告げられた位であるから、毎月二三百圓の補給はさしたる事でもないやうだが事實餘裕がなく、月末に交付さるべき補給が月を越えたり、或は數月補給を絶つやうな事もあつたので、學校は月給の支拂が出来ず、ひどく困んだ。斯る場合に自立の考が起るのは自然の勢で、高田氏先づ起つて、學校は大隈侯の創立に係るとは云へ、いつまでも其の補給を仰ぐべきでない。況して侯の困難を知りつゝ、補給の續行を期するなどは恩人に對する道でない。宜しく補給を辭して學校の自給自足を圖らねばなるまい。既に學問の獨立を宣してゐながら、學校が經濟上獨立しないで、争でか學問の獨立が出来ようぞ。然らば何によつて自給自足の資を得ようか、方法は月謝の額を二倍すれば即ち可と云ふ結論であつた。これは如何にも簡單の方法であるかに聞えるが、當時倍額の月謝を取ることには實に難事業であつた。その頃どの學校でも月謝は一圓と相場が極つてゐた。それを倍額にするに就ては、學生に對しそれ相應の事をしてやらねばならないので、いろ／＼苦心した。僅かながら二十錢を削つて八十錢としたのも學生の負擔を出来るだけ減せんとしたのである。亦原書の教科書を無料で貸與する法も學生の慰安の爲めに案出された。扱て八十錢の増額が、どれほどの増収となつたか、ハッキリ記憶に

無いが、當時の在學生の數を三百人とすると二百四十圓、三百五十人とすると二百八十圓となる。それでどうにか月の經濟が取れたのだから、學校の經濟も誠に小さなものであつた。しかしこれでもつて大隈家の補給を辭したのである。あとから考へると學校の經濟上の獨立は全く八十錢で買つたやうなものである。丁度三錢の切手が郵便の基礎をなしたと同じ様に、重大味があるのである。斯様な案は郵便の創立者たる前嶋校長が思ひつきさうなことであるが、事實は校長の發案でなく、高田氏や吾々が苦しまぎれに絞り出した案で、改革案を作る時は高田氏の若松町の宅に自分も泊り込んで、幾んど徹夜で十幾枚の案を書いたことを思ひ出すが、前嶋校長と協議して其の是認を得たことは勿論である。實は當時これより外に活路を得る法がなく創立者の肩も緩む譯だから、大隈侯に異議があらう筈はないのだが、其頃佐賀出身者で侯爵邸に出入するものゝ中には、學校を創立者の私有であるかの如く考へ、亦さう考へることを大隈家に忠なることゝ誤認した連中もあつたので、經濟の獨立に就ての成行には吾等も懸念が無いでもなかつたので、高田氏始め内心非常の決心をしたものだ。前嶋校長は吾々の意思を取次ぐ位地に居られたから、内實苦慮されたと想像するが、大隈侯の前で高田氏が提案を説明し終ると、校長は決然候にも御異議は無からうと云うて、案はスル／＼と無事に通過したので、吾等

はホツとした。若しあの時に大隈家の周圍のものに吾等が斟酌でもしたら、どんなことになつたか實に大切の場合であつたことをシミ／＼追憶する。

前島氏は長く校長の席に居られなかつたが、去られた後も常に學校の世話をされた。學校の第一回の基金募集の時なども氏を推して委員長とした。氏が自から陣頭に立つて越後に遊説された時は自分も随伴した。學校の困窮時代に、大隈侯の仲介で横濱の平沼專藏から二千圓程の借金があつて、それが常に累をなしたのを除かんと、氏の發意で中野武營牟田口元學の兩氏を帶同して、平沼を説き借金の一半を寄附させられたことも氏の盡力に依るのである。早稻田が種々の會社を經營した都度、必らず氏の世話を受け、日清生命保險會社は創立の際氏を社長に戴いたことがあり、日清印刷會社の創業時代には金融上氏の援助を受けたこともあつて、終始學校に厚意を寄せられた。自分は書生時代に早く氏の眷顧を受けたので、郷國の先輩中には最も親しみが深かつた。そんな縁故から氏の長逝さるゝや、傳記は自から執筆を擔當した。それは「鴻爪痕」と云ふ書で、氏の閱歴はそれに悉してあるから、こゝには絮説せぬ。

五、田原 榮氏

田原榮氏は帝大の吾等の同窓で、理學を専攻した。學校創立後理科の教師として來り投じ、前島氏の校長の時には幹事を兼ねてゐた。前島校長の項に擧げた月謝増額の案件を處理する衝に當つたのは、田原幹事であつた。學生の囂々たる紛論を治めるには非常の努力を要し、氏は三晝夜一睡もせず奮闘したので、月謝の増額は遂に實行されたが、氏の功は忘る可らざるものがある。氏は感激性に富み熱誠の人であつたが、決して人と争はず忍耐能く事を理めた。氏に柳城の號のあつたのは、恐らく柳のごとく風に争はぬ意を寓したのであらう。氏は中頃學校を去り、色漆の發明や漆器の製造に没頭し、色漆の發明には幾多の特許を得たが、氏の熱誠も商賣の成功を博するに至らなかつた。氏は窮餘横濱の某外國商館に投じたが、氏は商賣に適する人で無かつた。自分が校用で北海道に出張した際、偶然札幌の旅館で氏に邂逅した。氏も商用で來てゐたのであるが、柄にもないことで氏が奔走してゐるのを見ては、氣の毒で胸が塞り、一夜切に學校に復歸を勧めた、それが動機で氏は遂に學校に復歸し、理工科の經營に與かつたり、高等豫科長となつたりして、名科長の名を博した。氏は諸生を遇するに深切で、其の指導が懇到であつたので、富豪は多く子弟を氏の家に託した。加藤内閣に藏相の椅子に坐した早速整爾氏の如きも、青年時代氏の家に寄宿した一人である。氏は帝大在學中神經衰弱症に罹り自

殺を企てたことがあつた。それは救はれたが、病氣の故を以つて卒業に至らず帝大を去つた事が痛く氏の心を惱ましたらしく、數年間米國の通信教授に依り、熱心に化學を研究し自から顧みて短とする所を補修した。氏は亦自家の子弟を四人まで帝大に送つて卒業せしめた。これも亦自から卒業せざりし埋合せをしたものであると思ふが、四人共皆秀才で、吾等友人は氏の家庭の幸を羨やんだものだが、何故か天は此等の秀才に幸せず、氏が歿後何れも夭折して、一男子をも存せざる不幸を生じた。吾等は氏の未亡人に會する毎に落涙を禁じ得ないものがある。

六、岡山兼吉氏

岡山兼吉氏は學校の創立に與つた一人で、砂川雄峻氏と共に法科を教へた。氏は吾等と同窓だが、年輩は四歳ほど長者であつた。學窓時代既に老成で世故に通じてゐた。當時名判事の令名があつた、玉乃世履が、帝大で訴訟演習をやつた時に、多數學生の内氏が特に玉乃の注意を惹き、氏を名指して「君は判事をやつたことがあるか」と問はれたことがある。氏は啞辯であつが、其言説は實際に即して老巧で、學生には不似合であつたから目立つたと見える。氏は果して辯護士として名聲を馳せた。

氏が早稲田に教鞭を執つてゐる間に起つた事件は法科移轉論で氏は其唱首であつた。當時早稲田の法科は甚だ不振の状態に在つたが、其際に今の法學院大學の前身英吉利法律學校が創設され、岡山氏もその發起人であつた。氏は此學校の創立と共に早稲田の法科を移して合併すべしと主張した。實は當時の早稲田は繁劇なる業務に當つてをる法律家を教師として招致するに餘りに片寄り過ぎて不便が甚しかつた。岡山氏の移轉論の主旨も茲に在つて、氏は早稲田の法科の不振を地の利を得ざるに歸した。氏の言ふ所に一理はあつたが、併し折角創設した主要學科を單に地の利を得ざる故を以つて他の學校に合すと云ふことは、學校の一角を崩して他の併呑に委する觀があるので、校内に大波瀾を捲き起し、結局學校の輿論は移轉を否とし、飽まで死守することになつた。當時の噂では、英吉利法律學校の背後には有力なる藩閥の大官が暗に操縦してゐて、早稲田の一角を奪ひ、大隈侯の經營を妨害せんとの苦肉策だと云はれた。當時は藩閥者流が種々陰險な策を弄した折柄であつたから、實際噂の通りであつたかも知れぬ。大隈侯などは晩年までそれが事實だと信じて居られた。これに就て疑問であるのは、早稲田の法科の創設に努力した岡山氏が何故に斯る策に興して早稲田の法科を危ふしたかと云ふことである。氏は上叙のごとき陰謀のあることを全然知らなかつたであらうか。それは何んとも分ら

ないが、氏は決して藩閥の走狗となるごとき人物ではない。或は敵の略を知つて、その裏を掻かんとしたのであるまいか。氏はなか／＼の權略家で、いつも虎穴に入らねば虎子は得られぬと云うて、山氣のある人であつた。改進黨に籍を有する氏が衆議院議員になると、黨を脱して中立を標榜する曖昧の大成會に投じたなどは、誰れもが其心事を不審がつたが、氏の深意は曖昧の議員を陶冶し、それを引率して改進黨に復歸せんとするに在つたことが知れた。假令引率復歸は出來ないとしても、改進黨の與黨を作らんことを庶幾したのは事實である。斯様な略は氏が往々試みたことなどを考へ合はせると、法科移轉論も自から早稲田の法科を背負つて新設の學校に投じ、終にはそれを早稲田化して、早稲田の分校たらしめんと策したのであつたかも知れんが、氏の策略は巧であつても多くの場合成功しなかつた。畢竟氏は早く死んだからでもあらうが、實にあぶない藝當をやる人で、その肚が端倪出來ない爲め往々人の誤解を招き、今に於ても氏の法科移轉論は解けない謎となつてゐる。

氏は人を容るゝに博大の量があつて、後進は勿論、同窓でも先輩でも生活の道を得ないものは皆な自家の藥籠に納め、敢て其の清濁を論じなかつた。氏の門戸に多くのルンペンの輻湊したのは此故である。氏は自から思へらく、苟くも自分の埒場に入れゝばどんな人でも黄金と化

することが出来ると、氏の人を待つに寛大であつたのは此故で、氏には大志があつたと思ふが案外早く世を去つた。若し天壽を相當保つたならば、恐らく政治家として將た事業家として大いに名を成したであらうに、一辯護士で終つたのは惜しむべきである。

七、三宅恒徳氏

早稲田の早い頃には兄弟同士で教へに來たのが三組あつた。それは天野兄弟（爲之、喜之助兩氏）有賀兄弟（長雄、長文兩氏）三宅兄弟（恒徳、雄二郎）兩氏で、此内長逝したのは、有賀長雄、三宅恒徳の二氏である。三宅恒徳氏は帝大出身で、吾等よりも一年の先輩で、豪傑肌の人であつた。氏は法科を教へる傍ら英語も教へた。氏の教を受けた人から聞いた話に、ある時の試験に、問題を二十出したので、學生等は僅かに一時間で、二十の問題に答案を作ることには不可能だと苦情を鳴らした。三宅氏の云ふには、問題の数は多いが、皆なアイ、ノー（可若くは否）と書けば、それで答案になるのだと云うたので、苦情は一掃された。氏は亦スペンサーの代議政體論の譯讀を受持つて學生をして常に原語で讀ませることを例とした。氏の云ふには原語の讀み工合で、其人に意味が分つてゐるか否やは自分に判斷がつくと云うたと云ふが、

氏の教授法には斯る特徴があつた。

八、股野時中氏

股野時中氏も三宅氏同様豪傑肌の人であつた。氏は司法省の法律學校出身で、佛人アツペルの教を受けた佛法學者であつた。早稲田で法科を受持つたかどうか記憶は曖昧だが、寄宿舎監であつたことは確かである。此人に就ては自分は多少の縁故がある。自分が越後の高田新聞で筆禍を買ひ、投獄に臨み、後繼の主筆をと東京に求めた時に、大養木堂氏が薦められたのは此人であつた。股野氏は秋田の人で、大養氏も曾つて秋田の新聞を書いたことがあるので、それらの關係から股野氏を識つてゐたのであらう。氏の長技とも云ふべきは刀劍の鑑定であつて、木堂氏にも此趣味があつたから、多分同趣味から生じた知合であつたらう。自分が高田新聞にゐた頃は、同志が信越鐵道を私設で經營せんと熱中してゐた時で、自分も力を極めてそれを援ける論説を書いたが、股野氏は鐵道國有論者で、自分の後釜に坐わると、幾十回も續けて鐵道國有論を書き、社是である私設論を駁した。議論の當否は別として、信越に早く一線を引くことを促進するには、私設の計畫は一方便であつたのだ。股野氏の反對論は實に新聞社の株主全

體に對する挑戦であつたから如何にも奇觀を呈した。氏は豪傑肌で少しも周圍を顧慮しなかつたやうだ。

股野氏は漢學素養があつて、自分が氏に感服したのは、漢詩を作るに達者であつたことだ。詩の巧拙は別として、百詩千詩口を衝て出るの概があつた。此人が巡りめぐつて遂に早稲田に來たが、當時の寄宿舎には随分面倒な人物もゐて、之れを御することが容易で無つたので、氏を適任として迎へたのであらう。併し此人は足駄を穿いて平氣で講舎に登るやうな粗豪家であつた。いくら當時粗豪が風をなしてゐたとは云へ、舎監として適任と云ふよりも寧ろ超適任であつたのだ。今も氏の逸事として傳へられてゐることは、門限に後れて歸舎するものを惡み、懲らしめの爲にと、氏は棍棒を携へて門側に潜み、舎生の門に入らんとするものを一々撃ち据ゑたことがあつた。それが問題となつて氏は終に早稲田を去つた。

九、大西 祝氏

文科の創設された頃名聲の高かつた教授は大西祝氏であつた。此人は岡山の後樂園から遠くに見える山麓に生れ、其山の名を號として操山と云うた。初め同志社に學んで、後に帝大に轉

學し、卒業後早稲田に教鞭を取つた。哲學が專攻で、當時文科の哲學に關する、あらゆる學科を擔任した。頭腦が明晰で、其講義は能く學徒に徹した。教を受けた人の話に、氏は講堂に入ると、いつも講壇を離れて、講堂の周圍を歩しながら講義を筆記せしむるのが例であつたと。蒲柳の質で清癯の人であつたが、非常の勤勉家で、早稲田の外の他の學校にも掛持教鞭を執り遠路の往復をかならず徒歩して倦なかつた。坪内氏主筆の早稲田文學にも助筆をしたが、或る時編輯員が遠足會を催した時、氏も其の一行中に在つた、行先は品川附近であつたと聞くが、途中で空腹を訴へたものがあつた。氏はそれを叱して、そんな弱音を吐くのは、畢竟精神に緊張を缺くからだ、と、氏一流の説を唱へたといふが、これは氏の性格をあらはす一端である。氏は學徒に時々論文を課したが、氏ほど深切に論文を精査した人は無つたと云はれてゐる。幾回も見返して細かに評論を下したものだ。學徒の中には思ひ切つて愚論を冗長に百頁餘も書いて先生を煩はしたものがあつたけれども、それに對して極めて深切に教へる所があつた。文科の初期に少からず鬼才を出したのは、此人の薰陶に依るのである。何故か晩年に氏の心機一轉して京都大學に移つた。氏の洋行も京大から派遣されたのであつた。歸朝後氏は神經衰弱に罹つて間もなく歿したが、歸朝後當時圖書館長たりし自分を館へ訪はれて一時間程談話を交へた。

其際に自分は問うた、君ほど哲學の群書に涉り徹底的に研究してゐる人が、外國に出かけて何か得る所があつたかと云ふと、氏は之れに答へて、生ける著者に親炙したことが何寄りの仕合であつた。著者に接して、初めて其の著述に解し兼ねたことがいくらかも理解し得た。と語られたが、これが氏と最後の會見であつた。

一〇、鳩山和夫氏

前島密氏の後を承けて校長となつた人は鳩山和夫氏であつた。氏の校長は長く續いた。氏が校長に簡選された事情は明かでない。氏は帝大の吾々の先輩であるけれども、學校の創立には全然與からない人であるのに、それが學校の幹部に毫も相談なく、突發的に大隈家で定められたので、その頃は天降り校長だなど云うた。その頃學校の方針も略々定まつてゐたのに、新校長が萬一既定の方針を變改するやうな案を齎らして來られては吾々の折角の苦心も水泡に歸する譯だから、高田氏等は校長を定める手續は校規に定めてあるから、形式だけでも、校規に據り其手續を盡さねばならぬと言ひ出した。それが當然の事であつたから、大隈侯にも異論がなく、且つ新校長も決して既定の方針を變改せぬといふ内意もあつたので、格別の面倒なく、

鳩山氏を迎へることになつた。

鳩山氏は帝大法科出身で、古るいカレンダーに三浦和夫とあるのが此人で、首席で卒業した秀才であつた。後に侯爵になつた小村壽太郎氏などは氏の次席であつたのだから、早稻田の校長として迎へるには決して不足は無つた。氏は洒落恬愴の人で干渉がましいことは欲しない人であつたから、氏に對する一旦の氣遣ひは全然過慮であつた。當時學校の制度は校長の下に學監があつて、高田氏が其の椅子に坐し、校長の取るべき事務は學監が任じ、校長は時に重要な協議に與かり、毎年卒業の式を擧げることが校長の主要の務であつた。當時大隈侯はまだ總長として起たれない時であつたから、鳩山校長が内外に對する威嚴部であつた。氏は辯護士の業務を執つて日々繁劇であり、且つ政黨にも關係があつたから、事實毎日校務を見ることは不可能であつた。氏は何事も學監任せであつた。前校長前島氏も不干涉主義であつたのに、鳩山校長も亦同じ主義であつたのは、寧ろ學校の仕合せであつたと思ふ。鳩山氏が校長に簡選された内情に就き、或ものは云ふ、高田其他は皆年が若いから氣鋭の爲め遣り損ひを起さないとも限らない。鳩山は彼等の先輩だから、抑へとして上に置く必要があると、誰れの進言で氏が簡選されたか其邊の事は分り兼ねるが、以上の如き噂は事實であつたらしく思はれる。或は前島氏が

餘りに放任主義であつたので、牽制を欲する上から鳩山氏を校長に選んだのだと云ふ説もあつた。後年の大隈侯の襟度性格から判ずると、侯も不干渉主義で終始されたから、或は大隈家に阿諛する何人かゞ、お爲ごかしの進言に出でたのかも知れない。裏面にはどんな事情があつたにしても、それは鳩山氏の累とはならぬ。氏が萬端を學監に一任して終始されたことは賢明のやり方であつたと云はざるを得ない。氏は官私どんな學校の校長に比しても決して後れを取らぬ立派な校長であつた。氏の在職が長かつたから、學校の發展が氏に負うたことも固より少ない。學校が財政困難時代で鳩山校長を基金募集や其他に煩はしたことも頻繁であつた。自分分は氏が校長時代幹事の職にゐたから殊に接觸が多く、自分が北海道に出張して寄附金を募集した時などは鳩山校長も陣頭に立つて親しく遊説されたことを想ひ起す。

氏の生涯に就て氣の毒に感ずることは政局に志を得なかつたことである。氏の同窓の次席小村氏は度々外相となつて、終に侯爵の榮をも贏ち得たのに、氏は終に國務大臣として臺閣に立たずに終つた。氏は常に衆議院に議席を有し、嘗つては議長に擧られたこともある。任官して相當の地位に立つたこともあるが、臺閣に立ち得なかつたのは、常に失意の地位に在つた大隈侯の部下に屬してゐたからでもあらう。併し氏の恬憺の性質も手傳つたらしく思はるゝ。氏は

前にも云うたごとく帝大で主席を占めながら、海外留學生を選抜する時に、氏は其選に漏れたので例の淡泊の調子で何故の番狂はせだと質問したことがあると氏自から云はれたことがあるが、氏は政治家として餘りに善良に過ぎた。言ひ換れば辣味を缺いたことがいつも鹿を逸する原因となつたやうに思ふ、晩年氏は大隈侯を棄て、政友會に投じた。其是非は且らく論外に置き、此の轉身は出世の手段であつたかも知れんが、大隈侯との乖離は終に早稻田を去るの已むなきに至らしめた。

一一、山田喜之助氏

吾等の帝大同窓に二人の山田姓があつた、一は法科の山田喜之助で、一は文科の山田一郎氏である。共に饒舌を以つて同窓間に名高く、兩人も長廣舌を競うたが、亦才藻をも競うた。山田喜之助氏は大阪出身で藤澤南岳に學び、漢文の素養があつて詩文を善くした。大學卒業後直ちに司法省の權少書記官に任ぜられたが、當時これを異數とした。後に官を罷めて辯護士となり、早稻田の法科に親族法を教へた。併し例の法科移轉論で英吉利法律學校が創立されると、氏はそれに赴いたので、早稻田に教鞭を執つたのは長く無かつた。氏は屢々東京市から衆議院

議員に選ばれて議會に列した。自分は特に氏と交りが深く、服部誠一と共に内外政黨事情と云ふ隔日刊行の新聞を起した時は、山田氏は出雲町の藝者屋の眞中に、一軒藝者屋が明いてゐたので、わざとそれを借家して辯護士事務所とした。自分は毎日氏の所で原稿を書き、それを新聞社へ送るのが常であつた。氏は豪放磊落の質で、其門下から花井卓藏のやうな人が出た。山田も流石に花井を御し兼ねたやうであつた。自分と山田の交りには思出も多いが、自分の隨筆に書いたから爰には絮説せぬ。

一一一、山田一郎氏

山田一郎は廣島出身で頼山陽に私淑する所があつて、其の最も長ずる所は時文を達者に書くことにあつた。山田喜之助氏が卒業近くに病に罹り卒業論文を書き艱むと、山一氏は俺れが代筆してやると云うて、何を書いたか知らんが、畑遠ひの法律の論文を書いてそれで通過した。當時早く氏の將來はジョルナリストにあることを暗示してゐた。氏は早稻田開校當初からの關係者で、政治學を教へる傍ら、樞要の校務にも參した。併し氏の志は政治界にあつたので、遂に學校と離れて専ら新聞に筆を執ることになつた。自分は山喜氏よりも山一氏により以上交り

が深かつたが、自分をして遠慮なく云はしむれば、其政治家たらんと志したのが、一生を誤つた第一歩であつたかに思ふ。氏は政治家たるの資質に大切なことを幾つか缺いてゐた。氏は寧ろ操觚者たるべき性格に富んでゐた。氏には確かに文章に天稟の才があつたが、才に任せて達者に書くことが偶々累をなして、文章が粗漫冗長に流れた。三宅雪嶺氏は嘗つて、氏の傳に序して、天才の出來損ひだと云うたが、それはよく當つてゐる。今少しく才を矯めて文を磨いたならば、立派な文藝家となつたであらうに、惜しいかな中央の文壇に筆を揮ふ機會がなく、地方のジョルナリストとなつて、文を修めるの機に遠ざかり、後には糊口の爲め毎日四五の地方新聞に投稿するやうになり「天下之記者」の名は贏ち得たが、文章は益々粗漫となつた。彼れが如き才人が、一生不遇に終つたのは惜しむべきであるが、要は柄不相應の政治家たらん志を抱き、事志と齟齬するも身を轉ずるの雅量を缺き、飽まで我意に執着したからの事だ。彼れは磊落豪放を以つて任じたが、それは假裝であつて内實はさうでは無かつた。自分などは氏の轆軻不遇を見兼ねて、しばし學校へ復歸を勧めたが、一諾の雅量を有たなかつたことは遺憾に堪へない。

一三、小川爲二郎氏

小川爲二郎氏は小野梓氏の項に録したごとく、吾々を最初小野氏に紹介した人である。吾々が帝大在學中、本郷の弓町に進文學舎と云ふがあつた。橋機郎と云ふ漢醫の經營に係り、漢學の外に英學も教へた。その英學の教師は當時の帝大在學中の人に頼んで、それに充てたのである。小遣取りには適當の仕事と、高田、坪内、山田などの面々もそれに應じたのである。其頃小川氏は此塾舎の一室を借りて下宿同然に住してゐたので、自然高田氏等との交が起り、小野氏を紹介することになつたのである。此學舎は今考へて見ると、早稻田の創立頃の教授連に教授振りを講習せしめるには此上のないよい舞臺であつた。高田氏等が早稻田の教場で初めからマゴツキなく教へ得たのは、此の準備的練習があつたからである。坪内氏の如きは、塾舎の一室を借りて、そこに起臥し縁故者から子弟を託されて、それと同棲して教育もやつたのである。此塾主の子弟で、槐次郎、梅三郎の兄弟は皆帝大に入つて吾等と同窓の誼もあつたが、皆早く歿した。兎に角早稻田に學校の起る前は此塾舎が吾等の俱樂部とも云ふべきもので、教師を勤めたことは勿論、勤めないものも、日々遊びに出かけて、演説や討論などをやつた深い因縁のある所だ。

ある所だ。

話は横道に馳せたが、小川氏も終には早稻田の幹事を司どることになつた。氏は田原氏の後を承けたが、田原氏の柳に風の流儀とは趣を異にし、學生に對しても妥協的でなく、學生が我儘なことを申出ると、君等の如く柳の下にはいつも泥鰌が居るやうに思ふのは間違ひだと云ふ風に強硬に刎ね飛す風があつた。其頃の學生の風は氣荒であつたから、氏の如き強硬の幹事が必要であつたのだ。氏の幹事時代に寄附金募集の事が漸やく萌し、主として氏によつて策されたが、終に氏の在職中に實行されなかつた。氏は事務に才もあり經驗もあり、在職中學務を整理したことが少なくないが、氏の本領は寧ろ實業方面に在つて、學校を去つた後株式取引所より歐米の視察に派遣されたり、終には大阪に赴き、安田善次郎氏に知られて、安田閨の銀行會社の監督となつて、終始した。併し學校との關係は連綿として續き砂川雄峻平田讓衛氏と共に大阪の重鎮であつた。

一四、根本通明氏

根本通明氏は秋田出身の儒者で易に精通の人であつた。早稻田では文科に易を講じ又莊子を

講ぜられた。結髪で常に木刀を携へてゐた。漢學者流の生真目で、學校より案内をするとどんな會にでも缺かさず出席された。結髪異彩の人であつたから其の風采に憚かつて誰れも近づいて談敵となるものがなかつたので、自分は已むなく接伴を擔任した。交つて見れば決して屹岬の人でなく、なか／＼面白い話をされた。自分は此翁に交はる前、曾つて東京市會議長であつたチヨン鬮の芳野世經に交はり、幾回か小石川の居に訪うたこともあり、結髪は必らずしも頑固者流の徴象でないと思つてゐたから、翁に對しても面倒は無かつた。ある人の話に、翁は黒川眞頼博士と懇意で其の病を聞くと必ず見舞つた。實は懇情を寄するの外に、黒川翁珍藏の閨書を見んが爲めだと云ふ。此翁なか／＼隅に置けない若氣があつたのだ。

一五、信夫恕軒氏

信夫恕軒翁は吾々が帝大在學中に文章軌範の講義をやつて、得意の辯を揮つた人である。赤穂義士銘々傳を講談師風にやつてのける程の辯才があるから、文章軌範の講義も學生に喜ばれた。いつも酒氣を帯びて顔面に朱を灑ぎ、寒中でも跣足で、竹の皮革履を穿ち、悠然講壇に登り、酒氣を吹いて、徐ろに説く其の講釋に抑揚があつて、満座をして耳を傾けしめた。往々談

謹を弄し、韓退之の文の終りに「愈再拜」とある「愈」は韓退之の名だ「いよ／＼」再拜と讀んではならぬなど云うて笑はせたことだが、此翁早稻田に來ても矢張り得意の文章軌範を講じた。併し當時の學生から聞いたのでは、先生酒氣を帯ること帝大の時と同様であつたが、既に光彩ある説明はせず、文章の妙を知るは讀破にありと云うて朗讀するを常とした。そしていつも一時間の半ばは餘談に費し、一時間一回の報酬では精講は出來ないと氣餒を吐いたり。或る時は當時噂された破鏡のさびしさを學生に語り、文名ありし樋口一葉女史を後妻に迎へたいなど、臆面もなく學生に告げたと云ふが、先生の面目は躍如として見るが如くである。翁は特に漢文に志あるものには深切で、文章の斧正を請ふものがあると家に持ち歸つて案外丁寧に朱を入れられたといふ。

一六、夏目漱石氏

夏目金之助氏も文科で一時教鞭を取つたことがある。それは氏が帝大在學中であつた。氏の家は當時下宿業を営み、それで學費を辨するやうな境遇であつたと云ふから、多分學費稼ぎの爲めに來校したのであらう。其頃の文科の學生にはなか／＼意地の悪いものがあり、質問攻め

に教師を困らせたことが毎々あつた。氣の弱い教師は辟易して辭職をした人すらあつたが、夏目氏は質問攻めに遇つても一向平氣で、少しも困らなかつた。但だ即座に答へることを避け、次回の講席には質問に對する答が宛がら河を決することく、奔放止まる所を知らざる概があつて、質問者の膽を奪うたと云ふ、氏の蟄龍時代の片鱗が窺はれる。

一七、土子金四郎氏

土子金四郎氏は經濟學を擔當したが、氏は經濟學者としてよりも洒落哲學の著者として、よりよく知られたほど、氏の洒落は有名であつた。併し氏は造次顛沛諧謔づくめの生活をしたかと云ふと、決してさうではなく、頗る眞面目な人であつた。笑面と云ふ戲號があつたが、常に笑を湛へてゐる人でも無かつた。元來洒落諧謔は唐突に且つ笑もせず發する所に、可笑味があるものだから、氏のごとき斯の道の通人は其の心得があつたのであらう。氏は富豪に生れ、其邸宅は宏壯で庭も廣かつた。座敷に坐した氏を見ると堂々たる富豪の旦那らしく見えて、諧謔を弄する人とは思はれなかつた。

一八、志賀重昂氏

志賀重昂氏は札幌農學校出身で、農學が専門であるのに却つて地理學者として名を博した。氏の早稻田に於ける擔任も失張り地理學であつた。氏は詩的に地理を講ずる特能があつた。氏自身大の旅行家で、多くは其の體驗を講じたので、氏の力ある辯舌は講義に躍如なる生彩を添へた。氏は體軀が大きく豪傑肌であつた。氏の教を受けた人の話を聽くに學生中長髮の異風のものに注目して、君は豪傑風の男だが、どここの生れだと尋ねると、丹波出身との答を得て丹波には大江山の酒頭童子以上の豪傑は無いと、喝破したので、其學生は氣を奪はれて黙したと云ふが、それは井上雅二氏であつた。氏の地理の講義には政治も法律も經濟も宗教もあらゆることが交り、それが滾々として口を衝て出るので學生に該博の知識を與へた。

氏は自家の體驗を語る講義には殊に生彩があつて、往々黑板に旅中の詩などを書いた。印度洋を渡つた時の風光は如何にも寫實であつたと云ふが、説明し難い處は詩を以つて補つた、當時の學生中に今尙其詩を讀じてゐるものがあつて、自分の爲にそれを暗誦した。其詩に云く

三帆孕風動晚涼、澳蘭南去望蒼茫

不知今夜何處泊、月高浪白赤道洋

自分と氏との交りは可なり早くからである。會ては吾が郷國の新潟新聞に主筆たることを依頼し、氏の勁拔奇警の筆で論壇を賑はしたこともあつた。氏は天然物若くは史的記念物に蒐集癖があつて、旅行の都度いろ／＼のものを齎らし歸へることが例であつて、晩年の住宅の壁はサハラ沙漠の沙で塗つたと聞いてゐる。氏の家を訪ふ毎に、氏は雜然たるコレクションに就て面白く説明するのが常であつた。彼が如き豪傑肌の人は自負が強く、兎もすると他人の長を認めないことのあるものだが、氏は率直公平で、自から及ばずと思へば、飽までそれを稱讚して尊敬を拂ふ人であつた。亡友吉田東伍の大日本地名辭典は氏の専門に屬する著書だが、氏は極力賞讃して已まなかつた。亦亡友坂口五峯に服して、此人の詩書以外書齋に何物も掲げないと公言する程に傾倒した。

一九、和田垣謙三氏

和田垣謙三氏は、生徒受けのよい一名物であつた。氏は英語の操縦に熟し、ウエツトがあつた。課業時間の一半は餘談で、學生を烟に捲いたが、學生には人氣があつた。畢竟あの人は學

生に同感性があつたからだと思ふ。自分はその人の講義を聞いたことはないが、それに似たやうなことを聽いて感心した。氏がまだ早稻田へ來ない前であつたが、ある時君の家を訪ふと、折節家族も居らず下婢もゐないやうであつた。けふは幸ひ暇があるから、ゆつくりして往けとあつて、ビールを抜いて共に飲み、けふは「ファウスト」の朗讀をやらうと原書を持ち出し、それを全巻朗讀しようと思ふから自分もチト避易したが、辭しかねてどんな技倆かと聞いてゐると、意譯が神速で巧妙で少しも淀みなくズン／＼進み、男女それ／＼の聲色でやつてのける丈の餘裕があつて、實に熟したものであるのに驚ろいた。切れ目／＼に一杯を傾け、退屈をさせないやうにと時にウエツトを弄するなど他人に出來ない藝當である。斯くして全篇を朗讀するに多くの時間を費し、夜分に及んだが、自分は一向倦怠を覺えなかつた。自分は之れを追想する毎に氏の才藻に感ずる。早大には坪内博士以外コンナ藝當の出來る人は無い。氏の講義に特別の趣味のあつたことは察するに難くない。氏は謠曲を學んだが、同學の連中に聞くと可なり拙であつたと云ふ。然るにそれを時々講堂にうなり出して、仕舞とも踊りともつかぬことをやり出すことが珍らしく無つたと云ふ。氏は眞に快人であつた。惜むべし君は債鬼に困められ終始した。しかし、氏は困厄の間に一種の禪味を養ひ得たかに思はるゝ、同氏の滑稽三昧は

乃ち禪味の現はれだと自分は見てゐる。

二〇、吳文聰氏

吳文聰氏は統計學を長く早稻田に教へた人だが、今は兎もすると支那人であるかに思はるゝほど若い人達に知られないけれども、斯學の先輩として亦我邦統計術の先驅として忘れてはならぬ人である。杉亨二翁は吳氏の先輩であつたが、學問は蓋し吳氏に一着を輸したであらう。統計の學は頗る大切であつたが、數學的で面倒である所から、兎角學生に嫌はれ、之れを教へる人に骨が折れた、實は損な學問で、これを専門として立つ學者は甚だ少い。此點から吳氏に對して尊敬を拂はねばならぬ。氏はなか／＼の論客で、數學にのみ局促してゐる人ではなかつた。動もすると、サヴォタージをやり勝の學生を抑へて長く講座を保つたのは、氏の講演が乾燥に失せず、巧妙に數字を操縦して學生に倦怠を生ぜしめなかつたのは、偏へに氏の技倆によつたのであらう。偶々氏の筆作に係る統計學の必要と題する一篇を得たから、それを節録して同氏の口吻を現はして見よう。

世の學生は何故我が統計の如く、斯く多趣味にして境域廣大に世事の論難陳辯討論に有益に

て實力ある此學の講究を等閑に附するや、實に氣の知れぬ話とす。統計は土地、氣候、水利、土木、農林、漁業、工商を始め、政治、宗教、道德、財政、何から何まで凡そ人間社會の目前に顯はるゝ現象にして數にて數へ、枘にて計らるゝものにして其の討究にかゝらざるものなく。此方法を器械として論戰の陣頭に現はれんか。如何なる問題にも口を入れられざるなく、容れて而して敗走するは罕なり。論戰に於ける統計の效用は實戰に於ける機關砲の如く又魚形水雷の如く、向ふ所披靡せざるはなく、射る處破摧せざるはなし、諸氏何んぞ此利益を用ふることを習はざるや(中略)今日以後天下論争の間に立ちて最終の勝利を收むるものは多數の確實なる證據を有するものゝ手に落つべきは火を觀るが如きにあらずや。

と、恐らく教室の講義も此調子であつたらう。氏の幾年かの講義を聽て早大の學苑に何人が最も得る所があつたか、自分はまだ調査の暇がないが、敢て氏の講説を聽かずして統計に興味をもち、何んの議論にも統計を經緯として巧みに數學を繰り出し論陣の利器とした巨人があつた、それは唯あらう大隈老侯其人であつた。侯は數字の記憶がよかつたのみならず、それを繰り出すに巧妙なアートを有し、聽者を毫も倦ましめざる長所があつた。門前に斯人があれば設令ひ學校から統計學者を出さずとも償ふことが出来るであらう。

二二一、内田銀藏氏

早稲田の生んだ學者に内田銀藏氏あることを忘れてはならぬ。氏は明治廿二年東京専門學校を卒業して後、帝國大學に入り、文科を卒業してから大學院に入つて研究をつゞけ、文科大學の教鞭を執る傍ら、早稲田へも來て教へた。氏は明治三十六年に文部省より歐洲へ留學を命ぜられたが、それに先だち三十五年十月大學院に於て定期の試験を経、文學博士の學位を得た。氏の專攻は國史にあつたから此の專攻學科で試験を受けたことは言ふまでもない。氏は英國のオックスフォード大學に學んだ。歸朝後京都大學の教授となつて終つたが、實に篤學の人であつた。氏の體軀は矮少で、風貌はいつ逢つても青年の如くであつたが、學問は老成であつた。自分は京都に赴く毎に氏を大學に訪ふことを例としたが、氏は母校を思ふことの切なる人で、早稲田から人が尋ねて來たと云ふと、自宅からワザ／＼大學へ出頭して懇切に面接する人であつた。いつぞや氏が古文書類を大學に陳列して展觀に供された時、自分はそれを見に行つたが氏は既に自宅に歸つて場に居なかつたが、事務員が自分の名刺を見て直ちに氏に報じたらしく今内田さんが見えるから、ゆつくり見てくれと云はれたが、間もなく氏は出校され、深切に列

品を説明されたことなどを憶ひ出す。惜しいことに氏は早く世を去つた。

二二二、坪井正五郎氏

早大の教授中忘れ難い人は坪井正五郎氏である。氏は當時人類學のオーソリティーで、帝大に此學科を教へる傍ら早稲田にも同じ講座を擔當された。氏は蒲柳の質で、頗る謹厚の人であつたが、往々諧謔を弄して人を笑はせた。氏は勤勉の人で、教へるには懇切で學徒をして理解せしめねば已まなかつた。自分などの人類學に聊か趣味を感じるやうになつたのは、全く氏のお蔭に因るのである。嘗ては帝大で氏が熱心に蒐集された標本を見たこともあるが、氏は一々に就て丁寧の説明されたが、氏の説明には一種の味があつて長く記憶に存する。自分も一時骨董に耽つたことがあつて、神代土器や發掘品などを幾許手に入れたが、往々其用途其他に就て解し兼ねるものがあると、必らず氏の説を請うて釋然たることを得た。氏は此學問には該博で創見もあつた。洋行後一層智見を開拓されたが、惜しいかな、氏の蒲柳の質に長く天壽を藉さなかつた。

一三三、梅若誠太郎氏

梅若誠太郎氏は幾んど一生を早稲田に捧げた人である。氏は能學の家元の出であるが、家藝を事とせず、早く帝大に學んで秀才として聞こえ、憲法學者として名を博した穂積八束と首席を争ひ、それに打勝つて卒業した人である。卒業後時の内務次官白根專一に知られて神奈川縣の書記官に擧られた。此縣は國際事件の頻出する所であつて難縣であるのに、氏がその書記官に擧げられたのは破格の拔擢であつたが、氏は官吏として適する人で無つた。長野縣の書記官たりしことがあつたが、それをも罷めて某縣の中學校長となつたが、縣會議員などに對し校費獲得の運動をやらねばならぬことが五月蠅と云うて終に早稲田に投ずるに至つた。氏は早稲田に投じてから脇目も振らず育英に没頭した。氏の如く高年に至るまで何んの變故もなく早稲田に終始した例は無い。氏は學徒を教へるに深切老巧で名教授の名を博した。氏の風貌頗る温藉であつたが、事に臨んで、剛健不屈の所があつて、校紛の時にはその特性が現はれて、同僚の畏敬を博した。

一三四、高山樗牛氏

高山林次郎氏は早稲田で教鞭を取つた、大西祝氏が早稲田を去つた後、美學の講座が明いたので、氏はそれを擔當する爲めに迎へられた。其頃氏は静岡の某中學の教師であつた。氏を迎へるに就て早稲田の文科に異論を云ふものもあつた。當時帝大出身者を喜ばない妙な空氣が漂つてゐた。襟度の廣ろい坪内博士はそれを排して氏を迎へて厚く遇した。博士の談に依ると、或る料理屋で款晤した折に、高山が自分に何かわるい癖でもあれば、遠慮なく云うて下さいと云うたので、博士は短刀直入、君はエゴイステックだと評した。それに對し其席では別に辯疏もしなかつたが、それが常に氣になつてゐたと見えて、臨終の時に俺はエゴイステックでないと云うたと聞いてゐるとは坪内博士の語る所である。氏は博文館の太陽に迎へられ其論壇に花を咲かしたので、名聲が揚つた。歴史畫論なども太陽誌上に現はれた説だが、之れに對して坪内博士は長篇を讀賣新聞に寄せて揶揄的に論駁した。それが馬骨人言であつた。氏の名聲の揚ると共に病勢も進んで、鎌倉の僑居に歿したのは惜しいことであつた。

二五、有賀長雄氏

有賀長雄氏は吾等の同窓であつたけれども、早大とは長い間連絡が無かつた。氏は帝大で教授を勤めたり、赤十字社に關係したり、著述に忙しかつたりして餘力が無かつた。しかし同窓の誼はいつしか氏を早稲田に延き來り、氏自身も専ら教授に任ずることになつた。氏は同窓時代早く非凡の學才を示し、儕輩をして後へに墜若たらしめた。氏の學才は往く所として可ならざるなく、或る一科の研究に没頭すると、直ちに其専門の大家たることを得た。國際法の如きは全く自修に據つたのだが、それが専門となつて赤十字社にも關係し、後には支那の顧問に聘せらるゝことにもなつた。皆な國際法の故であつた。氏の發刊した外交時報が斯界に重きをなしたのも、氏の力に歸せざるを得ぬ。氏は大阪の累代和歌をよくする家に生れて、國書には多少親しみがあつても、漢學などは其長ずる所で無かつた。而かも氏は著述に才があつて、多くの著書はすべて世の歡迎を受けた。大隈侯の開國大勢史なども氏の執筆に係るものである。吾等同窓が氏に敬服したのは、事に當つて勤勉なる點に在つた。併し學才に富むもの必ずしも世才に富むものでない。氏が支那政府の顧問となり、或る失態の爲め非難を受けたときは、世才

に疎であつたからの事で、深く咎むるを要せぬ。氣節を氏に望む如きは實は無理の沙汰である。氏は晩年中風症に罹つた。病は名古屋の旅中に發し、偶々大阪に在つた自分は長電を受けて直ちに病床を訪うたが案外輕症であつて、其後再び支那に赴いた。其の發せんとする時、早大に高田學長を訪ねて懇ろに死後の事を託した。其の談話中突如氣がついたかの如く、高田君に頼んで置いても却つて高田君が自分より先きに死なぬに限らんと云うて、別室にゐた自分呼び入れて、同じ事を託したなどは、滑稽であつたが、氏の面目は此邊に在つて存する。

二六、關根正直氏

關根正直氏は早稲田の文科で源氏物語を講義されたが呼びものである。氏は當時女子師範にも同じ講義を擔當されてゐたが、氏自から學生に告げて云ふには、女子を相手に此書を講ずることは難い。兎角遠慮を要し、隱微に渉る所などは推測に委することが止むを得ないが、男性を相手としては遠慮に及ばないとあつて、際どい處までヴェールを取り去つて説くので、若い連中の血を湧かした。吾々も帝大では黒川眞頼翁の同じ講義を聞いたことを想ひ起す。翁の此の講義は餘程手に入つたもので、微笑だも湛へず、微に入り細を穿ち、宛がら閨閣の外に立

つて偷み聴きでもしたかの如き隠事を、明け放して巧妙に講ぜらるゝのが、帝大では評判となつて、級外のものまで傍聴に押寄せたものだが、知らず關根氏のに較べて優劣如何。

二七、齋藤 木氏

齋藤木氏は早稻田の初期に漢學教授として可なり長く教鞭を執つた。氏は越後の國學者の家に生れ、若い時三四年土藏の中に起臥して勉強したと云ふ程の苦學者で、歳は若かつたが學力は優れてゐた。詩經の講義を聞いた人の話に、如何にも熟したもので、あれほど説きにくいものを、やすくくと碎いて宛がら日本俗歌を講ずるやうに、音節を抑揚したり、談話を交へたりして巧みに説いたので學生の悦服を博したと聞いてゐる。氏は詩經の外に莊子の講義も擔當した。自分は郷國を同うする關係から親しく交つたが、どことなく超然たる所があつて面白い人物であつた。妙な事には根本通明翁が虎の巻としてゐる易の古鈔本の一半が氏の所にあることが知れて、根本翁は一方ならず懇望したが、氏は一笑に附して譲るは愚か、見せることも眞平御免と峻拒したことを憶ひ出す。

二八、久米邦武氏

久米邦武氏は正科竝に課外に國史を講ぜられた。氏は佐賀出身で大隈侯とは舊縁深く、常に侯の邸へ往來され、學校の種々の會合には大概出席された。さて其場合に誰れもが避けて氏の座邊に近寄らぬ。氏の談敵となるものは自分か然らざれば吉田東伍氏であつた。何故に人が氏を避けたかと云ふと、氏の言語が解し兼ねて應對に困しむからであつた。氏には郷國のナマリがある上に、語調が明晰を缺いた。これに就て思ひ出すことは、氏の先輩古賀精里翁が昌平學校の教官であつた時、將軍に召されて經書の進講をやつた。精里も佐賀訛が濃厚で、將軍は些しも聞き取れなかつたので、講義が畢ると、將軍が左右を顧み、あれでも大儒であるか、何を言うてゐるか一向分り兼ねたと云はれた一挿話がある。氏は國史に就て創見に富み、嘗つて岩倉右府に隨伴して歐米を漫遊したこともあり、すべて氏の談話は筆録に値するものがあるのに何分にも言語が解し兼ね、僅かに片鱗の閃きを捉へて大要を推測するに止まり、解し兼ねるのを解し得たことゝ受け答をするのは如何にもつらい事であつた。氏の晩年には氏の寂寞を慰める爲め、史家先輩と共に、借樂園に迎へたことがある。卓上史談は湧いたが、言語は前よりも

一段解し兼ねた。しかし其の時代は九十歳の高齢で氣力は尙旺盛であつた。

二九、吉田東伍氏

吉田東伍氏は史學の教授として早大の誇りとする人であつた。氏の始め早稻田に投じたのは小川氏の幹事時代で、圖書室事務主任と云ふ軽い擔任から、終に史學の教授となつて早稻田に終始した。自分は氏と深い關係があるので、語るべきことは少なくないが、既刊の余の隨筆に大略を録して置いたから、茲には重説せぬ。爰に單に久米翁の晩年に語られた逸事のみを録する。翁の談に據れば、吉田氏の初めて翁に會したのは「日韓古史斷」の草稿を携へて翁の意見を質した時だとあるから、氏が東京に來つて自分の家に寓してゐた時だと知れた。吉田氏は其頃訥辯で、何れかと云ふと沈黙の方であつたので、久米翁も初會の時は賢庸何れとも判じ兼ねたと云はれた。翁は其際或る材料を示して氏の論據に缺く可らざるものだと注意されると、吉田氏は黙々として一讀し、點頭はしたが寫しも取らずに去つたので、翁は内心不快に感じたがさて古史斷が刊行されたのを見ると、翁のサゼストした文獻が立派に録載されてゐるのを見て容易ならざる強記の持主であることを感じたと言はれた。氏と翁との學問的交通がこの時から

始まり、互ひに畏敬する間柄となつた。氏が歿するに迫んで、特に翁を煩して墓誌の撰文を得たのも、斯る因縁があるからの事だ。

三〇、磯部四郎氏

早稻田の過去には随分面白い人物がゐた。自由の學園に於ては教諭も學徒も磊落であつたのだ。辯護士界で名聲のあつた磯部四郎氏も初期には法科を教へたが、或る朝教場へ這入ると學生に向ひ君等の内金を二圓もつてゐるものがあれば貸して貰ひたいと云うて求めるので、或る學生はそれを辨じてやると、直ちに外へ出て間もなく歸つて來た。多分車代を拂つたのであらうが、當時の車代としては二圓はチト過ぎるので、口善惡なき連中は先生惡所から馬を引いて來たと云うた。ある時先生の出席が遅いので、學生は退席せんとする折柄、先生やつて來て學生に詫びて云ふには、實は昨夜花を引て、夜深しをしたので、遅刻した、誠に濟まんと挨拶の後は受持の治罪法は高閣に束ねて芳原邊の惚氣話をして學生を烟に捲いた。しかし氏の無邪氣の態度は却つて學生の喜ぶ所であつた。

三一、北畠治房氏

北畠治房男は開校匆々の評議員であつた。大隈侯が雉子橋邸に住はれた頃は、氏は隣家であつたので、終始懇親の間柄で、早稲田大學へもしばしば來られた。侯の大禮服姿の銅像を建設する時、自分はその委員長であつたが、北畠男は設計圖を見て、長簡を寄せられたことを想ひ出す。あの銅像は今ガウン姿のと替つたけれども、誰れもが尙記憶して居ることく、石の演壇に据ゑつけ、高く等身立像が石の臺に立つてゐるのだから、銅像の位置は高きに失する感があつた。北畠男は早く此點に氣がついて、銅像臺の高さは或る尺度を限りとする、それを超えれば風貌に變化を及ぼすからと、仔細に説明され注意されたが、自分は如何にもと思ひながら、工事が既に進んでゐたので修正が出来兼ね、遺憾ながら其の助言に従はなかつたこともあつた。男は法曹界の耆宿であつたが、新しい法律學者ではなかつた。國史を修むることが深かつたので、常に考證に耽り、何事も知らぬことはないと思ふほどの物知りであつた。大隈侯は考證嫌ひの人で、男が考證話を始めると、いつも話を他に轉ぜられたが、自分などは時々相手になつて、男の考證談を聞いたこともある。男の人魚の説と云ふが有名で、學苑の古顔は大抵こ

れを聞かされてゐる。現に人魚の標本も備へてあつた。男の考證は動もすると軌道を逸し、滑稽に陥ることがあり、そこに愛嬌もあつた。大阪の控訴院長であつた時、同僚中に問題となつた珍事は、淨瑠璃の道行の文句に「奈良の旅籠屋三輪の茶屋廿日餘りに四十兩、つかひ果して二分残る」と云ふはをかしいと云ふ議論が起つた。如何に贅澤な道中でも、あの頃二十日間で四十兩の金はつかひ切れるものでないと、毎日裁判所の食堂で論議を闘かしたなどは人を嘖飯せしめるではないか。男の考證家であるのは由來のあることで、男は嘗つて法隆寺の中宮寺に寺侍をつとめたことがある。晩年は法隆寺村に隱退して老を養つた位で、法隆寺に就ては最も委しい考證家である。男はいつも喜んで法隆寺の故實を語られた。亦隱退後は往々人を法隆寺の諸利に案内もされた。これに就て此頃薄田泣菫氏の隨筆を讀んで一笑を發した。氏の隨筆の冒頭に、氏が中宮寺を訪うた時、北畠男が案内したことが書いてある。それが如何にもよく男の態度を穿つてゐる。あの人は極めて傲慢の態度で、どんな人に對しても謙抑の風のない人であつたが、泣菫氏と同じく案内された或る名も知られない紳士が、途中男が邪魔がつて脱した古るぼけた外套を無遠慮に此紳士に持せて平氣で居るやうな始末だ。此邊の寺々は男の繩張とあつて、どこに往つても案内なしにどん／＼這入つて行く、別して中宮寺は縁故があるか

ら、座蒲團を出したり、茶をすゝめたりする。そこで男は兩人の座蒲團に坐り方が長者に對して禮を失してゐるとか、茶をすゝめに出了た若い尼僧の物言ふ時つゝまじやかに手を疊につくさまを君等は分るまいと説明するなど、宛としてあの老男爵を髣髴せしめるものがある。さて出んとする時に外套を持たせた紳士が立去つて居らないので、男は氣を揉んで搜がすと、其人は見當らなかつたが、外套は佛前に備へてあつた。それには何か書いた紙片が添へてあるので、それを見ると「奉納」古外套一着「口喧しい老人より」とあつたので、流石の老人も一本參つたとあるが、自分は之れを讀んで覺えず噴飯した。(以上の文は、原文が長いから約したのである)自分は此文を見て思ひ起すことがある。往年老男を法隆寺村の宅に訪うた時には生憎不在であつた。家族の云ふには近邊に居るから迎へにやると云うて待された。其時は既に正午を過ぎてゐた。其内老男歸宅して、玄關口に家人に言ふには、俺れは食事を済ました。俺れの爲めの用意は客人にやれと云ふ聲が自分の耳に達した。間もなく翁に會して談話中西洋料理が卓上に運ばれた。コンナ僻村に西洋料理のあるのは恐らく此家の割烹に係るものであらうと、空腹を感じてゐた自分は遠慮なく食ひ始めると、老人は卓の差向ひに坐してゐて、自分のフォルクの遣ひ方を見て、そんな遣ひ方では田舎風だ、斯うするものぞと、手を把つて教へてもらつた

ことを憶ひ起す。食事後大隈侯の近狀などを問はれて、いろ／＼語ると、老人の言はるゝのに君も知つてゐる通り大隈は菅公の苗裔だと云うてゐるが、その系圖が明かでないので、先頃からしきりに調べてゐるが、うまくつじつまの合ふやうに系圖が出来ればよいかと、不相變いろいろの考證談が出た。

三二一、谷口藍田氏

谷口藍田氏を早稲田に迎へたのは、何年であつたか記憶が朧ろげであるが、明治三十五年十一月の早稲田學報に氏が腦溢血に罹り八十一歳で逝かれたことが載せてあり、それ迄は常に來校されたとある。そして氏の歿した月が乃ち東京専門學校を早稲田大學と改稱した時であるから、氏の來校されたのは東京専門學校時代であることは言ふまでもない。確か自分は幹事であつて、氏を訪問して來校を求めたことを思ひ起す。其時私を紹介した人は氏の門人で宮内省に仕へてゐた恩地轍氏であつた。氏と初對面の時を追懷するに、氏は餘程高齢であつたが、豊饒として且つ容貌魁偉の人であつた。氏は自分の請ひに對して極めて快潤に、早稲田の學校なら喜んで行くと言はれた。氏は佐賀出身の儒者で、大隈侯には因縁があつたからであつたのだ。

其際大隈侯の八太郎時代の思ひ出をいろ／＼語り出されたが、如何にも翁が手録の幕末から維新にかけての日記を讀んで見ると、侯の動靜に關する記事がいろ／＼あつて、侯の八十五年史を編纂の時には、氏の日記は可なり役立つた。氏易簧の後は、令嗣豊五郎氏が教へに來られて在職は可なり長期間に涉つたやうに思ふ。自分を紹介された恩地氏も今は故人となつて、先頃其家から藏書が出たが、自分の手に落ちたのは、藍田翁の若い時富嶽を踏破した際の長篇の漢文紀行と、登嶽を嚴父に報じた長文の書簡であつた、書簡は氏の自筆であるから記念にと特に保存してゐる。

三三、島村抱月氏

島村瀧太郎氏は早稻田の學苑が産んだ秀才の尤なるものである。氏は哲學や文學を修めて同窓間に早く其才を認められた。氏は明晰の頭腦の持主で、事を経畫するに縦横の才があり、文章にも天籟の妙があつた。氏は文科の教鞭を執り、學徒に薰陶を與へたことも尠く無かつた。氏は海外に遊學して歸來自然主義を唱道した。早稻田の自由の學苑は氏の奔放を縱まゝならしめたが、氏の先輩坪内氏などは自然主義に異論は無かつたが、此主義の實行には、異論があつ

た。有體に云ふと氏は多くの長所を有したが、亦短所も多かつた。氏は思慮餘りありながら世に處する老成を缺いた。氏は常に學理を以つて自家の短所を掩はんとして粉飾をつとめ、師友の諫めを納るゝ雅量を缺いた。氏が逍遙翁の文藝協會に投じ、會規を犯して一女優に興味を感じ、其の行動が露骨になつて破綻を生じたなどは、氏の缺點の現はれである。當時自分などは此事のため氏の家庭に累せんことを憂ひ、亦此事の爲め學苑が此秀才を失はんことを慮かつて一二度友誼的の忠告をなしたこともある。其忠告は決して野暮なものでなく、氏の内心描く意圖を達成せしめんとするのであつたが、自分に對してはフランクで無つたのは遺憾に思ふ。氏は終に意中の女優と結託して藝術座の創立を企て、學苑と離るゝに至つた。これは氏に於て寧ろ本意とする所であつたかも知れないが、數奇と闘つて、早く歿したことを想ふと、氣の毒に堪へぬ。

三四、伊藤悌治氏

伊藤悌治氏は司法官で終始した人で、晩年に大審院の部長となつたが、早稻田の初期には法科を教へた。氏は敦厚の人で職務には謹嚴であつた。氏と自分は郷國を同うし、いろ／＼の縁

故があつたので、身を終はるまで交りを續けた。氏は司法官以外に餘り交際が無つたので、何か會合があつて通知があると、自分に對し君が出席すれば俺れも出ると云ふことが常であつた。氏は維新の際自分の郷里の伊藤退藏に養はれ、前原一誠が越後府の長官となつて自分の郷里に來て自分の家に宿した際には氏は小姓格で前原の左右に侍し、矢張自分の家に宿した。其後自分が東京に遊學して英語學校に入ると、一時同級であつたので、かたゞ深い因縁があつた。

三五、村上專精氏

文科の初期には村上專精氏を迎へて、印度哲學を講じて貰つたことがある。氏は眞宗派東本願寺の學僧で斯界の耆宿であつた。氏と自分はいろ／＼の因縁で長く交つた。氏は頗る苦學の人で、其の修業時代には吾が越後に來り、自分の識る一二の寺に身を寄せ、炊事や風呂焚などの鄙事を司どつたこともある。氏が佛教大綱論を著はして、本山の忌諱に觸れ破門された頃は自分の重忠後鎌倉で靜養中であつたが、此書を翻讀したのは其時で、深く氏の議論の莊重にして一宗一派に偏せざる學者的態度に敬服した。破門を受けた後氏の名聲は益々揚つた。曾て修禪寺の温泉に邂逅した時、氏より白隱禪師の遺法である自強術の教を受けたこともあつた。友

人山田一郎氏が歿した時法名を師に求めた。師の云はるゝには、山田といふ人には交りがないが、かねて其人の事は聞いて居るからと云うて、撰んで呉れられた法名は、廣宣院正論居士と云ふのであつた。天下之記者たる山田には洵とにふさはしい法名であつたので自分は深く喜んだ。此の語は言ふまでもなく佛典の成語から取つたのである。

三六、井上密氏

早稻田の法科の初期に長く教鞭を執つた人に井上密氏がある。京都大學が創設さるゝと早稻田からそれへ移つた人が、前には織田萬、岡松參太郎二氏があり、後には藤井健次郎、波多野精一氏がある。井上氏も織田氏などゝ共に移つた人である。氏は老成の人で、専門の學識に富み、學生の氣受もよかつたが、法學者には稀れなる趣味家で、書畫骨董の鑑識があつた。京都大學の教授から抽かれて京都市長になつたのも氏に俗才があつたからの事だ。自分も久しく交つたが、如何にも多方面の趣味家で面白い人物であつた。

三七、小手川豐次郎氏

小手川豊次郎氏は早稻田の初期に経済學を教へた。氏は外國仕入の學者で、一寸法師と綽名された矮小の人であつたが、體軀に似ず霸氣満々たる人物であつた。嘗つて衆議院議員の候補に立つたことがある。氏は學校の教員室でしきりに選舉談をやるので、自分もその話し相手となつた。氏の云ふのに五百圓の金があれば當選が出来る云ふから實は乗り出したが、五百圓では足りさうもないと云うて、側らに置かれてあつたカバンを指さし、此中に自分の貯蓄した金が全部這入つてゐる。毎日此内からいくらかづゝ金を出させらるゝが随分煩雜なものだネと云うた。自分はそれを聞いて、戯むれにそのカバンの中に幾何の金が這入つてゐるか知らんが間もなく空になるであらうと云ふと、氏はヤツキとなり、そんなことは無い。約束が五百圓だ此のカバンを空にしては自分の生活が出来ぬと云うて、如何にも無邪氣であるのに自分は笑つしたが、其後十數日を経て登校した時に、氏は特に自分を拉して云ふのに、選舉運動は恐ろしいものだネ、前日アナタの云ふやうに、もうカバンが空になりさうだと云ふから、自分は笑つてそれは當然の事で、ある間は出させらるゝが極つたものだ。結局は無い金迄才覺して出さねばならんことになるから用心し給へと注意したが、氏は遂に落選した。氏は經濟學者であつても選舉の經濟には甚だ迂濶であつた。

三八、三崎龜之助氏

三崎龜之助氏は初期の早稻田の法科を教へた。氏は吾等の帝大時代の同窓でありながら、卒業後は何事も行徑を異にした。氏は讃州丸龜の出身で、同窓の頃は勉強家であつたが才幹ある人とも思はなかつた。而るに社會に出でゝからは、頗る世渡りの上手の人たることを知つた。氏が京都に在つて某新聞の主筆をしてゐた頃、自分は社へ訪うて久濶を叙すると、直ちに案内されたのが一力亭で、其の取り回しが如何にも老練で、最早同窓時代の舊阿蒙で無つた。氏は初めから志官途に在つて、政黨關係も吾等と反對に藩閥を扶ける方であつたが、終に松方系の財閥にたどりついて、正金銀行の重役になり、早く資産を作る蔓に在りつき、政友會に投じては今の總務の位地に坐し、しきりに切り回はした。同窓時代には能辯でも無つたが、議院では辯論の雄たる評を博した。自分が殊に案外としたのは氏に陶器の鑑賞力があつたことである。氏は仁清の珍藏家と云はれ、何れの陳列會にも氏の出品が目覺しいものであつた。氏が仁清の逸品に富んだのは、氏の舊藩主京極氏の所藏品を譲り受けたからだと聞いた。氏の別荘は鎌倉に在つて、自分が病後同じ鎌倉に靜養中、氏の重患を慰問したこともあつたが、氏は遂に別荘

に歿した。

三九、小泉八雲氏

ラフカデオ、ハルン小泉八雲氏は帝大の文科に在つたのが、轉じて早稻田へ来て、早稻田の自由の學風を喜んだ。學苑に於ても斯人の來り投じたのを喜び且つ之れを誇りとした。氏に就ては語るべきことが多くあるが、氏には傳記もあり著書もあつて多く邦人に讀まれてゐるから、唯だ一事を語るに止める。嘗つて大隈總長は氏と會晤を欲し、某教授をして其意を氏に傳へしめた。氏は此の申込に對し辭して云ふには、野人禮に嫻はず、自分には一着のフロツクコートも無いと。氏は總長を尊大の人と想像して斯く辭したのであるが、紹介者は老侯の人となりを知り、衣服などに頓着する人でないと説き、やつと納得させて背廣のまゝで侯の邸に伴ふと、侯は例のごとく如才なく應接されたので、氏は想像の外なる侯の態度に驚ろき愉快を感じて談笑したが、侯は此の人に對してのみ老練の外交を過つた。侯は氏をクリスチアンと思つて、開口一番耶蘇教を説き出すと、氏は苦笑して之を遮ぎり、予は耶蘇教を奉ずるものでない。寧ろ貴國の祖先教を喜ぶものであるから、歸化して日本の國籍に入つたのだと云うたのには、流石

の侯もギャフンと參つた。併し侯は此の案外の事に失敗を忘れて大いに悦に入り、興に乗じ談笑時の移るを知らなかつた。

四〇、森鷗外氏

森鷗外氏も早稻田の初期には文科の講師であつた。明治廿三年の學校の職員名簿には氏の名が見えてゐる。自分は未だ氏の教を受けた人に何事も聞いてゐないが、自分自身氏の講演を聞いたことが一度ある。何んの折であつたか、氏は來校して教職員を聴き手として一時間計り講演された。講題は黃禍論で、獨逸人の書いた小冊子を手にし批評を加へながら説かれたが、黃禍論は當時珍らしい問題であつた。自分が氏の音容に接したのは、これが初めて亦終りであつたが、氏は長幹の人で較々瘦方で精悍の氣が満ちてゐた。逍遙翁は氏の歿後追悼文を作つて、氏を大隈侯に比し、征服せざれば已まぬ所に兩者に一致點があると云はれたが、如何にも負けぬ氣の人であつた。氏は逍遙翁と論壇の好敵手であつたが、劇に就ては氏は流石に一目を逍遙翁に措いたかの觀がある。氏が沙翁のマクベスを譯し畢ると、その草稿を寄せて逍遙翁の校訂を請うた。それは逍遙翁が熱海の荒宿の別荘に居られた頃で、博士自身も此脚本の譯を心掛た

時であつたので、翁は自分が同じことを譯するにつき念の爲め先づ鷗外氏の譯本を原書に較べて精査した結果は此通りと云うて示されたのを見ると、各頁雌黄に満ちてゐるのに一驚を喫した。其後翁の譯が成つた時、自分は兩氏の譯し方にどんな差があるかを知りたく、試みにマクベス夫人の獨語の處を読み較べて見たいと請求し、自分は鷗外氏の譯本を開き、一語々々翁の自譯を讀まるゝに較べて見て、全然味の異なるのに亦一驚を喫した。流石に餅屋は餅屋である。如何に譯が精確でも、舞臺を知ると知らざるとに大なるひらきがある、劇に就ては鷗外氏は翁に一着を輸さざるを得ないと感じた。

四一、大口鯛二氏

大口鯛二氏は宮内省の御歌所に奉仕する傍ら、早稻田の文科を教へた。氏は和歌を善くしたことは勿論だが、亦頗る書を善くした。氏は貫之其他上代の書を學んで氣品が高かつた。氏は上代の古墨蹟の研究に半生を傾けて、斯道に造詣が深く、鑑識に於ては第一人者と云はれた。在來筆の關所を以つて任じてゐた古筆の極めは、多く氏に據つて破毀され、上代の墨蹟は氏に因つて明燈を得た。氏の門下から尾上柴舟博士の如き鑑識家の出たのも氏の功として稱へねば

ならぬ。三十六人家集を西本願寺の寶庫深く搜り出して世に出したのも、それ〴〵の筆者を考證して平安朝の墨蹟に明りを通じたのも亦氏の功である。氏は和歌の道には如何にも忠實で、その門人は到る處にあつたが、それに對しては實に行届いたものであつた。自分は曾て京都に遊んで偶然旅宿を同うしたが氏が訪ひ來る人の多くは門人連で殊に女流が多かつた。夜間などは十二時に至るまでも、それ等を相手に和歌を談じたり、和歌を直してやつたり、揮毫をしてやつたりして、些しも倦む氣色がなく、宛がら夫子自身も楽しむごとくであるのを目のあたり見て、流石にと感じ入つたことがあつた。此の京都滞在中保津川に舟遊を試みた時、氏と自分の外に五七の女流門人も加はつたが、船中に於てすら、即詠を示して諄々教へる所があつた。氏は磊落の人で一向邊幅を修めず、門人に對してはあぐらをかいて應接するといふ態度で、宮内省奉仕の歌人としては不似合の態度であつたが、あんな氣樂の態度でなければ、門人相手に時の移るを知らずに親しむことも出來ないと思つた。

四二、梅謙次郎氏

法科の初期には富井政章、梅謙次郎、本野一郎の三氏も講座を擔任された。今は富井氏存す

るのみで、他の二氏は鬼籍に入つた。三氏は兄弟鬻ならざる誼があつて、麻布鳥居坂の本野氏邸に三氏の會晤が頻々とあつた。本野氏の嚴父盛亨氏は維新の頃官吏として自分の郷里に來られた因縁があり、讀賣新聞に自分が主筆時代其社長であつた關係で、屢々本野氏邸を訪うて三氏と交はることを得た。一郎氏が早く外交官となり、日露戰爭前は駐露大使で後に外務大臣となつたが、内地には留守勝であつた。梅氏とは公私さまざまの要件で屢々訪問した。氏は法典の編纂で頗る多忙の人であつたが、いつも綽々餘裕があつて嘗て多忙を口にしなかつた。氏は稀れに見る明敏の頭腦の持主で、外國へ游學中論文を提出して學者を驚かしたと云ふが、其の論文は特に羅甸文に書かれた。實は氏に羅甸語の素養があつた譯でなく、僅か計りの研究で自在に操縦するに至つたなども氏が非常の頭腦の持主であることを證するに足る。或る時自分は法律上の一案件を齎して氏の意見を叩いたことがある。氏は自分の質問を聽き了つて、君の爲めにはどうなればよいのかと云はるゝから、自分は法律の解釋にいろゝある筈がないと云ふと、氏は笑つてそれはどうにもなる。先づ原告側の利を主とすればかくゝしかゝで、被告の利を主とすればかくゝしかゝだと、少しも思案するでもなく、口を衝て流るゝが如く説かるゝのを聞くと如何にも双方に立派な道理があつて自分は頗る迷つたが、實に稀れなる英才

であつた。晩年臺灣總督府に奉仕中長逝されたが惜しむべき人であつた。

四三、穗積陳重氏

穗積陳重氏も法科の初期に早稻田に來られた。自分としては一二の思出がある。氏は帝大で課外講義に吾々門外漢にも興味のある法律問題を説かれた。監獄學などは其一で、自分が筆禍で繫獄の身となり、獄中許されて監獄論を書いたのも氏の講義に負ふ所があるのだ。石渡敏一氏と會て刑餘の人を保護する法を研究して行詰つた時、外國の事例を備さに教へられたのも氏であつた。氏は普通の法家が往々閑却する日本の大切な習慣例へば隱居養子五人組などの問題を捉へて趣味的に研究された。晩年はしきりに式目の版本を蒐集されたが、これにも深い研究があつたであらう。氏は阪谷芳郎氏と共に澁澤子爵と親族關係があり、前年阪谷氏の先人朗蘆翁の記念會のあつた折、氏は翁の碑文を評する一場の演説をされた。翁の碑文は三島中洲に書かれたが、最後に惜しいかな卑官で終つたとあるのに、氏は非難を入れて云うて、人の輕重は其人の學問人格にあるもので、官の高卑ではない。大隈侯などは維新の元勳で屢々臺閣に立たけれども、貳百年の後侯の事蹟として傳はるものはそれではなく、御即位の大典を擧げた事

が傳はるであらうと云はれたが、如何にも氏の論評は卓見である。大隈侯の墓誌には最初大典の事が漏れてゐたのを自分が氣づいて、それを補足せしめた。乃ち古より布衣にして卽位の大典を擧げたものはない。關白秀吉と雖も能はなかつた。唯だこれあるは翁に始まると補足したのは氏の説と偶中し、侯一代の經歷中これより大なるものは無い。官等の高卑を云々する如きは官僚學者の爲すことで氏の論破は流石に識見が高い。

四四、中野武營氏

中野武營氏は基金の管理に與かり、校紛を理する衝に當り、早稻田の生んだ日清生命保險會社の社長となり、早大に相當寄與した人である。氏は早稻田大學出身松平頼壽伯の舊封高松侯の勘定奉行の家に生れ、先代から硬直の聞えがあり、伯爵の信頼する所であつた。氏は曾つて農商務省に仕官したが、氏の硬直の資は長官品川子と合はず、去つて事業界に投じて終始し氏に依つて經營された事業が少なくない。氏は躬行實賤の人で馬車鐵道を市内に經營した時などは自から乗車して監督し指揮もした。實業界の難件は氏の處に輻湊して氏の決裁を得たものが少なくなかつた。氏は實業界の民權家で權勢に阿附して事をなす亞流とは全く趣を異にした。

氏が衆議院に議席を有した頃は、自分も席末にゐたが、しばし氏の長廣舌を聞いた。いつも實業家代表の態度で、思ふ存分氣焰を吐き、政府の心膽を寒からしめた。今は議院に實業家代表で氣餒を吐くこれ程の人が無い。亦實業界にもこれ程の人格者は無い。左までの功績が無くとも授爵の榮に與かるものがあるのに、氏に對して其の沙汰の無かつたのは氏の硬骨之れを然らしめたもので、吾等をして人爵がより以上尊いことを感ぜしめる。氏は色黒く鐵で鍛へたやうな人であつたが、ナカ／＼の通人で諺曲に趣味があり、酒を嗜むこと甚しく、菰樽を積んで歐米の實業視察をやつた。

四五、竹内明太郎氏

早稻田の恩人として忘る可らざる人に竹内明太郎氏があつた。早稻田に理工大學を開くに當り、何人よりも大なる寄與をした人は竹内氏であつた。此學部の經營には勿論少からざる資金を要した。多くの資金を寄せられた篤志家もあつたが、金よりも大切であつたのは開校匆々諸科を受持つ教授であつた。これは金で仕入れ得べきものでない。然るに氏は適當の教授數人を寄附された。これにより理工科は些しも困難を見ずして開き得たのである、氏はこれより先自

から工業學校を興すの志があつて。先づ適當の學者を簡拔して海外に留學せしめ、その修業を待ち、學校を創設せんとしたのであるが、早稻田に理工科設置の舉あるを聞き、氏は案ずらく自分が一校を開くよりも、既に發展して基礎のある早稻田大學に寄與して其の計畫を助るに若くなしと、折角の志を廢して留學の人の歸朝の上は皆な早大の理工科に投ぜしめることを申出された。此の留學の爲め、氏の投ぜられた資は勿論少なくなかつた。そして期の未だ満たない留學の人には自ら出資を續けられた。丁度早稻田自身が爲さねばならぬことを、氏が代つてされたやうなもので、意外の仕合を得た。氏は土佐の人で、氏の嚴父は板垣伯の四天王と云はれた、竹内綱氏である。明太郎氏は政治よりも寧ろ實業本位の人で、鑛山の採掘を營まれ、それに資せんとして學校を目論まれたのであつた。氏はどことなく超越した所のある人で、折角の志を抛つて早稻田に貢献したなどは普通實業家とは大いに趣を異にしてゐる。

四六、岡倉覺三氏

岡倉覺三氏(天心)も早稻田の初期には文科の課外講義に度々來校された。いつも自家の工夫になつた天平式の服裝であつた。氏の講義は日本美術に關するもので、しきりにフェネロサ氏

の日本美術研究に説き及んだとは聽講者の云ふ所である。氏は帝大に於ける吾等より一年前の先輩でフェネロサ氏より最も多く美術の教を受けた人は、蓋し氏其人であらう。そして遂に日本美術の指導者、ならびに開拓者たるの名を博するに至つた。フェネロサ氏の日本美術研究は帝大に哲學・政治・經濟・社會等の諸科を教授する餘業であつたが、此の餘業が本業よりも却つて日本に多く貢獻した。フェ氏が日本美術を鑑賞し批判し、其年代等を推定する迄は美術の廣い原野も荒廢に委されてあつた。古風な藝術家で沿習的に美術を鑑賞するものはあつたが、學術的に研究し批判したのはフェ氏から始まつたと云ふも残念ながら誣言でない。フェ氏の貢獻は眞に偉なるものがある。フェ氏の薰陶を受けたものは必ずしも岡倉氏に限らないが、氏は尤も美術に天分があつたので、フェ氏の繼承者として何んとしても氏を推さざるを得ない。美術院を創設したのも多くの藝術家を糾合したのも亦氏であつて、久しく闇黒裡に在つた日本美術もこゝに初めて黎明を得たのである。氏は自から畫をかき像を刻む人では無かつたが、藝術の士を率ゐる能があつた。明治初期の藝術家は抵ね氏に負ふ所がある。氏は文人肌で磊落、人に交はり、朝私宅を訪ふと茶の代りに酒を出して勧める人であつた。酒樓などで出會ふことがあると、室が異なつてゐると必ず長篇狂詩を寄せて談笑に代へた。外國人の爲めに歐文で著し

た「茶」の一書の如きは氏ならではの出来ぬ名著である。

四七、田尻稻次郎氏

田尻稻次郎氏は會計検査院長として亦經濟學者として知られ、早稲田にも長く經濟の講座を擔當された。氏は大隈老侯と姻戚關係もあつたので、早稲田に教鞭を執らるゝに至つたのも自然の因縁がある。氏は奇矯の人で會計検査院に出かけるにも早稲田へ來るにも、決して乗物を藉らずテク／＼の徒歩主義であつた。氏の住宅も田尻流で質素のものであつたが、辰ぬぎの處には高價の外國製の絨タンを惜し氣もなく敷てゐるなどは、氏が物に對しての無頓着であつたことを語るものである。氏が酒豪であつたことも周知の事實である。氏は鹿兒島の人だが、鹿兒島らしい處がなく、談話を交へると義理明晰で相手をして痛快を感じしめた。自分が早稲田の圖書館を督してゐた頃、時々圖書檢索の爲め書庫へ入られたこともあるが、館藏の繪卷物を瞥見して、これは博物館に置くべきもので、圖書館には不似合のものだと云はれた。經濟學者の見解としては敢て怪しむに足らないが、斯る見解を以て政府所管の圖書館の藏品を檢査されたらどんなに多くの違法のものがあるか知れぬと一笑したことがある。

四八、高根義人氏

高根義人氏は早稲田法科の出身であるが、帝大に入つて更に更に研究し、外國にも遊學した。洋行前には長く母校の法科に教鞭を執つた。氏は身體が羸瘠で頭腦は明敏であつたが、何れかと云ふと神經過敏であつた。洋行より歸朝の後は辯護士となり、此界に相當の名聲もあつたが、惜しいことに縊死を遂げて世を去つた。其の原因は知らないが、極度の神經衰弱が其の原因であつたのであるまいか。氏は常に鎌倉に住した關係から愛兒が海濱に遊戯中波に浚はれた不幸があつて氏の神經を鋭立てた。そんなことから神經の弛緩を圖るため長唄などを習うて十年も修養したが、遂に不幸の横死で終つたのは氣の毒千萬である。

四九、奥田義人氏

早稲田の法科に多くの教授を迎へた中に奥田義人岡松參太郎の兩氏は殊に傑出したものであつた。兩氏は何れの學校にも講義に好評を博した法律家だ、奥田氏は早稲田で物權法の難課目を擔任された。氏は法學院大學の中堅であり、亦屢々政府の要局に立ち法典の制定に與かり曾

ては東京市長にも擧げられて令名があつた。氏は人格が高く事に當つて勵精倦なかつたので、往く所として事が擧つた。氏が長壽を保ち得無つたのは、市長として餘りに事務に勵精であつた故と惜まれてゐる。

五〇、岡松參太郎氏

岡松參太郎氏は漢學界知名の岡松蕪谷の嫡男で、顔腦が明晰で氣格が高く、帝大在學中早く儕輩を抜き級中の頭領であつた。負けぬ氣の人で書生中に喧嘩でもあるといつても大將格であつた。氏は早稻田で尤も難しとする學課を擔任されたが學生の悦服を博した。京都大學が創設されるゝと、氏は抜かれてそれに赴き早稻田は此人を失うた。自分も氏と相當交つたが、如何にも闊達で男らしい快人であつた。氏は教育にのみ局促する人でなく、晩年は植民地の事に與かり臺灣總督府に奉仕しては臺灣の習慣などを調査し、遂に滿鐵の理事ともなつたが、滿洲在留中歿したのは惜しむべきである。

五一、長田秋濤氏

長田忠一(秋濤)氏は佛蘭西仕込の磊落肌で、教場に入ると靴のまゝ兩足を机の上に載せて、シガーをバク／＼ふかすのが常であつた。豪放酒を好んでだらしがなく、後には交友も持て餘したけれども、事實愛すべき性質の持主で、伊藤公に隨從して歐羅巴諸國を遍歴した如きは公に愛せられた一端が知れる。一時露探の嫌疑を受けて裁判沙汰となつたこともあるが、確かに冤罪でその放縱の肌合と外國語に通じてゐることが偶々累を招いたものと自分は信じてゐる。併し氏の放縱は随分甚しかつたので、氏の逸事と云へばグラシのない事ばかりである。其結果終には料理屋は勿論米屋でも酒屋でも長田と云ふと御免を蒙むるやうになつた。斯るフシダラの此人に妙なことのあつたことを古るい早稻田學報に由つて知つた。氏は嘗つて早稻田に一塾を開くことを計畫した。それは零塾と名づけて、十個條の塾則を定めた。要は早稻田の學校と連絡を保つて學生を監督しつゝ寄宿せしむる方法であつた。此塾が果して事實成り立つたかどうか知らないが、あの人が學生監督の塾を思ひ立つたなどは滑稽の感なきを得ない。晩年は漸やく眞面目になり、南洋の視察などに出かけた。氏は多くの友人に愛想をつかされても自分だけは交りに變りは無つた。自分が校用で大阪に出張中であつたが、須磨邊に住してゐた氏は、自分を訪ねて來た。其際自分は珍らしく風邪で病牀にあつた。氏は自分の枕邊に坐して袱紗よ

り一束の草稿を取り出し、これは南洋紀行であるが、どうかこれを出版することに斡旋してほしいと云ふことであつたから自分は直ちに諾したが、去り際に云ふには俺れは危険な病に罹つてゐる。病毒が頭腦を犯せば運命はそれで決すると云うた。氏は全く尿毒症に罹つてゐたのであつた。自分は眞逆急に變があらうとも思はなかつたが、二三日経つか経たぬ内に氏の計を聞いて驚ろいた。氏は永別の爲め自分を訪ねて來たやうなもので、自分が却つて病床にゐたことを逆であるやうに感じた。折角氏に頼まれた出版は別な友人の手で發行されたが、氏はその草稿を自分に渡さず直す所があると云うて持ち歸つたので自分は約を食んだ形になつて、故人に濟まないやうな氣がする。

五二、横井時冬氏

横井時冬氏は早稻田の産んだ知名の人である。氏は高等商業學校に長く身を寄せて、早く文學博士の學位を贏ち得た。氏は伊勢の本居宣長の血統を引き、國文を善くし、かねて日本の工藝史に精しかつた。氏は母校にも教鞭を執つたが、商科が置かれて、學生の参考に標本として種々の商品を探集した時には、氏に負ふ所が少なくなかつた。商品館は當時圖書館内に置いた

ので、自分は圖書館長として氏に接することが殊に繁しかつた。氏は趣味の人で自分と同好であつた關係から、常に趣味談を交換した。自分が國書刊行會を經營し、各種の稀れなる典籍を編輯した時には、氏を煩はして工藝美術の圖書選定を請ひ、氏に負ふ所が少なくなかつた。

五三、鈴木宗言氏

早稻田の初期に法科を教へた人に鈴木宗言氏のあつたことを忘れてはならぬ。氏は廣島出身で、高級の判事であつた。氏が早稻田で教へられたのも可なり長い間であつて、自分は交りが深かつた。氏はなか／＼の酒豪であつたので、自分もしば／＼其の相手となつたが、豪放の快人で、何時も氏と酒間に談笑することを愉快とした。氏は晩年臺灣に赴き高等法術の首腦となつたが、不幸失明して退職後長逝された。

五四、南條文雄氏

南條文雄氏は本願寺の耆宿で一たびは文科で印度哲學を講ぜられたが、自分は終に面接の機會を得なかつた。併し先年出版された氏の傳を翻し氏の人となりを知ることが得た。自分が先

づ意外と感じたのは、幕末に美濃の岐阜で小原鐵心が藩の爲め僧兵を訓練し有事の時に備へた際に氏も其の僧兵の一人であつたと云ふことである。氏は早く外國に遊學してサンクリットを研鑽した外國通であつた。常にフロックコート姿で本山に出勤し、法主の巡錫には必ず隨從した。氏の専門の印度哲學にはおのづから月旦があるから吾等の呶々を要しないが、自分が氏の傳を読んで感じたことは、氏が漢詩の才藻に富んだことである。氏は好んで詩を作り、如何なる場合にも詩がある。そして其詩は浮屠氏の臭氣が絶對になく、皆な風流本位の詩で、どれを讀んでも感吟するに足る。氏は詩人として門戸を張り得る人であることを知つた。

五五、澁澤子爵

自分共早稻田大學の關係者は澁澤子爵に滿幅の感謝を捧げねばならぬ。翁が大隈侯との舊誼を思つて早稻田に來り投ぜられ、基金募集の事に與つて基金管理委員長となられ、後には維持員となつて重要な校務に與られたことが頗る長期に亙つてをる。翁が無かつたら幾回の基金募集もうまく行かなかつたであらう。早稻田大學の盛大今日に至つたのは翁の力に依ること決して少なくない。いつも募金の場合には翁先づ自身の出金額を定めて、他の實業家に對して自身

勧誘さるゝから、何人も拒むことが出来なかつた。翁の遣り方はなか／＼の奇抜で、有力者を招いた席ではいつも客の歸途を遮つて、そこに筆硯を置き翁自から客を抑へて、君はいくら出世と云うて其の目前に寄附額を書かざるゝのだから、否應なしである。コンナ奇抜のやり方で翁はひとり早稻田大學の爲めばかりでなく女子大學其他公共事業に寄附金を募られた其高は實に莫大のものであらう。ある人は言つた、澁澤翁が歿したら、寄附事業は大いに減退するであらうと、これは穿つた評かも知れない。翁自から常に曰く、俺れの生れたのは自家の産を作る爲めでなく、人の産を分配する爲めであると、世の中には一代でミリヲネアとなつた人は必ずしも少なくない。一代にして大事業を起した人も敢て少しとしない。唯だ有り餘る人の手より、足りない人に資を移して、多くの事業を助成した慈善家は翁を除いて何れにあるであらうか。

自分等は翁の飛鳥山の邸でよくお目にかゝつたが、兜町に事務所があつた頃も一二度お遇ひした。如何にも多忙な人で、此事務所は宛がら、大繁昌の醫者の玄關もよろしくで、いつも訪客で充満してゐた。番號順で呼び入れられて應接室へ入ると、テーブルも椅子もありながら、翁はいつも立つてゐるゝので、客も椅子に就かず、立談で用を濟すことが常で、その爲め用

はドシ／＼片づいて小氣味のよい程であつた。朝早く飛鳥山の邸へお尋をすると、執事は必ず各所へ電話をかけてゐるのが聞こえるが、多くの場合翁から働きかけて何時に行くかと云ふ電話が多かつた。翁は活動の外に他に何も趣味を持たぬと云ふ風に、終日關係の事業や會社を回するだけで日が暮れる。一時重要な關係ある會社は三十餘を數へた位だから、その繁劇さは想像に餘りある、尙ほ實業界の難件と云へば、必らず翁の處へ持込むことがお定りで翁の裁定を待つことが頻々とあつた。翁みづからも俺の家は勸解裁判所のやうなものだと云はれたことがある。あんな多忙な人が實業上の事なら兎も角も教育上の事などは深く氣に留めて居られまいと吾等は想像したこともあるが、いつぞや病床近く行つて驚いたのは、早稲田大學の豫算其他の書類がチャント枕邊に開いてあつて、確に目を通して居らるゝことが知れて敬服した。

翁は斯る繁劇の身でありながら、慶喜公の傳を編纂することを思ひ立ち、しば／＼公を招請して其の資料を親しく相談されたり、吾等が設けた下村觀山を中心とする會にも参加せられて時には自邸で會を開かれた。あの忙しい人にゆつくり話を聞く機會は觀山會の時を除いては無いので、いろ／＼翁の閱歴は此會で聞いた。翁が幕末海軍の主計に擧げられ、其司る所は會計であるのに、其頃の士風は頽廢して或る刺客を逮捕するに誰れも恐れて行くものがないので、

已むなく自分が出かけたと云はれ、幕吏の怯懦斯の如くでは、幕府の運命も迫つたと歎じたが果してその如くであつたなどの談も出た。其際自分は翁の青淵と號せらる譯はと聞いたたら、翁は自分の家業は藍商であつた。青淵は藍壺を意味すると云はれて如何にもと思つた。

翁は演説の達人でよく謙遜の言葉で人を服するの妙があつた。いつも論語を引合に出さるゝが、あんなに論語をよく咀嚼して巧みに使ふ人は自分は他に知らない。亞米利加に遊説に出かけられた時などは、到る處其土地に適當の説を吐かれたので、隨行者も感服したと聽いてゐる。書も能筆で前島男爵の生誕地に記念碑を建てる時、翁に尺四方の大字の揮毫を求めたことがあるが、翁は喜んで書かれた。それは既に石に刻して建つてある。

翁の晩年ある時語られた。人間長壽を保つもよいが、耄碌はしたくないものだ。物徂徠はあれほどの學者であるが、晩年は耄碌したと見えて、おれが死ぬ時は紫雲がたなびくと云うたところがあるが、正氣の沙汰とも思はれぬ、と云はれた。翁は流石に死期に近づいても精神は頗る健全であられた。唯だ記憶力を喪はれた一事は否むことが出来なかつた、自分が早稲田大學の重要な報告に翁を訪問した時は、翁は病體であつたから、敢て面會を期せず、執事に依つて傳達を求めんとし、わざと早朝に出かけてゆくと、執事がまだ出勤して居ないのでそれを待つため、

控所に居ると自分の訪問が翁に知れたと見えて、自身で面會すると云はるゝので、遇つて見ると、私の言ふことは悉く理解されて快活の笑聲をも漏されたが、執事にあとから聞くと午前はいつも気分がわるいので、成るべく訪客を断つてゐるが、折角訪ねた人を空しく歸すことが嫌ひであらるゝので、貴下はお仕合であつたと云はれた。これが翁に面接した最後であつたが學校の事が兎角氣にかゝつたと見えて幾度も電話がかゝつて來たので、翁の記憶がわるいことに感づいた。翁の死は各方面の大損失で眞に痛惜に堪へない。

五六、砂川雄峻氏

砂川雄峻氏をも學園の物故者の内へ入れねばならぬことになつたのは遺憾に堪へない。氏は早大の前身東京専門學校の創立に與つた人である。氏は吾等と同甲の同窓で何事に就ても同志であつたが、氏の専門は法學であつたので、學校の創立と共に法科を擔任し、其の主腦であつた。氏は一身の都合で早く學校を去り、大阪に赴いて辯護士の業務を營み、大阪に終始したが學校とは五十年間片時もかはらず密着の關係を保つて最後に至つた。氏は關西に於ける早稻田の重鎮であつて、幾千の校友を長く統率したことは勿論、事あつて早大から人を大阪に派する

場合は、いつも氏を煩はした。早稻田の幾回かの基金募集、大阪方面は主として自分が擔任したが、いつも〱氏の力を藉りた。尙ほ他の早稻田の事業で間接直接に氏を煩はしたものは少くない。氏は大阪に於ける辯護士の先輩で其の會長ともなつた。曾つては府會の議長ともなつた。氏は亦關西大學を經營して今日の大をなさしめた。氏は兵庫縣姫路の出身で、二回衆議院議員に當選した。氏は恬淡の性質で若い氣の人であつた。七十になつてから漸やく毛髪を染めることを廢したが、それまでは同甲の吾等とは年齢に相當隔りがあるかに見えた。十數年前坪内逍遙翁と大阪に遊んだ時、氏に驚かされたことがある。氏は數枚の寫眞を出して示された。それを見ると皆女形の俳優の寫眞であるので、吾等は誰れの寫眞とも見當がつかなくかつたが、氏がクス／＼笑ふので、漸やく氣がついて、諦視すると、氏が女を扮した寫眞であつたので、大笑であつたが、氏はある時素人芝居にひと役を承つた其の記念寫眞であると語つた。氏は晩年丹青と親み畫を描いた。東京で催す一ツ橋時代の大學の同窓會には態々出京して臨み舊雨を語るを樂みとした。昨年早稻田大學の五十年式典にははる／＼出かけて來たので、食卓を與にして五十年前の舊を語つたが、これが最後の面晤であつた。氏は肺炎に罹つたと聞き、切に其の回復を祈つたが、遂に不歸の人となつたのは返す／＼も遺憾である。

五七、三島中洲氏 同桂氏

明治廿三年頃の早稻田の名簿を點檢すると、三島中洲翁の名が見えてゐる。其後の名簿には三島桂氏の名がある。父子共に學校に教鞭を取られたことが明かだ。自分はその頃郷里の新聞社にゐたから、學校に於て翁に會したことは無かつたが、吾々が帝大に在つた時、翁の教を受けたから翁の面目はよく知つてゐる。多分早稻田の講堂に於ける翁は帝大に於けると略々同じであつたと想像する。翁は早稻田で何を講ぜられたか未だ調べて見ないが、帝大には左傳の輪講を課せられた。左傳はなか／＼解し難いもので、當時の吾々が輪講するには、荷が重過ぎた。それにも拘らず、誰れも彼れも下讀をするでもなく、其席で自分の處へ回つて來る所を匆卒に調べるやうな始末だから、甘く輪講の出來やう筈はない。行を追うて義を説くことは出來ないから一頁二頁を總括して大要を言ふと、先生苦笑して、大要は其の通りだが、君等は漢學の力で解するのでなく、洋學の力で解するのだ。しかし大要の解せるのは感心だなどと云はれた。なか／＼翁は皮肉の人で、いざ試験となると、尤も難解の謎のやうな所を特に選んで、それと解を與へよと云はるので、これには皆々閉口した。翁より教を受けた因縁から、嘗て元老院

へ岡山兼吉、山田一郎二氏と共に官吏教員の政談演説の禁を解くべきことを建議した際に、長文の建白書の校訂を請うたことがある。翁は晩年 大正天皇の東宮にあらせられた時、侍講となられた。翁に陪鶴仙史の號のあるのは其記念で 東宮登極の後には陪龍仙史の號がある。翁は貨殖の才があつて産を作るに抜け目がなかつた。氏の家塾二松學舎は學校と云ふよりは下宿屋だなど悪評を下すものもあつたが、貧生には便利なもので苦學生が漢學を修め得たのは此の學舎のお蔭であつた。そして先生の貨殖の助をなしたに相違ない。翁の歿後二松學舎の組織を改め、日本唯一の漢學の専門學校となり、其の學舎の名目を存する以上の働きをなしてゐるのは、翁の餘澤に據るのである。

五八、早速整爾氏

早稻田出身で最初に臺閣に列した人は早速整爾氏である。氏は晩年早稻田の維持員として磐根錯節を料理するに大いに勉めた。氏は氣魄があつて且つ才辯に富み、どんな相手でも屈服せしめなければ止まなかつた。氏は公私に苦勞をした人である。氏は廣島の早速家の養子となり、其家を繼いだ。早速家は博文館のごとき書物屋であつたが、それは後に潰れた。これを潰した

のに氏はどれほどの責任があるか知らんが、氏は藝備日々新聞を長く督した。早くから郷黨の信を得て商業會議所の會頭に擧られ、傍ら政治にも關係し、常に議員に擧られたけれども、長い間中立黨らしき地位に居ることが土地の事情として已むを得なかつた。氏は此等の苦境に立つて自らを教育した。氏は廣島市の逐鹿場には選舉毎に勝を制して終に衆議院の副議長に擧られた。加藤内閣の時に最初氏は大臣の選に漏れたが、後鐵道大臣に擧げられ、間もなく大藏大臣に轉任した。氏は財政通を以つて早く黨内に認められてゐたからで、君は茲に適任の地位を得たが、惜いかな藏相として議會に臨む能はずして歿した。氏が最初大臣の選に漏れた時、特に私を訪うて来て、種々の經緯を語り、母校に對して面目ないと分疏された。其際は椅子の分配の都合で、加藤首相より鐵道次官の就任を餘義なくされたが、決して諾したのではなく、謂はば強制を受けたのだと、其志と違ふことを言明されたことがある。其後學校の同人が氏の入閣を祝するの會を開いた時、氏は謝辭を陳べて云く、實は今頃入閣したと云うてお祝ひを頂くなどは誠に不恥かしい次第であると、氏が幾十年苦心の黨派生活から考へれば、氏が入閣を晚しとしたのも無理はなかつた。氏は信義に篤い人で、其今日あるは畢竟往年田原氏の家庭で薰陶を受けたお蔭だと云うて、其未亡人の爲めに謝恩の會を開いて歡待した。亦氏は廉潔の人で、大

臣となつても赤貧洗ふごとく、殊に夫人は早く逝き、唯だ家族に一人の女子を存するのみで、あの廣漠たる大臣の官舎で、孤筧の生活を見ては眞に同情に堪へなかつた。

五九、上遠野富之助氏

早稻田出身で實業界に成功した人は敢て少なくないが、故人では上遠野富之助、昆田文二郎の二氏を先づ擧げねはならぬ。上遠野氏は早大の維持員であつて、日清生命保險會社の重役であつた。氏は秋田の人で學校に入學の時既に妻帯の老成の人であつた。卒業の後報知新聞記者となり、一時は政界に周旋したこともあるが、名古屋の商業會議所の書記長に擧げられてから、氏の志は實業方面に轉じた。當時名古屋には奥田正香と云ふ先達があつて、宛がら東京に澁澤子爵のあつたごとく、多くの惑星はそれを繞つてゐた。奥田氏は機略もあり手腕もある人であつた。氏が商業會議所に入つた時は、確か奥田氏が會頭であつたと思ふ。氏は奥田氏に識られて其の帷幕の人となり、奥田氏と常に進退を與にし、奥田氏の死後は繼紹の人となるまでに至つた。此間の徑路は長く隨分苦勞をしたものだが、氏が晩年病褥に在つて自家の經歷を語つたものが印刷され、知友に頒たれてあるから、委細はそれに譲る。氏の經歷は甚だ多端だが

自ら一貫の脈絡があつてよく筋が通つてゐる。要するに氏の老成の資と忍耐とが相待つて信を博し、中京實業家の重鎮たる地位を獲たのである。自分と氏との交りも久しいことだが、君が報知記者時代に、肥塚龍氏と共に越後へ遊説に來たことがある。自分は其頃新潟新聞社にあつたが君の一行に加つて、富山縣に入り、遊説を與にしたことがある。親不知子不知の崖頭に於ける石投げの奇談は、其途中の出來事で、自分の既刊隨筆に書いてあるから、爰には重説しないが、羈旅で親んだのはこれが初めて、其後名古屋に氏を訪うた時は氏は車輛會社の社長で、既に實業界に踏み出してゐた。會社の工場は熱田に在つたが、氏の案内で一覽したことを思ひ出す。其後も名古屋で度々遇つたが、遇ふ毎に氏の地位は上つてゐた。丁度氏が名古屋實業界の有力者と携へて海外へ視察に行かんとする折、自分は校務で出張した際であつたが、氏は自分の旅舎へ訪ねて來て、一行に加はるべき歟否に就て自分に諮る所があつて、そこで始めて意を決したやうであつた。氏は要するに早稻田出身實業家の成功した一人である。氏の先輩奥田氏のやうな機略は無つたが、その重厚の素質が君をして長く地位を保たしめたやうに思ふ。

六〇、昆田文二郎氏

昆田文二郎氏は自分と郷國を同うし、早稻田の第二期に法科を出て、先輩岡山兼吉氏の法律事務所にて辯護事務を執り、岡山氏の最も信愛した門人であつた。岡山氏は古河鑛業會社の法律顧問であつた關係から、氏が歿すると君は法律事務を抛つて、古河の會社に投じた。蓋し師承の關係に據るのである。氏は晩年擧られて古河會社の總務となつたが、庶務課長たりし間が長く、人は氏を萬年課長と呼んだ。氏は自家の地位には全然無頓着で、一意會社に奉仕して心血を灑いだ。氏の位地は課長に過なかつた。が、頗る難件を處理した。鑛毒事件で百萬圓の除毒工事を政府が命じた時なども、寢食を忘れて努力したものは氏であつた。曾つて早稻田に銀行を經營して見てはとの内議があつた時、その衝に當る人を物色すると、昆田氏ならばと誰れも言ふのであつた。實は氏の課長たる地位が餘りに長くつゞき、氣の毒な感もあつて、氏を古河より引き來らんとして、私から君に内議すると、丁度其日が氏の理事に擧られた當日であつたので、銀行計畫も沙汰止みとなつた。氏は無抵抗主義でねばり強く、難件を理する人であつた。氏は平生密かに語つて云ふのに、人事は如何に面倒でも理し得られ無いことはない、宛がら人事の難件を理することを趣味としたかに思はれた。敢て人と議論をするでなく、寧ろ人をして云はしむるを力め、事の決するまでは幾回幾十回でも、自から足を運んで少しも倦まな

い。その辛抱強くねばり強いには、多くの對手は辞易して兜を脱ぐやうな譯で、斯くして氏はいつも勝を制した。丁度柔術が對手の力を利用して斃すと同じ手段を取つたが、實はなかなか出来ない業である。氏は晩年母校の維持員に列し、屢々難件を處したが、いつも無抵抗主義でやるから、随分解決まで暇取れることもあつて、昆田は何をして居るなど云うて焦るものもあつたが、氏は一日もそれを抛擲してゐるのでなく、人知れず毎日其事に當つてゐるので、終に圓滿の解決を告げた。右の如き譯で、複雑な人事の難件が起れば、氏を煩すことが常であつたのに、今は其人亡し、自分は氏とは最も交りが深かつたので、氏の易簧には特別哀傷の感がある。

六一、池田龍一氏

池田龍一氏は早稻田の法科を出て、久しく海外に留學して専ら親族法を修め、歸朝後は早稻田に教鞭を執つた。日清生命保險會社が創立せらるゝに追んで、氏は教鞭を抛ち進んで此の事業に參畫し、前島密男、中野武營氏など二代の社長の下に専務に任じ、後には自から社長となり、此の會社と終始した。氏が二十年心血を瀉いで會社を今日あらしめた功は多大である。

氏は身體が羸弱であつたので、放膽的の氣魄は無つたが、保險會社のやうなデミな事業には寧ろ適任で、氏の手堅いやり方とその天稟の人格は業界の信用を博した。氏の母校に貢獻した有形無形の事は勿論少なくない。此會社は全國の早稻田の關係を背景として起つたのであるから早稻田も亦其の全國に散在する多くの支店によつて校友との聯絡を始め便宜を得たことが多大であつて、氏の斡旋の多きに因るは言ふを待たぬ。氏の歿する少し前には氏は熱海に避寒してゐた。自分も毎年々首に熱海に行くのが例で、氏をホテルに訪うて見ると、氏は病褥に在つて多少の熱があることに氣が付いた。氏は後嗣を定めて結婚の期が既に迫つてゐたので、自分は内心氏の爲め東京へ戻ることを危険に思つたが、既に定まつた期を動かすことの困難であることを見て止めもしなかつた。果して結婚の式が済むと簧を易へた。氏は戯曲に興味があり、晩年自から一二の脚本を書いた。氏は單なる實務家のみで無かつた。

六一、岸小三郎氏

早稻田が生んだ法科の教授に岸小三郎氏があつた。氏は明治十七年の得業で、學校の開校は十五年であるから、氏は初度の得業である。(第一回は二ヶ年の修業で卒業となつたのである)

同年の得業には氏の外に小河滋次郎氏がある。又板屋確太郎氏がある。小河氏は監獄學者として終始し、官吏ともなつたが板屋確太郎氏は卒業後母校の教鞭を取つた。岸氏は卒業後代言人となり、塙國に留學し獨法を修めてドクトルの學位を受け、歸朝後代言人として門戸を張る旁母校の法科を教へた。氏は幸運の人であつた。多分氏の先輩で當時第一の代言人と目された岡山兼吉氏の推輓が與つて力あつたのであらう。氏が永富謙八と云ふ富豪の女婿となつたのも岡山氏の紹介であつたらうと思ふ。永富謙八氏は郵船會社の重役であつた雄吉氏の父で、岡山氏とは郷國を同うし、互ひに信じ合ふ間柄であつた。岸氏の洋行や法律事務所の經營なども永富氏に負ふ所があつたに相違ない。氏の洋式の書齋などは如何にも立派に整うたもので、自分をして羨やませたものだ。自分は法律には門外漢であるから此方面の氏に就て語ることは出来な
いが、當時商法の署名問題が起つた時、梅博士などは署名に限ると解したのに對し、反對説を唱へて闘つたことを思ひ出す。氏は代言人（今の辯護士）としても將來を囑望されたが、不幸精神病に罹つて歿した。洋行中花柳病に罹つたのが其の原因であるまいかと親友連は惜んだ。

六三、田中唯一郎氏

田中唯一郎氏は専門學校出身で、會つて寄宿舎の舎監となつたこともある。晩年は理事となり維持員となつたが、幹事としての勤務は最も長かつた。既往にいろ／＼の人が幹事をやつたが、皆な學校の規模の小さい時代で、幹事は専ら内の事務を見ることが主であつた。然るに田中氏の幹事時代は學校の擴張を度々企てた進展時代で、外的事務が甚だ多かつた。學校の規模も舊時に比すると幾倍するものがあつたから、内外の事務は非常に繁劇であつた。が、その多端の事務を處理したのは此人である。氏は事に當つて縦横の機略を弄したり、人の氣づかぬ案を立てたりする人では無かつたが、事務を取るに敏捷で、よく動く人であつた。學校で何等かの方略が定まると、即刻其の遂行に取りかかり、決して疎慢に附することはなかつた。乃ち動が此人の生命でもあり、長所であつた。實は幹事の性格として何よりも大切なのは此長所である。且つ氏は常識に富んで人受けも良かつた。人の性癖として他人の立てた案の遂行を快しとしなかつたり、自身の好まない案を行ふに澁つたりすることもあるが、それは幹事として甚だ好ましからぬ事で、田中氏は一旦學校で定めたことはどんな案でも頓着なく忠實に且つ迅速に遂行した。なまなか名案奇策を立るよりも、遂行力に富んだ方が遙かに優つてゐる。いつも高田總長は一擴張を終つて、他の擴張を企てんとする時には、必ず自分と氏に向つて、先づ相談

をかけ、今度は斯うするが君等は例のごとく援けるかどうかと問うたものである。擴張には言ふまでもなく資金の募集が伴ふ。これがなか／＼面倒な仕事である。いつも此の厄介な仕事を氏と自分とが擔任した。募集の爲め人を訪ふ時も、多くの場合氏と連れ立ち、自分は主として勧誘の役をつとめ、氏は收拾の役を司つた。勧誘の口説は難くはないが、收拾が難儀であることは言ふを待たない。大隈侯が旅行さるゝ時には學校側で隨伴するものは、自分で無ければ田中氏であつた。侯の旅行には勿論令扶も隨從したが、それ等は蔭の人で、表向の事は到る處吾隨行者に輻湊するのだから、なか／＼繁劇であつた。氏は斯る場合に寢食を忘れてよく働いたが、學校にゐても毎日朝から晩まで走りつゞけた。氏には尙ほ餘力があつて學校に關係ある日清生命、日清印刷兩社の創立に與かり、その重役となつて大いに斡旋した。氏は兩社の重役として他人の成し得ない働きをしたのは、幾千の校友をよく知つてゐるので、外的の働きは氏の力に依らねばならなかつた。氏が兩社の重役として重寶がられたのは此故である。

六四、増子喜一郎氏

次には増子喜一郎氏を擧げねばならぬ。氏も學校出身で早稻田中學の創立に與かり、身を終

るまでその幹事であつた。氏は基督教信者で確乎たる信念があり、熱心校務に當り、學生を監督するに寛嚴宜しき得、嚴父のごとく畏れられ亦慈母の如く親まれた。氏は自分と郷國を同うし、越後岩船郡村上近在の人であるが、此地の常に誇りとするものは山邊里サベの織物と鮭とであつて、名物を數へるといつも此二ツを擧げるが、或る時氏と連れ立つて村上の有志に會した時自分は席上演説を試み、諸君は此地に大なる名物のあることを忘れてゐる。それは織物よりも亦鮭よりも誇りとすべきものだ。それは何かと云へば、こゝに同席してゐる増子氏である。氏は早稻田の生んだ唯一の教育家で、常に早稻田の誇りとしてゐる人だのに、何故郷里の父老は此人を閑却するのかと、氏の性格其他を吹聴したことを今想ひ起す。氏は早稻田大學の經營にも功勞があつたので、移して早大の幹事たらしめんとしたことがあつたが、氏は應じなかつた。亦氏の功勞に酬いる趣意で洋行を勧めたこともあつたが、それにも應じなかつた。氏の心は夙夜中學に在つて、一刻でもそれを離るゝことを欲しなかつたのである。人は中學の増子だか、増子の中學だかとも云うたのも無理も無かつた。中學が創立匆々模範中學の名を博したのも一には氏の熱誠に依るのである。氏は學實中正の意見を持ち難件を處するに倦まず屈せず常に人の心服を博した。

六五、中嶋半次郎氏

早稲田の生んだ唯一の教育學者は中嶋半次郎氏であつた。氏の志は初めから此の學科にあつたらしく、長い間の研鑽で造詣も深かつた。師範科の重要課目は此の専攻に屬する教育學であるので、氏の研鑽は之れに資する所が多かつた。氏が身を終ふるまで高等學院を督したのも亦その處を得功勞も多かつた。氏は熊本出身であつたが、熊本特有の性格はなく、極めて温和冷靜の人で、早稲田流の風格はなく、何れかと云ふと官僚的の人物であつた。

六六、菊池三九郎氏

菊池三九郎（晚香）氏も早稲田出身で、長く漢文を教へた。氏は菊池溪琴三溪などの高名な詩人と文章家を近親に有ち、英學を修めたが氏の趣味も長所も家學に在つて、どこを押せば英學があるか分らないやうな人であつた。氏は専ら學生の作文を直すことを擔當し、幾んど半生を費やした。これは頗る煩はしいことで多くの學者が厭うて避ける所であるが、君は敢て厭はず、深切、丁寧、滿紙雌黃で填めねば已まなかつた。氏が漢文家として學校に貢獻したのは最

も此點にある。尙ほ氏は學校の種々の儀式に必要とする多くの文章を筆作した。晩年氏は神經衰弱に罹つてゐた際に大震災に遇ひ、氏の土藏の外部が崩壊したので、遽かに厭世氣分となり一日自分を訪ねて來て云はるゝには、此の大震災の揚句掠奪が行はれることは必然である。然るに自分の土藏の四壁は崩壊して、今直ちに修理も出来ない。庫中のものは外部から手を延ばして取り出し得るやうになつてゐるから、掠奪の手は先づ拙家に及ぶに相違ない。此際寧ろあらゆるものを母校に獻じたいと云はるゝで、自分も其の病症の輕からざるを思ひ、百方慰めたことがあつたが、氏は其後幾許もなくして歿した。氏には多くの詩文の著書がある。皆な自費で出版して同人に頒つことを娛樂とした。

六七、山澤俊夫氏

山澤俊夫氏は早稲田の第一期卒業で、曾つては教鞭を執つたこともあり、寄宿舎長となり、校友會の創立に與かり、初めの幹事となつたり、種々の學校の閱歴がある。氏は溫雅の質で書をよくし、和歌や雅文にも造詣があつた。君の經營した女子講義録は、女學講義の先驅で、一時大いに振つた。此頃早稲田は困難時代で、自分は幹事として往々學校の會計に困しむことが

ある都度、君の女學會から一時の融通を頼んで急を凌いだことがある。日清印刷會社の起るに及んで、氏は重役となり、自分が其の社長となるに迫んで、氏は監査役として身を終はるまで其職に在つた。早稻田の出版部にも氏を煩はしたことがあり、大隈侯後援會の起つた時には、會長たりし自分は氏に囑する會計事務を以てした。氏は温厚篤實で敵のない人であつた。

六八、杉山重義氏

杉山重義氏は同志社出身で、早稻田に投じて教鞭を執られた間も頗る長い。氏は教授中の長老株で、種々の課目を擔當されたが、其長所は英語にあつた。氏の晩年は高等學院長として激務に當り、學生の瞻仰を博した。氏は壯年時代記者生活をされたことがある。彼の加波山事件の起つた時には、氏は福島新聞の記者であつて、事件に連坐して入獄されたが、無罪の判決を受けて青天白日の身となつた。氏は政談に興味があり、會つてジョルナリストたりし性格はいつまでも存じ、往々選舉の應援演説をやられたが、能辯で常に聽衆に感動を興へた。自分が氏と間斷なく交りをつけたのは、文明協會を通じてであつた。氏は浮田博士と共に文明協會を創立されたが、自分が其の經營に與かるやうになつてからは、氏は浮田博士と共に、主として反

譯すべき原書の採擇に任じ、亦譯稿を校閲するの衝に當られ、會の氏に負ふ所は少く無かつた。氏は基督教を奉る人であつたが、濶達の人で酒を飲むことも人後に落なかつた。

六九、中村忠雄氏

早稻田の初期には法科に中村忠雄氏が教鞭を執つた。此人は土佐出身で、元老院議員たりし中村弘毅氏の子息である。早く米國に遊んでミンガン大學に學んだ時には、松平康國氏並に早稻田出身の板屋確太郎氏も同窓であつた關係から、板屋氏の紹介で早稻田へ投ずることになり早稻田の法科の爲めに盡す所があつた。君は幸か不幸か、才のある上に金もあつたのが、禍をなして學校に終始することが出來ず、後に徳島縣で辯護士を開業したが、晩年は振はなかつた様子である。

七〇、前田秀村併實氏

校醫も二人まで故人となつた。早稻田の衛生的繩張は、最初から神樂坂にゐた前田秀村と云ふ醫家の手にあつた。吾々同人が病めば必らず此人を迎へるので、後には校醫に擧げ、學校附

近に出張所まで設けて、學生をも治療した。快潤で深切で患者には氣受がよかつた。秀村氏が歿すると、二代目の前田實氏が校醫を繼いだ。此人は前田家へ養子となつたのだが、誰れも佳婿を得たと評判した。此人は専門の内科の技に秀でゝゐる上に、人格も高かつた。心頭に理財の念がなく、唯だ熱心に治療を事とした。一たび外國に出で、業を修め、醫學博士の學位を得た。酒を嗜む外に音楽や劇に興味があつて面白い人であつた。自分の家に病人があつたとき幾んど毎日來られたが、此處は自分の休憩所だと云うて、腰を据ゑて一時間以上も緩睡することが常で、時には酒を饗することもあつたが、案外早く歿したのは早稲田衛生界の損失である。

七一、吉田巳之助氏

吉田巳之助氏は千葉縣出身で、早稲田に學んで政治科の講師となり、早稲田學報の編輯を擔任したことがある。世民といふ名に見えるのは此人の筆である。高田博士の政治汎論の反譯にも此人が助筆した。矮少の身柄であつたが、酒を嗜んで磊落の行が多かつた。いつの間にか自から細君を定めて、始めて住み込んだ家は矢來邊の醫者が住んだ宅で、堂々たる構へで、當時の家賃は十圓位と踏まるべきものであつた。學校で十五圓か二十圓の收入すらない此人の家と

しては不相應であつたので、友人は不審に思つたが、實は新妻に對する面目上斯る家に住むことが已むを得なかつたので、此事が追々同人間に分つて笑を博したが、御本人は一向平氣で、間もなく二三等も下る家に引越して濟ましこんでゐたことなどを思ひ出す。氏は愉快的性質で文章も達者であつたが、惜いかな早く歿した。

七二、佐藤善長、吉川義次兩氏

早稲田の開校匆々入つて事務を擔任したものは庶務に佐藤善長氏あり、會計に吉川義次氏があつた。佐藤は最初靜と名乗り後に善長と改めた。此人は水兵上りで、最初進文學舎に仕はれた時は將命と云ふ役目であつた。將命と云へば、偉らさうに聞こえるが、實は小使の事で、學舎の會長が漢學者であつたから、コンナ六かしい職名を選んだのである。氏は小使でありながら何んでもかんでも事務をやつてのけたので、いつしか幹事と選ぶ所が無いやうになつたとは、當時進文學舎の教鞭を執つた高田博士の話である。高田博士は進文學舎で此人を知つてゐるので、開校匆々此人を引き入れた。佐藤氏は開校當時の重なる教師と進文學舎で相識の間柄であるので、上下の隔てがなく、どの教師に對しても先生と云ふやうな敬語を用ひなかつた。なか

なかの酒豪で、いつも酒氣を帯びてゐたが、しかし事務には練達で、複雑な日課表を作るには此人で無ければならなかつた。人を御するの能もあつて、部下に不平がなかつた。十数年の長い間幹事は時々更迭したが、始終庶務課長であつた。會計の吉川義次氏も事務所の一名物で、老人であつたが、意氣旺んで、剛直清廉で昔し氣質の頑固な所があり、校規に背くことは一歩も藉さないで、時々波瀾を捲いたこともあるが、會計課長としては極めて適任であつた。これも在職頗る長かつたが、學校の困難時代に處した會計方は、給料が拂はれぬからとて教師や職員に言ひ譯をせねばならず、其の勞は一通りでなかつた。其頃在學生で學資の無いものに事務の手傳へをさせて仕立てたことも度々ある。後に辯護士となつた羽田智證氏などは、辯護士試験に及第するまで會計課にあつて數年事務を取つたし、今の圖書館の主事小林堅三氏も會計事務を執る傍ら卒業したものである。

七三、重野安繹氏

重野安繹博士も文科の初期に數度課外の講義をされた。氏の講演はいつも氏一流の創見に係る史論であつた。聽講の人から聞くに、足利尊氏論などがある時の講題で、沿習的に尊氏を

しざまに云ふ謬見を排した斬新の説であつたと云ふ。自分は國書刊行會を經營した時に、大隈侯を其の總裁に重野博士を其會長に仰いだ關係上、數々鎌倉の閑居に博士を訪うたことがあつて、行く度毎に、種々の史談を聞くことを得た。博士は可なり高壽であられたが、矍鑠として記憶は壯者を凌ぎ、博搜の考證は口を衝て出で、辯論が爽朗で、いつも興味を感じた。博士は學者と謂ふよりは寧ろ政治家肌の人であつたと思ふ。

七四、森 槐南氏

森槐南氏は文科の初期に三體詩や杜詩や桃花扇などを講義されたが、あの人は詩の講説に非常の能辯であつた。畢竟詩學の蘊蓄が深いからであらう。自分は早稻田で君の講義を聞かないが、兩國の中村樓であつたか、星社の大會があつた時、君の一場の詩論を聞いたことがある。複雑論難の問題を或は分析し或は總括して巧妙に且つ平易に説かれたのには、流石は大家と歎服した。早稻田の學徒も君の能辯に魅せられ、講説中は陶醉するが如く、ノートも取り得ず、講義終つて茫然たるものがあつたと云うてゐる。

七五、手島精一氏

早稲田で理工科を開いた當初、藏前の工業學校出身者を教授として迎へた關係から、其の校長たりし手島精一氏を顧問に仰ぎ、創業の經營に指導を受けた。氏の經歷は初代の帝國圖書館館長であり、内外の博覽會には常に關係があり、晩年には工業學校の校長であつたから、君は尤も實地に適した教育家であつた。早稲田の理工科は工業學校以上の大學であるけれども、理論に偏して實際に遠かるの弊に顧み、練達なる君の指導を受けたのだが、益する所少くなかつた。氏は官僚臭氣のない極めて老成の人で、深切で潤達で親しみ易い人物であつた。

七六、畠山健氏

畠山健氏は國學院の教頭たりし人だが、早稲田の文科で萬葉集を教へた。氏は溫藉の人で、講義に慣れてゐたが、言葉に抑揚波瀾がなく、宛がら春の海のぬたり〜と云ふ鹽梅で、その人の性格そつくりであつた。隣りの講堂では江戸ッ兒のチャキ〜關根正直氏が、源氏物語を齒切れよく講じたのと好對であつた。其頃の教授はなか〜元氣がよく、往々人の批評にわたり、或は軌道を逸して罵倒を浴せることもあつたが、溫藉の人畠山氏も其の飛沫を受けたこともあるが、關根氏も漸く氣がついて前言は取消すなど云うたこともある。氏は筆者の郷國新發田の諏訪神社の宮司であつた關係もあるので特に交りが深かつた。大隈侯を總裁として國書刊行會を起し、自分がその經營の局に當つた際などは、氏は常に自分を助けた。或る難件が起つて其の處理に困つた時などは、氏に困つて解決することを得た。氏は老成敦厚の人であつた。

七七、藤井健次郎氏

藤井健次郎氏は師範科で久しく倫理學の講座を受持れた。早大出身の教員の多くは藤井氏の薰陶を受けてゐる。氏は早大に於て大切の教授であつたが、澤柳政太郎氏が京都大學の總長であつた時切に懇請せらるゝので、割愛して譲つたのは十數年前であつて、氏は海外に遊學もし學位をも得た。氏は京都に轉住したが吾等は京都に遊ぶ毎に、氏に接した。氏は早大を忘れず曾て教へた師範科得業生を始終世話された。氏は頗る學究的人で、眞面目一點張であつたから、自分などは其の逸事を知らない。姉崎博士の談に藤井君の先輩であつた高山樗牛は曾て君を評して藤井は馬鹿だ。併し取り處はその馬鹿な處にあると云うたと聞いたが、所謂大賢は

愚なるが如くで、藤井氏もそれに近いものであらう。高山氏は才子肌で原書をザツト讀む流儀であるのに、藤井氏は徹底的に精讀してゐるので、高山氏は此點を馬鹿の取り處としたのだ。氏は普通の人が二二の四とかけ算で云ふ所を、いつも回りにどく二と二とを合せて四と云ふ風であつた。此の瑣事でもあの人の風格の一端がほのめくやうな氣がする。何があの人趣味であつたか、姉崎博士の談では晝道に趣味があつたらしく、揮毫は苟くもしなかつたと云ふ事である。

七八、坂本三郎氏

坂本三郎氏と吾等の交りは氏が吾郷里の始審裁判所の判事たりし時から始まり、其の棺を蓋ふまで交りが續いた。氏は嘗つて行政裁判所の判事となつたこともある。其後母校たる早大の法科に教鞭を執り、獨逸に遊んで法學を修め、歸來亦母校の教鞭を執り、大隈内閣の時に出て秋田縣知事となり、轉じて山梨縣知事となり、官を罷めて後は早大の維持員となつて經營にも與かつたが、校紛の起つた時には、氏は一時學長となつて、校紛の解決に全力を注いだ。其際の苦心は容易なことで無かつた。氏の此際の努力は没す可らざるものがある。其後理事とな

り監事となり、専門學部長となり、晩年は大隈信常侯を輔けて報知新聞社の經營に與かつた。今憶ひ起すのは氏が秋田縣知事に内定した時である。氏は一夕自分を訪ひ來り、縣知事たるの心得を質された。曾つて官仕の經歷を有たない自分が知事たる心得を語り得る筈がないが、自分は長い交りで氏の性格を熟知してゐるので、自分は無遠慮に云うた。君の病は何事も法律づくめの理窟で處理せんとするにある。恐らく縣知事として戒むべきは此點にあるであらう。地方官の態度は概ね不得要領で君などから見たらば、馬鹿げて居るでもあらうが、實は地方官として最も大切な心得は、不得要領の四字にあるであらうと云うたが、氏は之れを聞いて地方官はそんなむづかしいものか、それならば自分は勤まらないと云うた。丁度其際大隈首相邸から電話がかゝつて來て、即刻坂本氏に來邸すべしとあつたので。其夜秋田縣知事たることが決したのだが、後日早大の校紛を收拾する衝に當つた始終を自分は傍らから見て、氏も舊阿蒙でなく、二縣の地方官を勤めた丈に、餘程垢抜がしたことを感じ、或る時氏に向つて、地方官は君の性格を陶冶するに大いに力があつたと稱讚したことがある。併し天性と法律から生じた性格はなか／＼變ずるものでなく、晩年には往々同僚と争ふことがあつて、吾等は常に調停の役を勤めさせられた。自分一個の考では氏の致命の病患が腦を冒して、それが言動に現はれたので

あるまいか。

七九、東儀季治氏

東儀季治氏は鐵笛の名を以つて知られた、劇壇の秀才である。氏は雅樂の家に生れたから、おのづから父祖の血を受けたに相違ないが、坪内博士の文藝協會に投じて、幾回かの演藝に才名を博した。氏には自然のユーモアがあつて、何を演じても獨得の妙があつた。そして往々故人團十郎を思はせる風趣もあつた。本人は全く團十郎とは無交渉で一たびも其人の技を見たことがないのであるのに、どことなく團洲張であるのは、天才の自然の迸りであらう。曾て氏は早大の幹事を司つたことがある。事務は其の長所で無つたが、交際家としては最も適任で、教員室には氏は特に持てた。自然に愛嬌があつて、人の眞似をしたり洒落を云つたりして、人をそらさなかつたからである。「豊太閤と淀君」と云ふ劇に、氏は豊太閤をうまくやつてのけたがその豪放磊落で物に頓着しない豪傑的態度は全く大隈侯をそっくり型にしたものであつた。其の劇の畢つた直後であつた。何かの事で侯に招かれて饗應を受けた席に東儀氏もゐた。太閤好きの侯は東儀を顧み、先日の芝居を見損つたのは残念だと、愛嬌をこぼされた時、自分は可笑

しくて笑を忍んであの豊公は老侯そっくりであつたと云ふと、皆々一齊に笑ひ崩れたので公を驚したが、侯は己れが型となつてゐることを知られなかつたが、眞逆有體に云ふことも出来なかつた。東儀氏は終始老侯に親炙してゐたから、侯に擬することは殊にうまかつた。氏は雅樂の家に生れた關係から、雅樂に關する著述に没頭したが、惜しいことに早く歿した。

八〇、杉谷虎藏氏

杉谷虎藏（代水）氏は早稻田の文科の生んだ秀才の一人であつた。早稻田中學に寄宿舎のあつた頃、氏は舎監となつて舎生を督したこともある。温厚の人で文筆に長じた。富山房に投じ編輯に與かることになつてから、文筆と終始し、その勵精と文藻は房主の信を博した。坪内博士が富山房の爲め中等教科書を編纂した時は、氏は其の助筆をして完成に至らしめた。氏は不幸不治の病に罹つたが、病中も筆を廢すること無つた。氏を最もよく知る坪内博士がその棺前に讀んだ弔文の内に性格がよく悉されてゐる。

君や天資多才にして多能に、適く處として可ならざるはなかりき、君や信義に厚うして人情に深く、抱負は大いなりしかども、能く恭謙讓に沈毅にして慎密に、勉強にして忠誠な

りき。人の惡を言ふには寡黙なりしが、自ら信ずる所を披瀝するに當りては、能く禮を忘れずして雄辯なりき。人おのゝ自我を立るに急なる今の時に於て、君は屢々己を空うして知己の爲に職に力め、未だ曾て功に驕らず、名を求むることをなさざりき。君の如きの才も洵に世に多からざれども、君の如きの人格は更らに最も得易からずとす。

八一、巽 來治郎氏

早稻田の自由學園には種々雑多の人が來り投じた。巽來治郎氏の如きは其の異彩を放つた一人である。氏の體格は志賀重昂氏と同じく肥大で且つ強健であつた。漢學の素養も深く、殊に書を能くした。その當時小石川の高臺にアウンバラと呼ぶ怪僧があつた。氏は其の依囑に應じ其派の經文を撰んだこともある。大字を書くのが得意で、嘗て大隈侯に代つて、直徑二間の大字を書いたが、壯觀であつた。氏は膂力人に勝れて鐵棒を折り曲げたり、拳骨で鐵板を撃つてへこませなどした。氏の書道の主張の一に、筆は毛筆に限るものでないとあつて、火箸や筭など種々のものを筆の代用として、終には砲彈の辛うじて動かし得るやうなものを操縦して其尖頭で揮毫するに至つた。亦氏は書は坐してのみ書くべきものでないと主張して、嘗つて仰臥し

て書いたものを示されたことがあるが、それが立派なものであつた。氏は書道を以て立ち得る能力を有してゐた。氏が早稻田に來り投じた因縁に就き高田氏から聞いたことがある。氏は前項に掲げた北畠治房氏の勧めで學園の人となつたのであるが、巽氏の父の名は忘れたが此の人は才學もあり、且つ擊劍に長じた幕末の志士で、其の人の詩文の版本は曾て見たこともあるが、今は書名を思ひ出せない。曾て北畠氏は此人と葛藤を生じて争うたが北畠氏の敗に歸した。北畠氏は敗を取りながらその敵手に服してゐたと見えて、其子である來次郎氏を學園に推薦したのだと云ふ。巽氏は學校に教鞭を執る傍ら、出版部の一室を占領して外交史を著した。氏が學校以外に交はる人物は所謂壯士肌のものが多く、毎々氏を訪ねてくるものは粗暴の徒であつたので、出版部に忌れたこともある。氏の著はして外交史の引用書に陸軍省外務省の祕密文書も交つてゐた廉で、出版部長たりし高田氏と巽氏は訴へられたが結局高田氏は無罪で巽氏は若干の罰金刑を受けたことがある。巽氏は或る高官に識られ、機密の任務を帯び清國に長くゐたこともある。

八二、埴原正直氏

早大出身で大使級の外交官となつたものは埴原正直氏である。氏の志は初めから外交官にあつて、先輩青木周藏子に識られて追々身を起し、終に亞米利加大使となつた。氏は秀麗の風貌を具し、溫藉珠の如き人であつたが、其實、氣膽斗の如くで、外交には適任の人であつた。氏が米國に大使として赴任する頃は、恰かも米國の禁酒當時であつた。吾等君の行を送るに、吾等は君が亞米利加大使の重任を拜したるを喜ぶも、生憎君の嗜好物が禁ぜられてゐるにはお氣の毒であると云うて餞したが、氏は風貌身體不似合の豪酒家であつた。併し在任中よく任務を盡し、米人にも喜ばれたが、氏は國禁の酒のないには憤慨もしなかつたが、日本人排斥の議に會して、祖國の爲め公憤を發することを餘義なくされた。氏は抗議の外交辭令に硬語を閃かしたことが因となつて職を辭するに至つた。併し此の失脚は寧ろ氏の硬骨を露はしたもので、疚ましい處が寸毫もあるのではなかつた。一國の使臣が國辱に會して公憤を漏すは當然の事として稱讃せざるを得ないのである。氏は辭職後閑居して何等の職にも就かなかつた。某々外國に大使たるべしとの内命があつても、斷じて受けなかつたのは、偏へに米國に對して地歩を占めたのであつた。勿論それは自家一身の爲めでなく國家の爲めに地歩を占めたのであつたことは吾等が氏より親しく聽いた所である。氏は退任後母校の維持員として努力した。不幸にして春

秋尙甚だ富むのに半身不隨の病に罹り、病褥に在ること數年の久しきに涉つたのは氣の毒千萬で眞に同情に堪へなかつたが、氏の酒を嗜むの甚しき、病褥にあつて絶対に外出もしないのに吾等五七の毎月會合する陸會と云ふには必ず出席して、醫師より許された一合足らずの酒を飲んで無上の快とした。身體不隨の上に言語も漸やく不明となつても尙ほ此會に出席したので、吾等會員は席上萬一の事があつてはと氣遣つた位であつたが、終に不起となつたのは惜むべきである。

八三、渡邊 亨氏

渡邊亨氏は早稻田大學の前身東京專門學校の第二期の法科の得業で、早く實業に志し、株式取引所、水力電氣等の會社に入り、實業界に終始した。氏は才幹を以つて儕輩に知られたが、其多才が却つて氏の出世を害したとも云へる。氏は儕輩の期待した如く成功を博さなかつた。氏は久しく母校の維持員として努力もした。なか／＼の苦勞人で宴會の席上などには缺き難い人であり、埴原氏と共に吾等の陸會員で、此人の爲めに席は常に賑はつた。氏には風流の趣味があり、俳句を詠じて其堂に入つた。俳名は竹音と云ひ、歿後記念にと遺族から寄せられた短

冊の句は「秋の灯や席畫を圍む五六人」とある。氏は亦た高山の登攀を好み、暇あれば山水の跋涉を試み、これを無上の樂とした。そして七十に垂んとする晩年に及んでもこれを廢せず、同趣味の中島九萬吉男とよく打連れて危険の山嶽を登攀したが、最後の登山で終に病を得た。それは山に得た病でなく、齒牙の治療が行届かなかつたのが原因で、例の如く登山を試みると常に異つてひどく疲勞を覺えたので、下山して病床に就き、間もなく歿したのには、吾等は其の餘りにアツケないのに驚いた。氏は埴原氏とは特別懇親で、常に同氏の病體を氣にかけてゐたが、氏に先んじて歿したるは實に意外の事であつた。

八四、宇都宮 鼎氏

宇都宮鼎氏は陸軍の大主計たりし人で、少將格の地位にあつた。氏は久しく獨逸で財政學を研究し、造詣が深かつた。最初早稻田に教授として投ぜられたのは、山本權兵衛大將が大隈侯に推薦せられたのが動機で、長い間教鞭を取られたが、後には高等學院長となつて、學校の行政にも與られて令名があつた。氏は肥大の體軀で、豪放磊落の人であつたので同人に喜ばれ、學徒を導くに深切であつたので、其の畏敬を博した。氏は斗酒を辭せざる酒量があつて、常に

飲むと座中春を生じたが、終に酒故に病を得た。學苑の同人が君の古稀を祝した際は、君の健康が勝れず、最も好む祝酒も口にもせず、如何にも氣の毒に感じたが、君は其後遂に贅を易へた。自分は同縣の誼もあり、殊に自分が會長となつてゐる越佐會には常に出席せられたので、別懇であり、相交はる機會も多かつたが、今は幽明相隔て、殘念に堪へない。

八五、中橋德五郎氏

中橋德五郎氏は東京専門學校時代に法科を教へた。氏は仕官して管船局長となり、罷めて大阪に赴き、長い間大阪商船會社社長であつた。此時分私は學校の基金募集の爲め、しばしば大阪に赴き、其都度氏を煩はし、氏の斡旋で募金が少からず出來た。氏は園遊會などで懇意の實業家に遭遇ふと、早大のために寄附をせよと説き、千や二千の金は立談で決した。氏は豪傑肌の人で、曾つて語つて云ふに、大阪で千や二千の金を出させるのは容易であるが、其直ちに應ずる所以は他日交換問題を提出せんとする底意があるからで、寄附を勧誘するには他日交換問題の起ることを豫期せねばならぬ。多くの人が勧誘を憚るのは此故であるが、教育の事は利益問題でないから、俺れは他日の事には關心せぬと、氏は此意氣で私を助けられた。早大の事業

が氏に負ふこと決して少くない。斯る情誼のある氏に對抗せねばならぬことが起つたのは、大隈内閣の時、氏は郷里石川縣金澤で横山章氏と選挙を争ふことになり、自分は其際大隈伯後援會長で、選挙長の立場にあつたから、氏を敵に廻はし、態々金澤に出張し、選挙上稀れに見る大戦をやつた。其際若槻氏と共に演壇に立つて氏を攻撃することになつた時は、實につらかつた。此對抗は一時互角の勢であつたが、大隈首相が金澤に出馬さるゝに至つて、形勢一變し、愈々投票となると、横山氏は壓倒的多数を制した。氏の政治上の立場は政友會に在つたので、自分は其後氏と疎遠となり、曾て氏が文相となりし時、何かの事で、文部省で會見したのが最後であつた。氏は長く病床にあつたが、惜むべき快男子であつた。

八六、廣井一氏

廣井一氏は早大初期の得業生で校友の先輩である。氏は卒業後郷里越後の長岡に歸へり、一生の力を郷里の開拓に注いだ、長岡に於ける重要な事業は學校も病院も銀行も新聞も氏の指導誘掖に依らないものはないと云うてよい位である。氏は曾つて銀行事務に没頭したこともあるが、性來政治趣味があつて、終始政治運動に携はり、其經營に係る北越新報には最後まで

で社長として努力した。氏は母校に對しては飽まで忠誠で、早大の評議員として、學校の經營に努力したことが少くなかつた。亦常に校友團の牛耳を取り、越佐校友を統制し校友會の模範とまで稱せらるゝやうに校友の美風を涵養したのも半ば氏の功に歸せざるを得ない。氏の長岡銀行が其支店を東京に開くに當り、しばらく東京に居を定めた時、自分擔任の文明協會に投じて監査役に當り、金融等に就て援助を得たこともある。自分と氏との交りは幾十年の長きに涉り、自分が郷里で政治運動をなした頃には、氏は常に自分を助けて一方の部署を擔任した。又曾つて久須美秀三郎氏と共に山陰道を旅行したこともあつて、其際の事などを思ひ浮べると語るべきことが種々あるがそれ等は皆こゝに省略する。

八七、大石理圓氏

久しく早大圖書館の司書であつた大石理圓氏は早大の出身校友で、自分とは同郷の關係があり、一時僧籍にあつた爲め佛典に通じ、圖書にも趣味があつた。圖書館の事務を取る人は敢て乏を感じないが圖書に鑑識のあるものは得難い。自分は何か取調べることがあると、いつも此人に頼んで咄嗟に辨じたが、此人を失うたのは誠に遺憾である。此人は校正が堪能で早大出版

部の出版物で、特に綿密の校正を要するものは皆此人の手を経た。自分の十編ほどの隨筆も皆此人が校正したので、一字の違いもないと云はれたのは此人の周到綿密の校正のお蔭である。氏は疑はしい引用文などは必ず原書に就て對校したから、往々著者の誤りをも正した。いつも自分は蕪雜の草稿を氏に送つて整理を頼み、それが爲めに勞を省いたことも多かつた。氏を失つたのは獨り圖書館のみの損失でない。自分は長い間此人を勞したことを思ふと惋惜の情を禁じ得ない。

八八、坪内雄藏氏

坪内雄藏君も遂に白玉樓中の人となつた。思へば君との交りは六十年の久しきに亙つてゐる。君に就て云ふべきことは少なくないが、左に早稻田學報に載せた追悼文をこゝに收める。

惟ふに君は稀に見る文學界の巨人であつた。君は常に高く歩した。そして大炬を捧げて先頭に立ち、斯界の案内役をつとめた。君により幾多の道が拓けて嚮ふべき所が知れた。君は終始草分けを以つて任じ、一旦方向が決まると、あとの開拓は人に任かした。明治以後の文學界が君に負ふ所の大なるは専ら爰に在るのだ。君は文藻を以つて衆と争ふとはせず、どこまでも案内

を以つて任じ、瑣事には頓着せず、ズン／＼進んで尖端を切つた。惟ふに文藻に秀でたるもの何ぞ限らん、君を駕する者敢て少ないとは言はぬ。唯だ終始邁進して行くべき道を拓いた披雲の功は最も偉大で、何人もそれを否定することが出来ない。

人或は君を解して優れた天才となし、以上披雲の功も天稟の才能に據るとなすものあれども、恐らくそれは君の首肯する所でなからう。君は確かに少壯より文藻に富み、天才もあつたに相違ないが、それだけで文學界の師表たり得たと考へるのは大なる謬りである。君に偉大なる人格がなければ如何にして師表として仰がるべきか、君は精勵の人であり克己の人であつた。君の人格を作り上げたのは、實に此の二つに依るものである。

君は文學界に濶歩せんとするには、先づ自らを修めた。決して天才に任かして奔放したのではない。君は高等學府の教育を受けたとは云へ、壯年時にはまだ他日の人格は備はつてゐなかつた。君自らも嘗て告白したごとく、壯年時はフワ／＼ものであつたと言ひ、瑣細の事が發憤の動機となつたと云うてゐる。實はまかり違へば、昔時の戯作者流となり畢つたかも知れないのである。君の若い頃には君を繞つて誘惑が多かつた。幸に君がその累を免かれたのは、君に大なる志があつたからである。委しく云へば君は小説家たらんとして、魯文の門に趨せなかつ

た。大阪の大新聞に拉し去られんとしたが踏み止つた。劇作家たらんとしても、名優に跪くことをしなかつた。これ等は後年君が大家になつてから考へれば、ナンでもない事のやうだが、當時の事情を考へると随分あぶないことであり、一步誤ると或は君の一生を誤つたかも知れない。

君は尤も創作に熱中する時に、教育の衝に當り、早大に早中に多くの時を費し、幾んど著作に筆を染むる餘地がなかつた。早中では初めに教頭、後には校長ともなつたが、君は倫理を講ずるために、哲學や倫理の研鑽に數年没頭したこともある。吾等は傍らに見てアタラ君の文才を抑遏することを氣の毒に思うたが、併し後に考へると、これは君の爲めに不利ではなかつた。君があらゆる文學者に超越して、崇高の人格を作り上げたのは、確かに以上教育に與つた結果に外ならぬと思ふ。

君は一方教鞭を執りながら、文學の氣運に後れざらん爲めしきりに外國文學を修めた。内地に續出する屑々たる小説の類、それは君の門人格の筆に成つたものですら、看過せずに目を通し、その間々には自から創作を出し、沙翁の反譯は早くも此頃から始まり、君の勤勉努力は實に容易のものでなかつた。君は文學界の案内役たらん爲め、先づ自らを修め、自らを作り上げ

るに斯くまでに努力した。

君が劇の改善を志した頃は、まだ教鞭を取りつゝあつた時で、君は文藝協會を創設し、其の理想に基き新劇を徒に教へるに當つては、自から家庭に舞臺を設け、子弟に舞踊を習はしめ、君自から三絃の稽古までして、しきりに新作を物した。君は理想の宣傳家に止まらず、實に躬行實踐家であつた。新劇の起つたのは君の力強い輔導に由るのである。

君の身體は羸弱で、文學者の常として、長らく不眠症に悩み、眠藥を藉らず快眠を得ることは一週一回も無かつた。それに加へて胃酸過多症に累せられて數年悩んだ。而かも君の氣魄は此等に屈することなく、講演は常に聽者を陶醉せしめ、君一流の朗讀は幾千の聽衆に對し三時間も續けて、毫も倦色なく、能く徹したのは、古稀翁の業としては驚くの外は無かつた。

君は餘命のあらん限りを、藝術に捧げねばならんと深い信念を持ち、前年熱海で大患に罹つた時などは、恰かも自作のペーゼントを熱海町に演ぜしむる場合であつたので、瀕死の病人が床頭に三味線を引かせて、自から指導をした。今度の病患も一旦癒えたが、癒後靜養が必要であるのに、新修沙翁全集の内、書き直すべき所があるので、三十七八度乃至三十九度の發熱を意とせず汲々筆を絶たなかつた。其努力で到頭末卷まで訂正し得たが、斯の如きは普通人間の

到底企及し得ない所である。

君がシーザー奇談に筆を着けてから、四十巻の沙翁全集を完譯し、更らに普及版を出す爲め舊譯を訂正し、書直し且つ自ら幾回も校合し、末巻を直し終るまで前後五十年を費してゐる。君は沙翁に忠實なるものと謂はねばならぬ。君は多分或る覺悟を以つて、病後熱を冒してまでも筆を把つたと思はれる。君は沙翁を征服したが君も遂にそれで斃れた。君の遺業は少からざれども、後世長く文學界を益するものは沙翁の完譯であらう。世界に沙翁全集を完譯した人は種々あるけれども、君の如く劇に通じた人の手に成つたものは、幾んどない。此意味に於ても君の譯は世界のどれよりも沙翁の神髓を得たものと云ひ得る。君が畢生の事業として、五十年没頭し終に補正をなし終つたことを思ふと、君は思ひ残すことなく安らかに瞑したであらうと思ふ。

君は藝術のため何物も捧げたいといふのが素志で、君の遺旨も亦そこにあるのだ。君は君の古稀を記念するために起した演劇博物館に、少からぬ資財を投じたことは、既に隠れもないことであるが、未亡人百年の後には、更らにあらゆる遺財を國劇向上の資に供せんとしてゐる。君の高潔の精神は、文人に幾んど匹儔のないことで、此の偉大なる人格こそ文學界の範となす

に足ると信ずる。吾等は此の巨人を同窓より出したことを、平素誇りとしただけ、それだけ斯人を失つた悲しみも亦深い。ひとり吾等のみでなく、吾文學界に取ても、亦我學苑に取つても大なる損失であらねばならぬ。

回顧餘談

早稻田大學の沿革と人物に就て大略ながら前に叙したが、餘談として尙舊夢の語るべきことがある。斷つて置くが、早稻田は大學の所在地であるのみならず、大隈老侯の居住地でもあつたから、早稻田の回顧録に、老侯に就ての思ひ出の交はるのは當然で、此巻尾に老侯の旅行に自分が追隨した記を載せたのも其故であるが、此の餘談にも老侯に關することが續出する。

自分が早稻田大學に關係してから、既に半世紀を経てゐる。七年前自分が古稀の齡に達した時、高田、坪内、浮田の三博士と共に、同人から祝せられた。其際自分は述懐を陳べたが、自分のやうに攝生もせず亂暴な生活を營んでゐるものが、齡古稀に達したのは寧ろ案外で、全く早稻田學苑のお蔭である。早稻田は自由の天地で、何等拘束する所がない。自分のやうな放縱の人間に對して一切羈絆がなく、無位無官一個の野人として押し通すことの出來たのは、早稻田

の同人が自分に對して理解があり、持前の放縱性を許されたからであると云ふやうな事を言うて謝辭としたが、實に長い間敢て失業もせず、衣食に窮することもなく過ぎたのは、全く早稻田のお蔭と云ふの外はない。これは私のみではなく、官僚的階級を忌む人々は皆私同前であつて、ラフカデオ・ハルンの小泉八雲なども、官學を去つて早稻田に來たのを喜んだ。多くの名流が學校の創立以來義侠的に援助を與へたのも、自由の學苑を快としたからであつた。

併し私をして始終愉快に半世紀を過したのには、他に一原因がある。それは大隈老侯の聲致に接し日々親炙したことである。老侯は嘗て憂を知らないと言ふやうな陽氣な人で、いつも談論風發四座を壓するの概があつて、それを聽いてゐると、憂鬱の時でも、侯の門を出るときは、豁然としていつも吾れながら別人となつたかの如き氣がした。長い間侯の談説に鼓舞され不知不識の間に貴い薰陶をどんなに受けたが測り難いものがある。百二十五歳を期された老侯の豁達の元氣にあやかり、吾等弱卒が聊か長壽を保ち得たことは、老侯のお蔭と云はねばならん。

早稻田は自由郷であるのみならず亦吾等には此上ない樂土であつた。昔し羅馬の盛時世界の道は羅馬に通すと云うたが、私がそれを倣つて世界の道は早稻田に通すと云うたのは、早稻田

の村に大隈侯が在られたからである。内外の大人物は頻りと早稻田に去來した。吾等が居ながら多くの内外の大人物に接したのは、全く侯のお蔭に據るので、ある時は饗宴を設けられ、酒杯の間に賓主の應酬もあつた。或る季節には觀菊會が催されて連日幾多名流が來り會した。

卒業式

自分は今に迫んで大隈侯總長時代の早大の卒業式を憶ひ出す。卒業式は得業生の爲めには晴れの席ではあるが、場を飾ることは多數の教職員であるのが例で、どここの學校でも場を飾る大人物を招致せんとしても當日式場に演説をする賓客の外は出で來ないのが例であるのに、早稻田の式に於ては、いつも内外の貴賓が席に満ちた。云ふまでもなく、老侯が場に臨まるゝ爲めであつて、頗る異彩を放つた。更らに大きく記念の式典を擧げた場合には、各國の大使まで來り會した。内閣總理大臣などは勿論の事であつた。

大賓の卒業式に來會を機とし侯は其人々を自邸に延き談笑せらるゝが恒例であつて、來賓もそれを期待したかに思はれた。侯は客を喜ぶ人で、平日でも來客が堂に満ち、幾んど終日應接せられた。殊に侯は新聞記者を喜ばれ、どんな忙中でも迎へて、時事を談論されたが、侯はど

んな國家の大問題に對しても咄嗟にそれに處するの案があつた。どんな世界の難問題に對してもチャント定論があつた。

大新聞記者としての大隈侯

侯ほど記者に尊敬せられ重寶がられた人は無かつた。私は嘗つて言うたことがある。日本に於て偉大なる新聞記者は誰れだと云はゞ、大隈侯であると云ふに誰れも異存があるまいと、事實侯は内外新聞記者の指導者であつた。凡そジョルナリストに必要な資質は、事に當つて直に意見を吐き得るレデーネスが第一で、新聞は一日の仕事だから、悠々調査する如きことを許さない。然るにこれは難事であるが、侯には此のレデーネスがある。尙ほ記者に必要な知識は經濟、財政、外交であるが、優れた記者と雖も此の三ツを兼具するものはなく、大抵部分的に有つに過ぎないが、侯は此の三ツを具備して、殊に其何れにも精通されてゐたから、侯が偉大の記者と云はるゝ所以であつて、侯の在世中は各新聞紙の二三段は侯の言論に由つて填まり、それが其日の主要記事で、それが全國の新聞紙に轉載された。侯は何事に就ても立派な意見があつたが、國を代表して外人に語らるゝ意見は、思を凝して周到の注意を拂はれたので、それが

諸外國に電致され、宰相の説よりも重きをなした。これは勿論侯の元勳的地位も與つてゐるのであるが、元勳は他にもあるけれど、侯の如く新聞記者を喜び、侯の如く内外記者を指導した人は元勳中他にありとも覺えない。侯は終生筆を執らない人であつたのに、偉大たる新聞記者と評さるゝのも一奇である。

早稻田から新聞記者の多く出た理由

早稻田には早くから新聞記者が多く輩出した。これは早稻田が開校勿々政治、經濟、法律の學科を設けたから、學徒が政治趣味をもつた譯であるが、實に老侯が偉大なジョルナリストであられたことも、學徒に大なる影響を與へたに相違ない。侯は學校の講壇で、新聞學や記者術を教へられたことはないが、毎日新聞紙にあらはるゝ侯の言説は此上ない新聞學の好讀本であつた。尙文科が置かれてから一層ジョルナリストが殖えて、どの新聞雜誌でも、記者として又經營者として早稻田出身者が其位地を占め、新聞雜誌記者と云へば幾んど早稻田の得業生に限られてゐるかの觀を呈し、山縣元帥などは常に之れを忌憚したと云はれてゐる。實は政治趣味は國民の廣汎に有たねばならん最も崇高の趣味で青年の喜んで趨る所のものである。立憲國に政

治思想の普及の大切なることは言ふ迄もないが、藩閥武斷政治家には寧ろ其の普及が邪魔になるので、長い間政府者は之れを喜ばず、寧ろ之れを抑制する傾向があつた。此時代に於て早稲田は學問の獨立を建學の本旨とし、超然政治を自由研究に委ねたから、政治趣味を有つものが多く生れたのも自然の勢と云はねばならんが、老侯の高風に化せられたのも大なる原因であつたに相違ない。

圖書館長の早替り

思ひ起せば早稲田の如き自由の學苑には随分突飛の事があつた。大隈内閣が議會を解散して信任を國民に問うた時、圖書館にくすぶつてゐた自分が職を抛つて翌日上野の精養軒席上で、内閣諸大臣を應いて演壇に登せるチエヤメンと早や替りをした。これも早稲田の自由郷であることを語るものである。自分は此因縁で間もなく大隈伯後援會長となつたが、それは解散後の選挙を行ふ選挙長であつた。迂濶者流と見られてゐる圖書館長が、逐鹿場に現はれたなどは突飛なことであつた。此任務は實に重大であつたが、案外樂であつたのは、大隈首相が自分から逐鹿場に出馬されたので、到る處破竹の勢で風靡した。學校の諸教授で後援のため、逐鹿場に

出張した人も少からずあつた。人或は之れを異觀としたかも知れんが、政治學校の教授が斯くしたからと云うて何んの不思議があらうか。

校友會

私はこれより早稲田の校友會を一瞥したい。早稲田の校風を如實に語るものは、各地の校友會の纏まりのよい事である。浮田和民博士は同志社出身の人であるが、往年早稲田へ來り投ぜられた動機を語られた。それに據ると博士の旅行中、或る船中で若い學生がしきりに早稲田の校風之美を説き、學校を擇ぶものは早稲田へ來れと宣傳したのを博士は傍らに聽き、母校を激賞する斯の如きは校風之美なる所以であると感心して、早稲田へ投ずることになつたと云はれた。實に早稲田の校友ほどよく和して一團となつてゐるものはなく、其の總長教授を迎へるに赤誠を以つてする彼れが如きものもない。四萬の校友其の名簿は幾んど一千頁に垂んとする大のものであるが、全國に散在する幾十の校友會は常に和氣霽々の間に開かれ、彼等は相依り相扶けて、兄弟音ならざる誼があり、其團結は一勢力を形づくり、年を逐ひ其數を加ふるに従ひ益々勢力を増大しつゝあり、彼等は其子も其孫も其玄孫も皆母校に送つて遊學せしめてゐ

るのみならず、其の親族も亦それに倣ひ、倣はざれば肩身が狭いやうにまでなつてゐる。どこ
の學校でも卒業生は出てゐるが、一旦校門を出ると互ひ／＼は路人の如くで、先輩が来たから
と云うて迎へるでもなく、如何にも冷淡であることは會つて自分が某校の出身者と相携へて支
那に漫遊した時、自分のみ出来る處校友會に招かれたが、同行の友人は所在同學の出身者が多く
居るに拘らず、一たびも迎へられたことがなく、甚だ氣の毒に感じたことがある。畢竟如斯は
校風の然らしむる所で、友誼を閑却するは校風の大なる缺陷と云はざるを得ない。

早稻田の校友が時々會合することは校友其人々の愉快とする所で、又それに招かれて臨む
先輩の齊しく愉快とする所である。會は定期に開くこともあり、臨時に催すこともある。一府
縣の校友の會することは通例だが、諸府縣の校友が聯合會を開くこともある。科別に開くこと
もあり、同じ年度の同窓が會することもある。先輩來ると云へば檄を飛ばして即時に開くこと
あつて、其昔校友の少なかつた頃は、僅かに十數名の會合であつたのが、今は幾百にも上るこ
とがある。此等の會合は常に母校と聯絡を保ち、時には總長親しく臨み、諸教授も亦臨んで、
例として講演會を開き地方の開發に資する所がある。

各地の校友團體は今既に其の地方に於ける一勢力である。今よりも五年十年を経ば、校友の

數は今日に倍して一層大なる勢力たるべきは期して待つべきであるが、校友團體は其勢力を頼
んで閥を樹て、他の勢力と抗争することはせないが、此勢力を閑却して各地方共何事も成し得
ざるは言ふ迄もない。現に各地府縣會に校友の少からざる存在を見ても思ひ半ばに過るものが
あらう。尙ほ進んで帝國議會に送る議員も、選舉毎に其數を増しつゝあることも天下周知の事
實である。

早稻田出身者の擡頭

早稻田の校友名簿を一瞥すると眞に儕々多士であることを感ずる。今は政治部面にも社會の
各方面にも教育其他會社銀行等あらゆる實業方面に校友は彌漫し、其の要部に牛耳を執つてゐ
るものが少なくない。併しながら早稻田の出身者が續々大いに頭角を擡げるの日が近き將來
に在るであらう。兎角世の中には先輩閥とも云ふべきものがあつて、優先權がそれに在るため
後進の立身には障碍があつて、如何なる傑物秀才でも一躍大なる立身をする事が許されな
い。要は年功を積みまねばならぬ、頭髮に霜を戴かねば首位には立ち難い。早速整爾氏が前年鐵
道大臣を経て大藏大臣となつたとき、同人は宴を開いて祝したが、氏は自分は寧ろ入閣のおそ

きを恥づと云うたが、簡單ながら實相を語つてゐる。早速氏の外に前内閣に拓相となつた永井氏もをる。大臣級の外交官に米國大使となつた埴原正直氏もゐる。併し入閣者は未だ少く政務次官參與官位地のものが最も多いことが事實である。此等は一步進めば閣員となり得るのであるから、前途は頗る多望と云ふべきだ。

實業方面の出身者

實業方面に於ても今現に大會社の専務となつてゐるものが少なくない。其次席にあるものは更らに多きを見る。併し現状ではあきたらぬ感がある。其の大いに頭を擡る日は遠からず來るであらう。實を云へば早大で商科を開いてから餘り多くの年所を経ない。これを彼の廿五年の兄たる慶應大學が、開校勿々實業家を出すに汲々として其目的を達したのと同じ日に語るべきでない。自分の心頭に浮ぶ一例を云ふと、有力なる銀行會社の専務になるには約三十年を要する。それも同じ銀行に終始して功を積みやつと其地位に達するのであることを思ふと、實業界の立身も容易でない。併し後れ馳せに出た商科の出身者も可なり中老の人が多く、漸やく其功を積んで、益々其の堅實性と巨腕が認められ、先進者は後進を提擲してゐるから、實業界に百花の

爛漫を見る日は決して遠いことでない。

教育方面の出身者

更らに翻つて教育方面を見るに、早稲田の本校に須要の位地に居るものは皆出身者で、相踵で博士の學位を得るものも少なくない。未だ學位を贏ち得ないが、博士級にあるものは實に多數を占めてゐる。現状を以つて三十年前他所の學者を借用して各科を教へた當時に比すると眞に隔世の感がある。高等師範部の得業それに文科の得業を合せて、全國の中等教育の衝に當つてゐるものは實に多數であるが、此等も長い間他の學閥に壓されて雌伏状態にあり、一時は學閥の排擠を憚つて早大出身を名乗らなかつた位であるのに、今は教頭となり校長となるものが漸やく多くなりつゝある。萬事實力の世界とは云ひながら、閥の抜き難いことは、陸海軍の薩長閥が永く門戸を鎖して閥外のものゝを遠ざけたのでも徴し得らるゝことで、出身を問はず實力拔擢をすることになつたのは、陸海軍に於ても外交界に於ても近年の事に屬することを思ふと、早稲田出身者の擡頭も今後に在りと思はねばならん。

早稲田の經營家

早稲田大學が隆々たる勢で學界に雄視してゐるのは、自分が慾目で云ふのではない。今日に於ては其の形態に於ても其内容に於ても充實してをる。大隈侯の遺業は敢て少なくないが、其の第一に推さるゝのは早稲田大學であつて、侯暝すと雖も侯の精神は赫奕として學校の隆運と共に其光輝を發してゐる。此學校を築き上げるには衆多の力を要した。精神的に力を致した人の既に故人になつたのは二百の多數を數へ、其内自分に師友關係のある人々の閱歴は物故師友録に一端を擧げた。其物質的に援助を與へた人々は學校出身者は言ふまでもないが、他の篤志者は校賓贊助者名簿を見ても如何に多數であるか容易に知らるゝであらう。實を云へば早稲田大學は全國の有力者に依つて築かれたと云ふことが出来るのだ。

併しながら如何に創立者として大隈侯の如き大人物があり、全國の有力者が後援したにして、經營家が衝に當らねば、此事業は斯くまでに成功しなかつたであらう。早稲田大學は既に半世紀を経て居る。五十年は短かい年月ではないが、永久から考へると一瞬に過ぎぬ。五十年の間には何事も變遷があるが、よいことばかりがある譯でなく、下手をやると非運に陥り亡滅

するものが有り勝である。早稲田と雖も半世期の間には種々の難儀があつたが、遂に今日あるに至らせたのは經營家其人の力に依るのであつて、早稲田の仕合せは前に高田博士あり、後に田中博士あり、共に卓越の經營能力があるからである。

凡そ學校には學者其人を敢て缺かぬが、經營能力を兼ねた學者はどこを尋ねても甚だ稀れなものである。或る意味に於て學者と經營家とは兩立し難いものとさへ考へられてゐる。官設の學校の如きは必らずしも經營家を要しないが、私學に於ては學校の運命を握るものは經營家其人である。經營は學者から見ると俗的のものであり、事務的のものであり、割合に勞が多くして學者の了解が得られず、功があつても當然とされ、遣り損ひは非難攻撃的となるもので、學校の經營者程骨が折れて割のわるいものは無いのだ。しかし此の割のわるい局面に當るものが無ければ、學者は縦令滿ちてゐても學校は成り立ち得ぬ。そして私學に於て尤も然りである。

私は早稲田の困難時代を前の思ひ出に語つたから茲に再説せないが、高田博士は學校の創立から五十年の長き、幾んど間斷なく心血を經營に注いだ。自分は長い間博士の麾下に就て經營の下役を務めたから、何もかも知つてゐる。吾等が當初小野梓氏に誘はれて大隈參議に謁した時から、博士は吾れ／＼同人の團長格であつた。學校創設となつても、博士は其の職名の何た

るに拘らず、大切なことは皆博士に因つて處理された。校長は數次代つたけれども、事實學校の經理に任じたものは博士で、校長は決して干渉することなく、博士に萬端を委した。博士が學監となり學長となつても經營に何んの違ひが無つた譯は、博士は其の職名の如何に拘らず、校長の事務を終始やつて來たからである。大隈侯が名譽總長となられて、博士は種々の案を立て、總長の裁可を仰ぐに止まり、總長は常に博士の案を可とせられたから學校の經營は長い間博士の方寸で定まつた、随分難儀時代には磐根錯節に當り博士も苦勞をされたが、嘗て一たびも辟易するやうなことは無つた。終始經營方針を發展擴張と積極に取つたから、追々舞臺が大きくなつたが、博士は一事業を達し終れば更らに一事業を計畫すると云ふ意氣で、いつも他の事業に手を着ける時には、私や幹事であつた田中氏に「これから亦擴張事業をやるが、君等は扶けるかどうか」と、先づ問はれた。吾等が援けることを誓ふと、博士は翌日から着手すると云ふ意氣で、仕事に追はるゝことなく、いつも仕事を追うて行く流儀であつた。私は同窓時代博士の才幹を知つて居たが、斯る經營の才ある人とも思はず、亦斯程に經營に熱のある人とも思はなかつた。實は博士は數理に明るい人でない、然るにそのやる事が、嘗て敗れたことのないのは、其の非凡の常識と犀利の直覺が然らしめたのであらうと思はれる。間斷なく局

に當るものは事には通ずるが、久しきにわたると行詰る事があるものだが、博士は段々經驗を積むに隨つて、經營の能が益々冴えて現在の如き大規畫の學府を統べるに至つた。高田博士は以上の如くに開校當初からの經營家で抑すに押されぬ貫祿のある人だから、幾百の教職員幾千の學生を駕馭したとは云へ、偉大の經營力と、一生を學校に犠供する精神が無れば如何にして學校を今日の盛運に導くことが出來やうか。或は私學經營の難きを知らない人は學校の益々擴張さるゝのを見て、餘りに擴げ過ぎては危險がないであらうかと、臆病の説を立る人も往々あつたが、私學の經營は官學のそれと全く異つて、規模が大きくなければ收支が償はないもので、經濟の妙は規模の大なる所にあることは、私學の經營家にして始めて知る所である。併し規模が大きくなれば治めるに難く、教育も疎略に流れ易いが、規模を大にしてこゝに收支の經濟を立て、内容を充實して教育に疎略なく能く治めて行く處に、經營家の手腕がある。高田博士を偉なりとするのは、學校の規模を擴げつゝ内容の充實にも管理にも遺憾が無つたからである。現代の總長田中博士は高田博士を繼承した人で、經營家として稀有の手腕を有する人である。斯る人を高田博士の後釜に得たのは實に學校の仕合と云はねばならぬ。博士は高田總長の時、數年間經營理事として高田總長を輔翼したので、學校の事情に精通し、殊に會計事務に練達で

老なる學校經濟を巧みに調理し、大震災後の善後には目覺ましい働きをなした。博士は理事時代既に充分の試鍊を経てゐるから、高田總長を繼でも何等不足が無つた。博士は元來經濟財政が専攻で、數理の明晰である點は前總長よりも遙かに上にあつて、經理は一糸亂れず着々運んでゐる。博士の爲人は敏捷の上に勤勉である爲め、闔校の事務は大いに張り、早大と拮抗の地位にある慶應大學の如き、事務の敏活を早大に倣はんとして、曾て見學に早稻田に来て、會計其他の執務の狀を視察したこともある。

現總長の經營手腕は大震災以來間斷なき校舍其他の建造に於て現はれてゐる。大震災以來、建築亦建築で、十年間に全く學苑の面目を一新し、今は古るき木造建築は一つ存しないまでに舊觀を改めた。私學の經濟に餘裕のないことは言ふを待ないが、斯る建築經營は固より學校經濟に餘裕があつてからでなく、現總長が資金を募ることが極めて巧みであるから、嘗つて資金に乏を告げたことが無い。やつぎばやに建築亦建築で目まぐるしい觀のあるのは此故で、前總長も此點には舌を卷いて三舍を避けてゐるゝが、田中總長は稀れに見る學校經營者であると吾等は言ふを憚らぬ。

大隈侯から聽く會と侯に聽かせる會

大隈侯の晩年漸やく無事に困しまるゝを見て取つて、自分からも侯の談話を聽く會と侯に聽かせる會とを目論見侯の應諾を得た。侯の談話を聽く會は侯の議論でなく、専ら侯の閱歷に付て思ひ出話を求め、吾等の質問にも應答あらんことを求めた。實は侯易簣の後傳を編むの資料を集める下心から出たのであつて、毎月一回開くを例としたので、假りに月一會と名づけた。この會は五六ヶ月連続したと思つてゐるが、侯は午後清閑の時吾等早稻田の同人を相手に、二時間乃至三時間に涉つて種々語られたが、これ迄會つて聞くことを得なかつたことが多く、自分はそのを聞くのを楽しんで、會日の來るを待ちわびた位であつた。私はボスウキルが、ベンジヨンソンの日常の談話を筆記するに咳拂や態度に至るまで注意して漏さなかつた。筆記者に嚴密の注意を與へ、其筆記を文明協會の雜誌に掲載したが、それが豫期の如く侯の傳記を作るに相當に役立つた。しかし後日考へると、あの時あのこと、このことも聞けばよかつたと悔いたことが少からずあつた。併し今尙ほ忘れ難い興味のある談話が多かつた。侯に聽かせる會と云ふは、前から侯を會長として設けてあつた。文明協會は譯書の刊行に専

ら力を注いでゐたが、更に種々の人を延て談話若くは講演せしめることゝした。談者は各方面の人を選んだが、海外から歸朝して新らしい視察を齎した人が殊に多かつた。其選擇には侯自らあの人の人と指名されたこともあつた。此會には七八十名の會員が常に列したが、侯が聽者であつた爲めに、演者も精根を凝らしベストを盡して、二時間乃至三時間に渉る談をなした。侯は其講演を熱心に聽かれ、會つて半途に座を起されたことがなく、誰れか面調を乞ひに來ても斷られ、奥からも入浴の使が來てもそれにも應ぜられず、如何にも落着いたものであつた。談話が終ると、侯は例として談者の勞を謝し、且つ講演に對し批評的演説を試みられたので、これが此會に大なる光彩を添へた。老侯易簧の後も令嗣信常侯を會長とする同じ會は、毎月此の講演會をつゞけてゐるが、吾等が居ながら歐米其他諸國の内情や近況を知ることの出来るのは、全く此のお蔭に據るので、會員の喜んでいつも満員を告るも此故に依るのである。

大隈熊子刀自

私の此回顧録に逸してはならぬのは大隈熊子刀自に就ての追憶である。私などは刀自が英曆君の夫人であられた頃はお目にかゝる機會はなかつたが、侯の晩年には常に侯の居室に侍して

居られたので屢々お目にかゝり、侯御夫婦棄館の後は、其の御魂を護つて早稻田の別邸に在られたので、毎年盆暮には必らずお尋ねして其警咳に接した。いつもしとやかな應對があつて、談話は百端の事に涉り、時事問題や世相の移り變りなどにも及んだが、どこまでも女性的態度を崩されたことがなく、何も彼も承知して居られながら、銜氣などは微塵もなく、謙遜であられながら、どこかに凜然たる處があつて、確かに老侯の血が流れてゐるといつも感じた。刀自は靜閑を利用して常に讀書に耽り、早稻田の範圍に出版された圖書は大抵目を通されたが、私が侯を總裁として圖書刊行會で出版した圖書の内古記録などは、難解のものであるのに、それをも閱讀され、往々其中に就て質さるゝこともあつたが、私などは御質問に對しお答が出來ず、恥入つたことが一二度もあつた。刀自は父母に對して孝養到らざる處なく、召使に對しても物やはらかに遇され、粗略の言葉は絶対に使はれたことなく何か遣り損じでもあれば、當意即妙の才で父母に辯護されたり、代つて謝罪されたりした。刀自は吾々にこそ何んにつけても語られたが、新聞記者などに對しては絶對謙遜で、如何に何事かを引出さんと記者が力めても全然失敗であつた。私は高貴の婦人に接した經驗を有つてゐないが、刀自の如き氣格が高く物軟かで、どこ迄も女性の態度を失はない人を見たことがない。刀自は眞に日本婦人の好典型で

ある。私は別邸へお訪ねする時には必らず娘を同伴して其の高風に浴せしめんと庶幾したが、娘はいつもお話を承つて深く感激した。刀自は常に早稻田の校運の益々隆んらんことを念とせられ、早稻田の状況を報ずる時は殊に耳を傾けられた。四隣のものも刀自の高風を傳へ聞いて其の附近に住するを以つて光榮とした。刀自は眞に早稻田の一名物であつた。刀自は晩年漸やく死期の近づくを知ると、自家の詠草や日誌の類を一括して人知れず水に投じて委棄されたのは惜むべきだが、何に就けても周匝の用意があつた一端として爰に書き記して置く。

大隈侯の國民葬

此の餘談の最後に語るべきは、大隈侯の薨去と其の葬儀である。侯は八十五歳を一期として不歸の人となられた。これは早稻田の痛恨事であるのみならず、眞に國家の大不幸であつた。吾等は大學の同人と共に十數日間侯の邸に詰め切つて、御容態を打護り切に回復を祈つたが、實に最後まで不治の症であることを知り得なかつた。十二月十八日と云ふ日に、私を病床に呼ばれたから、直ちに參ると、侯は危篤の病人にも似ず、例の快濶の調子で、其頃の不祥事であつた安田善次郎翁と原敬首相の横死を氣の毒であると同情を表され、俺れも長く病褥に在るの

で君等に厄介をかけてゐるなど語られ、病前からしきりに編纂に努力された「東西文明の調和」を是非出版してくれと囑され。文明協會に就ても是非盛り立て、存続するやうにと語られた。私は此等のことを承つて非常に感激したが、これが實に侯の遺言であつた。

侯の母堂が逝去されたのは十二月三十一日であつたから、侯の病勢が次第に重りゆくのを見て或は母堂と同じ日に薨去されはしまいかと思つた位だ。それ故に其日が來ると、私は心配で心臓が烈しく鼓動するやうな氣がした。然るに幸ひに侯は三十一日を無事に過し、大正十一年の新年を迎へられ、そして尙ほ十日の壽命を保たれた。愈々臨終の時、私共極小數のものが侯の枕頭に集まつた。もう二三時間で絶命の場合であつた侯のお顔を拜すると、極めて安らかに何んの苦惱も無い様子であつた。私は靜かに水を筆につけて侯の唇頭に點じた。此時ほど私が沈痛の感慨に打たれたことはなかつた。四十餘年間侯に追隨して侯の赴かるゝ所へは影の身に副ふが如く陪侍し、侯の薫陶に浴したことが無量であるのに、今お別れと思ふと、熱涙が止めどもなく出て、吾れを忘れて慟哭した。私が生涯忘れられない深い悲みを感じたのは此時であつた。

私が一生の光榮としたのは侯の御葬儀の衝に自から當つたことである。葬儀委員長としては

時の宮相波多野敬直子を推したが、委員長は萬端私に任かされ、侯の令嗣も亦私に委かされた。實は高田博士が此の衝に當るべきであつたのに、不幸病んで居られたので、私が此の光榮を擔つた。勿論早稻田大學の理事諸君は皆私を扶けて非常に努力された。吾等は大學の同僚と共に侯が不起と定まつた時から、秘かに如何にして侯の終りを飾るべきやを寄り／＼相談した。侯の死は國葬に値するものであるけれども、國葬は現役の人で無ければ行はない規定と聞いて、何かそれに齊しい葬儀はあるまいかと案じた結果が國民葬となつた。私は此案を決する前に加藤高明伯にグラッドストンの葬儀の模様を聞いて見た。グラッドストンの靈柩はウエストミンスターアベールに安置されて、大衆の參拜を許したと聞き、其例に倣はんとしたのが、國民葬を行ふ動機となつたのである。實に侯に最もふさはしい葬儀は、或る階級に限つて參列せしむる國葬でなく、あらゆる階級、熊も八も包含する大衆が、隨意に參拜し得る告別式であらねばならぬ。それは日比谷公園に行ふべきであると私かに案を立てたものゝ、未亡人の一諾を得るにあらざれば、勝手にやることは無論出來ないので、内々其の準備を進めながら、どうすれば未亡人の同意を得ることが出來やうと、これが自分等の大いに頭を悩ました問題であつた。侯の絶命の其夜は、吾等は悲みの間に夜を徹して内議を凝らした。其席には加藤高明伯は不在であつた

が、町田忠治君などはゐた。種々協議の末、侯の未亡人は病氣であらるゝから、どうあつても告別式は本邸に於てせねばなるまい。それが終つて後ならば、日比谷に大衆の告別式を行ふことには未亡人も多分不同意はあるまい。併し一日二度の告別式を行つて埋葬まで済すことは、なか／＼容易でない。本邸の告別式は朝から行ふにしても勅使や皇族も見える譯だから、餘り早く初めることも出來まい。日比谷の告別式も大衆の參拜に遺憾なきを期するには、三時間位の時間が必要であるが、終つて護國寺の墓地に埋葬するにも餘り深更になつては困る等々で時間的组合せを案ずる苦心も一通りでなかつた。

吾等は所謂國民葬を行ふに、それに要する費用まで内々工夫をした。と云ふのは二重の告別式を行ふに、大隈家を煩すべきでないかと考へたからだ。が、其費用に充つべき資金は案外容易に出來た。併し未亡人の同意が得らるゝかどうかゞ一種の謎であつた。悲しみの間に居らるる未亡人に、薨去の翌日直ちに御相談するのは餘り無遠慮と、多少躊躇する所があつたが、大體の案が決しねば準備に手を下す譯にも行かないので、自分の氣を揉んだことは一ト通りでなかつた。幸に薨去の翌日加藤伯も武富時敏氏も早朝から來邸されたので、兩氏を先頭に立て自分も後に隨つて未亡人に相談に及ぶと、萬事を任すとの挨拶があつたので、吾等も初めて安心

した。書院に居並らぶ多くの同人も、暗に心配して其結果を知らんと待構へてゐたが、皆な結果を聞いて安心して歡喜を發するものすらあつた。

愈々正式に準備に取りかゝつたが、告別式當日まで十日間を費さねばならぬほど大規模の葬儀であつた。侯の靈柩は三百六十貫と云ふ重量のあるもので、それを日比谷に運ぶには自動車に依るの外はなかつたが、校葬の心持で居る早稻田の學徒は、日比谷まで昇ぎたいと云ひ出したのは其の麗はしい赤誠から出たものではあるが、一分の時間も誤つてならぬ葬送に、萬一の事があつてはならぬと氣遣つた自分は、學徒の折角の望を拒むことが已むを得なかつた。靈柩を載せる自動車を新たに製造したり、日比谷に式場を作つたり、途中の道普請をしたり、種々の土木を營むにも、いろ／＼面倒もあつたが、此葬儀の委員たらんことを冀望するものが澤山あるので、折角の念願を無にする譯にゆかず、追々委員が増加して遂に八百人と云ふ多衆になつた。それが爲め度々委員名簿を印刷し、何か通知を發するにしても八百枚の葉書を出さねばならない始末で、此事務のみでも容易なことではなかつた。

偕て愈々當日が來た。本邸の告別式は豫定通り滞りなく行はれ、侯の靈柩は混成旅團の儀仗兵に護もられ、肅々と本邸を發し、親近者を載せた幾十の自動車は靈柩に尾し、二萬に餘る早

稻田の教職員學徒は、沿道の兩側に堵を築き、それが九段の坂上に達し、靈柩が九段下を過ると、それに尾して早足で早稻田關係者は日比谷公園まで隨つた。公園は前日降雪があつたので、折角石炭ガラで泥濘を整理したのが、降雪のためぬかるやうになつたのを、急に一萬枚の蓆を敷くと云ふ騒ぎで、靈柩は一刻も違はず、假りにしつらひたる式場に安置され、定刻左右二個所の門を開くと、弔客は潮の如く入り來り、忽ち幾萬の人を以つて、さしにも廣ろい場が満ちた。豫て混雜を恐れて、御大葬の式場に倣らひ、靈柩前に左右に吐ける道を作つたので、拜を了ると直ちに自然足が移り、斯くして幾十萬の人衆は間斷なく去來したが、何れも敬虔の念を以つて禮拜し、毫も混雜なく、亦非禮のものも無かつた。此日は一月中の寒天であつたから、脱帽を強ひず、外套を脱するに及ばぬと揭示もしたが、其の揭示は全く無駄で、手を引かれて入り來つた小兒すら、皆な脱帽して一人の彌次馬らしいものがなかつた。殊に群衆中には侯を神の如く尊敬し、雨の如く賽錢を投じ、靈柩の前に賽錢の堆をなした。此日朝野知名の士は皆委員となつて參拜者の通路に立つて一々丁寧な挨拶をなしたので、場を一層嚴肅にした。私は大衆の去來に萬一何事か起つてはと時間中心配で溜らなかつたが、それは全く無益の心配であつた。此日大衆の取締は警察を煩さず、學生が熱心に其の衝に當り、慇懃に來會者に對したの

で、心あるものは校風の美なるを思うて感激した。

靈柩を護國寺の大隈家の墓域に移して全く埋葬を畢つたのは夜の九時であつて、朝の告別式より終局まで一糸亂れず、プログラム通り一刻の違算も無つた。埋葬を畢るまで幄舎内に多數の侯の昵近者がゐたが、當日儀仗兵を指揮された堀内將軍は私に握手を求めて無事結了の喜びを陳べられ、且つ云はるゝに、此葬儀に就て君の伎倆に敬服した。實に葬儀の準備中毎日大隈邸に集つた面々の内に論客が多く、葬儀に就て囂々の論があり、多分總務に任ずる君も方針を變ずるならんと豫期した。軍隊などでも傍議に左右せられて方略を變ずることは珍らしく無いが、君は紛々たる群議に頓着なく、初めに立てた方針を幾日経つても毫も變ずること無つたのは恐れ入つた。君は三軍を率ゐるの能があると、溢美の褒辭があり、尙ほ二萬の學徒が九段より日比谷まで自動車に尾して駆け足で歩き續けた。如斯は軍隊に於ては不可能の事に屬し、誠に異數の事だと云はれた。自分は自から揣らず、此大任を故障なく果し得たのは、侯の令嗣が自分に萬事を委せられ、傍議を一切取り上げられざりしことゝ、早稻田大學の同僚が極力自分を輔けたことに依るので、決して自分の手柄などと思つてゐぬ。

此の葬儀は誰れ云ふとなく國民葬と名づけられたが、葬史に前例のない盛儀で、あらゆる階

級の人が式場に臨み、其數三十萬と註せられ、日比谷附近の電車は一時停車を餘儀なくさるゝ雑踏であつた。常に國民を友とせられた侯の葬儀としてはふさはしいと一般の公評であつた。これを二ヶ月後山縣元帥の國葬に比すると、繁閑同日の論でない。國葬は餘りに階級本位で、服装などがやかましく、會葬を望むものもおのづから制限せられて、如何にも淋しかつた。これは強ち山縣元帥の徳が大隈侯に譲るにあらず、國葬の儀式が時代後れをしたのに據るもので、或る人は、國葬は閩葬だと云うたが、吾等は國葬儀の今後改善されんことを望まざるを得ぬ。所謂國民葬こそ國葬の實質を具するもので、國葬の式を改善するとなれば、國民葬に學ぶべきものがあらうと思ふ。

私は儀全く果て、坪内逍遙翁と自動車に同乗して歸途に就いたが、車中戯れに翁に問うた。君は劇通だが、今日の日比谷劇を見て君はどう感じたかと、翁の答は如何にも大規模であるのに恐れ入つたと云はれた。翁は亦あれ丈の大芝居を打つにどれほどの費用を要したかと問はれたから、未だ精算してないが、多分十萬圓を下るまいと答へた。

大隈侯國民敬慕會

大隈侯薨去後十年にして侯を追悼する會が催された。此の發起の中堅となつたものは隈門會であつた。此會は侯の薨後、侯を偲ぶ爲め、常に侯の邸に出入したものが組織したもので、今も繼續して時々大隈會館に催されるが、侯の薨後九年目に此會に動議が起り、來年は侯薨去の十年目に當るから、侯を追悼する會を開きたい。侯の國民葬は日比谷に行はれたから、宜しく日比谷の公會堂に開會して、會名を國民敬慕會としたいと、衆議これに決して、準備委員を擧げ、自分は亦委員長に推された。

此會の準備行爲として、式日に頒布すべき侯の偉蹟録を編纂することが、尤も急務とされた幸ひに渡邊幾次郎氏が明治以後の文獻に依り、侯の偉蹟を考證しつゝあつたから氏に囑して、之れを完成せんことを需め、半年計りで脱稿したのを「文書より觀たる大隈重信侯」と題署し之れを印刷に附した。侯の傳記八十五年史三冊は既に刊行されてあるが、渡邊氏の編纂に係る著は種々の文獻と侯の事蹟を考證したもので、八十五年史と全く趣を異にするものである。乃ち侯の事蹟の明瞭を缺くもの、侯が謂はれない非難を受け、久しく謎となつてゐる事蹟などを文書に就て宛は雪ぎ暗らきを明るくしたのがこの一書である。

準備行爲として骨を折つた他の一事は、一千人の發起者を募ることであつた。これも案外容

易に出來て、一千人が醸出した會費は一萬圓に上つた。これは侯の往年の葬費の十分の一に過ぎないが、これを以つてすべての經費を支拂ひ得る豫算で、編纂物の費用は勿論、侯の墓域に國民敬慕碑を建てる費用も皆包含されてゐるのだ。

準備は悉く調ひ翌年豫期の如く、式を日比谷の公會堂に行うた。當日場を飾つたものは三十數團體よりの獻花で、それが侯の影像の左右の壇に置かれた。司會者として山本達雄男を推し先づ會を代表して追悼文を朗讀し、踵で犬養首相の追悼の詞があり、徳富蘇峰氏等の追悼文朗讀等があつたが、國民葬の時と同様、何人も皆場に入り得たので、忽ち會衆は堂に溢れた。發起人のみで千餘人もあるのだから、實に盛況であつた。此夕べ兒童に對し、自分は侯に就て放送をした。自分は此會に就て感慨に堪へなかつた。實は十年前の國民葬で、侯に對し最後の御奉公が終つたと思つてゐたのに、十年後に此の敬慕會の衝に當らんとは、思ひもよらなかつた。幸にして盛況裡に終り、國民敬慕の碑も此式後侯の墓域に建設することを得た。

雙柿舎物語

逍遙翁の熱海生活

坪内逍遙翁が伊豆の熱海と深い因縁を結び終に常住するに至つた、其の最初を尋ねると明治十年頃にまで溯ぼらねばならぬ。その頃翁は東京大學の學生であつたが、長兄の病痾保養のため、熱海の富士屋別館に宿した時、翁も付き添うて初めて熱海に來た。自分が初度熱海を訪うた時も其頃で、旅舎は異つたが頻繁に往來した。其頃の熱海は蒙昧期に屬し、旅館などは自炊主義が本則で、漁夫は毎朝魚類を客室に持ち回つて直接客に賣つた。(勿論客の依頼により旅舎は賄をやつたけれども)東京からの交通も甚だ不便で、是非小田原に一泊せねばならず、小田原から熱海までは例の人車鐵道も無つた。随つて旅費も相當かゝるので、書生などは熱海に遊ぶこともなかつた。恐らく書生で熱海に遊んだものは吾等大學生が始めであつたらう。

追々他の同窓も熱海に遊ぶやうになつて、或る年などは七八の友人を數ふるやうになり、旅舎は皆異つたが、なか／＼賑やかであつた。皆々舟で錦ヶ浦を経て網代を訪うたこともある。露木旅館の二階で近邊の娘達を集め、吾等も打混じて歌かるた會を催したこともある。其際も其後も翁はいつも例の早口で和歌の読み役であつた、或る夜露木に泊つてゐた穂積八束が兪皇自分の宿へやつて来て今夜泊めてくれと云うので、どうしたと聞くと、今夜宿の長女が結婚するので、それを見せつけらるゝのが溜らないと云うた。井上圓了なども此頃から熱海に来て、露木の陶器店の薄暗い不景氣の二階に起臥してゐた。

自分が翁と高田博士と熱海に落合うたことも度々あつた。ある時高田君が云うには、吾々は單獨に此地に別莊を營む力はないが、三人で共同別莊を營むではどうかと云うた。翁は例の諧謔を弄して共同墓地かと戯れ、三人打連れて其の場所を検討したこともあつた。なんでも今熱海ホテルのあるあたりの丘陵が見晴しがよいから此邊にするかと評議したこともあつたが、遂に實行に至らなかつた。然るに翁のみ熱海に因縁があつて、終に獨力で別莊を設けた。それは荒宿の別莊で其地は今の露木の別館の地續で川に臨んだ所であつた。二階に八疊の書齋と十疊の寢室があつて、階下は茶の間と下女部屋があつたに過なかつたが、翁は寒中は多く此別莊に

來り、多くの著作はこゝに成つた。自分としても此別莊が忘れ難いものである。自分が毎年の初頭に熱海で翁の趣味ある談論を連日聞いたのも此の別莊の書齋であつた。此の別莊の設けられたのは今より二十七年前で、此頃聞いて見ると、十年ばかりはこゝに冬期に限り起臥されたと云ふことである。然るに追々熱海が繁賑に赴くに隨ひ、近所合壁が皆な待合や小料理屋に變じ、翁は終夜絃歌に惱まざるゝやうになつたので、此の別莊を棄てゝ更らに山手の方に地を相して今の雙梯舎を設くるに至つた。これが今より十七年前の事である。翁が此別莊を營む時地を相するに相當苦心され、自分も翁と散策しながら、あちらこちらとしば／＼探討したことがある。翁は熱海の地理通でどんな所でも知らぬ所がないが、さて翁一流の風景趣味に投ずる所はと云ふと容易に見當らなかつた。然るに通例「イリ」と唱へてゐる、水口村の小高い所に百姓家があつて、それは荒れ果た茅屋であつたが、二本の柿の樹の枝振が如何にも趣味があるので、翁はこれに惚れこんで到頭こゝと定めることになつた。こゝは丘陵であるから眺望がよく海を見晴すのみならず、熱海の市街も眼下にあり、背後には透達たる山が屏風の如く風致を添へて、遠く錦ヶ浦に通ずるトンネルを見透すことも出來、翁の風景趣味には尤も適つた所であつた。此屋敷は前の別莊地に較べると地積が十倍も大きく、雙梯を取込んで庭を作るにも充分

の餘積があつた。翁は流れを庭に引くに苦心して、其の浅い溪流に橋を架したり、山葵を培うたり、果樹や其他の樹木を植ゑたりして、古い石佛や石塔などを配し園に風致を添へた。建物もわざと茅屋にしたが、堂々たるもので荒宿のに較べると天壤雲ならざる差があり、幾多附屬の建築もあつて、追々執事の居る文化的の建築も成り、終に塔式の建物が庭下に經營された。それは階下が書庫で、階上にも書齋があり、熱海に一美觀を添へた。これは翁の趣味の結晶とも云ふべく、其意匠には翁も相當苦心されたやうである。書齋に上つて見れば四方の戸がひらくやうになつてゐて見晴らしがよく、夏時には涼を納るゝに足り、廊下に出て見ると、此邊に多く梅樹が植ゑられ、夜分の電燈は其影を白壁に映して繪を見るごとく、自分をして「梅花書屋」なる哉と叫ばしめた。翁は普請巧者であり、亦建築の意匠に富んでゐた。此の塔庫と早稻田大學内に設けた沙翁の運命座に做つた演劇博物館は、全く翁の意匠の標本として長く傳ふべきものである。

翁の趣味的經營は追々成つたが、翁に仇なすものは熱海の繁榮である。丹那トンネル開鑿の結果、其吐き出す土砂が大なる山をなし、翁の書齋から見るとそれが正面にある。翁は此の土砂を見て、他日富士の形の上に土を盛り、山下に水を引いて五湖に擬し、熱海富士と名づけて

名所となすべしと巨細に私案を立てたが、實は斯くせざればこれも目障りのもので、翁としては勘辨の出来ないものである。翁の邸宅の丘陵下には大なる温泉兼割烹旅館が出来た。これは敢て風致を害するでもないが、其の庭中に落る瀑布は夜中騒々しく、不眠症の翁には勘辨が出来ず、夜中だけは瀧を落さぬことに、一時交渉が成つたが、實は隣地に温泉の湧き出したのは翁の別荘の大缺點を補ふことになつた。翁の家には温泉がなく、毎日村の共同湯から人を役して浴室へ運ばせてゐたが、隣地に温泉が湧き出したので、之れを管で引上げ翁の浴室に通し得るやうになつたのは翁の仕合せで、熱海の繁榮を一概に仇とする譯にはゆかぬ。併しこの様な都合のよいことは他に無くして翁の目障りになるものが續出した中に、翁の庭先きの一角に柴四郎氏が其夫人を居らしめんと茅屋を建てた。これには全く前面が遮られ、見晴しを失うたので、翁も閉口し、其の茅屋をつぶすため、終に其土地を購ふに到つた。此地こそ翁がこんど終焉を告げた新築の室のある所で、實は夫人のために建てたのである。萬一夫人が病む場合、別荘には病臥の室がないと云ふので設けたのであるが、翁はこゝに病み、終にこゝに歿したのである。

翁の雙柿舎から坐して見ての一大風致は屏風の如く透邇たる鬱翠の山で、翁はある時朱塗り

の華表を作り、山の持主に交渉して、山上縁樹の間に之れを立て、奥に神祠でもあるかと思はせる工夫をして風致を添へたこともあつた。これは荒宿の別荘の庭園が餘りに狹隘であるので前の農家の畑にある柑橘を毎年買収して、それを詠めとしたと同じ筆法であるが、段々分譲地が盛んに行はれて来て、山の切り崩しが始まり、追々禿山になりつゝあるのには、翁は奈何ともしがたく、毎日附近の景の俗化するのを憤慨し、いつも苦情ダラ／＼であつた。

自分は熱海に遊ぶ毎に雙柿舎に宿泊することが數年つゞき、其都度翁の書齋に起臥した。自分是我儘もので他の家に泊ることを好まないが、新年は熱海の旅舎が混雑して泊る處がないのと、翁夫婦が自分を款待さるゝので終に厄介になり、毎日晚酌に翁と快談を交ふることが此上ない愉快であつたが、夫人が眼疾に罹られてからは、宿泊を辭した。翁の書齋は翁の趣味で作られてゐて、極めて居心地がよく、いろ／＼の書物も置かれてゐるので、退屈を覺えることがなかつた。或る時書齋の作り付けの机に憑つて物を書いて、フト窓外を望むと隣家の百姓家の馬小屋から馬が頭を出してゐるので、自分は思はず噴き出した。翁の生年の干支は羊であるので、小羊とも云うて居らるゝが、こゝに翁が坐して時には隣家の馬と鉢合はせをすることであらうと、をかしく思うてそれを晩食の笑資としたことを思ひ出す。此書齋の下には隣家の瀑布

が轟々の聲を發するが、それは前に録したごとく、夜中は止めるので別に聲もないが、丹那から吐き出す土砂を箱から出す際にコツ／＼箱を敲く音がするので、往々夢を醒さるゝことがあつた。コンナ事から丹那トンネルの成否問題が、折々翁と共に討論され、長い間氣に懸つて多少難工事の経緯を調べたこともあつたが、愈々開通となつたので、わざと數多の友人を誘うて三島まで行き、神社境内の茶店で友人に對しトンネル工事の説明をしたが、熱海に戻つて酒宴を張つた時は、翁は重患に臥し容態がよくないと聞き、いつもなら訪うて丹那通過の報告をする所であるのに、それどころでないで、自分も黯然たらざるを得なかつた。

自分は熱海に赴く毎に、翁と散策を與にし、附近界限は跋涉し盡した。翁の仲兄の存命時代には初島遊覽に同伴したこともあり、五七年前には翁夫妻に伴はれて伊東に遊んだこともある。梅園などは幾十回行つたか知れない。熱海も繁昌と共に刻々に形勢が變じ、吾等が會つて散策中名區として喜んだ所は今概ね亡びた。翁も一種の風景歎美家で、氣に喰つた風景となると幾回となく探討した。その一二を云ふと、梅園の奥に今も亭々として空に聳えてゐる、一本の松が頗る翁の鑑賞に入り、之れを光琳の松と云うた。その樹下に大なる老樟がある、地震で大いに損うたが、これこそ翁が役行者を作する時、自分から行者に扮し、試みに攀て坐した記念

樹である。嘗ては來の宮に行く途中に風致のよい處があつて、そこに廢屋ながら門に四五株の柳があつたが、翁は之れを喜んで五柳先生の家と稱したこともある。今は全く痕跡もないが、衛戍病院の門前に溪流があつて、其上に鬱林が天を翳し晝も薄闇らく、其溪流は傾斜があつて山葵が培養されてゐたので、山葵谷と云ふ名があつた。こゝは翁が喜んだ所で度々散策したが翁は此溪流に多く蟹の居るのを見て、蟹は山葵を喰ふものと解し、或る時云はれるのに蟹は文人に賞翫される動物だけに生意義に辛い物を嗜むと見えるが、實は渠れは山葵の大敵であると、自分も其頃は同感であつたが、後に調べて見ると山葵を害するものは一種の黴菌で、蟹ではなく、蟹は山葵と同じく停滞しない水を好むので同居してゐることが解り、其後翁と節を曳いた時此ことを話して蟹の冤を雪いだことがある。翁は自身の庭に故ら山葵を培養してゐる程此植物の愛好家である。翁と自分と同賞の所が尙他に一ヶ所ある。それは伊豆山に赴く途中、元と鳥尾子爵の別荘地の一端で高く崖をなしてゐるあたりで、そこは深く谿が落ちこみ、一方の山から溪流が奔つてゐる。そこに橋が架されて、人は何心なく通行してゐるが、熱海から行く時此橋を渡つて直ぐダラ／＼下りの道を民家を沿うて降ると海に達するが、此邊の風景に一種の趣がある。殊にある農家に馬専用の浴場があつて鑛泉が下からどん／＼出て居る。温度が低い

ので、馬が愉快さうに四足を入れて佇立してゐるさまが如何にも興味深く感ぜられ、此景を洋畫にしたらよからうと評し合つた。實に連簷櫺比農家であるから、道ばたに大根の皮などが遺棄され、蕪穢を極めてゐるが、流石に美景はそれ等に向妨げられず、此の一區に一種の山水美がある。翁は此の風景を賞して之れを沙翁の作に比し、沙翁の作は宛がら此景の如きもので、細かい所に文の整はん所もあるが、大體の文章美に何んとも言へない所があつて、如何にも規模が大きく、小瑕瑾があつても少しも大體を傷けない、そこに沙翁の大手腕を見る。他の作家例へばイブセンなどは、頗る字句の洗練に力を籠めて、一點の汚穢も留めないやうに掃除が届いてゐるが、それだけ規模が小さく、遠く沙翁に及ばない、と説かれたことを今も記憶してゐる。

自分が翁から種々の文學談を聞いたのは重に荒宿の別荘時代である。毎年々首に熱海に出かける十日位は滞在したが、旅館では何んの爲すこともないから、朝餐後は翁を訪ふことが毎日で、樓上の書齋で翁と對話をつゞけて正午近く辭して歸るのが常であつた。翁は例の能辯で三四時間ぶつ通しに種々の事を語られたが、多くは文藝上の事に互つて、いつも興味を以つて傾聴した。毎日／＼如此であるから階下の夫人はよくも毎日話しても種が盡きませんな杯と云

はれた。ある時は散策中に、翁が興に乗つて文藝談を試み家を出ると直ちに談じ始め、梅園に赴く途中無氣になつて談を続け、梅園に達しても憩もせず、直ちに踵を回らして歸途に就きつゝ談話を続け、幾んど無意識に往復したことも度々ある。ある時翁の云ふのに自分ばかり毎日話すだけでは興がない、隔日に君と僕と語りたいたいはれて、自分も半日愚談を試みたこともある。自分は斯くして旅舎へ歸へると別に用もないから、翁の談話を筆記して二三時間を費やした。其筆記を此度搜がし出して見ると十冊許りもあつて案外委しく書いてあるが、明治三十五六年から三十七年頃の筆録が多い。此等の記事を整理したら、翁を研究する資料となるかも知れん。

或る夜翁と酒を酌みながら君の好き嫌ひを聞かせよと云ふと、翁云く、私は紅葉とは異つて物に頓着しないから好き嫌ひなどは無いと云はれた。然るに自分からいろ／＼のを持出して聞くと、中にはおのづから好悪があつて随分抱腹に堪へないやうな話もある。まづ食物に就て云ふと好物は自然薯のとり、汁と鰻位なもので、總じて新らしいものでなければ嫌ふ、新らしいと云ふのは貯へたものに對して云ふので、罐詰類は尤も嫌ひと云ふことである、骨董書畫などの類に至つては絶対に所持するを欲しない。なまじい少しばかりあるのは目障りと云うて

は仕舞込む流儀だと云ふ。先年文科の校友が謝恩の爲め紫檀の大机を贈つた時、その置き所に困つて眼のとゞかぬ長持に入れてあると云ふ始末、自分は壁間に掲げてある山陽の幅を指さしこれは君の藏品に不似合でないかと云ふと、これは仲兄の所持品を預かつて居るのだと云ふ。衣服に就ても好みはない。昔しは縞柄位は分つた人で、小説にも衣裳を細かに描寫したこともあつたに、それが一變して今は少しも頓着しない。それで小説が書けるかと問へばそんなことは小説家の本領でないとうてゐる。翁は右の次第だから、自家の衣服には絶対に構はない。細君が側に居つて云ふのに、主人は着古しの衣類が一番よいと申すので、そればかり用ゐます。つまり體によく合ふからと見えますと、これは細君の考、自分は之れを聴き、如何さま君が今現に着てゐる、茶色の毛絲のシャツも随分古るものだね、自分が知つてから既に十年にもならうと云ふと、細君笑つて、これは毎年／＼自分が作つて改めますので、古るいものではありません。しかし何んでも在來のと同じの／＼と申しますから、色がいつも同じですと云ふ、自分は更らに一問を發した。ソレヂヤあの茶色で太と縁のある洋服は學校でよくお目にかゝつたがあれこそ随分古るいのですと云ふと、細君は吹き出し、あれはヤット此頃暇を出しました。あれも着慣れてよいからと申しますので、洋服屋に同じ柄は無いかと尋ねましたが、流行が棄つ

て、どこにも無いと申しました。若しあればそれで新調する積りであつたと聞き、あのオールドスタイルの洋服を思ひ出して一笑を禁じ得なかつた。そこへ翁は一話を附け加へた。或る年藝人や文人が鶯溪に會することがあつて、自分(翁)も招かれた。その時自分は例の洋服で小兒を連れて往つたが、あとで聞くと誰れも坪内とは思はなかつたと云ふ。成るほど其時日本風の烟具、即ち君が僕の三種の神器と冷かす、指しつきの烟草入をズボンに差し込んで往つた、折々それを引き出してパク／＼やつたから、随分妙に見えたかも知れんが、自分はやり慣れてゐるから、無論他人の思惑などに氣のつく筈はなかつたと云ふのには、自分も絶倒した。翁の好き嫌ひを尙附け加へて云へば、翁の本貫である名古屋の人が嫌ひ、招かれて人の家で馳走を受けることが嫌ひ、あらゆる集會に出席することが嫌ひ、親友以外に手紙を書くことが嫌ひ、天才めかしい人に接することが大嫌ひと、なか／＼列挙すると嫌ひのものが少からずある。

翁は多趣味の人であつたが、あの人の第一趣味は劇で、幼少から芝居を好んだ、翁の道樂は何かと云うたら、劇だと云はねばならんが、その道樂が本藝となつたので、娛樂どころか却つて苦痛となつたとは、翁の毎々自白する所であつた、翁は専心劇に没頭したから、他の趣味は一切頭を向ける暇が無かつた。

翁の不眠症も長い間の事で荒宿時代既に悩んでゐた。翁の二階の寢室を蔽ふやうな樹が一本あつたが、それは夜分になると眠る如き態度で一切の葉が垂れ下がるので、椈びんの樹と名づけられてゐる。自分は此庭樹に氣がつき、或日翁に云ふには、樹ですら夜分は、彼れが如く眠るのに、君は何故あれに見習はないかと詰つたこともある。なか／＼一週一回も自然の快眠を得ず、眠薬を藉りて僅かに眠る様な始末であるので、翁の家に宿して毎朝起ると先づ翁に前夜の眠況を聞くことが例であつた。或る時自分は翁に問うた。君は連宵眠られぬと云ふが、そんな時に巧い作の工夫が案じらるゝかね、翁云く、床に這入つて二時間位寝ないで、いろ／＼考へ居る内に、自分ながら驚くほどに神経が澄み、頭腦が透明になる、斯うなるとなか／＼巧い工夫がつくこともある。一例を挙げると、淀君夢の場の趣向だ、あの金鈴銀鈴を櫻樹に繋ぎ、風吹けば琅々の聲を發し、散すれば天を飾る星となるあの趣向などは、深夜フト浮んだ案である。連宵睡を得ないのは衛生にわるいは知れてゐるが、作家としては實は大切な研究時間だ。唯僕以外の作家は夜分不眠の代りに朝寝をするが、僕は朝から學校の稽古があるので、長く寢て居ることが出来ない……ナニいつ筆を取る、僕は朝旭日の瞳々として輝く時分、戸を明け放して書くのが一番好きだ、これは作家各自のテムペラメントに依る。陰鬱な作家は白晝でも闇黒の

カーテンを卸して置なければ書けん人がある。

翁は不眠症のある上に長らく胃酸過多症に困んで、嗜好の食の攝れぬことが長かつた。あの羸弱の身體で、よく喜壽迄保つたと自分は思ふ程である。全く翁の氣魄が身體を支へたかと思ふ。いづぞや大隈會館で例の朗讀を試みた時などは水一滴も口にせず、三時間も更らに倦む色なく、聲鮮やかにやつてのけたなどは古稀翁としては實に驚き入つたことである。

翁の別荘の茶の間には一枚の洋畫の額面が掛つてゐる。椅子に坐してゐる大隈老侯に翁が顔を近寄せて何事か語つてゐる圖である。これは翁がある人に寫させたものだが、これに就て思ひ起すことがある。いづぞや大隈侯と翁が共に演壇に立れたことがある。翁は自分の演説を侯に二時間も聞かせるのはお氣の毒と遠慮して、侯に先づ演説を請ひ翁は後に回つたが、侯は自分の演説を終つても席を去らず、椅子に憑つて二時間に餘る翁の演説を靜聽せられた。翁の茶の間にある額は其時の寫眞に據つたもので、侯は翁が降壇すると翁に向つてどうも君は如何にも面白相に講演するね、多分愉快であらうねと云れたが、侯の眼には愉快らしく映しても、翁は一生懸命で、如何にすれば聽衆が理解するか、如何にすれば聽衆を倦ましめざるか等に苦心慘愴であるかを、翁は深く包んで左も愉快さうに談ずる所に翁の藝術があるので、翁の講演は

何時でも聽者を陶酔せしめざれば止まない概があつて、翁の講義は天下一品と一般に評されたのも偶然でない。自分は此の茶の間の額面を見る毎にいつも翁の能辯を思ひ出さずには居られない。

或る時の晩酌に自分はフト思ひ出して、翁に向つて戲に例の三種の神器はどうなかつたかと問うた。翁の家には吾等が稱して三種の神器と稱するものがある筈、それは何かと云ふと、

(一) 蝙蝠傘 毛繻子で作られ、羊羨色に褪めても居たが、これが幾年か東京専門學校時代に、翁のお供をしたものだ。

(二) 朝鮮扇 尺長の油を引いた鐵扇、これが家康の扇の指し物と同じく、幾戰場を経たかしのれない古物で、翁は演説の都度これを振り廻したものだ。

(三) 書物入靴 これは銀金具がつき、新しい時は立派なものであつたが、傘と同じく長年學校へお伴をするうちに雨露にさらされて、追々革が硬化し、色もはげて見るかげもなくなつたが、これは早大時代となつても翁のお伴をしたものだ。

此外に翁の若い頃を偲ぶ品が三點ある筈、

(一) 渡邊省亭筆 掛幅

月下櫻花散亂の圖

(一)象牙の烟管筒

これには櫻花の散りたるを彫刻しあり

(二)箸箱

黒塗に櫻花の蒔繪がある

此等は翁が龍岡町時代自から通がつて作つたものだが、翁は「あれも舊惡全書と同じ取扱をして居る」と笑つたが、細君に聞けば以上三種の内烟管筒は、翁が廢烟を決行した一ヶ月ばかり前に紛失したさうだ。

翁は性急の人で思ひ立つと容赦がなく直ちに取りかゝる、何時頃訪問すると云ふと、その時間前から必らず待つて居る、時間を後らすと不満である。萬事が其通りで原稿を作る時は筆が走り、繪を書く時は筆が飛ぶ、散策の時は健脚で坂路を意とせずズン／＼歩るき、杯を舉げれば一舉に飲みほすのが例で、相手をする事が甚だ難儀である。翁のセツカチは萬端の事に就て徹底してゐるが、セツカチにはソ、カンイ失の附き纏ふもので、いつぞや貳百圓かの紙幣を渡した時、よせばよいのに不慣な手で計算を始めた。幾許か足らぬと云うたが、實は十圓札に

若干の二十圓札が交つて居るのに、區別なしに勘定した誤りであつたので一笑を發したことがある。

翁の家庭の事は細君と分業で、俗事は細君の擔當だから、翁は俗事に遠ざかり、自から金銭の勘定などする必要がない。外へ出る時は細君が若干の貨幣を紙入に入れるが、いくら在中とも知らずに翁は出て行くやうな始末であつた。

翁は嚴正の人であつたが其實温情があつて、窮迫の門人其他に對しては甚だ涙もろく、翁の生涯にどれほど人の急を救うたか、幾んど枚擧に暇ない位である。一面責任觀念が強く、金銭の事は勿論、其他に就ても責任を果さずしては一刻も安んじない人であつた。前年大患に罹られた時、幾んど危篤に近い病態であつたが、恰かも自作の熱海のペーゼントを町で演ずることになつたので、翁は病床に三絃や舞踊を自分から指導されたが、瀕死と傳へられた翁の病室から三絃の聲が外に漏れたので、人は奇異の思をなした。此の一挿話も翁の責任觀の一端を語るものである。

翁は多方面の趣味家で、行く所として可ならざるなき才能を有し、繪も書けばうまく和歌も出來れば小説も書き、芝居となつては脚本も書き舞臺の監督もやる。これほど多方面の藝があ

りながら、さて道樂は何かと尋ねると道樂は無いと云うてゐる。實は幼年の頃から芝居が大好きであつたから、芝居こそ翁の道樂でありさうであるが、翁は劇の改良向上を終生の仕事としたので、道樂でありさうなものが、遂に本業となつた。本業となつてみれば遊びとも又すさびともならず、仲々苦しい辛いものだと言つてゐた。翁の述懐の和歌はこれを道破してゐる。

二心ゆめもたじとて唯一つ此わがすさびをしつとめとはしつ

遊びとも又すさびともすなるわざをつとめとすればうきこと多し

わみづから人にならばで作るてふ此すさびなくばわれ生けらんや

世間の人がすさびとするものを翁は、務めとしてゐるので、憂きことが多いというてゐるが、併し樂もおのづから苦中に存するので、翁はこれが無ければ生きて居られんと本音を吐てゐる。翁は非常の凝り性で、何か研究でも始めると徹底しなければ止まん、殊に劇は翁の半生の事業であるから、其の凝り方はすばらしいもので、見るもの聞くもの皆な劇の材料とする。劇が翁の頭腦全部を占める天地であるごとく、何をみても何を聞いても劇がつき纏うてゐて、何事も劇を以て批判せんとする。

翁は、或時私の家に訪ひ來り、玄關前の松をしきりに賞讃し、此の松は稀れにみるよい形だ、

就ては君に勧告することがある。それは玄關の入口の扉を四枚の白木の檜板にしてほしいと云はるので、自分はその意味を推し得た。翁は此の松をみて能舞臺の背景に畫く松を聯想し、その背後の扉を白木にすれば能舞臺ソツクリであると思うたのである。此松は自分も愛してゐるのだが、大震災後大切の枝を枯らして幾許風趣を害したので、翁の折角の勧告に従はずにゐる。

翁は私にそんな勧告をする位であるから、一と頃大久保余丁町の自宅の板屏を黒色と柿色と互ひ違ひに塗つたことがある。言ふまでもなく芝居の緞帳に擬したのである。

翁と連れ立つて大阪へ赴いた時の事だ。或る人に招かれて萬灘で饗應を受けた。その頃此割烹亭は改造前で、日本造りであつた。樓上に立つて望むと、浪華橋が近く見えて多くの人が橋上を往來してゐる。此家の周囲には板屏があつて家との間は僅かに四五尺位の餘地が存する程の狭くるしさで、そこに只一本枯れかゝつた見越の松がある。自分はこれらを見て、俗氣の紛々たるに寧ろ不快を感じたが、翁には妙に氣に入り、これは全く芝居がかりだ。此の見越の松もよいが、あの橋の書き割は何んともいへない趣があると褒めそやしたので、如何さま芝居道の觀察は違つたものと思つた。

又ある時、翁と共に高田博士の國府津の別荘に宿つたことがある、翁は不眠症だから、夜の

明けぬ内から眼を覺まして居るので、自分もおつき合ひで早くからいろ／＼床中で談話を交へてゐると、翁は脚本の書き方を語り、脚本は單調であつてはならぬ、どこかに山がなければならず、莊重の所もあらねばならぬが、くだけた所も亦必要で、錯綜趣をなす所に妙があるといふて、家屋の構造論に移り、この高田君の建築は如何にも氣が利いてよく出来てゐるが、どの部屋もみな同調であるやうに思はるゝが、君は何んと思ふと云はるゝので、自分も同感を表し、別荘などは、待合めかしく洒落れた作りが多いけれども、なんにしても座敷は莊重でなければならず、書齋に洒落れた意匠も望ましくない。納戸などこそ洒落れた意匠が望ましい。家も君の脚本の説と全く其揆を一にすると答へ、こゝにも翁は劇をもつて建築を評された。

翁の建築評で聯想の起るのは演劇博物館である。これは翁の古稀を祝し且つ記念するために早稲田大學の構内に建てたもので、これも全く劇的である。昔し沙翁劇の演ぜられた運命座の略圖が残つてゐるので、翁はそれによつて意匠を凝された。即ち正面の玄關が舞臺で左右の翼を張れば觀覽席が出来るのである。劇の博物館建築に沙翁の舞臺を應用したのは誠にふさはしい工夫で、翁ならではの思ひつかない意匠であると感じたが、此館こそ翁の劇の趣味を永久に傳へるであらう。

翁は其半生を劇に精進した。創作の名脚本も少なからずあるが、劇の世界的大脚本、沙翁全集四十巻を完譯し、普及版を作るに當つて大なる修補を施し、全然書き直した篇もある。翁は五十年の長き其反譯に心血を瀉ぎ其完成と共に終に斃れた。翁の死は惜んでも餘りあるが、不朽の此大業を成し遂げたので翁にも遺憾はあるまい。

翁に就て語れば必ず劇の事に涉る、劇を離れては幾んど翁を語ることが出来ない。翁と劇とは實に一心同體の如くである。翁は常に曰く、人世は大なる劇であり、天地は大なる戲場である。然り翁は此見解をもつて劇に終始し、劇のためには何物をも犠牲に供して惜しむ所がなかつた。實をいへば翁の一生も劇であつた。翁ならではの脚色し得ない大なる劇であつた。殊に翁の最期は壯烈で吾等を泣かした。翁は發熱と闘つて沙翁譯を征服し畢るや自ら不起を覺り、勇猛心を鼓舞し死前十日早く飲食を絶ち、絶對に注射を辭し醫者をして手を下すに由なからしめ、遂に大往生をとげた。觀じ來れば翁の最後も劇的であつた。

四五年前熱海に赴いた折、翁に就て案山子のことを色々尋ねると、翁は翌朝二三枚の自畫に案山子の故事や、沙翁中にある案山子や、自作の歌謠にある案山子などを書いて贈られた。翁は親友などに揮毫を興へることを決して惜む人でないが、強ひて頼む人には絶對に諾せず、方々から

依頼し來るものを返却するに可なり執事は勞するのである。翁は興動けば直に筆を馳する流儀で、いづぞや熱海に大地震のあつた時、翁と高田氏と自分三友が久方振りに同席したが、翁は三人宴會の圖をもつて寄せられた、それには自分の杯の持辭が書かれてゐるが、自分は無意識だ
が書生時代の持辭が今も其儘だと翁は云はれた。亦銀座の繩暖簾演作と云ふ家を紹介せられた
時も、戲畫で演作の光景を描き數首の狂歌を添へられた。尙幾多折に觸れての墨蹟は架中に少
らずあるが今は翁を偲ぶ大切な記念物となつた。翁の臨終に就ては多く語ることが出来ない。
唯だ夫人の語らるゝを聞くに聊かの苦悶もなかつたと云ふ。併し死前十日頃から全く覺悟を極
めて、少量の水の外絶食を續けられたと云ふ。翁は常によく語られた。餘命があつても働くこ
との出来ない餘命は何もならないと、翁が臨終に大なる覺悟のあつたのも、平生の翁の言に徴
すると自ら理解がつくので、吾等は誠に悲しみに堪へない。自分は長い間熱海を樂土として屢々
往來した。それは氣候が暖で温泉の湧く故では無かつた。此地に翁が居らるゝからであつた。
翁に親炙して翁の薰陶に浴する事が、自分の此上のない愉快であつたからである。而るに雙梯
舎あつても今は翁がない熱海は最早唯の熱海と成り畢つた。これにつけても思ひ遣らるゝのは
未亡人が如何に寂寥を感じらるゝ事であらうか、自分は五十年未亡人を知つて居る。未亡人が

此長い年月翁に盡された内助の大なるを憶ふと、落涙を禁じ得ないものがある。翁は幾十年不眠
症や胃酸過多症に罹つて苦惱し乍らもよく喜壽を迎へ得た。之は一に夫人の行届いた看護と注
意に依るもので、夫人は醫師よりも遙かに大なる任務を果された。夫人は子が無つたけれ共養女
を始め長仲兄の兒女を養育されたのみならず、翁が家庭に舞臺を設けて子女に藝術を教へられ
た際は、夫人も翁を助けて舞臺を監督し、且つ身躬から和洋の樂器を操縦された。夫人は或る意
味に於て翁の藝術の内的相談役であつた。夫人は家政を見るに周到で、殊に調理割烹に通じ、失
明の後外出の時は翁に手を引かれ乍ら、家に在つては調理割烹を自らせられた。夫人の勝氣は翁
に比して敢て遜色無かつた。自分は筆を本篇に絶んとするに臨み、夫人の功を稱へねばならぬ。
翁は六十歳の頃から、和歌を折ふし詠ぜられた。いづぞや自分に書き與へられた、「きまぐれ
集」と題する翁自筆の歌集が一冊ある。その巻首の歌は

六十を二つ越えたることゝなりしきしまの道をふまんとそ思ふ

老い人の飛鳥山ふみならなくにむそちをこえて入るや此道歌にあらずたゝことなりといふ
勿れたゝことにもあらず獨りことそこれ

尙ほ集中より數首を摘録する。

新居

わか住むは熱海の戌亥となり村字入村と土地の呼ふなり

古詩に「人生不滿百、常懷千歲憂」又淵明に「世短意常多」東坡に「意長日月促」の句あり。
ねられぬも或時によし意は長く世を足らはぬを夜を日に繼かな

不眠

あなちねられの夜半を呪はんや作と静思は多くこれに得つ

われ好かす

われすかす古風な干菓子諸罐詰二番煎し茶やくさ反譯
形式の手紙書くこといとつらし鄭重な禮を要するはなほ
まこゝろの伴はぬ物を貰ふいや頭をさけて物頼むいや
頼まれて物かくはいや眞似もいや外國人を拜むのもいや

ひとりこと

髮髭に霜はおけとも目も耳も心も筆も老いぬと思はず
なからへは三年は三年十年あらはとせのわさをわれ營まん

今死ぬもわれはうらみし然れとも尙世にあらはすへきこと多し

新居の庭に二百年経たらんと思ふ柿二本あり

我菴のもゝ年柿の枝越しに咲く梅こしに青海を見る
冬の庭に瘦せ仁王とも立ちはゝる二本柿の姿おもしろ

熱海の磯の松枯れゆく

とし／＼に枯れゆく磯の松のことく古き手振の亡ふる熱海

創作

孫子なきわれとまこゝとわか作を思ひつゝ生めと捨てたきか多し
装成りて手にするまでと近き作をいつもさすかに頼むおそまし
をさなくも醜くもあれと生着れはいろ／＼きぬをまとはせもしつ

以上の物語を書き終つて後明治三十七年中の雜録を検索すると、若かりし頃の翁に就て十枚ばかりの記を發見した、既に物語の内に収めた事實もあるが、全く漏らしたことが二三あるから、爰に追補する。

明治廿三年帝國議會が初めて開かれんとする時、愛知縣からは、遙々總代を上京せしめて

翁に議員の候補者たらんことを懇請したのを翁は拒絶したとの夫人の談で自分には初耳であつた、それも其咎自分はその頃郷里に在つて東京に居らなかつたからだ。此話が出ると翁は傍らより俺れのやうな臆病なものがどうして政治家になれるものかと一笑し去つた。が、實は此事は翁が自家の弱點を自白したものであつた、翁は餘りに正直過ぐる人であつた。をかした話だが、あの頃は大學を出ると、誰れもが一時の融通をつけるため、高利を借りたものだが、翁は例の神経質と正直とで、曾つて一たびも約を破つたことがなかつたので、いたく高利貸の信を博したことがある、此事實の如きも翁の性質の一端を現はしてゐる。

翁は大學を出てから寓居を諸方に移したが、一ト頃本郷元町の山川健次郎氏(後の男爵)の向側にある三軒連なつた長屋を借りてゐたことがある。これは人から託された子弟を置く爲めであつたが、その頃は漸やく活計丈は差支なく營んで行けたと見えて、學生の外二人の同窓を食客として收容してゐた。それは他日相當の司法官となつた香坂駒太郎氏と染谷徳五郎氏(此人は其後どうしたか知らない)の二人で、皆大學を卒業しながら失脚して身の託し處がなく、翁に救はれて可なり長い間翁の厄介になつてゐたが、往々飯焚婆に酒を買つて來い肴を取つて來いと云うて我儘をやると婆は承知せず、それは旦那様に對して濟みますまいと

云はれて頭を搔いたといふ話が残つてゐる。翁は此頃から義氣のある人であつた。

翁は後に小石川の傳通院の或る寺院に居たこともあるが、其後本郷の眞砂町に移つた。これは翁に學生を託した永富謙八氏が、特に製圖して新たに作つた家で、廣い食堂の外貳間もある家であつた。翁が書生氣質を書いたのも、亦結婚したのも皆此家であり、山崎覺次郎、丘淺次郎二博士が翁の監督下に勉強したのも此家である。此家の所有權は永富にあるやうだが、實は永富は翁に與へる積りで建たと聞いたこともある。翁も書生の監督を廢めることになつた時、一日も他人の家に居ることが例の氣象で厭やになり、しきりに貸屋を探がしてそこに引移つた。これは永富の本意でなかつたらしいが、翁が無理に移轉したので、已むなく眞砂町の家を翁に賣らせた。それが五百圓に賣れたので、勿々其金を細君に持せて永富へ遣はし、金を渡さうとすると永富の云ふには、あの家は坪内さんにやる積りであつたから、此金は受取るまいと云ふ。翁は高利貸に褒められる程の人間で、他人の金を貸りて居ると、夜も寝られない神経質だから、前以つて細君に入念に是非渡して來いと言ひ附けてあつたから永富の言ふことには従はない。そこで永富も少し考へて、何か書いたものを嚴封して細君に渡して云ふには、此中に一通の證書がある。坪内さんが他日困ることのあるまで、これを開

かすに仕舞つて置きなさい。其時開封さるれば必ず多少の便宜を得らるゝであらうと云うた。細君は此思慮ある取計に對し辭退も出來兼ね、謝意を陳べて立別れ、數年これを篋笥の底深く秘め置いたが、大久保の邸宅を營む時試みに此封書を開いて見ると、五百圓は何時にも贈與する旨が書かれてあつたと云ふ。此小説めかしい話は翁の性格を語ると共に、永富氏の義氣を語るものであつて、誠に美談となすに足る。

此程文部省の社會教育局長山川建氏に初めて面接した折、逍遙翁の逸事を語られた。山川局長は山川健次郎男の次男で健次郎男の實兄の山川浩男の家を繼でゐる人である。氏の談話に據ると、翁は一時男の所有に係る五軒の長屋の内に住したことがあると云はれたが、前に記した山川氏の家の前の長屋三軒を借りたと云ふのが即ちそれに當るのである。其頃山川家には三人の女中がゐて、四十恰好の年増が女中頭で他の二人は若い女であつた。其内の一人が翁の風貌を見て熱烈の戀に陥ち、どうあつても坪内さんの嫁になりたいと云ふので女中連も困り、結局直接談判と云ふ事になり、女中頭が連れて坪内氏に引合はせ、本人より切々の情を訴へると、無残にも氏は言下に刎けつけたので、いたく女を失望させたと云ふ、これは吾等が會つて聞かざる逸事だが、若い頃の氏は女に思はるゝ程の美男子であつたことは確かである。

大隈侯追隨記

所謂る侯の大名旅行

大隈老侯の旅は大名行列と呼ばれて有名であつた、併し其真相は知れて居らぬ。唯だ侯が旅行の度ごとに、多數の隨伴者があつて如何にも賑やかである外形を見て大名行列と云つたに過ぎない。實は侯の旅行の内容はなかく複雑で、到る處侯が豪華を極めたのが大名行列の内容であるかの如く思ふのは真相を知らない皮相の觀察で、そんな成金の俗的なものでなかつたが、これまで侯の旅行の内容を如實に書いたものがない。畢竟侯に隨伴して侯の動靜を仔細に知る者で無ければ書けないからで、斷片的には多少の記がないでもないが、較々纏つたものは無い。

自分は大隈家の家職でないが、いつも侯の旅行には家職同様に必ず隨伴した。其の譯は侯の晩年は早稻田大學の總長で、大概の旅行は早大の總長としての旅行であつたから、早大から理事若くは幹事が隨伴せざるを得なかつた。但し侯の旅行が政治的であつた時も、總長の肩書

を帯びて居られた關係上、早大から誰れぞ隨行する必要があつた。侯が首相として議會を解散し、總選舉の爲め旅行された時も、自分は恰も侯の後援會の會長であつたので、職責上矢張隨伴の必要があつた。斯様な譯で、自分は侯の動く時は必ず追隨したので、おのづから三太夫頭の觀をなし、出先の公的交渉はすべて自分が擔任し、旅行の先々侯を招待することが頻繁にあつたが、自分の關門を通らねば、侯は諸否を云はれなかつた。行違を豫防するには事實斯くせねばならなかつた。自分はこれが爲めに多忙を極めた。長途の汽車などで、侯の話相手も自分であり、旅館に於ても侯が寢に就かるゝまではお伽役は自分であつた。去れば侯の旅中の巨細を知るものと云はゞ、不束ながら自分であると云はねばならぬ。

侯の旅行の規模

侯の旅行の場合、汽車の二三室を買切ることが幾んど例であつた。侯は身體が不自由であるので、醫師や看護婦が必らず隨伴する、晩年は侯の衛生を氣遣はれて夫人が大概隨伴されたから、夫人に屬する女中も二三人加はつた。侯は動もすると知人を勧めて一行に加へられたこと

もある。足利へ赴かれた時などは、支那が足利の織物の得意先であると云ふので、支那公使并に公使館員を伴はれたこともある。各地に講演する爲めに二三早稻田の教授が大抵一行に加はり、侯を送迎するものゝ内、代表者らしいものが、三四必らず一行に加はる。各地の校友の幾許か加はるのは言ふまでもない。尙ほ大都會に近づくとき、必らず新聞記者が各社から入り來り侯を取巻いて其の談論を聴くが例で、それやこれやで一行は十五人位であつても、臨時の來客がどしどしやつてくるので車内に餘程の餘地が無ければならぬ。侯の荷物もあの不自由の身體に應ずる大なる便器や寢具まで携帯さるゝから、夫人のを併せて、如何にも大量のものであつた。汽車の沿道で侯の旅情を慰めんと種々のものを持ち込むものが多く、或る時は大なる盆栽を持ち込んで侯の坐前に据ゑたことがある。又薩摩琵琶を弾する婦人を車中に伴ひ來り、侯の面前に彈奏せしめつゝ、數驛を経過したこともある。私としても汽車中琵琶の彈奏を聴いたのはこれが初めて、驛頭に堵をなす歡迎者を驚かしたに相違ないが、大名行列など云ふに至つたのも此等の故でもあらうが、侯は敢て豪奢を喜ばるゝでもないが、種々の必要から斯く旅行が規模大きくなるのも止むを得ないのである。

旅行に先だつ準備行動

侯の旅行に先だちいつも準備行動に相當骨が折れた。關西方面は旅館其他の設備が調うてゐるから、餘り面倒もなかつたが、北陸地方の僻地になると、宿泊所に適當の處を得ないことがあり、已むなく地方の富豪の家を宿所としたり、新潟ですら當時適當の大旅館がなく料理屋を宿所に充てたことがある。私の郷里に行かれた時には親族の家に宿られたが、主人は準備の爲約一週間晝夜努力して萬遺憾なきやう没頭した。侯は足が不自由である爲めに浴槽を改造する必要があつた。又、汚損の疊は新しいものに替へ、寢具まで新調する宿屋もあつた。越後の長岡の旅舎では、家は新築だが庭がまだ出来て居らなかつたので、急に作庭をやらすと云ふのであつたが、自分はそれを制し、丁度夏期三伏の候であつたから、越後名物の雪を以つて山を築くべしと指圖をしたことがある。實は雪は澤山に包藏されてあるので十圓も拂へば山が築けるから經濟的に此案を立てたのだ。侯は二階の上り下りが難澁であるから、下座敷を必らず選ぶ必要があつたが、二階に相當の座敷がありながら、下座敷が相當でなかつたりして困つたこと

もあつた。すべて這般の準備も其地元の有志者が東京に打合せに来てやることであるが、自分の郷國へ侯夫婦が行かれた時は、それに先だち自分が萬端の事を自からやつた。幾回の旅行に自分が些しも與らず、萬端行届いてゐて、申分なかつたのは讃岐のみであつた。

侯の茶代

老侯がどこの宿に泊つても二百圓、三百圓の茶代を投ぜらるゝのが例だ。これを以つて大名行列とするものがあるけれども、老侯を待つには前陳の如く相當の設備も要るので、多くの茶代を投ぜられても實は不思議はないのである。維新の元勳達の内では、儉約家もあつて、俺れが泊つてやるのは宿屋の光榮だと云はん計りの自尊の人もあるが、侯は全く其選を異にして思ひ遣りが深かつた。そして夫人が同伴であるために決してその邊にぬけ目が無く、どこに行つても大もてゝあつた。侯は人に招かれた席に藝者などが來ると、それにも纏頭を與へる人であつた。金澤に行つて一泊された時、侯は自分に云はるゝのに、先頃井上が來て一週間もこゝに泊つた筈だが、茶代をいくら置いたか調べてくれとあつたので、調べた所井上侯は百五十圓置かれたのを隨伴の早川千吉郎氏が内々それを二倍にして置いたことを知り、其事を侯に告げる

と、侯は笑つて俺れは一泊だから三百圓でよからうと云はれた。侯はぬけ目のない人だが、夫人は常に氣にされて、夫人同伴でない時は、東京へ私が歸へると、大隈は一人で出ると兎角ケチで困りますと云はれたことがある。如何さま侯の各地の寺宮に參拜されると廿五圓を納められたが、夫人同伴なら其二倍であつたと思はれる。

大阪の宿屋の勘定

大隈侯はあの通り陽氣な人で、おまけに規模が大きく、宿屋の勘定などは寧ろ當むのを喜ばれたかに思はれる。大阪でいつも泊らるゝ宿は、この頃廢業した花家であつて、五六日も滞在さるゝと拂が數千圓に上り、自分は出納には全然關係のない身分だが、侯が滞阪となると、毎日どうでもよい訪問客が朝から宿屋に来てブラ／＼してゐる、それに對して無差別に酒飯を饗するは、莫迦々々しいやうに感じ、宿屋に申付けて多少の斟酌をした結果、その勘定はいつもの半分にも達しなかつたので、侯は家職に就て何故勘定が少ないと問はれた。聊か來客の接待に斟酌を加へた結果だと云ふと、侯は喜ばるゝどころか寧ろ不滿であつたと聞いたが、侯は景氣のよいことが大好で、旅中の費用は決して惜まれなかつた。所謂大名行列も内々侯は得意

であつたらしく、ある會場で藤田平太郎男に遇はれた時、俺れは貧乏でも苟くも足を擧げると衆と共に樂むのが愉快で、自然散財をするが、君などは金持の癖に四疊半で内々金を散じて衆と樂まない、チト僕に見習ひ給へと戯れ半分に揶揄されたことがあるが、侯の大名旅行は成金的でなく、衆と共に樂むことにあるのは此小話で知ることが出来る。

日程の齟齬

侯の旅立に先だち細心の注意を要するは日程を定むることであるが、殊に氣を配らねばならぬことは汽車の連絡であつて、いつも汽車通が調査の衝に當るのであるが、二三度失敗したことがある。越後路から越中に入る時などは汽車の連絡を誤つたので大混雜を生じた。斯様な間違から行先の日程が全部狂ふのであるから、實に大變である。越後の柏崎で豫定連絡が出来ないと知つた時には夜半まで、越中と數十回の電信の往復をした位であつた。さて翌日富山縣の入口なる泊町に入つて下車すると、富山の有志者十數は自分を包围して時間の喰違をどうするかと難詰を受けた時は、自分も實に困つた。終には大隈侯も其の混雜の處へ出て來られて、時間の場合で朝食前若くは深夜であつても俺れの都合は構はんから、急速日程を作り換へて豫約

してある方面に失望させぬやうにと云はるゝので、無理の時間に候を煩はしたこともあつた。尙ほ東海道線の或る處で乗り後れた時などは、鐵道の好意で特に速力を早めて失つた時間を取りかへしてくれたこともあつたが、こんな無理な臨機の措置は大隈侯に對してこそ出来るので普通行はるべきでない。侯が高野山に登られて、下山して和歌山市に臨まるゝ時も、電信文の時間の誤りが混雜を惹き起し、夜半まで和歌山へ數次大阪から人を派したこともあつて、此時もひどく困つた。侯の旅行には例として各驛に挨拶のため多衆が群集するので、時間が狂ふとそれ等に立往生をさせることにもなるので、旅程と日程とは尤も精確であらねばならないのである。

大都會に於ける侯の繁劇

侯の旅行には大阪の如き大市には三日位滞在するゝが例であつて、其の滞在中の日程は出發前凡そ定まるのだが、臨時侯を招待せんとするもの、侯に演説を請はんとするもの杯が、いろいろあつて、侯は旅舎に到着するゝと、待構へてゐる幾多の面々は、私を先づ玄關に包圍して口々に種々の要求をすることが例であつた。侯は時間の許す限り、どんな所にも行かるゝ流儀であつたから、結局多數の冀望を容れ、會社でも工場でも學校でも私人の宅でも、極めて短時

間臨まるゝことを諾して日程に編入すると、朝から晩までぶつ通し巡回するゝことになるが、侯は寧ろそれを本懐とされ、時間にアキが生じてボンヤリ次の時間を待つことを嫌はれた。私はその爲め招待する當事者にあらかじめ注意して虚禮の爲めに時間を潰さぬ様にと茶菓の饗應までも斷つた。侯は朝旅舎を出らるゝと、其日の日程に隨つて順次に回つて長短さまざまの演説や講演をさるゝのが常であつたが、大抵夕刻迄に六七回の講演をされた。侯の會場に着さると行きなり演壇に臨まるゝのが常で、私のいつも時計を手にして侯の傍らに侍立し、時間になると侯に注意し、それで演説が終ると、休憩室にも入らず直ちに辭して馬車に乗らるゝ、車上に喫煙中私から次に臨まるゝ學校なり會社なりに就て大要を言ふと、侯の頭腦には即時に演説の趣向が定まり、始めて臨まるゝ所でも極めて剴切の演説をさるゝのには自分も恐れ入つた。尙侯に敬服することは、どこに行つても演説の趣向が異つて、決して同じことを繰返されたことが無つた。侯自身も内々之れを得意として居られたやうであつた。

侯の經濟演説と軍隊に訓示演説

侯の大阪滞在中實業家に招待を受け、そこに經濟上の大演説をされた。經濟は侯の最も長ず

んなことをする暇がなく、今になつて惜しいことをしたと思つてゐる。侯の談話に受け答することは不肖なる自分には可なり難儀を感じ、後になつてから、あんな侯の閑散の時にあの事を問うて見ればよかつた。この事も聞けばよかつたと感じたこともあるが、あとの祭りで残念に思ふが、それにしても自から待設けない種々の談論を聴いて興を感じ、益を得たことが少くない。侯の旅中は汽車中でも旅舎でも應接に忙殺されるので、夜中旅宿で話のお相手になるやうなことは極めて稀であつた。大概夜分は招待があつて、そこに行かると、それに就て思ひ出すのは、或る時藪田と云ふ其頃株式界に雄視した人が自宅に侯を招待した。其時澁澤子爵も來阪中で共に行かれた。此の招待につき如何に侯を饗應すべきやと自分は相談を受けた。先方の言ふには大阪の名物と云へば淨璃瑠の外にないから、越路太夫を招いて語らせてはと云ふ、自分はそのよからうと云うて越路は二段語つた。實は侯に淨璃瑠を聴く趣味の無いことは自分百も承知であるが、前に云うたごとく、侯は終日各所に講演をやられて少しの休憩もない、侯に沈黙を餘儀なくするには淨璃瑠を聴かせるのも一案と考へたからであつた。越路は入念に二段まで語つたから、侯は可なり退屈さうに見えたが、併し口舌はこれに依つて休憩を得た。事果て、馬車に乗り旅舎へ歸る途中、自分を顧みて散々苦情を鳴らされ、越路のあの不自然の態

度、あの苦しさうな聲、どこに妙があるのだと云はれたが、自分も説明も出來兼ねて一笑した。侯は淨璃瑠嫌ひであるらゝのに、大阪には實業界の巨頭に土居通夫と云ふ人がゐた。此人も昔し大隈家に寄宿した縁故があるので、侯の大阪滞在中度々見えたが、此人の得意は淨璃瑠を語ることであつて、侯に一段聞かせたいとあつて、著名な三味線引を伴うて旅舎へやつて來た。侯の執事はいつもの通り侯夫婦の室に案内せんとすると、土居氏の言ふには、今日は太夫格で參上したから別室に控へると云ふ餘所行きの挨拶であるのに侯も笑はれたが、漸やく侯夫婦の前に語り出す段となると避けてゐた私なども聴聞を命ぜられたが、そこで土居氏は得意の一段をやつてのけたが自負ほどでもなかつた。大隈侯は苦り切つて居られたが、夫人は流石に愛嬌ある讚辭を寄せて土居氏を喜ばせた。同じやうなことで侯を困しめたことが今一回あつた。それは大阪でなく静岡の旅舎であつた。侯の一行中に高田博士もゐたが、博士は深更一人の校友を伴ひ來り、共に謡曲をやり出した。自分は隣室に寝ながら聴いてゐたが、侯は吾等の室の二階に寝ねて居られた。翌朝侯に面すると、侯は昨夜は謡曲に當られたと云はれ、二人の内下手なのは市島君だらうと云はるゝので、自分は謡曲をうなるやうな邪道に入ることゝ幸に免かれ

てをります。高田君の相手は某校友であることを告げて一笑したこともあるが、侯はすべて音

曲に趣味が無つた。

京都と金澤に於ける侯

併し京都へ行かるゝ毎に片山春子の舞踊をしばしば見られた。これにも侯は趣味をもつて居られないのだが、夫人が喜ばれるので侯も辛抱されたりしかつた。風の變つた踊の饗應に出たのは、大丸下村の小松谷の別荘に招かれた時、庭園の野趣に調和さすべく八瀬小原の農婦を招いで其郷土固有の踊をやらせたことがあり、嵐山の對嵐房に招かれた時、空也踊を農夫連がやつたが、これはなか／＼複雑な踊で、其の野趣のある所を侯は却つて喜ばれた。侯は常に自ら云はるゝのに、俺れは野武士で都びた事はわからないと。曾つて加賀金澤の兼六公園内にある前田家の別荘に招かれた時、侯は私を茶室に伴はれ、云はるゝのに、こゝだよ昔し俺れが失敗した所はと懷舊談があつた。維新の當初こゝに前田侯から招かれ、當時の顯官四五が會した折庭前に潺溪聲を發して流れてゐる水を見て、侯は庭に降り立ちて水を手で掬して口を噉がれたそれを見てゐた岩倉公は「どうも野武士の行儀のわるいのに困る」と評したのを、侯は忘れず當時を思ひ出して一笑されたこともあつた。

下村大丸に招かれた時の侯

話は又京都へ戻る、大丸下村が侯を本邸に招待した時、設備に付て自分は豫じめ相談を受けた。私の言ふには侯は書畫などを見て喜ぶ人でないから、そんなことに意を用ひるは無駄だ。侯はすべて雄大なことを喜ばれるが、何か侯を驚かす様なものはないかと相談すると、下村には青緑で松を畫した屏風が百雙あると云ふから、それこそ屈竟のものだよろしくそれを立て回はすべしと。先づ入口の長い路地の兩側に立て、玄關に入つて五六の室を通過して本座敷に入るまで同じ屏風を左右に立て、どこまでも金屏風の垣根を通過せしむべしと一決したが、當日若し降雨があるも知れぬから、路地にはテントを張るべしと注意したが、下村では濡れても構はぬと云ふので其意に任かした處、丁度侯夫婦が路地に入らるゝ時に小雨があつた。雨中に金屏風が立つて居るので侯の注意を惹いたが、それが奥深い座敷まで際限なく牆壁の如く通路を飾つてゐるので、流石の侯も驚かれた。實は各室のアラ隠しであつたが確かに成功であつた。此時も餘興は片山春子の舞踊があつたが、酒次侯の口から興味ある談話が出た。侯の云く、自分の京都の旅舎は祇園の中村樓であるが、或る時矢野文雄が大嘉をしきりに褒め、是非一泊を

試みよと云ふので、其言ふに任かせて一泊して翌朝早く二階の洗面所で楊枝を使つてゐると、前樓に蚊帳が吊つてあつて、間もなくなまめかしい若い女が出て來た。誰れがあとから出てくるかと思つてゐると、案外にもそれは矢野であつたと云うて笑はれた。傍らの夫人はその話を承けて、矢野さんは白らばくれて大嘉の娘を褒められたが、實はおのろけであることを萬々承知であると云うて笑はれた。侯は料理の二の膳に大きな鯛のあるを瞥見して云はれた。これは目鯛と云うて饗應に出て見るばかりで、箸をつけずに持ち歸へるものとなつてゐる。いつであつたか東本願寺の枳殻亭へ招かれた時、矢野も同席であつたが、此の目鯛が出ると箸を着け出したのがをかしかつたなど云うて笑はれた。侯は此處案外野武士でなく、寧ろ龍溪居士はあの態度不似合の野武士であつたと一笑を發した。

村井の長樂館に於ける侯

序に尙ほ京都に於ける侯を語るが、侯は曾つて村井煙草王の請に應じ其の洋館別荘長樂館に寓されたことがある。村井は善美を盡した馳走をしたが、それが却つて野武士的の侯には氣に喰はなかつた。浴場其他に苦情もあつたが、尤も飲食が氣に入らなかつたのだ。侯は田舎風の

鹽辛ら好であるのに、村井は京都第一の料理を吟味したから、淡泊に過ぎて、侯の口に適しなかつた。マサカ人の厚意を彼是と云へないから辛抱されたが、東京へ戻られてから、其際同伴の夫人の云はるゝのに、村井さんの別荘では實に困りました。食物が大隈の口に適はないので、大隈はコンナ時に鯉節と大根おろしがあればよいがと度々申しましたが、二三日あすこにゐた爲め少し瘦せましたと云はれたことがある。事實は侯は上品の料理など好まない人であつた。さうかと思ふと番茶が嫌ひで、私が同癖であることを知る侯は、いつも番茶が出てくると、茶碗を指して自分を顧みらるゝが例で、煎茶を供したが、それを滿喫さるゝのが侯の流儀であつた。祇園の中村樓が長い間侯の旅舎でありながら、侯の食味を心得ないので、往々苦情が起るので、中村樓から指導を請はれて、出かけたことがあつたが、校友の谷村一太郎氏も同伴で、藝者まで揚げて散財したことがあつた。あの樓は元來旅館でないから、客の扱ひに慣れず、大隈侯が宿泊されると、ある限りの女中は侯の身邊に集中して別室にある自分等を全く閑却するので、いつぞや嚴格に吾等は、大隈家の令扶でない。外に宿を持つて居るから粗略にすれば泊らないとねぢこんで、臨時に吾々付の女中を特に傭はせたこともあつた。

侯の乗用の馬車

侯が入浴さるゝ毎に東本願寺が馬車を提供することが例となつてゐた。縣廳の馬車の方が新式であつたけれども、本願寺の厚意を無にする譯にゆかないので、縣廳の方は辭して滯洛中本願寺の馬車を用ひられた。ある時此馬車で侯が西本願寺を訪はれた時、恰かも遠忌に際し多數の人衆が門内に蝟集してゐた。侯の馬車が門に近づくと、人衆は侯を見んと吾れ勝に門外に出て雑踏を極め、馬は駭いて門にも入らず、門外の空濠に沿うて駆け出したので、アハヤ濠に落ち込んだが、幸に仇車が路頭にあつて車夫は其車で前を遮り辛うじて馬車を駐めたので、難を免がれたが、仇車はメチャクに破壊した。さて仇車の賠償問題が即時起つて、西本願寺では自分の寺前の出來事だから當然自分方で始末すると云ふ、東本願寺では自分の馬車が事を起したから自分方で處理すると云ひ出す。侯は亦兩寺共御心配に及ばぬ自分がどうでもすると云はれるので事が決しない。それこれで雑沓中に時間を潰すのは馬鹿らしいので、馬車に同乗してゐた自分は、侯の主張を止め、兩寺の爲すに委して寺に入つた。寺では光瑞師始め赤松連城等の耆宿が侯を書院に迎へた。侯は長幹なる光瑞師と並び立つて挨拶を替はされたが、身長

は光瑞師の方が幾らか高かつた。光瑞師は侯に向つて、閣下は百二十五歳の壽を期して居らるるやうに承るが、私は聊か御遠慮して百二十歳の壽を期して居りますと云はれた。侯と師はしきりに盆栽談を交換されたが、自分は其頃寺に齋されて一見を得た敦煌の發掘物に就て云々し、師は時機が後れたのと、資力が乏しい爲め充分發掘が出來なかつたと謙遜の挨拶があつた。やがて能の催されてゐる席へ導かれ拜觀後に饗應を受けて辭去すると、前刻の出來事が新聞の號外に出たり、各地へ電報が飛んだりして旅舎へ見舞に來る人が相踵ぎ意外の混雜を生じたが、夜に入ると各地から織るが如く見舞の電報が來て、家職連は夜を徹して事務を執り頗る多忙を極めた。

比叡山に於ける侯

侯の滯洛中叡山の延曆寺管長が訪うて來て是非登山をと請求したので、侯は登山さるゝこととなつた。此日京都の有力者校友などの隨行者數十人皆徒歩で従つた。此頃は勿論今のやうなエレヴェートルの設備がないので登山は可なり難儀であつた。自分などはヘコタレて籃輿で登つた。延曆寺では禮を厚うして大綠門を作り盛んに歓迎の意を表した。山上の根本中堂は國史

に輝やく名蹟で、天子の行幸でも無ければ開かない所だが、此日は特に侯夫婦の爲めに開門して佛に直面する帝座に侯夫婦を坐せしめ、吾等四五の随員も其の背後に坐した。侯の母堂は曾つて自製の耦糸曼陀羅を納められたが、此日は特にそれが侯の座邊に置かれてあつた。此席は僅かに四五人を容るゝ位の狭い所だが、これは通常人の入り得ない所である。如何さま管長始め一山の僧徒は帝座の下に坐するので、間もなく梵鐘が鳴り讀經の聲は吾等の脚下に起つた。吾等は坐るに此席の尊さを感じざるを得なかつた。讀經終つて休憩所へ案内されたが、侯の休憩所の床に掲げてある幅に私の目が留まつた。其繪は杉聽雨翁の筆で、登山者が嶮路を攀る所を畫し、諦視すれば登山者の臀部を丁狀の棒を以つて押す合力が居るので、ハテ此人は誰れかと案じつゝあると、侯は其男は誰れか分るか、前年登山した時杉も同行したので戯れに俺れを圖したのだと云はれて、侯の健脚の昔しを偲んで感慨に堪へなかつた。饗應を受けた後、山上を散策して眼下の琵琶の湖景を弄し、今の寺の荒廢を見て昔時の隆盛時を追懷し、遂に日枝神社を拜した。偶々小雨があつたが、宮中の儀禮に通じて居らるゝ侯夫人は下駄を脱ぎ棄てゝ足袋跣で雨に濡れてゐる石道を歩し、一拜の後背退された。吾等は其物慣れた儀禮に敬服した。侯は此の境内に節を曳ながら、延暦寺并に此神社に就ての史談をいろ／＼説かれた。侯は一場

の演説をなすべき腹案もあつたのに、管長が遠慮して請はなかつたのは甚だ遺憾であつた。侯は腹案の大略を語られたが、惜しいかな筆録し置く暇がなかつたので、今は殆んど忘却した。維新匆々高野、比叡等の寺々の廢寺とならんとしたのを助けたのは侯で、此の日の歓迎は謝恩の爲めであつた。

加茂の葵祭見物の侯并に妙心寺と侯

侯の滯洛中加茂に葵祭があつたので侯は見物された。繪卷を展開したとき古式の行列に吾等も興を感じたが、侯は行列中の服裝其他に破損のあるを認められ、此祭典は朝廷の盛儀であるのに、破損を修理しないなどは以ての外だと憤慨され、歸京の後宮内省に注意を促さねばならぬと云はれた。又妙心寺を訪はれた時、境内を散策されたが、傍らに歩しつゝある私を顧み此寺は思ひ出の多い所だ。幕末に捕吏に付き纏はれ逃るに處なく、且らく身を潜めたのは此寺であつたと云はれたことも忘れ難い侯の逸事である。侯は又京都の實業家中井三郎兵衛氏の請に應じ、東山に行かれたことがある。中井氏は東山を京都の公園にしたいと計畫した際であつて、東山の地形を侯に見て貰らひたいと云ふ懇望であつた。此時も京都の有力者は菊池帝大總

長を始め、幾十の人々が随伴して賑かであつたが、其際侯が記念の爲め手栽された樹木は今は大きくなつて、一昨年であつたか京都の校友會は記念碑を建て、且つ記念樹の保護を計畫したが、此記念樹は今東山の一名物となつた。

神戸に於ける侯

京阪の記事が案外長くなつたが、神戸に就ても多少云はねばならぬ事がある。いつであつたか侯の馬車に同乗して神戸を周覽した際、侯は維新前の事を回顧して、今は立派な開港場となつてゐるが、維新の前はまばらに家があつた田舎で、土地の價も二束三文で、買占めることも容易であつた。他日の繁榮は期して待たるゝあの頃に神戸の地を買占めたら間もなく暴富をなすは知れ切つたことであるから、自分は鍋島家の爲めに土地の買収を策したことがある。藩の俗論は之れを納れなかつたが、今目前の繁榮を見て自説の行はれなかつたことを残念に思ふと語られた。侯夫婦が川崎造船所主川崎正藏氏に招かれ、其饗應を受けられた時は、自分も席に陪したが、自分の青年時代校長であつた服部一三氏が兵庫縣知事であつたので、陪賓として席に臨まれ、造船所の社長格であつた松方幸次郎氏も亦席にあつた。主客の間に懷舊談が交換さ

れたが、侯夫人は松方氏を顧みて、宛かも少年に對する如く、あなたも大きくお成りだと云はれたのには、松方氏も苦笑し、自分も一喙を禁じ得無つた。十歳位の少年時代夫人が見られた幸次郎氏は、今は二十數貫の肥大の人であるから、夫人の驚かれたのも道理であつた。神戸で盛んな侯の歓迎會のあつた時、服部知事は總代として歓迎辭を陳べられたが、知事は青年時代佐賀の大隈侯經營の學校に學んだ侯の門下生だと言はれ、侯が早稻田大學を起した功を稱へたのはよかつたが、侯が到る處に雄辯を振はるゝが、侯の門前にどんな材料でも直ちに供給する多くの學者のあるのは羨しいと云はれたのは、自分から抗議したかつた。成るほど早大には幾多の學者はあるが、侯は唯の一遍でも學校に頼んで、統計やら材料などを得られたことは無いので、この事實を知つたら服部氏も驚歎したであらう。侯は幾回も神戸に演説されたが、或る時外交演説のあつた時、其の誤譯が電報で外國へ傳はり、意外のセンセーションを起し、正誤電報を發するやうなこともあつた。

中國筋に於ける侯

中國筋では岡山市を始め倉敷、津山、吉備津などに數ヶ所講演された。岡山では後樂園の内

會つて明治大帝行幸の際、行在所に充てた座敷に侯は立つて庭の風景を詠められ、明治大帝もいたく此庭がお氣に召し、御賞讃があつたと語られた。此庭の特色は天守閣が庭の一方に雄姿を現はしてゐること、樹木や丘陵の視界を遮るものがなく、明るい庭であること、附近の山が京洛の東山の如く溫藉で、それが宛がら庭中のもとなつてゐることなどが特色で、山を庭中のもとするために平庭にしたものであらう。寺もない眼前の山に五重の塔の立つてゐるのも庭に風致を添へんが爲めであらう。併し何物か缺けてゐるかに思はれ、侯がしきりに賞せられても實は自分はそれほどよいとも思はなかつた。夜に入り同行三四の友人と水邊の一亭に小宴を催した時、清い一帯の河流に柴舟の通過するのを見、沙磧に白布の曝してあるのを見、亦中島と云ふ遊廓が橋を隔て、燈火を漏らしてゐる景を見ると、宛がら鴨河そつくりで、水の多いだけが鴨川に優つてゐるので、自分は激賞して後樂園よりも此景が優ると云ふと、一友人は笑つて此流れは園に附帯の一景で、此河が園を抱へて居るのだと語つたので、自分も始めて覺り、この河流が園の附屬なれば園に對して遺憾はないと、翌朝侯に此事を語つた所、侯もうなづき、後樂園は全く京洛の景に擬らひ、山も河も京都に形どつたものだと言はれた。早大の出身者であり岡山縣下の有力者である大原孫三郎氏に招かれ、侯は倉敷へ赴かれた。

大テントを張つての講演であり、大原家の饗應も善美を盡した。津山では舊城址内で侯の歡迎會が催され、侯は舊藩主松平確堂と閣僚として交はりがあつたので追懷の談があり、津山はスウェツルランドと地形が似て居ると云はれ、工業國たるべしと鼓舞された。吉備津神社參拜の折の演説には犬養木堂に言及され、あの人の祖先は此神様の犬の番人だと語り、此神社の名物釜鳴りに就ても侯一流の興味ある説を立てられたが、すべてを省略して四國に渡り、高松の松平頼壽伯の客となられたことに筆を移さう。

四國に於ける侯

侯は船中珍らしく休養の時間を得られたので、私などを相手にいろいろのことを語られた。それに據ると、會つて夫人同伴の旅に讃岐へも立寄られたことがある。それは燈臺建設の官用を帯び、外國の技師を伴うての視察旅行であつた。其頃征韓論で内閣は大紛議を生じ、閣僚は大隈を呼び戻せと騒いだが、今のやうに電信が自在でなく、一度電信に接しても侯は平氣で戻らず旅行をつゞけたと云はるゝ、實は内閣の紛争はおよそ知られてゐたが、極度まで争はねば治まらないからと思つて態と急いで歸ることをしなかつた。然るに大阪に着した時には東京か

ら迎へが来てゐたと言はれた。此の燈臺視察に候は伊勢に立寄り、外人が太廟を拜したいと云ふのでそれを初めて許したが、一條件を附した。それは跪いて拜せねばならぬと云ふことであつた。外人はその如くにしたが、慣れない爲めに後ろにヒツクリ返つたものもあつたと語られた。尙古市の踊が見たいと外人が望むので、縣知事に交渉すると、あの踊りは今禁じてあるが臨時にやらせようと言ふので、備前屋であつたか油屋であつたか忘れたが、臨時に命じてやらせると、知事は其娼樓からひどくやられた。人の營業を勝手に禁じて置きながら、必要であるからと云うて突然やれと命ぜらるゝは餘り蟲がよすぎると散々苦情を鳴らされ、知事も閉口したなどの笑話も出た。

さて船は高松に着し、侯夫婦は數日滞留され、屋島の勝地を始め鹽田地其他數ヶ所に講演されたが、屋島の懷舊演説などは頗る揮つた名演説であつた。自分が何よりも嬉れしかつたのは讚地では世話役が物慣れた人で、何から何まで申分なく行き届いてゐて、自分が容喙せねばならぬことは一つも無かつたことである。自分は山水明媚の此地を最も好むもので、滞在中は全く觀光の客となつて愉快を感じた。松平家の客となつてゐる間に、一夜松平伯夫婦より正式の饗應があつて私も其席に侍した。席には侯夫婦と伯夫婦の外、私があつたのみだが、宴酣にし

て中野(武營)をお相伴に呼べと命ぜられ、私の席の次ぎに客の膳よりも小なる膳が持運ばれ、そこに中野氏が入り來り丁寧な禮をして座に着いた。中野氏は其頃東京實業界に雄視してゐる巨頭であるのに、こゝでは君臣の關係が嚴重で、踰ゆ可らざる畛域があるのを見て、ひどく感激した。

馬關に於ける侯

夜中の汽船で高松を發し、深夜の岡山に上陸馬關に着いたのは朝であつた。侯は前夜不眠の爲め顔色は不愉快げに見えたが、自分の郷里の商業學校の教頭であつた齋藤軍八郎氏が此地の商業學校々長となつてゐて、自分を訪ねて來て、突然だが是非侯に講演を請ひたいと云ふ。豫定しないことでもあり、殊に不眠のため氣色わるげに見える侯に請求して承諾さるかどうか私には難色があり、海峡を渡るにまだどれほどの時間があると聞けば、一時間半位はあり、會場には人が集まつてゐるかと問へば早朝から立錐の地のない程詰めかけて居ると云ふから斷り兼ねて、侯に云ふと、案外早速に承諾され、盥嗽が済むと朝食も取らず直ちに會場に赴かれた。自分も例の如く隨從し、コンナ場合の演説は果して氣乗があるかと暗に氣遣つて、侯の演説を

傍聴すると、如何にも堂々たるもので、あらかじめ工夫でもされたかの如く行届いたものであつた。實は此地には侯のト演説無かる可らざる地である。侯は長州の先輩が維新の大業に興つた功績を擧げて盛んに氣燄を吐かれた。ホテルに歸る途中、自分が傍聴した感じを陳べると、侯は莞爾として、朝餐前の演説は餘りやらんが、腹がへつてよい心持だ、時間があればまだ言ふべきことがあつたにと語られた。

九州に於ける侯

愈々九州に入り博多に於ける醫科大學に於てなされた講演は一時間餘に涉つたが、醫學の大家が席の前面にぞろり列してゐるを見て、侯は徹頭徹尾、醫學範圍の談論をされ、それがなかなか興味があるので、壇に侍立して聴聞してゐた自分も侯の多能であるのに驚いた。侯は長崎に於ける和蘭學の沿革やら、政治家中にも醫者が幾人かあると云うて寺島外務卿などを引合に出し、醫學や醫術に關する興味ある經歷が沸くが如く陳べられて、遂に百二十五歳説に移り、養生の要を説かれたが、目前の大家先生を宛がら書生を扱ふごとく、諸君はまだ若いから深いことを云うても分らんなど、横柄ながら愛嬌ある辯を弄して全衆を烟に捲かれた。

侯は不思議な強健の記性の持主で、腹笥に滿々たる種々の事實が必要に応じて續々送り出で、それが如何にも多方面である。どこの講演でも多くの場合、其土地に就て若くは其地の故人に就ての懷舊談が出るが、侯の演説に光彩を添へる要素は確かにこれである。侯は何れの地でも跋涉を經ない所はなく、知名の士で知らないものとは無い。侯の記憶に存する程のことは史的興味のあることで、それが場所に應じて續出するのだから聴者の興味をそゝるのも無理はない。侯は醫者に對すると醫を説くと同じ様に僧に對して法を説き、神主に對しては神を説き、皆侯獨得の見解があつて、強ち故事附でない。吉備津では故事記が引合に出で、高野山では空海の稀有の大自然であることを稱し、經文を侯一流の解釋で説くと云ふ工合で、土木でも工業でも商業などに就ても大なる經驗を有せらるゝから、それ等は云ふまでもないが、侯は又外交の辭令に通じ、人をそらさぬ妙があつて、人の感情を害するやうなことは決して口外されぬ。加賀の金澤に行かれた時、加賀藩は收斂を以つて名高かつたと喝破されたから、場所柄妙なことを云はるゝと思つてゐると、直ぐに政治家は手腕が無ければ收斂は出来ないものだと言はれ、縦横の辯に驚かされたことがある。醫科大學に於ける講話の如き多能の侯の演説の一標本とするに足ると思ふ。

佐賀に於ける侯

九州でも各所に講演され、録すべきことが少くないが、割愛して佐賀に於ける侯を少しく観察しよう。侯の汽車が佐賀に着すると官民多数の人が驛頭に迎へた。小學兒童も澤山に堵列してゐたが、それが皆跣足であるのに吾等は驚いた。侯はまだあれを止めないで困るとつぶやかれた。侯の佐賀入は大人氣であつた。丁度閑叟侯の銅像除幕の式があるので、侯夫婦もそれに臨む爲め歸省されたのであるが、鍋島直大侯一家も前日既に到着されてゐて、佐賀は歡喜で満ちてゐた。全市お祭り騒ぎで、フリーユーとか云ふ獅子舞は各町村のを併せると三十團もあるとか云うたが、それが一々侯の旅館の前で舞ひ踊る、一は歡迎の意を表する譯でもあるので、大隈家では各々に相當の酒肴料を出さるゝので、これ丈でもなか／＼混雜であつた。侯の久方振りの歸省と云ふので、侯の舊知は頻りに訪ねて來た。大隈家では四斗樽の鏡を抜いて之れを待つ様な騒ぎで、到頭侯の外出の留守に來島恒喜の弟が夫人に面會を求めて叩頭謝罪をするやうなこともあつた。閑叟公銅像除幕の日、生憎雨が降つたが、侯は雨中に立つて公の偉蹟を陳べられた。私は長幹の公の像を拜し、又式場にあつた武富時敏氏に公の達辯なりしことや、人を

待つに傲らず如才のなかつたことなどを聞き、大隈侯に似寄つた人だと思つた。侯は又因縁の深い寺院を會場にして郷黨に演説をされた時は、郷國に對する種々の感慨を陳べ、且つ苦言を吐いて警醒されたが、侯は前年來た時よりも烟突が減つたと云うて工業の不振を喝破され、佐賀人は兎角議論好であるが、無用の言を繰返す癖がある。此の繁劇の世の中にはそれを改める必要があると云うてロヂツクを習へなど云はれ、兒童の跣足の陋習などを説かれた。

侯の政治的旅行

以上は侯の非政治的旅行の大略であるが、侯の政治的旅行は侯が首相として議會を解散し信任を國民に問ふ時に在つた。侯は上野の精養軒に閣僚と共に都下の有識者を會して解散の理由を陳べられたのが皮切りで、候補のため都下各選舉區に演説をされた。首相が足を擧げて自から逐鹿場に立つことは日本に於て前例の無いことである。侯は都下のみ運動を以つて足れりとせず、遂に地方遊説を試みるゝに到つたが、此遊説は侯として前例のない多忙を極めた。侯は東海道筋の都會地には大概演説されたが、汽車中でも各驛に選舉人が群集して居るのに對し室外に顔を出して一二分の停車時間を簡單ながら群衆に呼びかけられた。此の簡單な演説に

は侯は既に経験があるのであつた。私の郷國越後に北越鐵道が出来た時、侯は此汽車で全線を視察されたが、片言一語でも侯の説を聽かんとするものゝ各驛に群をなしてゐたので、侯は驛毎に起つて呼びかけられた。越後地は侯が御巡幸に扈從されて熟知の地であるので、簡單ながら土地に適切な事を説かれ、多衆の満足を博されたこともあつたので、東海道でも此の経験を繰返されたに過なかつたが、侯の當意即妙の演説は、千鈞の力があつて、沿道の選舉民は靡然として侯に左袒し、侯の經過地の候補者に落選したものは殆んどなく、時間の都合で侯の經過されない地方では氣の毒にも落選者が若干あつた。三四日に亙る侯の不眠不憩の運動は、侯の咽喉に祟つて聲が全く潰れ、低調で物を言はるゝと聽き取れないほどであつたが、侯を煩はす難場が一つ残つた。それは小山松壽氏のため名古屋に演説さるゝことであつた。名古屋の通過はいつも夜半近くで、自分は内心コンナ夜深かに聽衆があるであらうかと思ふと同時に、侯の發聲を氣遣つたが、事實は私を裏切つた。名古屋に下車すると群衆は會場に到るまで數丁の沿道に堵を築いてゐたが、會場は數時間既に満員となつて、沿道の人衆は皆場に入り難いものであると聞いて、其の意外なるに驚ろいた。侯は會場國技館に導かれ、直ちに演壇に立たれたが、侯の音聲は自分の氣遣つた程でなく、低聲に語らるゝ時こそ不鮮明であつたが、大聲では

よく徹し、一時間に渉る大演説も無難に濟み、大感動を與へたのは實に意外であつた。

富山に於ける侯

名古屋に於ける侯の大人氣に就て想ひ起す一事は、侯が富山に赴かれた時である。此地は旅順の戦闘に出征した兵の所在地で、此役に戦歿した將卒は無慮三千を數へた。侯の來遊を機とし戦歿者の追悼會が催された譯は、侯が軍人後援會の會長であられた爲でもあつた。會場は西本願寺の別院で貳千人の遺族は朝來詰めかけてゐた。勿論將校も澤山に座にあつた。侯は演壇に立つ前に、鎖してあつた佛殿の扉を開かせて聽衆の目前に香を焚き、合掌された後、徐ろに演壇に進まれ、愈々演説となると言々語々戦歿者の遺族に同情を寄せられ、白骨の文などを引用されて熱誠溢るゝ演説には聽衆も感に打れて場内歎歎の聲に満ち、將校も首を垂れ泣く人も少なくなかつた。侯は終に報國の大義に論及して降壇されたが實に大説教であつた。

富山は東西兩本願寺が對立して各々別院がある、均勢上西の別院に軍人の追悼會があつたから東の別院にも侯に講演を請ひたいと切なる要求が出て、侯は諾された。講演は午後三時に始まるのに朝から近在のものが詰めかけて、午前中既に満員となり、入場の出来ないものが貳千

人寺の境内寺の門前に溢れてゐるので、侯が臨まるゝ時、通路が雑踏を極め警官が如何に制しても通行が出来ないので困つた。自分は車を下りて侯に近寄り、此等の群衆は場に入ることが出来ないで失望して居る。願くば車上で二三分群衆に呼びかけて戴きたいと需めた。侯はよろしいと例の當意即妙の演説をさるゝと、群衆は歡呼して漸やく道をひらき、追々歸路に就たので寺に入ることが出来た。仇車上の侯の演説はこれが始めてあり。亦絶後でもある。こゝに一瑣事を附記するが、富山では侯夫婦の仇車を紅紫の花で飾つて車夫にも特別の服を着せた。田舎じみた工夫ではあるが、一行三十人も車を列ねて練り歩く時、侯夫婦を容易に認識せしむるにはよい工夫であつたので、自分は郷里に於て此故智に倣つた。

新潟に於ける侯

侯はどこに行かれても舊藩のある所では必らず藩祖の廟を拜せられ、或は地方の崇敬してゐる神社佛閣を必らず参拜された。此参拜で思ひ出すのは新潟で法音寺を訪はれた事である。此寺は前年火災に罹り本堂も其頃は假設であつた。そこへ侯夫婦が訪れて懇なる讀經を頼まれたのは人々は奇異の思をなしたが、侯夫婦には深い因縁がありながら、始めて参詣されたの

であつた。安政頃に新潟で名奉行の稱があつた小栗又一忠高と云ふ人が、幕末の俊傑小栗上野介の父で、大隈侯の夫人には肉親の関係があるのだ。奉行の墓も此寺内に在つて立派に存してゐるが、侯夫妻は展墓して香花を捧げられた。此奉行在世中、新潟の藤井忠太郎の家と特別懇意の関係があつたので、小栗上州が其の領地高崎で官軍の爲め横死すると、遺族は遁竄して此の藤井の家に潜伏するに至つた。藤井は自分の妻の親戚であるので、侯夫婦に紹介し、家に傳はる小栗上州の遺族に就いて語つたのに據ると、三人の婦人は從僕が一人付き添うて藤井に投じた。其婦人の内、老體は新潟奉行たりし人の未亡人で、妊娠中の婦人が小栗上州の室で、十七歳許りの一女子は、藤井家では大隈侯他日の夫人であらうなど云うてゐたが、さうではなく、小栗家の親族であることが侯夫人の談で分明了。藤井家では油断なく大切に隠匿したが段々危険が迫るので、深夜會津へ落した後は杳然消息を絶つた。併し其後多少の消息が知れ上州の未亡人は分娩後死し、産れた一女は三井の三野村氏が引取つて育て、七八歳の頃始めて侯夫人に引き合はたと夫人の談だが、此の女子こそ矢野文雄氏の弟貞雄氏の配偶となり、貞雄氏は小栗姓を冒かすことゝなつたのである。此の因縁話しは旅中尤も興味を感じ、脚本にでもしたいと思つた事實である。

侯は越後校友の熱誠なる冀望により前後二回來られた。其間の事に就てはいろ／＼記すべきこともあるが、綺羅の巷新潟に於て侯が寛いで喜ばれた一事を語らう。初度新潟に來られた時校友會の宴席も侯の宿泊も割烹店行形であつたが、校友は侯の旅情を慰めんと歡待至らざる所なく宴席には特に新潟の佳麗三千の粹を抜き、妙齡の藝妓をけふを晴れと粉粧を凝らさせ、侯の座を圍繞せしめた。陽氣の侯は御機嫌殊に麗はしく、新潟美人は日本第一とまで賞讃され、興の盡きない内追々夜が更るので、自分は侯の健康を氣遣ひ退席を請うたが、侯は餘程遺憾とされたらしく、歸京して後も、しば／＼私に君等は俺れを邪魔がつて早く寝せたなど云はれたので、十年後再び新潟へ來られた時は夫人も同伴であつたが、今度こそは引取ると云はれても應ずまいと校友連とも謀し合はして、前回よりも一層派出に百餘の佳麗に座敷の兩側の縁に盆踊をさせた。侯は自から野武士を以つて任せらるゝだけ、此種の陽氣な舞踊が大いに悦に入つて、深更まで退席されなかつた。自分は前回の侯の不平を十年目に償つた心持で頗る愉快を覺えた。

侯の旅の到る處何人にも先んじて幹旋歡待をつとめるのは校友で、宛がら慈父母に對するごとく熱誠を籠めた。以上新潟の事も其一例だが、侯夫人は衷心悦ばれて、往々涙ながらに

謝されたこともあつた。侯はいつぞや松方侯に澤山子孫のあることを言はれ、俺れは随分負け嫌ひだが、兒孫を多く有つてゐる點では松方に勝てぬ。併し俺れの兒孫は早稻田大學に始終一萬有餘居り、全國に散在してゐるものは幾萬とある。俺れも強ち子供が無いとは云へないと云はれたが、實に其通りである。

結 論

侯の所謂大名旅行と云ふものゝ内容は凡そ以上の如くで、賑かな旅行であるには相違ないが、決して成金的に豪華を極めた旅行でない。侯に舊交のあるもの早大に生れた校友は天下に充ちてゐるから、其の關係で侯の旅は勢ひ大規模となるのである。大名の旅は云ふまでもなく、大名はロボットと一般であるが、侯の旅は侯一人のみ間斷なく根氣限り活動さるゝので、人は之れを見て侯の文化運動と評するが、侯の志もこれにあるのである。侯は少からざる自費を散じ、勞を厭はず活動されたのである。侯の旅は決して觀光の爲めでない。地方人の案内するに任せ、風景地を訪はれたこともあるが、それは侯の旅の趣旨ではなかつた。侯の趣味は風景にあらずして、多數の人衆に會し自家の主張を傳へんとするのである。されば侯

の行かるゝ先々、各地の新聞記者は侯の車中でも旅館でも遠慮會釋なく訪ね来るが、侯は之れを接することを寧ろ興味として喜んで應接せらるゝことが常であつた。侯の精力は絶倫とは云へ既に古稀を超えての老齡で、よくも身體が堪へたものと敬服の外は無つた。自分などは侯の長途の旅に随伴して格別自から勞することも無いのに、歸京すると多少の疲れを覺えて一日位客を謝して休養したいと思ふほどであるのに、侯に於ては歸宅の翌朝訪問して見ると、常の如く早朝客に接して居られて些の疲勞の態を見なかつたことを思ふと、體力に於ては吾等は太刀打が出来ないことを感ずる。自分は東京に在つても幾んど毎日侯の邸に伺候して、其の談論を聞き、これが爲めに啓發したことは少くないが、侯の旅行には幾んどいつも追隨したので、他人よりも侯の薰陶を受ける機會が多かつたことを思ふと、私は衷心侯に感謝を捧げなければならぬのである。

19886

昭和十年九月十五日印刷
昭和十年九月十九日發行



隨筆早稻田 (定價一圓七十錢)

著者	東京市牛込區東五軒町三五市島謙吉
發行者	東京市杉並區高圓寺六ノ六五九石高七郎
印刷者	東京市神田區鎌倉町五番地ノ二古川篤夫
印刷所	東京市神田區鎌倉町五番地ノ二東陽印刷所
發兌	東京市杉並區高圓寺六ノ六五九翰墨同好會 南有書院 振替東京一六二一二

文墨餘談

市島春城著

定價金貳圓三拾錢
送料十 四 錢

翰墨談

後藤朝太郎著

定價金貳圓五拾錢
送料十 四 錢

篆刻三法

楠瀨日年著

定價金 壹 圓
送料十 二 錢

書齋管見

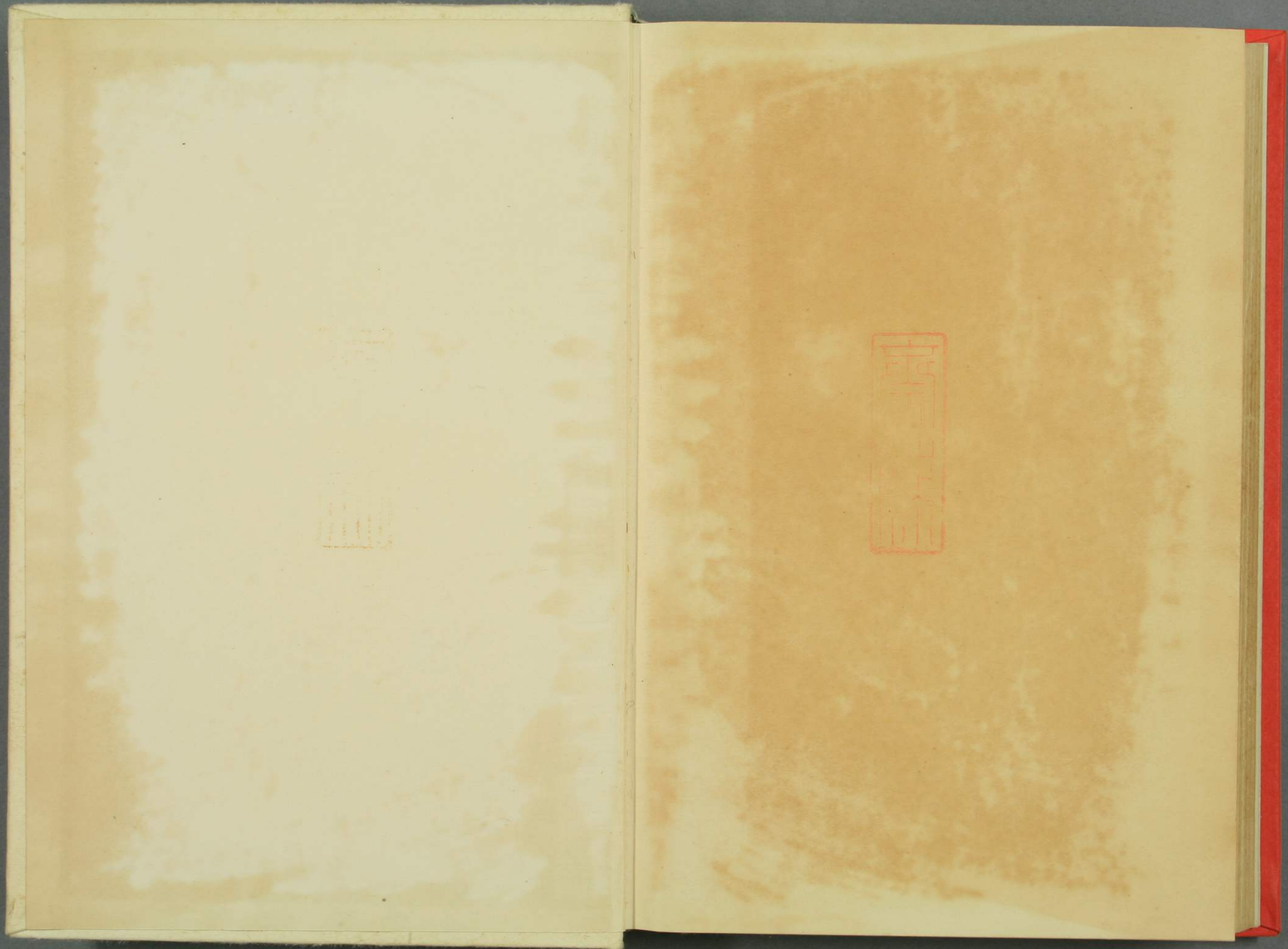
楠瀨日年著

近 刊

良寬禮讚

津田青楓著

近 刊



Faint rectangular impression on the left page, possibly a ghosted seal or text.

Red square seal impression on the right page, containing characters in seal script.